

正义与邪恶交锋实录

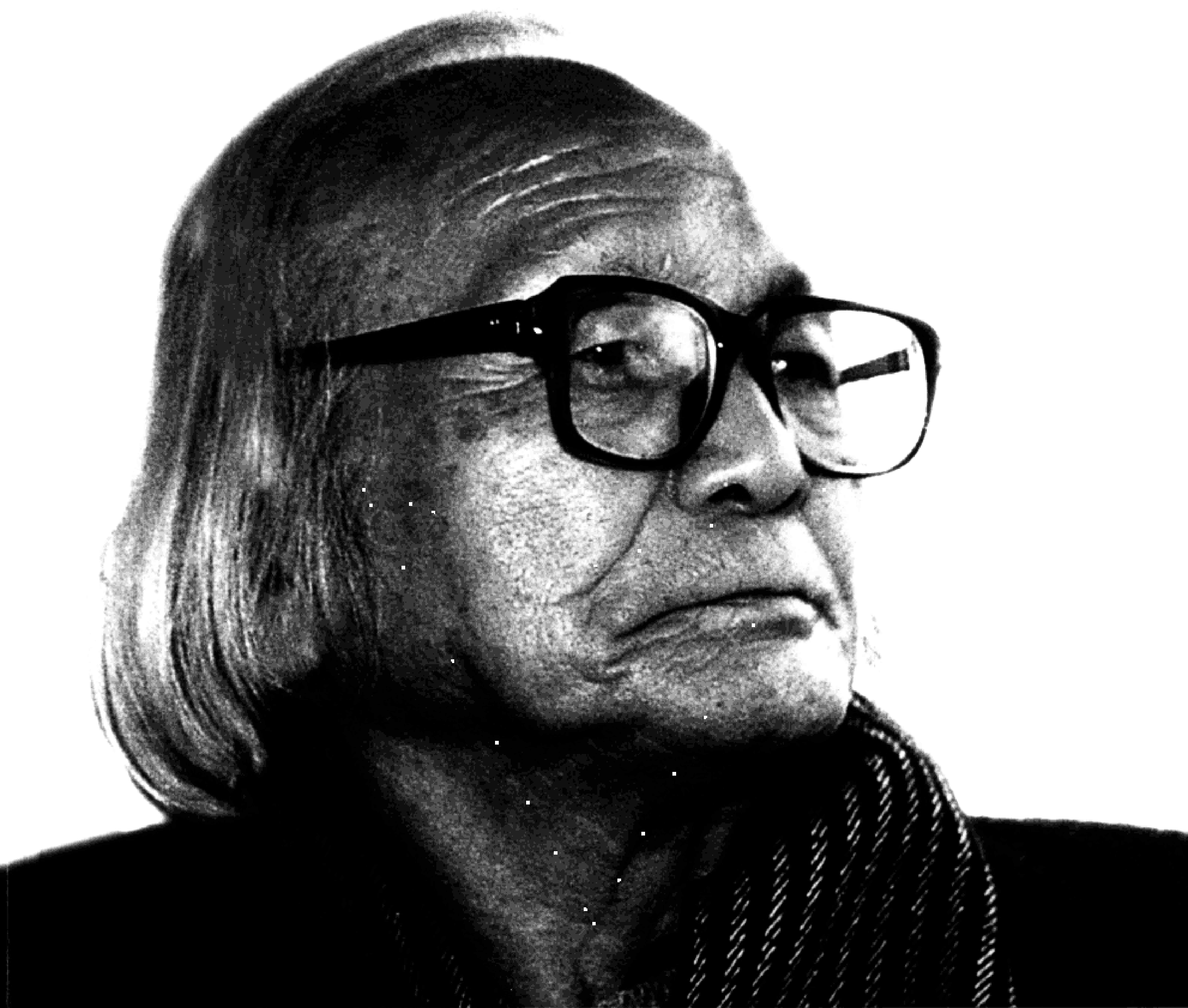
《东史郎日记》案图集

中日文对照

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆　日本支援东史郎案审判实行委员会　编著

新华出版社

南京大屠杀史研究系列丛书



《东史郎日记》案图集 中日文对照

「東史郎日記」裁判写真集 日中対訳

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆　日本支援东史郎案审判实行委员会　编著

新华出版社

南京大屠杀史研究系列丛书

正义与邪恶交锋实录

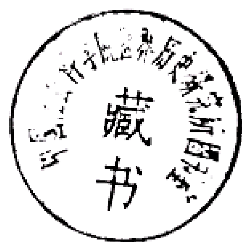
《东史郎日记》案图集

主编　朱成山　山内小夜子(日)

「東史郎日記」裁判写真集

正義と邪悪のたたかい真実の記録

主編　朱 成山　　山内　小夜子(日)



038323

新　华　出　版　社

（日本）東史郎さんの南京裁判を支える会
侵華日軍南京大虐殺受難同胞記念館 編著

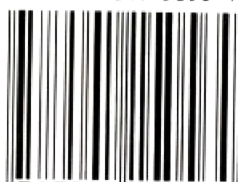
新華出版社

正義と邪悪のたたかいの真実の記録

「東史郎日記」裁判写真集

日中対訳

ISBN 7-5011-5056-7



ISBN 7-5011-5056-7/D·805

定价：400.00元

图书在版编目(CIP)数据

东史郎日记案图集／朱成山，山内小夜子(日)主编；
常嫦，燕龙溪，北山敏博(日)，山本千夫(日)译.
—北京：新华出版社，2000.12
ISBN 7-5011-5056-7

Ⅰ.东… Ⅱ.①朱…②山…③常…④燕…⑤北…⑥山…
Ⅲ.南京大屠杀-史料-图案 Ⅳ.K265.606-64

中国版本图书馆CIP数据核字（2000）第59350号
京权图字：01-2000-3697号

《东史郎日记》案图集
朱成山　山内小夜子(日)主编
*
新华出版社出版发行
（北京宣武门西大街57号　邮编：100803）
新　华　书　店　经　销
常州太平洋印刷有限公司印刷
*
889×1194毫米　16开本　18.5印张
2000年12月第一版　2000年12月第一次印刷
印数：1-5000
ISBN 7-5011-5056-7／D·805　定价：400.00元

编　著

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆
日本支援东史郎案审判实行委员会

主　编

朱成山　　山内小夜子(日)

中方编委

朱成山　段月萍　刘相云
刘燕军　陈平稳　王伟民
常　嫦

日方编委

山内小夜子　中北龙太郎　丹羽雅雄
空野佳弘　菱木政晴　山本干夫
竹内　迅

著 集

侵華日軍南京大虐殺受難同胞記念館
(日本)東史郎さんの南京裁判を支える会

主 編

朱成山　　山内小夜子(日本)

中国側編集委員

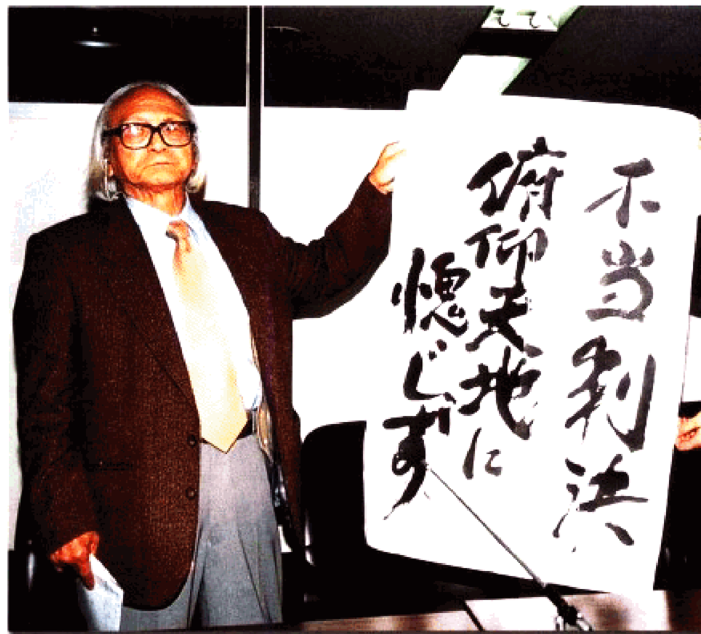
朱成山　段月萍　劉相雲
劉燕軍　陳平穏　王偉民
常　嫦

日本側編集委員

山内小夜子　中北龍太郎　丹羽雅雄
空野佳弘　菱木政晴　山本幹夫
竹内　迅


青年志愿者协会




不当判決
俯仰天地に愧じず




强烈抗议日本右翼势力召开否定南京大屠杀


正義之師
永勝不敗
声援東史郎君


NANJING MASSACRE – A TESTIMONY OF AZUMA SHIRO
IN HONG KONG PRESS CONFERENCE
「南京大屠殺」東史郎香港見證會記者招待會

目 录

1	序 1	仰不愧天 俯不愧地	东史郎(日)
9	序 2	加深对历史认知的共识和心与心的交流	山内小夜子(日)
20	序 3	正义与邪恶交锋的真实记录	朱成山
26	前 言	关于《东史郎日记》案	
	第1部分	侵华战争期间的东史郎及其战时日记	
63	第2部分	东史郎的反省、谢罪和《东史郎日记》公诸于世	
91	第3部分	《东史郎日记》案引发肯定与否定南京大屠杀的诉讼	
117	第4部分	中日两国人民声援东史郎，共同为正义举证	
159	第5部分	《东史郎日记》案二审判决后引起的反响	
	第6部分	正义人士强烈谴责日本最高法院的不公正判决	
[illegible]	第7部分	正义的斗争仍在继续	
269	附录 1	《东史郎日记》案关系年表	
277	附录 2	《东史郎日记》上诉案律师团大事记	
283	附录 3	东史郎先生致本图集全体编辑人员的函	
285	后 记		

目　録

5	序　1	俯仰天地に愧じず	東　史郎
14	序　2	歴史認識の共有と心の交流を深めたい	山内　小夜子
23	序　3	正義と邪悪のたたかいの真実の記録	朱　成山
27	前　言	『東史郎日記』裁判について	
29	第１部	中国侵略戦争期間中の東史郎とその戦時日記	
63	第２部	東史郎さんの反省、謝罪と『東史郎日記』の公表	
91	第３部	『東史郎日記』裁判が南京大虐殺の肯定派と否定派の訴訟を引き起こす	
117	第４部	中日両国人民は東史郎さんに声援をおくり、ともに正義の立証活動をおこなう	
159	第５部	『東史郎日記』裁判第二審判決後に巻き起こった反響	
197	第６部	正義を求める人たちは日本の最高裁判所の不公正な判決を厳しく非難する	
227	第７部	正義の闘いは続く	
273	付録１	東史郎日記裁判関係略年表	
280	付録２	東史郎南京虐殺裁判二審以降の裁判年表	
284	付録３	東史郎さんからの写真集編集者への書簡	
286	あとがき		

序 1

仰不愧天 俯不愧地

东史郎

南京战之后，我从未有意识要向世人坦露那段经历，更是将日记一直尘封着，直到1987年应京都“为了和平的战争展览”这一市民运动的恳请，才将日记借出并公开，而当时，我无论如何也不会想到，就是因为这件事引发起一场诉讼。

虽然这场诉讼是所谓的损坏名誉民事诉讼，但我认为这是一个衡量日本社会如何看待历史和那场战争的审判。到底是谁，又为了什么策划并挑起了这场诉讼？在这个诉讼的背后，是如今在心中还穿着军服的一部分毫无反省的原日军将校军官们，要达到“南京大屠杀事件是虚构”的目的。我希望大家了解我的斗争意义。

1937年8月，我应征到京都16师团20联队，在3年中参加了侵略中国河北省、侵占南京、徐州、汉口、安陆、襄东等战斗，于1939年11月回国。从入伍到回到故乡丹后半岛，我经历了不同寻常的体验，因此记下了日记。在枪林弹雨中记下的日记时常很潦草。我的部队在1939年7月从汉口乘船“凯旋”回到日本，在广岛登陆后，首先进行的是“个人清洁”，然后由宪兵检查所带物品，没收一切记录和笔记。

我因为中途患疟疾不得不下船，住进了南京的一家医院。在脱离大部队四个月后，我一个人作为伤病员回到了日本。因为没有经过宪兵检查，才得以将日记带回来，不能不说这是一个偶然的幸运。

回到家后，当我还是单身汉时，我就自然地在记忆鲜明时整理起战场日记，也是在誊写着自己人生的记录。我为日记起名为“民族的血祭”，因为我在中国战场上所得到的就是“血祭”这种感受。日记的开头我写道：“我要在这里记下真实，惟有记下真实的事实，才能了解战场上士兵的思想与行动。”当时我25岁，日记是为了自己而写的。

到了1944年秋，我再次应征入伍，转战华中的扬州、盐城等地，最后在宁波迎来战败。

若在战场上战死，我将化为灰烬。我记录下战争带来的非同寻常的人生经历，在日记中如实地写下了善、恶和战场的真实。虽然已过去了60多年，当我一看到日记，往事就会历历在目。

我们在毫无罪恶感下杀死了那么多的农民。"膺惩支那、草木山川皆是敌，统统干掉"。在这种思想驱使下是多么的残酷。

没有任何食物供给，占领哪里就在哪里征抢；在搜寻粮食中，一旦发现躲藏的妇女，必对其强奸。为什么我们会以坦然的心态对待那样屠杀、强奸、放火、掠夺等非人道的行为呢？为什么在家中的一个普通善良的人，一旦穿上军服上了战场，竟然变得如此野蛮，为什么会这样呢？必须严肃地反省追究其原因。

将肿脓的地方进行外科手术，是为了不再化脓。反省过去的野蛮行为，揭露其原由，是为了建立真正的日中友好。因此，我要公开日记、为历史作证、也为自己的行为谢罪。

我们所受到的非人道的军国主义教育，把侵略战争奉为"圣战"，"惩罚横暴的中国人是正义行为"。军国主义灌输的是蔑视中国人、怀着渗透到骨子里的民族歧视来膺惩"支那"，教育我们"尽忠天皇重于泰山，军人的生命轻如鸿毛；宁做护国之鬼，不受生俘之辱。"

由于对中国人有了民族歧视心，就由蔑视变成了傲慢。我认为这就是产生暴行的原因。

当时的日本，连自己国民的生命都作为资源肆意滥用，轻视人的生命，将我们士兵当作消耗品。既然自己的生命都轻如鸿毛，那敌人的生命岂不是更轻吗？"杀掉他们！"于是，就进行了没有任何良心谴责的屠杀。当时的日军没有丝毫的人道，战争的目的就是为了达到胜利，为了胜利就不要考虑什么人道，胜利就是正义。我们被训导成活武器，为了正义而死是尽忠于天皇，是无尚光荣的，丝毫没有珍惜生命的意识，想的就是尽忠天皇。正因为如此，丧失了自我，丧失了道德，失去了正义与善良。

在战争中，由于忠实勇敢而被授予金鵄勋章的我，青春是在那令人悔恨的战场上玩命度过的。在发生南京大屠杀事件60多年后，我已站在了人生的终点站，那场战争还在向我逼来。

在13年前的1987年7月7日，应京都"为了和平的战争展览"的请求，我与增田六助、上羽武一郎三人一同举行了记者招待会，讲述了我们的战争体验。这是首次在日本用真人真名为南京大屠杀历史作证。

没想到发表这次证言后，有人对我进行了没日没夜的猛烈攻击，最难忘的第一个抗议电话竟是一位女性，她从东京打来的电话里声嘶力竭地喊道："你不要亵渎英灵。"后来我才知道我们作证的三人都遭到了攻击。

增田六助作为第四中队的机关枪部队队员，曾参与了在玄武湖畔屠杀500人的暴行。83岁那年，他因病住院，我去探望他。他一见到我就想起那场屠杀，不禁潸然泪下说："我死后是要下地狱了。"我十分理解他的心情，对他说："你不会下地狱的，下地狱的该是发布屠杀命令的那些上司。"不久，增田就离开了人世。

另外，同在机关枪中队的北山与，在82岁时由于脚病不能走路而拄着拐杖。发生在玄武门屠杀

500名俘虏这件事，使他一直受到良心的谴责，他让三个孩子分别搀扶着、轮流背着，特地来到南京谢罪，并在玄武湖畔和扬子江岸分别赋诗二首："几万血肉，染红江河，映着夕阳，静静流淌"；"残虐恶极日本军，孤身老兵诉悔恨。"这些曾经参加过战斗的士兵，一直怀有负罪感，最后带着苦痛离开了人间。

虽然抗议、威胁我的人很多，但是也陆续收到了不少支援我的明信片、一些老兵写下的战争体验和迫切地"要去中国谢罪"的信件。

但是，在本地（指京都福知山）我却受到了"损坏16师团名誉"的攻击。并在我作证的第二年，就有人警告我说："你等着上法庭吧！"

此后，在我出来作证6年后的1993年，我被起诉为"损害了日军名誉"、"太不像话"和"损坏名誉"罪。其实，我与原告之间没有任何个人恩怨，只是因为我对日军的非人道的行为出来作证，才遭到迫害和打击，并告我损坏了名誉。

在第二次出征时，我在宁波迎来了战败。我们受命把武器弹药运往上海，交给中国军官。这位军官对我们说："我在南京作战成为日军俘虏时，在下关码头遭到集体屠杀，因压在战友的尸体下才九死一生，一直与可恨的日军进行战斗。今天，我恨不能杀了你们，然后扔进黄浦江里。但是，因为上级有令要'以德报怨'，所以放你们一条生路。"多亏中国军人对我们的宽大，我才有幸活到今天。我为中国人的宽容感动得热泪盈眶。中国人将"以德报怨"作为美德，而日本却将复仇作为美德，如果当时换了日本人肯定是要报仇的。正因为当时中国人没有杀我，才有了我今天88岁的生命。

我认为日本不但在战争中，同时也在道德上输给了中国。

汉字是日本的文字和文化的起源，汉字是从中国传来的，是中国教给日本的。我们却对文化之师的中国肆意践踏和破坏。

我今年已88岁了，为了和至今还在心中穿着军服的伪君子们进行抗争，已经进行了8年的诉讼斗争。

东京高等法院曾在1998年9月8日宣布了11月26日下午1时15分（连几分钟都定下来了）进行第二审判决，但突然通知延期，改为12月22日。我当时就感到是有某种政治意图，因为中国的江泽民主席要在11月25日访日，所以，其目的是为了避免在江主席访日期间做出这种不公正的判决。

判决的结果是宣布我败诉，对这样不公正的判决，我一度从内心感到万念俱灰。原告方抓住12月21日邮政袋事件不放，告我损坏名誉罪，同时主张"南京大屠杀不是日军所为，而是中国人所为"，在法庭上公然否定南京大屠杀，说它是中国人自己所为。该院对南京大屠杀事件的历史真相视而不见，而仅凭"推认"来判断。特别是他们抓住邮政袋事件是"杀人游戏"这句话，因为是游戏，他们就主观地推断加害者本身有烧伤的危险而不会去做，进而断定我记载的日记不可信。这是根本不了解战场真相和主观臆测而已。

12 月 13 日到 23 日是“扫讨残敌”最起劲的时期。我在日记中说的是大激战后在空闲状态下大量杀害残敌，所以写的是玩弄折磨人的“杀人游戏”，却被他们故意推认为“游戏”。我在日记中接着写道：“像这样的事情在战场上算不上什么罪恶。这伙人一会儿就会将这些事统统忘掉，又哼起小曲上路了。”可以说，法官丝毫不考虑战场的真相、以及在战场上士兵的精神状态，完全是一种不公正的判决。

这场诉讼，完全是至今还在心中穿着军服的那伙人挑起的。要以今天的感觉衡量60年前那场战争，必须对历史有充分的认识，对宪法、法律和善恶的认识，也将随着时代的改变而改变。而法官们却一概不考虑这些。

在东京地方法院第一审判决后，原告方面在会见记者时说：“今天的审判胜利，就如同当年占领南京的心情一样。”并当场三呼万岁。

在东京高等法院第二审判决后的记者招待会上，原告方面挂起了“捏造南京屠杀诉讼胜利”的横幅，法官虽在判决书中有意避开了对南京事件的判断，但原告就是要达到横幅中所写的目的。

第二审判决后，我也举起自己书写的“仰不愧天，俯不愧地”这句引用中国古人老子的话。意为即便是判我败诉，但是，我所记录的真实事实是对得起天地良心的。

我为何要如此抗争呢？就是为了击碎那些伪君子的谎言。

南京大屠杀是历史学家已作出定论的事实。而这些人企图以司法形式来达到否认南京大屠杀的目的。“虽然这场官司说是为了恢复所谓个人名誉，但实际上是以此为突破口来证明南京大屠杀是虚构的”（板仓由明在《星期一评论》中所述），这就是原告方的主张，他们一开始就挑起了关于南京大屠杀的论争。正因为这样，决不能允许他们歪曲战争历史的真相。为此，我将作彻底的抗争。

李白在体弱衰老、身境悲凉时作过《秋浦歌》这首诗：“白发三千丈，缘愁似个长。不知明镜里，何处得秋霜。”我一个老兵孤独地进行了 8 年的抗争，早已心力交瘁，不觉已是满头银发了。

李白悲感于生命的衰老。我虽非青春，却在胸中燃烧着火焰并决心战斗到底。

不是中国进攻了日本，而是日本进攻了中国，根本上就是侵略。对此，我们应当反省。不是什么“自虐”，而是“自省”。

我不仅希望日本的司法当局，更寄望于世界人民对历史的审判。我将讨个公道。即使我的生命完结，也要在地狱中会见死去的战友，寻求证言，请阎王作出公正的判决。

最后，中国方面曾给予我这样一名日本老兵以莫大的声援，并将这部“图集”向世人公布，这是我无上的荣幸。谨此致以衷心的谢忱！

2000 年 8 月写于丹后半岛自宅中

俯仰天地に愧じず

東　史郎

私は南京戦以降、体験を公表する意志すらないし、日記を秘匿していたが、１９８７年に「平和のための戦争展」という市民運動の要請で貸与し公表した。その時には、これが原因で裁判にまで発展するとは想像すらしなかった。

私の裁判闘争は、名誉毀損の民事訴訟という形で行われたが、私は日本社会の歴史認識を問う戦争裁判であると考えている。裁判は誰が何を目論んで起こしたのか。

この裁判の背景には、未だに心に軍服を着ている一部の無反省な元将校たちがおり、目的は、「南京大虐殺事件はまぼろし」とするための裁判である。私の闘いの意味を知って欲しい。

私は、１９３７年８月京都１６師団２０連隊に召集され中国河北省の戦闘、南京攻略戦、徐州戦、漢口戦、安陸戦、襄東戦と３年間戦い、１９３９年１１月に帰国した。召集を受けてから、郷里の丹後半島まで帰還するまで、私は異常なる体験故に、日記をつけた。砲煙弾雨の中で書く日記は時として書きなぐりのものとなることもしばしばであった。我が部隊は１９３９年７月に漢口から御用船で日本へ「凱旋」した。広島へ上陸後、衛生風呂に入浴、その時に憲兵が所持品検査をし一切の記録・メモ等を没収した。

私は、途中でマラリアのために下船、南京病院に入院した。本部隊とは別に一人四ヶ月遅れて、白衣で一人で帰還した。憲兵検査もなくこの記録を持ち帰ることができた。偶然の幸運というしかない。

郷里に帰還後、独身の気楽さに、記憶の鮮明な時にと戦場日記を整理し、自分の人生の記録を清書した。日記には「民族の血祭り」という題をつけている。私が中国の戦場で得た感覚は「血祭り」という印象であった。冒頭に「ここには真実を記したい。真実なる事実を記すことによってのみ、戦場の兵士の思想も行動も明白となろう」と、当時２５歳の私が、自分自身のために書き残している。

その後１９４４年秋、私は再び召集され、華中の揚州、塩城と戦地へ赴き、寧波で敗戦を迎えた。

戦場で戦死すれば、私の身体と共に焼却されるものであるが、戦争は人生の異常なる体験故に記録した。日記には善も悪も戦場の真実を書いた。６０年以上経っているが、日記を見れば当時のことがまざまざ

と甦る。

我々は何の罪悪感もなく多くの農民を殺した。「暴支膺懲だ、山川草木みんな敵だ。やっつけてしまえ」と殺した。誠に酷いことであった。

食糧補給は一切なく、占領した場所で徴発して食えという戦法であった。食糧を捜しているうちに、隠れている女性を見つける。見つけたら必ず強姦した。虐殺・強姦・放火・掠奪などの非人間的行為を良心の呵責もなく平然と行為したのはなぜか？家にいる時には、普通に善良なる者が、一度軍服を着て戦場に立ったら、このように野蛮に変身したのはなぜか？なにがそうさせたのか？その反省と究明が厳しく検討されなくてはならない。

膿んだ傷を外科手術をして膿をえぐり出すのは、再度化膿させないためである。過去の野蛮な行為を反省し、その原因をえぐりだすのは真の日中友好を建設するためであります。それ故の証言であり、日記の公表であり、私自身の謝罪の行為である。

我々を非人間的にした軍国主義教育は、侵略戦争を「聖戦」と教え、「横暴な中国人を懲らしめるのは正義だ」と教えられた。そして、中国人を軽蔑し、民族差別をたたき込まれ、暴支膺懲だと教育された。「天皇への忠義は山嶽よりも重く、汝等軍人の命は鴻毛よりも軽し、生きて虜囚の辱めを受けず。死して護国の鬼となれ」と教えられた。

中国人に対する差別心により、軽蔑が傲慢へと変わった。これが非行の原因であると私は自らを省みて思う。

当時の日本は、自国民すら人間を資源とし濫費濫用し人命を軽視した。我々兵隊は消耗品であった。自分の命が軽いのなら、敵の命はさらに軽い、「殺してしまえ！」と、良心の呵責もなく虐殺した。当時の日本軍には人道的心情はなかった。戦いの目的は勝利であり、勝利のためには人道も軽視、勝つことが正義だと考えた。我々は人間兵器であり、その正義のために死ぬことは天皇に忠義であり名誉の戦死だと教えられた。人命尊重の思想はなく、あるのは死を決して天皇に忠義を尽くせ、それだけであった。これは自我の放棄であり、道徳的無自覚であり、不正義・悪に反発する思考の欠如であった。

戦争中、金鵄勲章を「下賜」されるほど忠実なる戦士であった私は、大いに我が青春に悔いがある戦場に召集され、命をかけて戦った。その南京６０数年後の、人生の終着駅に立った現在、今なお戦争が私を追いかけてくる。

今から１３年前の１９８７年７月７日、「平和のための戦争展」の要請で、私と、増田六助君、上羽武一郎君の三人で記者会見をし体験を証言した。日本初の実名による南京大虐殺の証言ということであった。

以後、日夜を問わず猛烈な攻撃・抗議が続いた。忘れもしない最初の抗議は、東京の女性からの電話であった。「英霊を冒涜するな」という叫びであった。以後、私だけでなく、三人とも攻撃にさらされた。

第四中隊の増田君は、第四中隊の機関銃部隊員として、玄武湖畔で５００人の虐殺を体験している。８３歳になってから病気になって入院した。私が見舞いに行くと「わしは死んだら地獄いきだ。」とあの日あの時の虐殺を思いさめざめと泣いた。私も彼の気持ちがよくわかった。「君は地獄へはいかない。地獄へ行くのは虐殺命令を下した上官や」といったが、その増田君も亡くなった。

また、同じ機関銃中隊の北山与君は８２歳の時足を悪くし杖をついていたが、玄武門での５００人の捕

虜虐殺を良心に悔い、左右の腕、背中を三人の子どもに支えられ、南京へ謝罪に旅に出た。そして、玄武湖畔で「惨虐の　限りつくせし日本軍　兵士の一人　わびてたたずむ」、また揚子江岸で「幾万の紅き血潮で染めし河　夕陽に映えて　静かに流れる」という詩を捧げて謝罪した。戦闘の実行者は、その罪の前に苦悩し、苦悩して亡くなっていっている。

抗議・脅迫も多かったが、支援の葉書や、「私も中国に行き謝罪したい」と体験を切々とつづったお手紙もたくさんいただいた。

しかし、地元では「１６師団の名誉を傷つけた」と、攻撃してきた。

また、証言の翌年には、「お前を裁判にかける計画がある」と忠告してくれた人もいた。

そして、私たちの証言から６年後の１９９３年、私は「日本軍の名誉を傷つけた。けしからん」と「名誉毀損」で告訴された。原告の橋本光治氏との間には、私怨もなにもない。　私は、南京５０周年の年に、私たちの日本軍の非人間的行為を証言したために、以後、脅迫と攻撃にさらされ、その延長として名誉毀損で提訴された。

二度目の出征の時、私は、敗戦を浙江省の寧波で迎えた。上海まで武器弾薬を運ぶ命令を受け上海に行き、敵将に渡した。その中国の将校が私たちに言った。「私は、南京戦で日本軍の捕虜になった時、下関波止場で集団虐殺にあった。戦友の死体の下敷となり、九死に一生を得た。今日まで憎い日本軍と戦ってきた。その無念を思うと、おまえたちを殺して、黄浦江へ投げ込んでやりたい。しかし、「怨みに報いるに、徳をもてせよ」という命令がでた。だから命はたすけてやる。」と、私は殺されなかった。この寛大さの故に、今の私の命がある。私は中国人の寛容さに感涙した。中国人は「怨みに報いるに、徳をもてせよ」という。一方、日本では復讐は美徳であり、日本人なら必ず復讐したであろう。今、私８８歳の生命があるのは、この時に殺されなかったからである。

私は、日本は中国に戦争に負けたのみならず、道徳的にも負けたと思う。

日本の文字と文化の源泉である漢字は中国から伝わり、教えられたものである。私たちは文化の師である中国に土足で押し入り、暴虐を加えのである。

私は今８８八歳。未だ心に軍服を着た偽善者たちと闘うため、提訴されて以来八年間闘ってきた。

第二審の東京高裁の判決は、九月八日の法廷において、判決日は１１月２６日午後１時１５分と「分」まで決まっていた。しかるに、突然延期となり１２月２２日となった。私は政治的な意図が働くのではないかと危惧した。中国の江沢民国家主席の来日が１１月２５日からであったからである。不正な判決であるから、主席が在日中に於ける判決宣言を避けたのである。

判決は、私の敗訴であった。不当判決に腹の底から無念極まる思いであった。

原告・橋本光治氏側は、１２月２１日の郵便袋事件に焦点を絞り、それが名誉毀損として訴えていたが、同時に「南京大虐殺は日本軍によるものではなく、中国人によるものである」等、南京大虐殺否定どころか中国人が自ら行ったという暴論を法廷で主張していた。裁判官は、南京大虐殺事件総体の中でのこの郵便袋事件の真相を見ようとせず、「推認」で判断をくだした。

特に、郵便袋事件を「殺人遊び」とし、遊びだから実行者自身が火傷を負う危険なことはしない、だからこの記述は信用できないとする判断は、戦場の実相を知らない者の妄想である。

１２月１３日から２３日までは残敵掃討戦の最中である。大激戦後の余裕綽々たる状態であるから残敵を殺すのに、なぶり殺しにしたから「殺人遊び」と書いたものを、故意に「遊技」と「推認」する。私の日記には、この事件の記述の後に「こんなことは、戦場では何の罪悪でない。次の時にはこのようなことは少し記憶にも残さず鼻歌を歌っている一隊であった」と記述している。戦場の実相と、その場にいる兵士の精神構造を全く考慮しない、全く不当な判決である。

この裁判は、未だに心に軍服を着ている連中らが起こした裁判である。今日の感覚で、６０年前の戦争という国家非常時を律するためには、十分な歴史認識が必要である。憲法も法律も善悪の考えも、時代と共に変わる。それを裁判官は、いっさい考慮していない。

第一審東京地方裁判所判決の後、原告橋本側は、記者会見の席上で、「本日の裁判勝利は、南京占領の気分だ」と万歳を三唱した。

第二審東京高等裁判所判決後の記者会見で、原告橋本側は、「南京虐殺捏造裁判勝利」という横断幕を掲げた。彼らの本音である。裁判官は、判決文において南京事件についての判断を避けたが、原告側はかくの如く主張したのである。

第二審判決後、私は、「俯仰天地に愧じず」という老子の言葉を掲げた。敗訴になるとも真実の主張の故に天にも地にも良心にも恥じないと言う意味である。

私がなぜここまで闘うのか。それは、偽善者の虚言を粉砕する為である。

南京大虐殺は歴史学的には決着したものである。それを裁判の場に持ちだし、虚構化しようとする目的で提起したものである。「この裁判は個人の名誉回復を目的としているようだが、これを突破口として南京大虐殺の虚構を明らかにする」（「月曜評論」板倉由明）と原告側が主張し、初めから南京大虐殺論争を挑んできた。それ故に、戦史を、歴史を曲げることは断じてできない。その為にも、私は徹底的に闘う。

李白は老いの身の悲しさに、「白髪三千丈　憂いによりてかくの如く長し　知らず明鏡のうち　何れのところに秋霜を得たる」（秋浦歌）と歌った。私もこの８年間、元兵士としてただ一人の孤独な闘いで過酷に心労し、いつの間にか白髪となった。

李白は老いの身を悲しんだが、私は青春ならぬ老春に炎えて闘う。

中国が日本へ攻め込んできたのではない。日本が中国へ攻め込んでいったのである。侵略であったということが全ての原点である。それが反省すべきことであり、「自虐」ではなく「自省」すべきことなのである。

私は日本の司法のみならず、世界人民の歴史の審判を仰ぎたい。私は、この裁判を断固として闘う。私の命がつきることがあっても、地獄で、戦死した戦友に会い、証言を求め、閻魔大王の厳粛な判決を求める。

最後に、中国の方々から一元日本兵である私・東史郎に多大な支援をいただいた。その一端を「図証」として記録に残すという。身に余る幸せである。心から感謝の言葉を述べたい。

２０００年８月円後半島の自宅にて

序　2

加深对历史认知的共识和心与心的交流

日本支援东史郎案审判实行委员会秘书长　**山内小夜子**

我初次访问南京是1988年8月，当参观到紫金山的东郊丛葬地纪念碑时，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆（下简称南京纪念馆）原副馆长段月萍告诉我说："去年（1987年）12月，南京大屠杀50周年之际，原日本兵东史郎来到南京，向南京人民谢罪。也来到东郊丛葬地，向这一地带3万多遇难者致哀、谢罪。我们敬佩东史郎先生的勇气。因为我们知道，在日本能够站出来作证是件很不容易的事。"

我是在战后出生的，没有从学校和家庭了解到日本侵略中国的战争真相，对这方面的历史知识知之甚少。通过参观南京纪念馆，知道了1937年南京发生了这么重大而悲惨的事件，并且受害者现在仍然承受着战争给他们带来的痛苦和折磨，我心里很难受。在参观南京大屠杀遗址现场，又听了段副馆长对东史郎的一番话，心情更不平静。这是因为我今天终于了解到一个事实，即有日本人把自己50年来深藏心中的加害之罪说出来，为了谢罪而来访问南京；还有，我感受到了中国人民的(宽容)精神，那就是对承认自己的罪过，由"鬼"变成"人"的人表示敬意。每年夏天，我都会想起紫金山下梧桐树覆盖的林荫路和当时涌动的感情。可以说，我是在南京这块地方知道了东史郎。是南京，使我有缘与东史郎相识相知的。

东史郎先生也对我讲了1987年12月特地来南京谢罪的事。

东史郎先生还记得当时在南京纪念馆里，他被许多人包围着。他想："你们来报仇吧。"可是等待他的不是复仇，而是许多提问。最后提问的是位女性，她说："不管过去发生过什么事，那毕竟是过去的事情了。你认为今后中国和日本的关系应该怎样发展？"这个巧妙的提问使东史郎先生陷入了深思。

在南京纪念馆的接待室，东史郎先生和幸存的老人们见面。作为一名加害者，不知该如何面对

他们，非常紧张。虽然这次是来南京谢罪的，但受50年前的记忆所困扰，不知说什么好，只是深深地低头，表示认罪。他最后终于说出了“给南京人民带来了祸害，实在对不起”这样一句话。

一位幸存者（鞋匠）说：“我不愿意见到令我憎恨的日本兵。可是，听了你刚才谢罪的一番话，我气消了。”他主动与东史郎握了手。东史郎感慨地说：“真是没白来南京。”

东史郎先生自从对加害中国的史实作证以来，遭到了威胁、责难、恫吓、在他诉讼最艰难的时期，正是这些话语给了我们无穷的力量 。

今后日本和中国的关系应该怎样去发展？这是一名中国女性提出的问题。我想、正是这句话，才是东史郎能够在1987年至2000年这长达13年里进行斗争的动力。

南京战后50年的1987年7月7日，东史郎应京都“为了和平的战争展览”市民运动的要求出面作证，并公开了日记。这是东史郎、增田六助和上羽武一郎先生第一次自己出面对加害中国的史实作证。

之后，东史郎出版了一部分日记，名为《我的南京步兵队——一个召集兵体验的南京大屠杀》（青木书店1987年版）。出面作证后，东史郎先生收到100多封恐吓信、抗议信和电话。据东史郎先生讲、最初一个电话也是位女性，她在电话中大声斥责东史郎“不要亵渎英灵”。东史郎在南京向中国人民谢罪被看成是“叛徒”、“卖国贼”。东史郎被战友会“除名”，“为了保护20联队的名誉”，原日军官兵组成了“福知山20联队爱护会”，在以后的审判中，他们成为支持原告方的主要力量。

公开日记和谢罪6年的1993年4月14日，东史郎因“损坏名誉”被起诉。《东史郎日记》在下里正树著的《被隐瞒的联队史》（青木书店1987年版）、以及下里正树、井口和起、木坂顺一郎编的《南京事件·京都师团关系资料集》（青木书店1989年版）中分别被引用、这三册书的作者同时受牵连被起诉。

原告方是步兵第20联队3中队1小队原小队长，是东史郎先生的上司，在东史郎88年的人生和数年的军旅生涯中只有4个月与东史郎先生同食共寝。他以东史郎先生以及下里正树、青木书店“侵害名誉”为由，要求刊登谢罪文章、赔偿损失。

起诉后，在原告代理人高池胜彦律师事务所设立了“纠正虚构南京事件会”。

记载南京大屠杀只有数万人牺牲的《南京战史》（原将校亲和团体“偕行社”发行）编委板仓由明在这个诉讼两天后，就发表了题为“向虚构的南京屠杀挑战，原告诉讼的经纬及其意义”的文章，说明了诉讼的意义，文章说：“此诉讼表面看来是为了恢复原告个人的名誉，但实际上是以此为突破口、来证明发生在步兵20联队的所谓的残酷行为的虚假性，并为其恢复名誉、进而如果能说明南京大屠杀是虚构的，这是与日本全体利益相符的。”

在《东史郎日记》中有这样一段记载：在最高法院前，同小队的“西本”将中国人装进邮政袋，然后在邮政袋上浇上汽油进行燃烧，再在袋上绑上手榴弹进行爆炸。（东史郎将原告的名字用了“西本”这个假名）也就是围绕这段记述是否真实而在诉讼中引起了争论。

仅在东京地方法院一审中就有20次的公审。在这段时期里，东史郎每次从毗邻日本海的丹后半岛的最顶端来到东京、需要花2天时间。这对一个八旬老人来说是多么的困难。

1996年4月东京地方法院的一审判决，1998年12月东京高等法院的二审判决，都判定了上述

日记内容是“虚假”的，损坏了原告的名誉，要求东史郎、出版社（青木书店）等各赔偿50万日元的罚金。虽然东史郎在二审判决后又立刻进行了上诉，但是，在2000年1月21日，日本最高法院还是作出了驳回上诉、维持二审判决的判定。

1996年4月，在东京地方法院的一审判决中说：“尽管大家期待着在南京事件的历史学争论的基础上加以判断，但这并非我们能够做到。对南京事件中有关日军对多数的俘虏和非战斗人员的中国人进行杀害的事实（略）是不可一概否认的事实。”沿袭了在家永教科书诉讼中对南京事件的判断。但是，关于邮政袋事件却判定为“明显不正常（略），没有客观证据（略），缺乏对事实认定的条件等”。他们就这样只见树木不见森林，硬是采用原告方面的主张而作出判定。

面对在东京高等法院的二审诉讼，我们在关西成立了律师团和声援东史郎会。对邮政袋事件，不论是从物理学和科学角度还是按照当时的历史事实，我们都认为并没有什么不正常的。为了证明这一点，我们进行了许多具体的验证活动，四处收集证据。

我们在南京成功地进行了再现手榴弹爆炸的试验，确认了能够装进人的邮政袋，搞清了汽车当时的构造，并在现场调查时，根据当时的航空照片和地图，明确了原中国最高法院前池塘的位置，另外，还进行了将装入袋中的人沉下水中5秒钟后的深度试验等等。总之，该做的都去做了。

1998年9月，东京高等法院审理完毕，并决定于11月26日进行判决。可是到了11月份，该院竟以“没写好判决书”为由，延期至12月22日。为何突然推迟判决日期？因为从11月25日起，江泽民主席访问日本。东史郎曾担心地说过：“可能是因为如果在江主席访日的第二天就进行判决，对日本政府来说是时机不合适，还可能作出被政治操纵的判决。”我当时也是这样想的。

12月22日，东京高等法院的判决对邮政袋事件判定为“不能认定事件具有实行的可能性”，并作出“控告人东史郎不能再现具体事实进行供述，这说明他当时没有亲眼目睹本件行为，因此只能推认没有发生过本件行为。”法官是把真实的历史用“推断”来进行否定的。此外，有关《东史郎日记》，该法院提出了一个原告和被告都没有提出的“战地日记”是否存在这一问题，也因为没有战地日记，就断定为“是战后所写”等等，充分暴露了其真正的目的。完全是“乱下结论式”的判决。

东京高等法院判决后，原告方面在记者招待会的会场上挂起了“捏造南京屠杀诉讼胜利”的横幅。他们想利用法庭达到否认南京大屠杀的目的，在这场诉讼中已是显而易见的了。

在二审判决后，一右翼青年闯入出版《东史郎日记》的青木书店并破坏了其办事处，因触犯法律该青年被捕。

在东京高等法院判决后的1998年12月25日，东史郎立即上诉到日本最高法院。最高法院判决方式是不开庭审理，根据申述材料进行判决。

一审、二审中都是以日记的那段内容，以“对肇事者本身有危险，是不可能发生的事情”为借口而判东史郎先生败诉的。因此，我们在南京有关方面的协助下，按照日记所述的方法，再次进行了手榴弹的水下实爆模拟试验。试验根本没有危险，是在很从容的情况下进行的。我们将这些证据和证书，递交给日本最高法院。

在东京高等法院的判决前，我们也递交了原告接受香港电视台采访的录像。原告曾在法庭上作证说：“自己没有在中国杀过人，更谈不上什么强奸，也没见过掠夺和尸体。”可是在这次采访中他

回答道："我也杀过人。战争就是杀人的工作。""东史郎（12月21日）记下的那个地方（原中国最高法院前），我想我当时也在那里。"

我们在12月上旬把充分的证言、证据都交给了最高法院，在一个多月后的1月21日，该院下达了判决书，这不能不认为该院是在没有审核律师团提交的重要证据的情况下，就作出了草率的判定。在1999年12月13日，声援会向该院递交了来自中国南京市和全国以及世界各地的"要求基于南京大屠杀的史实，作出严肃的司法判决"的约7万多人的签名。可以认为，在这种情况下，日本最高法院考虑的是，越将判决的时间推后，越会引起国际社会的关注，越会面临着来自国际舆论的压力，为了不造成这样的局面，所以尽快作出判决。

而这个时候正好是日本右翼势力即将在由大阪府、市经营的"大阪国际和平中心"召开一个名曰"20世纪最大的谎言——南京大屠杀的彻底检证"集会的前夕。

判决后，面对来自中国的抗议，日本政府的解释是这个诉讼"只是一般的民事诉讼"，但实际上这场诉讼的本质是利用司法形式达到否定南京大屠杀历史，并企图封住凭良心说真话的历史证人之口，惩一儆百，使其他想说真话的证人不敢再说的目的。中国方面完全认清了这场诉讼的本质。

法院方面对挑起这场诉讼的原告背后势力视而不见，就作为一般的名誉损害来进行处理了。虽然这是一个围绕历史认知的审判，然而却在完全缺乏对历史的认识的情况下作出了判决。正因为这样，它完全是错误的。

进一步地说，这场诉讼公正与否还直接关系到被害国中国人民的感情问题，本应考虑中日两国之间的国际关系来进行严肃审议的。我认为，如果说日本的司法机关无视公理和正义也丝毫不过分。这场诉讼当然也涉及到日本的司法界如何看待历史，有无国际责任感的问题。

在这场诉讼中，本该是公正的法官却明显偏袒于原告方。

我坚信，不管如何判决，丝毫不能贬低作为一个日军士兵所记录的南京大屠杀及侵略中国史实的《东史郎日记》这份历史资料的珍贵性。而我自身也从《东史郎日记》中了解到日军在中国干了些什么，战场上的人又是怎样的，学到了很多历史知识。

这场诉讼斗争，也取得了很大的成果。由中北龙太郎、丹羽雅雄、空野佳弘组成的律师团，收集了广泛的证据，进一步证明了《东史郎日记》的真实性，揭露了挑起诉讼的原告方面企图达到否认南京大屠杀的目的。

另外，声援东史郎诉讼的斗争，由最初的几名日本青年人发展到超过500人的民间组织。在山口县防府市结成了以高岛美登里为中心的山口县"南京大屠杀证言者・支援东史郎之会"组织，还有在东京法庭上前来声援的"不再重演南京事件之会"田中宏(负责人)、芹泽明男、刘彩品等声援者。广岛、冈山、熊本各日中友好教师协会青年部的人们，多次邀请东史郎作证言演讲集会，使更多的日本人了解历史。虽然，原告方起诉的目的是欲封住证言人之口，但实际上不仅没有封住东史郎之口，还使支援东史郎的人越来越多，东史郎有更多的机会来讲述那段历史，并通过英特网更进一步将诉讼情况告知全世界，使各国人民能够同时思考发生在日本的这场诉讼。

在这里要强调的是，在这场诉讼斗争中靠的是中国人民特别是南京人民的支援和帮助。

1996年一审败诉后的夏天，为了收集在日本找不到的证据，我们访问了南京。我们向南京人民

请求为我们提供当时的历史资料，如原中国最高法院的位置，水塘的地理状况、当时能装入一个中国人的邮政袋等等。在2个月后的10月，市民集中汇集到南京纪念馆的就有60余件地图、证言以及当时的南京市区航空照片。这些证据与《东史郎日记》完全一致，为律师团和我们支援会证明《东史郎日记》的真实、增加了很大的信心。

特别困难的是手榴弹爆炸试验，在南京纪念馆和南京工程爆破研究所专家的支持和帮助下，按照《东史郎日记》中所记载的内容、成功地进行了验证。

南京大屠杀史研究会的高兴祖先生、孙宅巍先生等人，从诉讼一开始就一直向我们介绍南京大屠杀事件的最新研究成果。

还有在调查取证时，免费为我们提供出租车的司机以及配合我们调查直至深夜的幸存的老人们等等。在这场诉讼中，南京人民实实在在地给予了我们许许多多的支援。

关于"维护南京大屠杀历史的真实、要求做出严肃的司法判决签名活动"，来自中国及各国人民的签名达7万余人。为了整理这些书信、横幅，南京纪念馆工作人员和南京金陵职业大学的同学们、利用暑假做好了这项工作。这些签名到达日本后，声援会的成员又进行了几天的整理。我们从签名的书信里，听到了热情的声援之声，感到了跨越国界的鼓励。

一想起给予我们签名支援的那些人，我就心潮难平，决非"感谢"两字能够表达的。

我们充分感到，我们是与南京纪念馆和中国友人携手，在共同的斗争中，共建和平与友好关系。

南京纪念馆的朱成山馆长用这样一段话赠与东史郎先生："尊重历史的人，将被历史尊重；否定历史的人，将被历史否定。"

我认为，这场东史郎的诉讼斗争就是尊重历史的斗争。我们的斗争是为了使日本尊重像东史郎这样正视历史的人。也是面对日本社会中"今后日本和中国的关系应该怎样发展"的提问进行回答而持续的斗争。我们的斗争仍在继续。

特别是看到近来日本国内的势态，围绕南京大屠杀事件的争论异常激烈，"南京大屠杀是虚构"的声音越来越大，使许多不明真相的人不知所措。更有甚者，竟出现了诬陷中国的幸存者是"假证人"，以及妄图篡改历史的动向。在这种严峻形势下，痛感维护历史事实的重要。我衷心祈望日中两国人民携起手来、共同推进这段历史的深入研究。

进而我由衷希望把日益高龄的幸存者的证言作为历史保留下来，共同牢记他们那无法治愈的内心创伤、努力恢复人的尊严。

现在、南京纪念馆和支援东史郎案审判实行委员会决定共同出版这册图集。

通过这册图集，您可以了解到在南京大屠杀50周年之际，将自己战时日记等资料公开，并为自己加害的历史作证的这样一位老人、在其后10多年间，在日本的遭遇，以及目前日本社会对历史认知的实况。

把《东史郎日记》案的全貌和真实记录，以及日中两国人民共同战斗的这段历史记录下来，这是我们出版《东史郎日记》案图集的初衷。

2000年9月成稿于长冈京市自宅中

歴史認識の共有と心の交流を深めたい

東史郎さんの南京裁判を支える会事務局長 **山内　小夜子**

私が初めて南京を訪問した１９８８年８月、紫金山の東郊葬送地の記念碑を訪れた際、段月萍副館長は、「昨年（１９８７年）１２月の南京大虐殺５０ヵ年の年に、東史郎という元日本兵が南京を訪れ南京人民に謝罪しました。ここ東郊草葬地にも来て、この地域一帯で亡くなられた３万人以上にのぼる受難者に追悼し謝罪をしました。私たちは、この東史郎さんの勇気に敬意を表します。日本で証言されることの困難を私たちは知っています」と、語られた。

戦後世代の私は、学校や家庭で先の侵略戦争について学ぶ機会がなく、十分な知識を持っていなかった。午前中に訪問した記念館の展示を見て、南京で起こった事件の大きさ、悲惨さ、現在なお続く深刻な被害について、胸がつぶれるような思いを抱えていた。午後、訪問した虐殺の現場で、段副館長からこの言葉を聞いた時に、胸に熱い思いがこみ上げてきた。自らの加害の罪を５０年間も心の奥深くしまい込み、謝罪をするためやっと南京訪問ができた日本人がいるという事実。そして、自分の「罪」を認め「鬼」から「人間」になった者に対しては敬意を表するという、中国人民の魂（精神）に触れた思いがしたからだ。夏が来る毎に、私は紫金山のプラタナスの並木道と、あの時のこみ上げるような感情を思い出す。私は、南京の地で「東史郎」という一人の元日本兵士と出会った。南京が私と東史郎さんの出会いの原点である。

１９８７年１２月南京を訪問し謝罪した時の事情を、東史郎さんからも聞いた。

東さんは、南京記念館の中庭で群衆に取り囲まれた時、「中国人民からの復讐を覚悟した」と言う。しかし、復讐ではなく沢山の質問が待っていた。最後の質問は一人の女性からで、「いかなる事があっても過去は過去。これからの中国と日本の関係はどうあるべきと考えるか？」という聡明な質問であった。この質問に東史郎さんは考え込んだ。

その後記念館応接間で幸存者のおじいさん、おばあさんと対面した。加害者として、どういう顔をして対面すればいいかわからない。非常に緊張した。謝罪のために訪問した南京であったが、５０年前の記憶が東さん自身に問いかける。言葉にならない。ただ頭を下げるだけ。「南京の人たちにたいへんなご迷惑をか

けた。どうもあいすみませんでした」という言葉がやっと出た言葉であった。一人の幸存者（靴屋さんだった）が「会いたくもない憎い日本兵だが、あなたの謝罪の言葉を聞いて心が解けました」と語り、握手を求めてくれたという。そして、手と手で握手した。東さんは「そけだけで、南京に来た甲斐があった」と思った。

東史郎さんは加害証言以降の重なる脅迫、非難、恫喝、そして裁判闘争の中で困難な状況が生じる度にこの時の話をして、私達を力づけた。

「これからの日本と中国との関係はどうあるべきか？」という一女性の質問。

１９８７年から２０００年に渡る１３年間の闘いの原動力がここにあるのだと私は思う。

南京戦から５０年後の１９８７年７月７日、東史郎さんは京都の市民運動「平和のための戦争展」の要請を受けて体験を証言し日記を公表した。東史郎さん、増田六助さん、上羽武一郎さんの三人が、初めて一人称で加害証言を行った。

その後日記の一部が『わが南京プラトーン　一召集兵の体験した南京大虐殺』として発行された。加害証言後、１００通を越える脅迫状や抗議の手紙、電話が続いた。東さんによると、一番最初の抗議は東京の女性からで、「英霊を冒涜するな」と電話口で怒鳴ったという。さらに、南京で中国人民に謝罪した姿は、「裏切り者・国賊」と映ったのか、戦友会から「除名」された。そして「二十聯隊の名誉を守るため」に「福知山二十聯隊愛護会」が結成され、後の裁判では原告側の支援母胎となっている。

日記の公刊と謝罪から６年も過ぎた１９９３年４月１４日、東さんは「名誉毀損」の裁判で訴えられる。東さんの日記は、下里正樹著『隠された聯隊史』、（青木書店）木坂順一郎編『南京事件・京都師団関係資料集』（青木書店）にも引用されており、この三冊が関連して訴えられることになる。

東史郎さん他二名（下里正樹、青木書店）から「名誉を毀損された」として、謝罪文掲載・損害賠償等を求めて裁判を起こした原告は、歩兵第二十聯隊第三中隊第一分隊の元分隊長で上官であった。東さん８８年の人生の中、数年の軍隊生活の中で、たった４ヶ月間だけ、寝食を共にした仲である。

提訴後、原告代理人高池勝彦弁護士事務所には「南京事件の虚構を正す会」が置かれた。

南京大虐殺の犠牲者数を数万人とする『南京戦史』（発行偕行社：元将校の親睦団体）の編集委員でもある板倉由明は、この訴訟が起こされた翌月に「南京虐殺の虚構に挑戦ー橋本訴訟の経緯とその意義」と題し、「この訴訟は、一見橋本氏個人の名誉回復を目的としているようだが、これを突破口として、歩兵２０連隊の残虐行為の虚偽を証明して名誉を回復し、さらに、いわゆる「南京大虐殺」の虚構を明らかにできれば、日本国全体の利益とも合致する」と訴訟の意義を表明している。

東日記の１９３７年１２月２１日の欄には、最高法院の前で、同じ分隊の「西本」が、中国人を郵便袋に入れ、袋にガソリンをかけたうえ火をつけた後、袋の紐に手榴弾を結びつけ沼に放り込み手榴弾を炸裂させた、と記されている。（東さんは、戦友の名を西本と仮名にした）その記述の真偽をめぐって裁判が争われた。

東京地方裁判所での第一審だけで実に２０回の公判が開かれている。その間東史郎さんは、日本海に面する丹後半島の突端から東京まで、２日がかりで裁判所まで出向いた。一老人にとって、どれほどの困難さであったことか。

１９９６年４月の東京地一審判決、１９９８年１２月の東京高裁二審判決はいずれも、この記述は虚偽であり原告の名誉を毀損したと判断し、東さんや出版社らに対し金５０万円の損害賠償金の支払を命じた。東さんらは二審判決に対し直ちに上告したが、２０００年1月２１日最高裁判所においても上告棄却の決定が下され確定した。

１９９６年４月、第一審地裁判決は、「南京事件の歴史学上の論争に判断を加える事を期待されている訳でも、これをよくするものでもない」として、南京事件については、「多数の捕虜や非戦闘員である中国人が日本兵によって殺害されたとの事実については、（略）・概ね否定しがたい事実」と、家永教科書裁判における南京事件の判断を踏襲した。しかし、郵便袋事件については、「不自然というべきで、（略）客観的証拠はなく（略）事実と認めるに足りない」と、木を見て森を見ない、原告側の主張に引きずられた判断を下した。

第二審東京高等裁判所での裁判に向けて、関西で弁護団と東史郎さんの南京裁判を支える会が結成された。そしてこの郵便袋事件が、物理的にも科学的にも、また当時の歴史事実に照らしても、なにら不自然でもなく、この判決は、南京大虐殺事件総体の中でこの郵便袋事件を判断していない歴史を無視した判決であるとして、実証活動、証拠集めに奔走した。

南京での手榴弾再現実験を成功させ、人が入れる郵便袋の存在を確認し、当時の自動車の構造を明らかにした。また、現地調査や当時の航空写真や地図により、最高法院前の池の位置の確認した。また、水中に人を袋に入れて五秒で沈む深さを計る実験など、できることはすべて行った。

１９９８年９月に結審となり、１１月２６日が判決言い渡しの日とされた。ところが１１月に入って「判決文が書けないから」という理由で、１２月２２日に延期された。１１月２５日から、江沢民国家主席の来日が決まっていた。「来日の翌日が判決日では日本政府として都合が悪かったのか？政治に左右される判決がでるのではないか」。東さんは心配して語った。私も同じ思いであった。

１２月２２日、東京高等裁判所判決は、郵便袋事件に関し「到底実行可能性があるものとは認めることができない」とし、「控訴人東が具体的な事実を再現して供述することができなかったのは、本件行為を目撃していなかった、すなわち、本件行為が実行されていないからと推認せざるを得ない」と、歴史を「推認」に基づいて判断した。また、東日記について、原告側からも東側からも一度も主張されたことのない「戦地メモ」の存在を裁判所自身が創作し、戦地メモがないから「戦後に書かれたもの」などとまったくの暴論を披瀝した。まさに「結論ありき」の判決である。

東京高裁判決の直後、原告側は記者会見の席上「南京虐殺捏造裁判勝利」という横断幕を揚げた。法廷を利用して、南京大虐殺事件を虚構化しようとする、この裁判の推進側の意図を明らかにした。

第二審判決後、この本の出版元の青木書店が右翼青年により襲撃され事務所が破壊され、青年が逮捕されるという暴力事件が起きている。

高裁判決後の１９９８年１２月２５日、東さんは最高裁判所に上告した。最高裁判所では、法廷は開廷されず文書による主張が中心であった。

第一審、第二審とも日記記載は、「実行者に危険で、実行可能性がない」という理由で敗訴になっていた。そこで再度、南京方面の協力を得て、日記記述通りの方法で手榴弾再現実験を行った。危険性もなく悠々

と行えた、その証拠ビデオと書証を提出した。

東京高裁の判決前に、香港テレビのインタビューに原告が答えたビデオを証拠とし提出して。原告は法廷では「自分は中国で人を殺したことがない。強姦もしたもとがない。略奪も死体も見たことがない」と証言していた。ところが、インタビューでは「私も人を殺しました。戦争は人を殺すのが仕事だから」「(12月21日は)東日記に書かれているから、あそこ(最高法院前)にいたと思う」と答えている。その証拠も最高裁判所に提出した。

それらを提出したのが、12月上旬。一ヶ月程後の1月21日に判決がでるということは、弁護団の提出した重要証拠をほとんど検討しないままで、決定を下したと考えざるを得ない。

1999年12月13日、支える会と来日していた朱成山館長は、中国南京市を始め、各地から寄せられた「南京大虐殺の史実に基づいた厳粛な司法判断を要求する」署名を七万人分提出した。それを見た最高裁判所は、判決を先に延ばせば延ばすほど、国際的な注目を集め、国際世論の圧力が裁判所に来ると考え、そうならないために早い時期に決定を下したものと考えられる。

時あたかも、大阪府・市の経営による「大阪国際平和センター」で、「二〇世紀最大の嘘　南京大虐殺の徹底検証」という名目の集会開催の直前であった。

判決後、中国側からの抗議に対し日本政府は、この裁判は「単なる民事訴訟にすぎない」と対応した。しかし、実態は、司法の場を利用し、南京大虐殺の歴史の否定し、良心に基づいた証言者の口を封じをはかり、見せしめにし、他の体験者が証言を躊躇させるという萎縮効果を与えるというのがこの裁判の本質であった。中国側は、この裁判の本質を的確に認識していた。

裁判所は、裁判を提起した原告の背後の勢力を見て見ぬ振りをし、あたかも通常の名誉毀損裁判として扱った。歴史認識をめぐる裁判であるにも関わらず、歴史認識を欠いたまま判断を下した。それ故に全く間違った判断をしてしまった。

さらに、この裁判の本質の一つは、被害国・中国の人民の感情に直接に関わる裁判であり、中日両国間の国際関係をも配慮して厳粛に審議されるべき裁判でもあった。ところが、日本の司法に、この観点は全くなかったといって過言でない。

この裁判は、東史郎さんが問われたのではなく、むしろ日本の司法の歴史認識、国際感覚が問われた裁判であった。

裁判闘争は、公正であるはずの裁判官によって一方的に幕が引かれた。まさに、日本社会、司法界の歴史認識、国際感覚こそが問われた裁判であった。

しかし、判決がどうであろうと「東史郎日記」は南京大虐殺を始め中国侵略の史実を記録した一兵士の資料として、貴重な歴史記録であることは全く揺らぐことはないと私は確信している。私自身この「東日記」によって、日本軍は中国で何を行ったのか、戦場で人間はどうなっていくのか知り、学ぶことができたと感じるからだ。

裁判闘争で積み重ねてきた成果は大きい。中北龍太郎、丹羽雅雄、空野佳弘弁護士による弁護団は、実証的な証拠を集め「東史郎日記」の真実性と、裁判を起こした原告側の意図が南京大虐殺の虚構化にあることを明らかにした。

また、初めは数名から始まった裁判支援闘争であったが、５００人を越える支援の会の輪が広がった。山口県防府市には、高島美登里を中心に、「東史郎裁判を支援する会・山口」が結成された。また、東京での裁判傍聴を支えてくれたのが「ノーモア南京の会」（代表・田中宏）の芹沢明男、劉彩品をはじめとする支援者であった。広島、岡山、熊本の日中友好教協会青年部の人たちが、講演集会を何度も主催し、証言活動と裁判支援の輪を広げてくれた。この裁判の一番のねらいは証言者の口封じであったが、東さんの口封じはできず、裁判の支持者は広がり、証言の機会はますます増えている。さらに、インターネットを通じてこの裁判の情報が全世界に届いており、日本国内の裁判情報を、国外の人々とも同時に考えることができるようになった。

また、この裁判は中国のとりわけ南京市民の協力なくしては闘えない裁判であった。

１９９６年の第一審敗訴後の夏、日本国内にはない証拠を集めに南京を訪問した。当時の歴史資料、最高法院の位置、沼の場所の確認、沼の形状、当時の中国に人を入れることが可能な大きさの郵便袋があったかどうか等々、どうか教えてほしいと、南京市民に情報の提供を申し出た。二ヶ月後の１０月には、南京記念館には６０点余の地図や証言、当時の南京市街の航空写真まで集まった。それらの証拠は、東史郎日記とことごとく一致し、弁護団も支える会の私たちも、東史郎日記の記述の裏付けになったと大いに自信をもっていた。

さらに、最大の難関であった火薬爆破実験も、南京記念館を始め、南京工程学院の専門家の呉教授の多大な指導と協力のもとで、東日記記述通りの実験を成功させていた。

また、南京大屠殺史学会の高興祖先生、孫宅巍先生を始め諸先生方には、裁判当初から、最新の南京大屠殺事件研究を教えていただき指導していただいた。

さらに、現地調査の際、「運賃は入らない」と支援の意を表してくれたタクシー運転者さんや、深夜まで聞き取り調査につき合ってくださった高齢の幸存者の方々など、私たちの裁判闘争を南京の市民は心から支えてくださった。

さらに、「南京大虐殺の歴史の真実に基づいた厳粛な司法判断を要求する署名運動」に対し、中国を始め各国から七万人余が届けられた。署名の整理には南京実業大学の学生たちが夏休み返上で担当してくれたと聞いている。日本に届いた署名を。支える会の事務局員が何日もかかって整理をしたが、署名や手紙をくれた一人ひとりから、熱い支援の声が届けられ、国境を越えて励まされた。

支援をしてくださり、署名を届けてくださった一人ひとりの、その心の中を思うとき、「感謝します」、という言葉では言い表すことができない気持ちでいっぱいになる。

南京記念館を始め中国の友人たちと共に闘うことにより、平和や友好関係は共同の闘いの中で、共に作り上げていくものであることを実感した。

南京記念館の朱成山館長は、東さんに「歴史を尊重する人は、歴史から尊重される。歴史を否定する人は、歴史から否定される」という言葉を贈られた。

この東史郎さんの闘いは、歴史を尊重する闘いであり、私たちの闘いは、歴史を尊重する人を尊重する日本社会を作る闘いであると思う。それは日本社会の中で「これからの日本と中国との関係はどうあるべきか？」と言う問いに、答え続ける闘いでもある。私たちの闘いに終わりはない。

特に昨今の日本国内の情勢を見ると、南京大虐殺事件をめぐる論戦はますます烈しくなっている。「南京大虐殺は虚構」の声は次第に大きくなり、事実を知らされない多くの民衆は判断を躊躇している。さらには中国の幸存者を「偽証人」と非難してまで歴史を改竄しようとする動きが始まっている。そのような厳しい状況の渦中にいて、あらためて歴史研究の重要さを痛切に感じる。日中両国の民衆が提携して共同の歴史研究を継続して推進することを心から願っている。

さらに、何よりも高齢化が進む幸存者の方々の体験を民衆の歴史として残し、癒されない苦痛を共有し、人間としての尊厳を取り戻すための取り組みをますます推進することを心から願っている。

このたび、南京記念館と東史郎さんの南京裁判を支える会とが共同して、一冊の本を出版することになった。

南京５０カ年の年、日記等の資料を公開し、自らの加害証言を行ったこの一人の老人の身の上に、その後の十数年間に日本でおこったことをこの『図集』で報告することにより、日本社会の歴史認識の実相が浮び上がってくると思う。行い、日記等の資料を公開したこの一人の老人の身の上に、その後の十数年間に何が起こったのか、この「図証」で報告することにより、現在の日本の実相が浮かび上がってくると思う。

"東史郎日記"案の全貌と真実な記録及び日本と中国との民衆の共同の闘いの歴史を記録したのは私達は"東史郎日記写真集" を出版したことの最初の願いです。

２０００年９月長岡京市の自宅にて

序 3

正义与邪恶交锋的真实记录

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆馆长
侵华日军南京大屠杀史研究会常务副会长　**朱成山**

2000年3月3日晚，我与日本友人一行4人，陪同东史郎先生去上海南京路散步。由于担心东史郎先生年事已高，就劝他在街头石凳上坐一坐，稍事歇歇脚。谁知刚落坐不久，就被一位年轻人认了出来，并执意要东史郎先生为其签名留念，结果很快聚拢了几百名要求签字的人群，把东史郎先生团团围住。日本友人山内小夜子和山本千夫，既为此情此景而激动，又怕挤坏了老人的身体。我只能求助于两名巡警，一起向群众解释不能满足其要求的原因，请求他们的谅解。最后，匆忙要了一辆出租车，回到了下榻的和平饭店。

从上述的例子来看，东史郎先生在中国的确有着很高的知名度。有人曾做过粗略的估计，可能有6–7亿中国人知道东史郎这个名字。不管这个估计是否正确，说东史郎先生在中国是个新闻人物或公众人物，恐怕没有人会提出疑问。

自1998年12月22日《东史郎日记》案二审败诉后，至1999年7月的半年多时间内，仅侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆（下称本馆），就收到来自全国30多个省、自治区和直辖市的6万多封支持东史郎先生的信函。东史郎先生作为曾侵略中国的加害者之一，为什么会在受害国人民的心中，享有如此高的支持率和信赖度呢？

东史郎先生诚恳地反省历史的过错，勇敢地揭露侵华日军当年在中国暴行的行为，赢得了中国人民的宽恕和谅解；他不屈服于日本右翼势力的压力，八年如一日地站在被告席上，始终与企图否定历史的日本右翼势力进行不懈斗争的勇气，更值得人们敬重。可以这样说，东史郎先生从与军国主义思想决裂和历史罪行的反省中获得新生；同时，他在与日本右翼势力较量和维护历史真相的斗争中，渐变为和平反战的勇士。

东史郎先生自1987年最初站出来反省历史开始，一直到现在，与本馆结下了不解之缘，也与我本人成了忘年之交。据本馆大事记记载，东史郎先生自1987年12月13日专程来到本馆谢罪起，先后7次来到南京，参加南京大屠杀历史调查、南京大屠杀史国际学术研讨会、邮政袋燃烧和手榴弹

实爆试验、《东史郎日记》及其勋章等文物的捐赠、《东史郎日记》中文版首发式等项活动，还多次应邀来南京报告日本法院不公正判决的情况。与此同时，本馆也一直是东史郎先生正义行动的有力支持者，曾发起声援东史郎先生的活动，并承担全中国人民声援东史郎先生信函的接受、登记和转交；组织有关“水塘”、“邮政袋”和“手榴弹”等问题的验证和地图、邮政袋、当年手榴弹技术参数等一批重要资料的收集与转送；在《东史郎日记》案一审、二审、三审败诉时，及时地给东史郎先生、支援东史郎案审判实行委员会（下称支援会）和律师团发去声援信；在二审败诉一个多月后，本馆就推出了“正义与邪恶的较量——东史郎日记案资料展”，两年来，已接待中外观众超过100万人次；在东史郎先生患病住院期间，还代表南京人民给他送去了花篮和营养滋补品；今年5月，还在南京饭店为东史郎先生举行了88岁生日的寿宴，等等。多年来，本馆人员与东史郎及支援会成员之间建立了彼此信赖与合作的关系。我也曾陪同东史郎先生去上海、北京、沈阳、杭州、苏州、扬州、镇江等许多城市举行报告会或座谈会，先后在北京大学、南京大学及日本冈山和平集会上多次同台演讲。去年12月16日，我还专程去东史郎先生的家拜访，受到了东史郎先生及其夫人久江女士的热情款待。在与日本右翼势力共同斗争的岁月中，我与东史郎先生成了莫逆之交，与支援会成员成为同一战壕的战友。

本馆现保存千余张与《东史郎日记》案有关的照片，数百封与东史郎、山内小夜子、中北龙太郎等日本友人的信函和传真，数千篇与《东史郎日记》案有关的新闻报道。有关日本支援会和律师团方面的则更多，法庭档案资料、相关照片、音像资料全部垒在一起有二米多高。为了把中日双方八年时间积累下来的宝贵资料中的精华奉献给读者，为了帮助人们更全面地了解《东史郎日记》案，去年12月，在我访问日本期间，与山内小夜子秘书长商量，由本馆和支援会一起，共同将各自留存的资料去粗取精、筛选编集，出版《“东史郎日记”案图集》和《“东史郎日记”案文集》，以飨读者。今年2月，我与山内小夜子、竹内迅等日本朋友，在南京中日友好会馆，专门为出版本图集进行正式磋商，并取得了一致意见。今年4月，我在大阪中北律师事务所内，又与山内小夜子、北山敏博、丹羽雅雄、空野佳弘、菱木政晴、山本千夫等日本友人一起，再次就出版一事商谈了具体的细节，决定年内在中国正式出版本图集。此后，山内小夜子秘书长用10多封快件，分别寄给本馆200多幅照片及说明词供选用，还专门为本图集撰写了序言。当本图集资料初步汇编成集后，山内小夜子、菱木政晴、山本千夫等支援会成员认真负责地对本图集进行了校对和修改。此事从一开始，便得到了东史郎先生的赞同和支持，他不仅向我们提供了自己保存的部分照片和资料，还应邀为本图集作了序。

本图集第一、二部分，用图文并茂的形式，扼要介绍了东史郎先生由“魔鬼”变成人的历史演变过程。受军国主义思想的熏陶，侵华战争期间的东史郎的确是个“魔鬼”。他的言行举止，都是个彻头彻尾的加害者。他的战时日记，是其加害行为的真实记录，也是日军侵华暴行的历史书证。战后多年和平安宁的生存环境，富裕和睦的家庭生活，促使东史郎先生人性的回归，开始对战时的加害行为进行反省，恢复了人的良知和本性。终于在南京大屠杀事件发生50周年的时候，他勇敢地站出来公布其战时日记，诚恳地向中国人民谢罪。本图集后五个部分，用大量的图片和简要的文字，系统地向人们介绍了《东史郎日记》案前前后后和林林总总的诉讼过程及其内幕，以及该案引发的肯定与否定南京大屠杀的较量与斗争，是一部正义与邪恶交锋的真实记录。

《东史郎日记》案历经8年，先后在东京地方法院、东京高等法院和日本最高法院提起诉讼并再

三败诉，而且还将在国际法庭持续诉讼下去。该案不仅在中日两国引起强烈反响，而且在美国、英国、菲律宾等国也有一定的影响。该案诉讼时间长，涉及的影响面大，诉讼主旨明确并指向性强，然而囿于本图集的篇幅和我们的能力有限，难以将其涉猎的图片资料一一囊括，对此，我们除了在《"东史郎日记"案文集》中用部分文字资料加以弥补外，只能请诸位读者谅解。

2000 年 8 月 1 日成稿于南京

正義と邪悪のたたかいの真実の記録

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館館長
中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会副会長　朱 成山

２０００年3月3日夜、私と日本人の友人の四名は、東史郎さんを案内して上海にいき南京路を散策した。東さんが既に高齢であるのを心配して、街角の石の腰掛けに座り、少し足を休ませることを勧めた。腰をおろすやいなや、思いがけなくも一人の青年に発見されてしまい、東さんはどうしても記念のためにサインをしてほしいとせがまれた。そしてあっという間に、数百名のサインを求める群衆がむらがり、東史郎さんを取り囲んだ。日本の友人の山内小夜子さんと山本幹夫さんは、この情景をみて感動すると同時に、老人の身体が押しつぶされるのではないかと心配した。私ができたのは、二人の警官に助けを求め、一緒に群衆に対してその要求にこたえられない理由を説明し、彼らの理解を求めることぐらいだけだった。最後は、あわただしくタクシーを呼び、宿泊していた和平ホテルに帰り着いたのだった。

この例からわかるように、東史郎さんは中国では確実に非常に知名度が高い。かつてある人がおおざっぱに推計したところ、六～七億の中国人が東史郎さんの名前を知っていることだった。この推計が正確であるかないかは別にしても、東史郎さんは中国では話題の人であり、大衆的な人物であることは、おそらく誰も疑問を差しはさむものはいないであろう。

１９８８年１２月２２日の『東史郎日記』事件の第２審の敗訴以降、１９９９年の７月までの半年あまりの期間、侵華日軍南京大虐殺受難同胞記念館（以下本館）だけで、全国の３０あまりの省、直轄市、自治区の６万を越える東史郎さんを支持する手紙が寄せられた。東史郎さんはかつて中国を侵略した加害者の一人であるが、どうして被害者の国の人々の中で、このように高い支持と信頼を得ているのであろうか。

東史郎さんは誠実に歴史の誤りを反省し、中国を侵略した日本軍が当時中国ではたらいた残虐行為を勇敢に暴露し、中国人民の許しと理解を勝ち得てきた。彼は日本の右翼勢力からの圧力に屈服せず、８年間を１日のごとく被告席に立ち続け、終始、歴史を否定しようともくろむ右翼勢力と妥協することのないたたかいを進めてきた勇気は、さらに人々の尊敬に値するものである。言い換えれば、東史郎さんは軍国主義思想から決別し歴史の犯罪行為の反省の中で新しく生まれ変わったのである。同時に彼は、日本の右翼勢力との勝負と歴史の真相を擁護するたたかいの中で、次第に反戦平和の勇士へと変わっていったのである。

東史郎さんは１９８７年に、初めて歴史の反省に立ち上がってからずっと今日に至るまで、本館と確固とした絆を結んできており、私個人とも年齢を超えた友達づきあいをしてきた。本館の年代記によると、東史郎さんは１９８７年１２月１３日にわざわざ本館に来て謝罪したほか、相次いで七回南京を訪れ、南京大虐殺の歴史調査、南京大虐殺史国際学術シンポジウム、郵便袋の燃焼と手榴弾の爆発実験、『東史郎日記』と勲章などの文物の寄贈、『東史郎日記』中国語版出版記念会などの活動に参加し、また何度も招待に応じて南京を訪れ日本の裁判所の不当な判決の状況を報告した。これと同時に本館もずっと東史郎さんの正義の行動の支持者であり、東さんの活動に声援をおくるよう呼びかけ、また全中国人民の東史郎さんを声援する手紙を受け付けることを担当し、登録し取り次いだ。「池」「郵便袋」と「手榴弾」などの問題に関する検証を組織した。『東日記事件』の第一審、二審、三審の敗訴の時、すぐさま東史郎さん、支援する会、弁護団を声援する手紙を送った。第２審が敗訴して一ヶ月あまり後、本館は『正義と邪悪のたたかい………東史郎日記事件資料展』を開催し、二年間でのべ百万人を越える中国内外の参観者を受け入れた。東史郎さんが病気で入院されていた期間には、また南京人民を代表して、彼に生花を盛った篭と強壮剤を送った。今年の五月、また南京ホテルで東史郎さんのために88歳の誕生記念パーティを行い、本館の職員と東史郎さんおよび支援する会のメンバーとの間にお互いの信頼と協力関係をうちたてた。私もかって東史郎さんを案内して上海、北京、瀋陽、杭州、蘇州、鎮江など多くの都市に行き、報告会や座談会をおこなった。また前後して北京大学や南京大学および日本の岡山の平和集会で同じ壇上で講演した。昨年１２月１６日、私はまた、特に東史郎さんのお宅を訪問し、東史郎さん及びそのご夫人の久江さんの心のこもったおもてなしを受けた。共同闘争の歳月の間に私と東史郎さんとの間はきわめて親密な間柄になり、支援する会のメンバーとは同じ塹壕の中の戦友ともいうべき関係になった。

本館では今、1000枚に及ぶ『東史郎日記』事件に関する写真、数百通の東史郎さん、山内小夜子さん、中北龍太郎さんなど日本の友人からの手紙とファックス、数1000件の『東史郎日記』事件関係のニュース記事のコピーを保存している。そして、日本の支援する会と弁護団の側ではさらに多く、法廷調書資料、関係写真、録音・映像記録資料など全部を積み重ねると二メートル以上の高さになる。中日双方で八年の間に蓄積してきた貴重な資料の中の精髄を読者に提供し、人々の更なる『東史郎日記』事件の全面的な理解の手助けとするために、昨年１２月、私が日本を訪問した際、山内小夜子事務局長と相談し、本館と支援する会とが、共同でそれぞれが保存している資料を取捨選択、『「東史郎日記」事件写真集』と『「東史郎日記」事件文献集』を出版し、読者の要望に応えることにした。

今年の二月、私と山内小夜子さん、竹内迅さんなどの日本の友人と南京の中日友好会館で、この出版の件について正式に協議をおこない意見の一致をみた。今年の四月、私は大阪の中北龍太郎弁護士事務所で、また、山内小夜子、中北龍太郎、丹羽雅雄、空野佳弘、菱木政晴、山本幹夫氏らと一緒に、再度出版の件について具体的な詳細をうち合わせ、年内に中国でこの本を正式に出版することを決定した。この後、山内小夜子事務局長は十数回の速達便で、それぞれ本館に２００枚以上の写真とその解説を送り、また特にこの本のために序文を書いて下さった。この作業はここから始まり、東史郎さんの賛同と支持を得た。彼はわれわれに自分の保存している写真の一部を提供してくれただけではなく、また求めに応じてこの本のための序文を書いて下さった。

本書の第一部、二部は、多くの写真と簡潔な説明で、東史郎さんが「殺人鬼」から人間へと変わっていった歴史的変遷過程を要点をかいつまんで紹介している。軍国主義思想の影響を受け、中国侵略戦争の間の東史郎さんは確かに「殺人鬼」だった。彼の言動振る舞いは全て徹頭徹尾加害者であり、彼の戦時日記はその加害行為の真実の記録であり、またそれは日本軍の中国侵略残虐行為の歴史的証拠書類でもあった。

戦後の数カ年の平和で安寧な生活環境と豊かでむつまじい家庭生活は、東史郎さんに戦争当時の加害行為を深く反省することを促し、ついに南京大虐殺事件発生５０周年の時に、彼は勇敢に立ち上がりその戦時日記を公開し、中国人民に対して誠実に謝罪し、同時にまた人間としての良識と本性を取り戻したのだった。

本書の後の五部では、大量の写真と簡潔な文章によって、「東史郎日記」事件前後の多くの訴訟過程とその内幕、さらにこの事件が南京大虐殺を肯定するものと否定する勢力との勝負とたたかいを引き起こしたことを系統だって紹介している。これはまさに正義と邪悪のたたかいの真実の記録なのである。

『東史郎日記』事件は八年間の間に、東京地方裁判所、東京高等裁判所と日本の最高裁判所に訴訟が相次いで提起されたが、再三敗訴してきた。そしてまた国際法廷において訴訟が継続されていこうとしている。この事件は中日両国でお大きな反響を引き起こしただけではなく、アメリカ、イギリス、フィリピンなどの国においても一定の影響をもたらした。

この事件は訴訟の期間が長く、関連する影響の範囲が広く、訴訟の趣旨は明確で強い方向性をもっているが、本書の紙数と私たちの能力に限りがあり、『「東史郎日記」事件文献集』の中で使った説明資料で補足を加えた以外、広く探し求めた写真資料を全て包括するのは難しかったことをお許しいただき、読者諸兄のご理解を請う次第である。

２０００年８月１日南京にて

前　言

关于《东史郎日记》案

东史郎，曾作为日军士兵参与了侵华战争，并在1937年参与了南京大屠杀。1987年，东史郎在事隔50年后，向世人公布了他的战时日记，并于同年12月13日专程到南京，在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆向受害的中国人民谢罪。1993年4月，东史郎因日记中涉及南京大屠杀内容，被日本右翼势力诉讼至东京地方法院。1996年4月，该法院在未查明事实的情况下，公然判处东史郎败诉。1998年12月22日，东京高等法院无视公理与事实，二审再次判处东史郎败诉，受到了世界舆论的抨击。2000年1月21日，日本最高法院不顾法理与正义，终审判决其败诉。日本右翼势力企图借助司法程序达到否认南京大屠杀史实的不公正判决，激起许许多多正义人士的强烈义愤、谴责和抗议！

在侵华战争期间，受军国主义思想的毒害，东史郎无疑是中国人民的加害者，双手也曾沾上受害者的鲜血。但是，在日本军国主义分子发动的那场战争中，东史郎和无数日本年轻人一样，既是加害者、又是受害者；他们是战争狂人的工具，也是炮灰。

中国有句古话："知耻者，近乎勇。"东史郎能在半个世纪后，勇于站出来向中国人民反省、谢罪，并无情地揭露日军当年的残暴行径，这是一个值得称道的正义行动，需要一定的觉悟和勇气。特别是在80岁高龄之后，他不怕围攻、谩骂和威胁，甚至一而再、再而三地被推上法庭，并在受到不公正判决后仍不屈服的精神，尤其难能可贵！

本图集披露的有关《东史郎日记》诉讼的图片资料，旨在帮助人们了解该案件的真相，揭露日本右翼势力妄图掩盖侵略历史、否定南京大屠杀史实的图谋，同时也是对东史郎先生正义行动的声援和支持。

『東史郎日記』裁判について

東史郎氏は、かって日本軍の一兵士として中国侵略戦争に従軍し、また１９３７には年南京大虐殺事件にかかわった。１９８７年東史郎氏は事件の５０年後に、その戦時日記を公表し、また同年１２月１３日にはわざわざ南京を訪れ、侵華日軍南京大虐殺殉難同胞記念館で被害を被った中国人民に対して謝罪をおこなった。１９９３年４月、東史郎氏は、その日記の中の南京大虐殺の内容に触れた部分が原因で日本の右翼勢力に東京地方裁判所に告訴された。１９９６年４月、東京地方裁判所は事実を調べて明らかにすることなく、東史郎氏に敗訴の判決を言い渡した。１９９８年１２月２２日、東京高等裁判所は道理と事実を無視して第二審で再度東史郎氏敗訴の判決を下し、世界の世論から厳しい批判を受けた。２０００年１月２１日、日本の最高裁判所は法理と正義を省みることなく、終審判決として東史郎氏の敗訴を決定したのだった。日本の右翼勢力が司法手続きを借りて南京大虐殺の歴史的事実を否定する不公正な判決を目論んだことに対し、多くの正義を求める人たちの義憤と激しい批判と抗議が巻き起こった。

中国侵略戦争の期間に、軍国主義思想の害毒に侵されていた、東史郎氏は間違いなく中国人民に対する加害者であり、かつて、その両手は犠牲者たちの赤い血で汚されていた。しかし、日本軍国主義分子が引き起こしたあの戦争のさなかで、東史郎氏は他の無数の日本人青年と同じように、加害者である一方、被害者でもあった。彼らは戦争狂人どもの道具であり、大砲の餌食でもあった。

中国で、「恥を知ることは、勇に近い」という古くからの言葉がある。東史郎氏は半世紀後に、勇気をもって立ち上がり、中国人民に対して反省と謝罪をおこない、また日本軍の当時の残虐なふるまいを容赦なく暴露した。これはまったく称賛に値する正義の行動であり、ある程度の覚悟と勇気が必要とされることである。特に８０歳の高齢になった後、彼は包囲攻撃や侮辱、罵悪と脅しをおそれず、ひいては再三再四法廷に立ち、不公正な判決を受けた後も依然として屈することのない精神は、とりわけ高く評価されるべきである。

本書で公表する『東史郎日記』裁判関係の写真資料は、この事件の真相を理解するのに役立ち、日本の右翼勢力が侵略戦争の歴史を隠蔽する策動や南京大虐殺の歴史的事実を否定するもくろみを暴露し、同時に本書また東史郎氏の正義の行動に対して声援をおくり支持する目的で発行されるものである。

1 侵华战争期间的东史郎及其战时日记

中国侵略戦争期間中の東史郎とその戦時日記







图为身着日军军服、参与侵华战争的东史郎。 ——(日)东史郎 提供

写真は、日本軍の軍服を着た中国侵略戦争に参加した東史郎。

——(日)東史郎 提供

东史郎，1912年4月27日生，日本京都府竹野郡丹后町人。

1937年8月，25岁的东史郎奉天皇之命应召入伍，系日军第16师团步兵20联队上等兵，曾参加攻占天津、上海、南京、徐州、武汉、襄东等战役，于1939年9月，因病退役回国。

1944年3月，他再次应召参加侵华战争。1945年8月，他在向中国军队投降后，于1946年1月回日本。

东史郎有记日记的习惯，他把侵华战争期间的所见所闻详细地记录下来。这些日记共有5本约40万字。

１９１２年４月２７日生まれで、日本京都府竹野郡の丹後町の人である。１９３７年８月、天皇からの命令を受け取り召集に応じて入隊し、日本軍第１６師団歩兵２０連隊の上等兵として、かつて天津、上海、南京、徐州、武漢、襄東等の戦役に参加し、１９３９年９月に病気のため退役して帰国した。

１９４４年３月、彼は再度召集されて中国侵略戦争に参加した。１９４５年８月、彼は中国軍隊に降伏した後、１９４６年１月に帰国した。

東史郎氏は日記をつける習慣があり、彼は中国侵略戦争の期間中に見聞きしたことを詳細に記録し、あわせて５冊、約４０万字にのぼる戦時日記がある。



在日本军国主义思想和“武士道”精神的毒害下，无数日本青少年接受法西斯训练，投身到“大东亚战争”之中充当炮灰。

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

日本軍国主義の思想と「武士道」精神の害毒の下で、無数の日本の青少年はファシストとしての訓練を受け、「大東亜戦争」の中に身を投じ、無理やり戦場に送り込まれた。

——日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年出版





20世纪初，日本为了发动侵略战争，对全体国民实行军国主义教育。图为在校学生正在接受法西斯训练。

——日本每日新闻社：《大日本帝国的战争—满洲帝国的幻影》1999年版

２０世紀初、日本は侵略戦争を発動するため、すべての国民に対して軍国主義教育を実施した。写真は、学校の学生に対してファシストとしての訓練を受けさせているところである。

－－日本毎日新聞社『大日本帝国の戦争－満州帝国の幻影』1999年出版



在推行军国主义教育的日本公立中学里，军装式的立领装成为学生们的制服。图为东史郎（左）在京都第二中学和同学的合影。

——（日）东史郎　提供

日本帝国主義下の公立中学校では軍隊式の詰め襟が学生たちの制服となっていた。写真は京都第二中学校時代、東史郎と友人。（左・東史郎）。

－－（日）東史郎　提供



深受军国主义思想毒害的东史郎，应召出征前在家中思索着如何尽忠天皇。

——(日)东史郎　提供

軍国主義思想の害毒に深く染まっていた東史郎氏は、召集に応じて出征する前、家の中でどのように天皇に忠誠を尽くしたらいいのか考えていた。

——(日)東史郎　提供

东史郎临出征时，受军国主义思想影响的生母对他说："这是一次千金难买的出征，你高兴地去吧，万一不幸被支那兵逮捕，就用这把刀剖腹自杀吧。我有三个儿子，死一个也没有关系。"说完，母亲拿来一把刻有"菊"字的短刀。

养母（义母）和他分别时痛哭流涕地说："你一定要活着回来。"她企盼并祈祷着他活着回来。东史郎怀着复杂的心情告别了两位母亲踏上了征途。

这张照片是在自家宅前与养母久的纪念照。

—(日)东史郎　提供

東史郎が出征する時、軍国主義の影響の受けていた生母は、「幾萬の金を積んでも行けへん出征やで。喜んで行きや。もし不幸にして支那兵に捕まったら、これで腹を切って死によし。私には三人も男の子があるのやし、一人位死んでもかまへんのえ」と母は、菊一文字の短刀を差し出した。

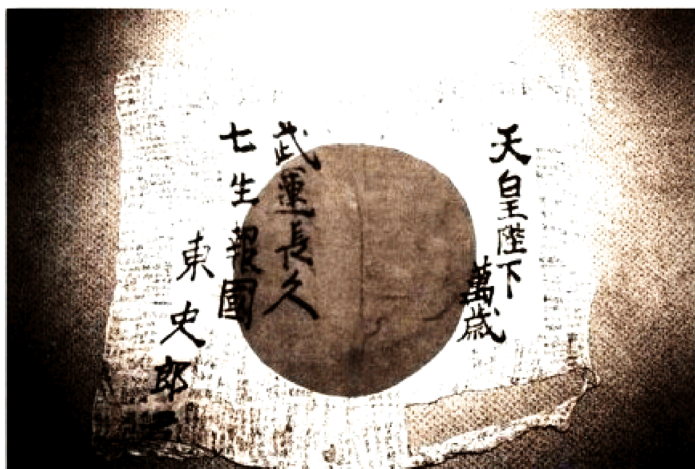
養母（義母）は、私と別れて泣いた。「きっと帰ってきてくれ」と生還を期し、生還を願った。生母は、「死ね」と激励した。二人の母の間で、複雑な思いを抱えた出征であった。

この写真は、自宅の前で母（養母・ひさ）との記念写真。

——(日)東史郎　提供







东史郎参与侵华战争前，他的邻居们在一面日本军旗上签满了姓名，鼓励他投身到“大东亚战争”中去。据东史郎回忆，当年他正是扛着这面军旗，从南京中山门攻入南京城的。

这是东史郎侵占南京时使用的军旗。

——(日) 东史郎　提供

東史郎氏が中国侵略戦争に参加する前、彼の隣近所の人たちは、「日の丸」の旗いっぱいに名前を寄せ書きし、彼が「大東亜戦争」に身を投じていくのを激励した。東史郎氏の回想によると、当時彼はまさにこの軍旗を掲げて南京の中山門から南京城に攻め入ったのである。

これは東史郎氏が南京を侵略占領した時に使った軍旗である。

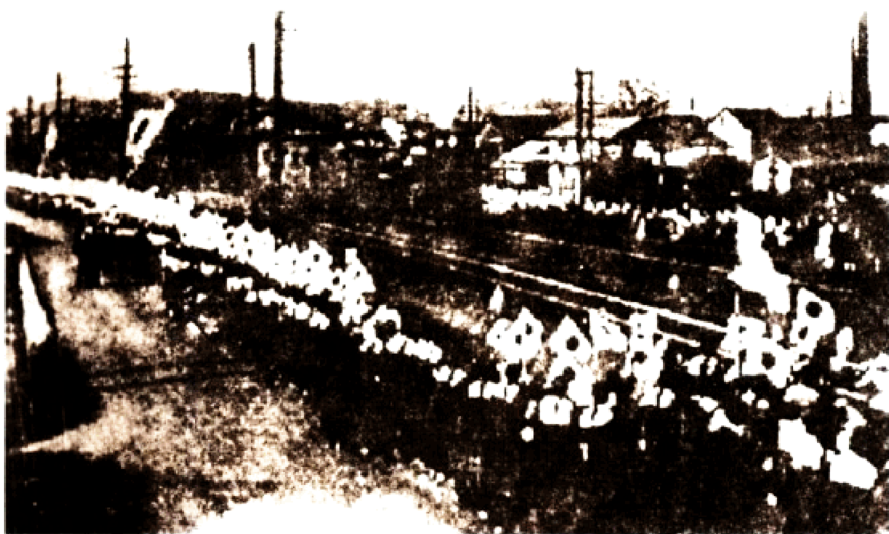
——(日)東史郎　提供

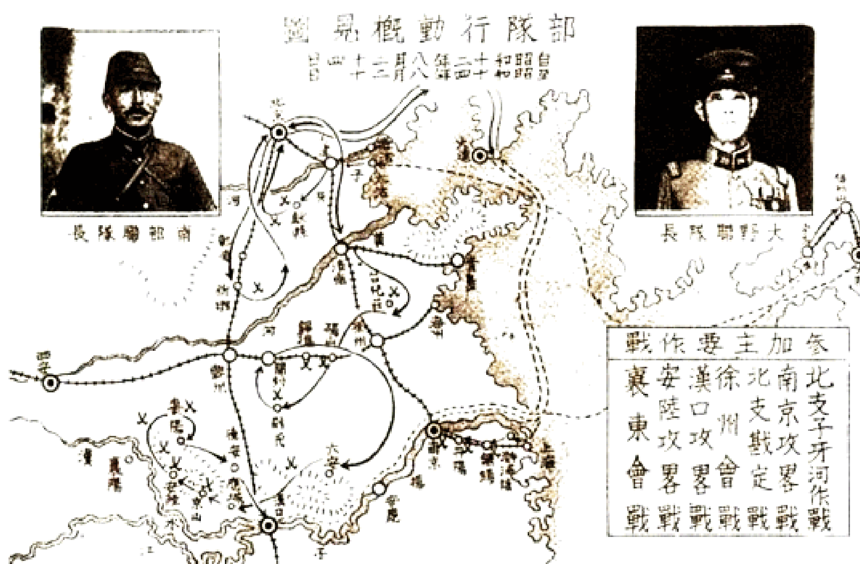
东史郎的乡邻们在福知山车站，为参与侵华战争的福知山第20联队士兵送别。

——(日)下里正树：《被隐瞒的联队史　第20联队下级士兵看到的南京事件真相》· 青木书店1987年版

東史郎さんの故郷の人たちは福知山駅で、中国侵略戦争に参戦する福知山第20連隊の兵士たちを見送った。

——(日)下里正樹『隠された聯隊史「20i」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年版





1937年8月20日、東史郎さんは日本軍第16師団20連隊に従って、日本の大阪から軍艦に乗り込み、中国の河北省の大沽港に上陸し、引き続き天津と華北地区を攻略した。1937年11月、また大連から海を経て揚子江の白茆口に上陸し、上海、無錫などを侵略占領し、その後で南京大虐殺にかかわった。1938年1月、再び海路で大連に戻り、相次いで彰徳、新郷、南和、北京、天津、済南、徐州、開封、六安、漢口、襄陽、徳安を攻略した。1939年7月京都第16師団は中国戦線から帰途についたが、東史郎はその部隊の帰国途中マラリアによる高熱のため部隊を離れ、漢口出航した後、南京で下船し広辻病院（広辻は病院長の名）へ入院した。9月に日本の宇品港に到着、福知山病院に入院の後11月に帰宅した。この図は東史郎が参加した中国侵略の『部隊行動が概見図』。

——(日)東史郎『わが南京プラトーン』

1937年8月20日，东史郎所在的日军第16师团20联队由日本大阪乘军舰，在中国河北省的大沽港登陆，继而侵占天津和华北地区。1937年11月从大连渡海，在长江白茆口登陆，侵占上海、无锡等地，随后参与了南京大屠杀。1938年1月，再由海路回大连，先后侵占彰德、新乡、南和、北京、天津、济南、徐州、开封、六安、汉口、襄阳、德安。1939年7月，京都第16师团从中国前线回国，途中，东史郎因患虐疾发高烧而离开部队，从汉口乘船，在南京下船，住进了广辻医院(广辻是院长的名字)。9月到达日本的宇品港，住进福知山医院，于11月出院回家。图为东史郎参与侵华作战路线图。

——(日)东史郎:《我的南京步兵队》



东史郎所在的侵华日军第16师团中将师团长中岛今朝吾。

日本每日新闻社:《不许可写真集》1998年12月版

東史郎さんの所属していた中国侵略日本軍第16師団中将師団長の中島今朝吾。

——日本毎日新聞社『不許可写真集』1998年12月出版



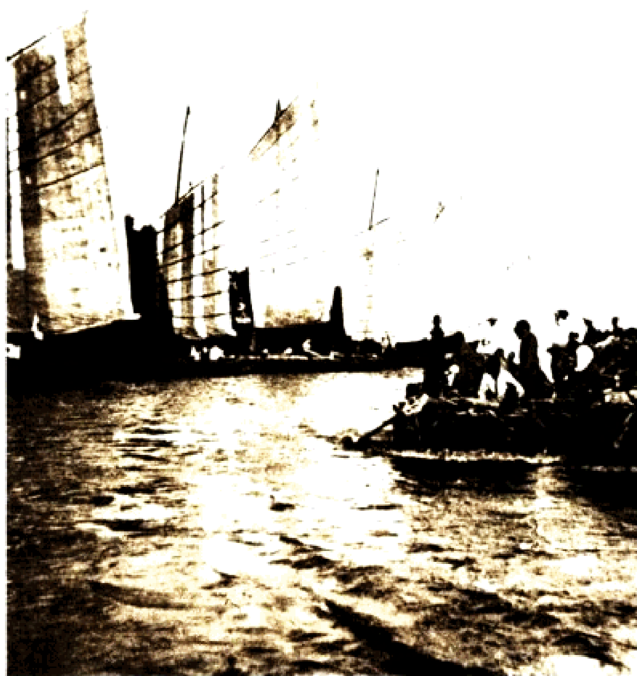


1937年9月，东史郎所在的侵华日军第16师团侵占独流镇。

——日本每日新闻社：《不许可写真集》1998年12月版

１９３７年９月　東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第16師団は独流鎮を侵略占領した。

－－日本毎日新聞社『不許可写真集』1998年12月出版



1937年9月19日，东史郎所在部队沿子牙河溯流而上，向河北省中部地区进犯。

——日本朝日新闻社:《支那事变写真全辑—北支战线》(上) 1937年版

１９３７年９月１９日、東史郎さんの部隊は、子牙河沿いに川をさかのぼり、河北省の中部地区を侵犯した。

－－日本朝日新聞社『支那事変写真集 -北支戦線』(上) 1937年出版



1937年9月，东史郎所在的侵华日军第16师团侵占保定。

——日本每日新闻社：《不许可写真集》1998年12月版

１９３７年９月　東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第１６師団は保定を侵略占領した。

－－日本毎日新聞社『不許可写真集』1998年12月出版



1937年9月，东史郎所在的侵华日军第16师团侵占河北献县。

——日本朝日新闻社：《支那事变写真全辑—北支战线》(上) 1937年版

１９３７年９月　東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第１６師団は河北省の献県を占領した。

－－日本朝日新聞社『支那事変写真集—北支戦線』(上) 1937年出版





1937年10月，东史郎所在的侵华日军第16师团侵占宁晋城。

日本朝日新闻社:《支那事变写真全辑—北支战线》(上) 1937年版

１９３７年１０月　東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第１６師団は寧普城を占領した。

——日本朝日新聞社『支那事変写真集—北支戦線』(上) 1937年出版



1937年10月，东史郎所在的侵华日军第16师团侵占石家庄。

——日本朝日新闻社:《支那事变写真全辑—北支战线》(上) 1937年版

１９３７年１０月、 東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第１６師団は石家荘を占領した。

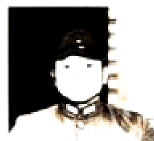
——日本朝日新聞社『支那事変写真集—北支戦線』(上) 1937年出版



1937年11月13日，东史郎所在的侵华日军第16师团在长江白茆口登陆。
日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

１９３７年１１月１３日、東史郎さんの所属する中国侵略日本軍は揚子江の白茆口に上陸した。

——日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年出版



1937年11月24日、侵华日军第16师团第9联队从梅李镇向常熟进犯。

——日本每日新闻社：《不许可写真集》1998年12月版

１９３７年１１月２４日、中国侵略日本軍第１６師団第９連隊は梅李鎮から常熟にむけて侵犯する。

——日本毎日新聞社『不許可写真集』1998年１２月出版





1937年11月26日，侵华日军侵占无锡后，纵火焚城。

——《侵华日军南京大屠杀图集》

１９３７年１１月２６日、中国侵略日本軍は無錫を占領した後、放火して街を燃やした。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』

1937年12月1日，东史郎所在的侵华日军第16师团第20联队向丹阳进攻，沿途纵火烧毁村庄。

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

１９３７年１２月１日、東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第１６師団第２０連隊は丹陽にむけて侵攻し、道中で放火し村を焼き払った。

――日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年出版



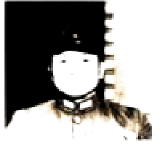


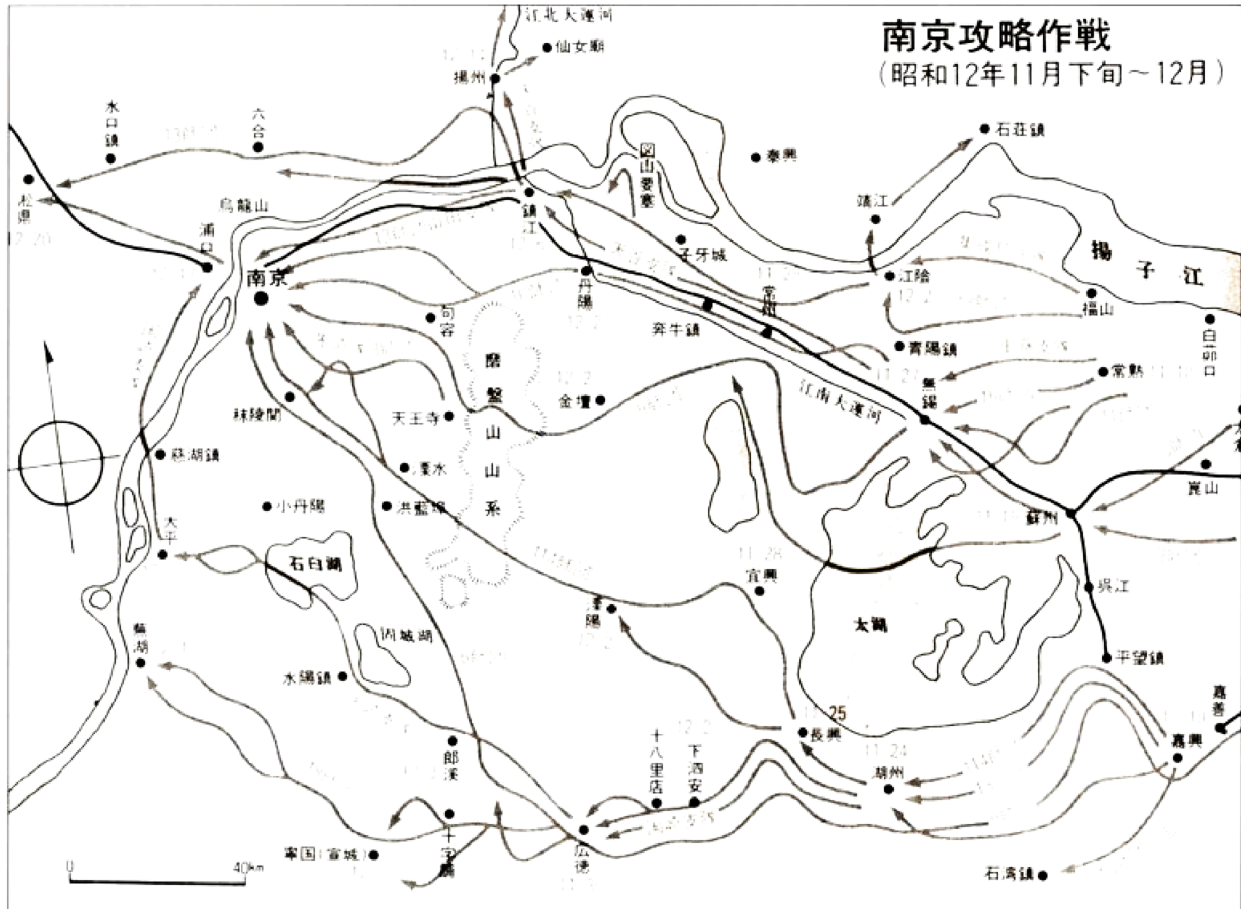
1937年12月2日，东史郎所在的日军第16师团20联队向丹阳进击。12月3日，丹阳陷落，这是将要侵入丹阳的片桐部队。

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

１９３７年１２月２日、東史郎さんの所属する日本軍第１６師団２０連隊は丹陽にむけて進撃した。１２月３日丹陽が陥落、これはまさに丹陽城に侵入しようとしている片桐部隊。

――日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年出版



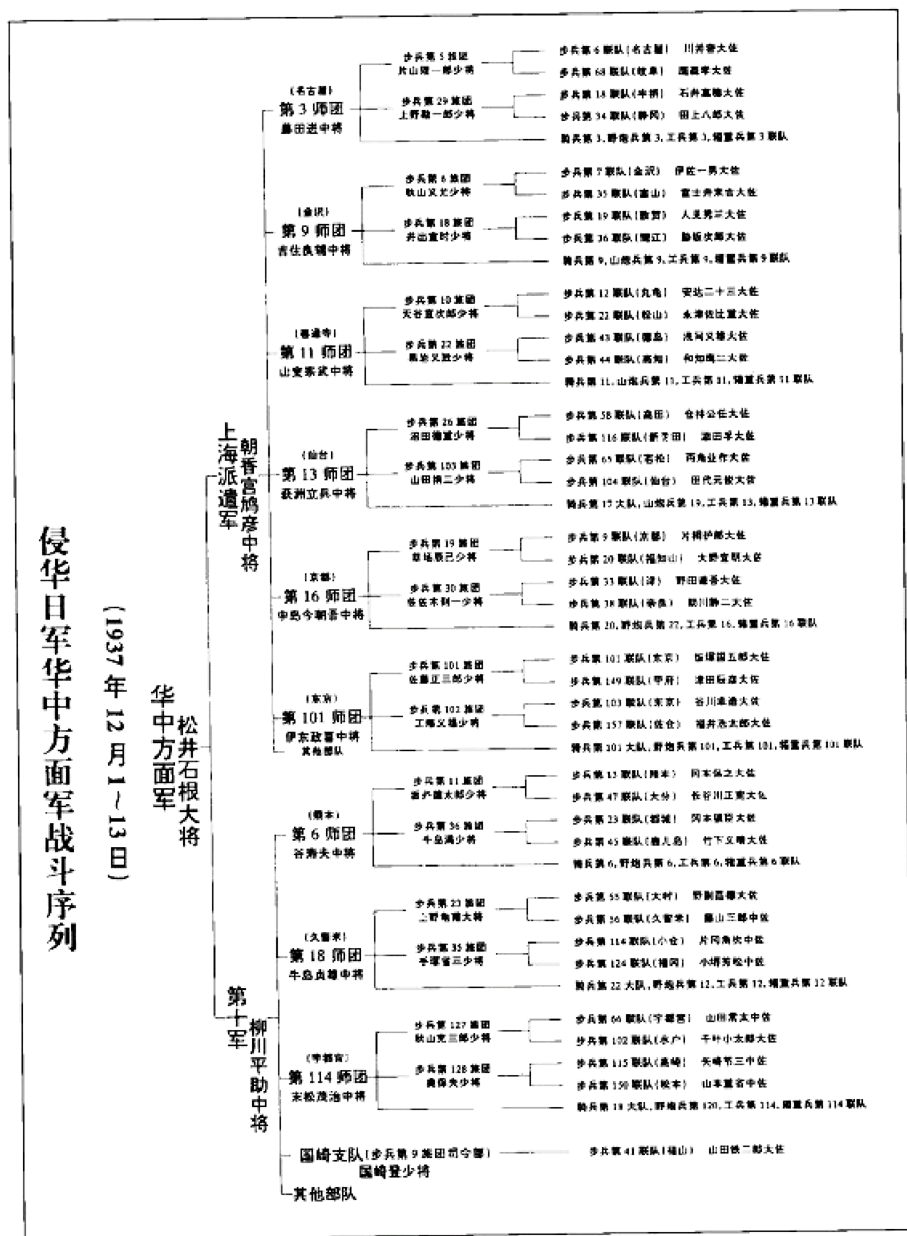


侵华日军进攻南京路线图

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979 年版

中国侵略日本軍の南京侵攻道順図

——日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979 年出版



侵华日军进攻南京的战斗序列。

——《侵华日军南京大屠杀图集》

中国侵略日本軍の南京侵攻時の戦闘序列。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』

大陸命第八號

命令

一 中支那方面軍司令官ハ海軍ト協同シテ敵国首都南京ヲ攻略スヘシ

二 細項ニ關シテハ参謀総長ヲシテ指示セシム

昭和十二年十二月一日

1937年12月1日，日军大本营下达《大陆命第8号命令》："华中方面军司令官须与海军协同，攻占敌国首都南京。"

——《侵华日军南京大屠杀图集》

1937年12月1日、日本の大本営は『大陸命第８号命令』を下した。「中支那方面派遣軍司令官は海軍と協同して敵国首都南京を攻略すべし」

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』



1937年12月3日、侵华日军第16师团第9联队沿京沪铁路向南京逼近。

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

1937年12月3日、中国侵略日本軍第16師団第9連隊は京滬鉄道沿いに南京に迫る。

——日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年版



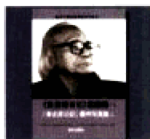


东史郎所在的侵华日军16师团越过磨盘山进逼南京。

日本每日新闻社：《一亿人的昭和史》1979年版

東史郎さんの所属する中国侵略日本軍第16師団は磨盤山を越え南京に迫る。

——日本毎日新聞社『一億人の昭和史』1979年出版





在侵略中国的战争期间，很多日军官兵都有记日记的习惯，东史郎也是其中之一。他将战争期间的见闻详细地记录下来。1939年9月，东史郎因病退役回到家乡。由于只有一人回国，他没有受到严格的检查（按当时日军的规定，所有描写战争残酷行为的记录或照片一律要没收），所以他的日记才得以保存。

中国侵略戦争の期間中、多くの日本軍の将兵に日記をつける習慣があった。東史郎さんもその中の一人だった。彼は作戦期間中に見聞きしたことを詳細に記録してきた。１９３９年９月、東史郎さんは病気のために退役して故郷に帰った。彼一人の帰国であったために厳格な検問所の検査がおこなわれなかった（当時の日本軍の規定で、戦争での残虐行為を描写した記録や写真はすべて没収した）ため、彼の日記は保存することがができた。

东史郎战时日记节录　1937年12月4日

我们对绑在树上的男人，又刺又砍又开枪射击。因为对这对青年男女感兴趣，所以把杀他们放在了最后。

中队长说："把那个女的从男的身边拉开。"一个士兵拧过那个女人的胳臂用力拉，终于把她拉开后，另一个士兵"嘿"的一声把刺刀刺入男人的胸膛。

放火　这件事对此时的我们来说并不算什么，比小孩玩火更觉得有趣："喂、今天真冷啊。""那就烧房子烤烤火吧！"我们既是杀人魔王又是放火的恶鬼。

東史郎戦時日記抄録　１９３７年１２月４日

木にしばられた男は、突き刺されたり、斬られたり、射殺されたりした。我々は、この青年と女に興味を持ったので殺すのを最後にした。

「女を男から引き離せ」と中隊長が言った。一人の兵士が、彼女の腕をもぎとるようにひっぱって、ようやく引き離すと、他の一人が「エイ」と男の胸をついた。

放火する——ということは、このごろの我々には何でもないことであって、こどもが火遊びするよりも、面白がってやるのである。「オイ、今日は寒いね」「じゃ、一軒炎してあたろうか」これが今日の私たちなのだ。私たちは殺人鬼であり放火魔である。

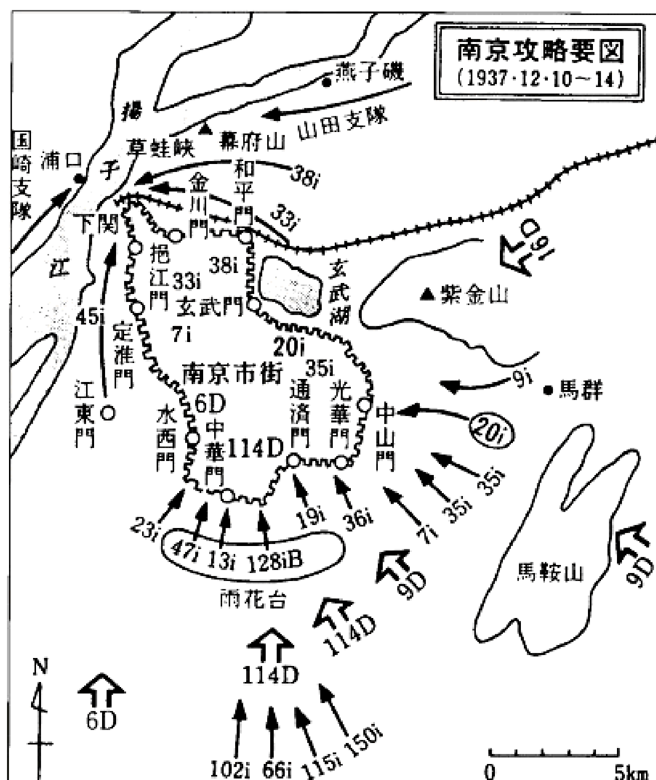


日军侵占南京示意图。

（日）下里正树：《被隐瞒的联队史—第20联队下级士兵看到的南京事件真相》· 青木书店1987年版

日本軍の南京攻略要図

——（日）下里正樹『隠された聯隊史　「20i」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店 1987年版



东史郎战时日记节录　1937年12月13日

12月13日、夜色在脚下弥漫开来，夜幕终于降临了，虽然一片漆黑，星火闪烁，我们依然前进着，(大概走了三、四里地，我看到前面有许许多多的烟火一闪一闪的，那里又像有无数的青蛙在叫，一片喧嚣。)大约有7000名俘虏被解除了武装。他们坐在田埂上，将领们早扔下他们的部下逃掉了，只剩下一个大尉军衔的军医。他们坐的田地比道路低，所以站在上面可以一览无余。夜色更深了，寒气更加袭人，我们来到下麒麟村的一个大宅院，把俘虏们全部关在里面。第二天早上，我们奉命加强马群镇警备，据说在我们警备马群镇期间，给每个中队分配二、三百名俘虏分头杀掉了。

東史郎戦時日記抄録　１９３７年１２月１３日

１２月１３日、夕暮が足元に広がり、やがて夜の幕が下がりの、すっかり暗くなって星がまたたいても歩いていた。(三、四里も歩いたと思われる頃、無数の煙草の火が明滅し、蛙のような喧噪をきいた。) 約七千人の捕虜が畑の中に武装解除されて座っている。彼らの将校は、彼ら部下を捨て、とっくに逃亡してしまい、わずかに軍医大尉が一人残っているだけである。彼らが座っている畑は道路より低かったので、一望に見渡すことができた。夜が深まるにつれて冷え冷えとした寒気が増した。下麒麟村のとある大きな家屋に到着し、彼らを全部この中に入れた。(略)

翌朝私たちは馬郡鎮の警備を命ぜられた。私たちが馬郡鎮の警備についている間に捕虜たちは各中隊へ二、三百人ずつあて、割り当てられて殺されたという。



1937年12月13日，侵华日军侵占南京中华门。
《日本侵华图片史料集》

1937年12月13日、中国侵略日本軍が南京中華門を占領する。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』







南京光华门城门上留下的累累弹痕。
——(日)《上海派遣军支那战争写真贴》

南京光華門城門に残された数多くの弾痕。
——(日)『上海派遣軍支那事変写真帖』



侵华日军侵占南京光华门。
《侵华日军南京大屠杀图集》

中国侵略日本軍が南京光華門を占領する。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』

南京中山门城门上写着："大野部队十三日凌晨三点十分占领"字样。

《侵华日军南京大屠杀图集》

南京中山門城門に昭和１２年12月13日午前３時10分「大野部隊占領」という文字が書いてある。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』



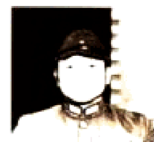


1937年12月13日，东史郎所在的侵华日军第16师团20联队攻占南京中山门。

—— 《侵华日军南京大屠杀图集》

１９３７年１２月１３日、東史郎さんが所属する中国侵略日本軍第１６師団２０連隊が南京中山門を占領する。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』





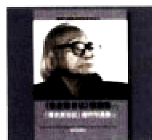
侵华日军侵占南京中山陵。
——（日）《写真集・南京大屠杀》

中国侵略日本軍が南京中山陵を占領する。
——（日）『写真集・南京大虐殺』



侵华日军在南京东郊中山陵灵谷寺一带“扫荡”。
——（日）《写真集・南京大屠杀》

中国侵略日本軍が南京の東郊外の中山陵霊谷寺一帯を掃討する。
——（日）『写真集・南京大虐殺』





1937年12月17日，侵华日军举行南京入城式。这是松井石根（前骑马者）等日本侵略军从南京中山门入城。

——《侵华日军南京大屠杀图集》

１９３７年１２月１７日、中国侵略日本軍は南京入城式をおこなった。これは松井石根（前で馬に乗った者）等の日本侵略軍の南京中山門からの入城である。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』

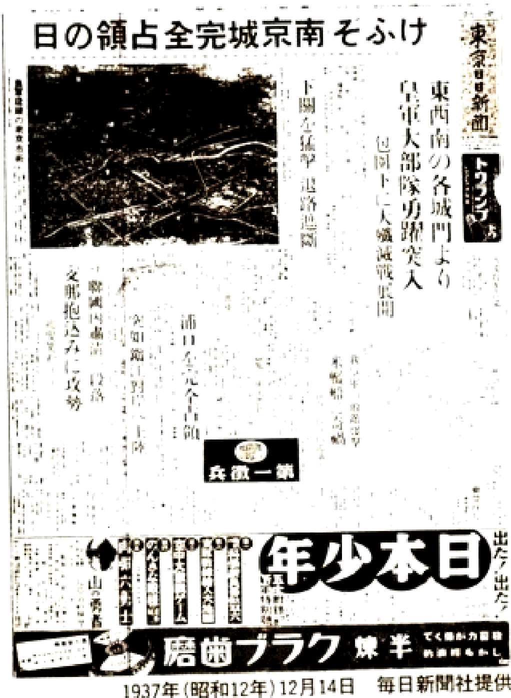




侵华日军侵占国民政府（总统府）。
《侵华日军南京大屠杀图集》

中国侵略日本軍が国民政府を占領した（総統府）。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』




けふぞ南京城完全占領の日

東京日日新聞

東西南の各城門より
皇軍大部隊勇躍突入
包圍下に大殲滅戰展開

下關を猛撃 退路遮斷

浦口を完全占領

支那抱込みに攻勢

第一徴兵

出た!出た!
日本少年

半煉
クラブ歯磨

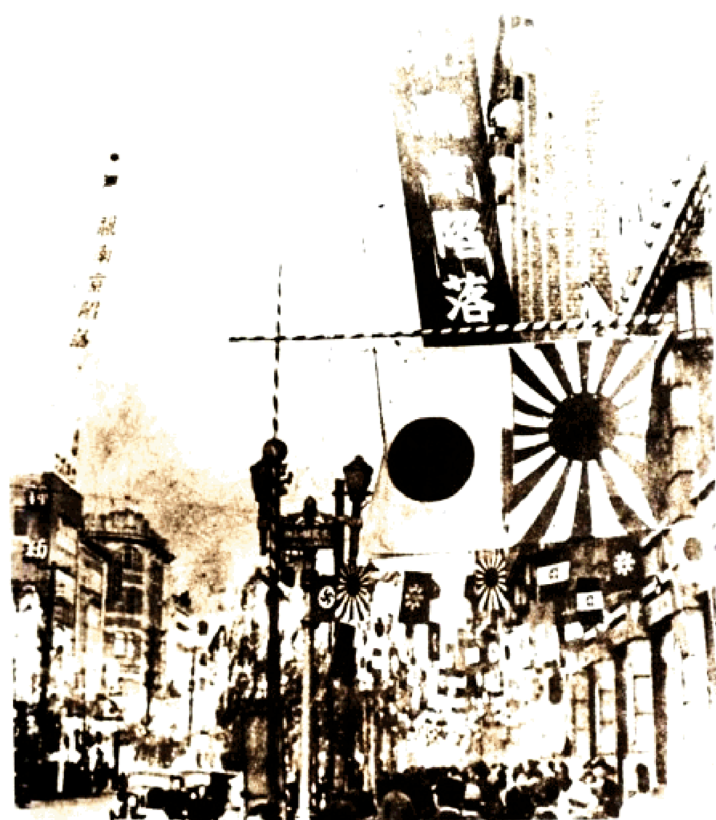
1937年(昭和12年)12月14日　毎日新聞社提供

1937 年 12 月 14 日，侵占南京城的日军到处杀烧淫掠，而日本东京却在疯狂地庆祝南京的陷落。

——《侵华日军南京大屠杀图集》

１９３７年１２月１４日、南京城を占領した日本軍は至る所で殺人、放火、強姦、略奪をおこなった。この一方で、日本の東京では熱狂的な祝賀ムードであった。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』





日军自白：

侵华日军第16师团30旅团佐佐木到一《一个军人的自传》（后改名为《进攻南京纪实》）：

12月13日"拂晓前，我先头部队插入敌人阵地，接着紧追敌人，轻装甲车中队在上午10时左右向下关挺进，扫射聚集于江岸，或在江面上逃跑的残兵败卒，大约打完了1.5万发子弹。

"那天，在我支队的作战地区内遗弃敌人的尸体达一万几千具，此外，还有在江面上被装甲车击毙的士兵和各部队的俘虏，如果合在一起计算，仅我支队就已解决（屠杀）了敌人二万人以上。

"下午2时左右，'扫荡'大致结束，接着安全无事，于是一边整顿部队、一边前进，到达了和平门。然后，俘虏接连不断地前来投降，达数千人。态度激昂的士兵毫不听从上级军官的阻拦，对他们一个个地加以杀戮。回顾许多战友的流血和10天时间的艰难困苦，即使他们不是士兵，也想说：'都干掉！'

"12月14日，两个联队全由隶下率领，在城内外展开'扫荡'。潜伏在各处的残兵败卒都被拉出来。但他们的武器都已被丢弃或隐藏起来。500名、1000名，大批俘虏接连被押解而来。

"虽说是残兵败卒，但他们有的潜伏在村庄和山区里，继续进行狙击。因此，进行抵抗的人和不愿顺从的人，当即被无情地杀戮。整天可以听到各地传来的枪声。死尸填满了太平门外很宽的护城河。

"下关的繁华街道几乎全被烧毁。数百辆汽车被扔在江边马路上，数百具死尸一具一具地被扔到江里漂走。"

12月16日："奉命'扫荡'紫金山一带地区。虽说收获不大，但两个联队把几百名残兵败卒拉出去处置了。"

12月17日："不言而喻，江南的田地与河滨染上了7万人的鲜血。"

日军文件　日军第16师团30旅团33联队《南京附近战斗详报》："自12月10日到14日，俘虏将校14、准士官下士官3082"，"俘虏处断（即屠杀）"。

日本軍の自白：

日本侵略軍第16師団30旅団佐々木到一『ある軍人の自伝』（勁草書房１９６６年発行）

「１２月１３日　（略）払暁前我第一線は敵陣地に突入しつづいて敵を急追し、軽装甲車中隊が午前十時ごろ先ず下関に突進し、江岸に蝟集あるいは江上を逃れる敗敵を掃射して無慮一万五千発の弾丸を撃ちつくした」

「この日我支隊の作戦地域内に遺棄された敵屍一万数千にのぼりその外装甲車が江上に撃滅したもの並びに各部隊の俘虜を合算すれば我支隊のみにて二万人以上の敵は解決されているはずである」

「午後二時頃、掃討が大体終って、後は無事安全だった。部隊が調子を調整しながら前進し、和平門に着いた。その後、俘虜が次から次へと投降にやってきて、数千人に達した。興奮した兵士たちが上官からの禁止令を聞かない、次次と捕虜を殺した。数多い同僚が血を流れることとこの１０カ間の苦しいことを思い出して、彼らは士兵ではなくても全部殺しようと言いたがったのだ。」

「１２月１４日　両連隊全部隷下に掌握、城内外の掃討を実施す。いたるところに潜伏している敗残兵をひきずり出す。が武器はほとんど全部放棄または隠匿していた。五百、千という大量の俘虜がぞくぞく連れられてくる。」

「敗残兵といえども尚部落山間に潜伏して狙撃をつづめける者がいた。したがって抵抗するもの、従順の態度を失する者は容赦なく即座に殺戮した。終日各所に銃声がきこえた。太平門外の大きな外壕が死骸でうずめられてゆく。」

「下関のめぬき通りはほとんど全部焼け落ちていた。バンドは数百の自動車が乗りすてられ、数百の死骸が一つ一つ岸から流れていく」

「１２月１６日　命により紫金山北側一帯の地域を掃討す。獲物少なしとはいえ両連隊ともに数百の敗兵を引きずり出して処分した」

「１２月１７日　七万の鮮血が江南の田圃とクリークを彩っているのはいうまでもない」

日本軍の文献　日本軍第16師団30旅団33連隊『南京付近戦闘詳報』：「１２月１０日至１４日、捕虜昇降１４、准士官下士官３０８２」「俘虜を処理す（即ち虐殺）」



1937年12月13日，侵华日军占领南京后，在长江岸边将1.4万多名俘虏处死。

---(日)《朝日画报支那战线写真集第24报》1938年1月5日

1937年１２月１３日　中国侵略日本軍は南京を占領した後、揚子江岸で１万４千人以上の捕虜を殺害した。

－－(日)『アサヒグラフ支那戦線写真第２４報』１９３８年１月５日

侵华日军搜捕南京青壮年，用绳索捆绑着押往郊外集体屠杀。

日本每日新闻社：《不许可写真集》1998年12月版

中国侵略日本軍は南京で青年、壮年を探し出して捕らえ、ロープで縛りつけて郊外に護送し集団虐殺した。

－－日本毎日新聞社『不許可写真集』１９９８年１２月版







侵华日军在南京城内外随意刺杀中国俘虏。
——《侵华日军南京大屠杀暴行照片集》

中国侵略日本軍は南京城内外で捕虜を気の向くままに刺殺した。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』



遭侵华日军在南京城内外屠杀的中国被俘官兵和难民。
——《侵华日军南京大屠杀暴行照片集》

中国侵略日本軍が南京城内外で虐殺した中国の捕虜将兵と難民。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』



侵华日军屠杀中国僧侣和无辜平民。
—《侵华日军南京大屠杀暴行照片集》

中国侵略日本軍は中国のなんの罪もない僧侶と一般民衆を虐殺した。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』



侵华日军屠杀中国无辜平民。
《侵华日军南京大屠杀暴行照片集》

中国侵略日本軍は中国のなんの罪もない一般民衆を虐殺した。
——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』





侵华日军在长江的汊江边屠杀中国被俘军民，图为一日军站在江边成堆的遇难者尸体旁留影。

——(日)《村濑守保写真集》

中国侵略日本軍が揚子江の支流で捕虜にされた中国兵や一般民衆を虐殺した。

写真は、一人の日本軍が川岸に積みあげられた受難者の死体の傍らで写したもの。

——(日)『村瀬守保写真集』

东史郎战时日记节录 (1938年1月23日)

天一亮，一幅凄惨的景象就展现在我们面前——扬子江河岸上堆满了如山般的、像畜生一样被屠杀的敌兵尸体，这些尸体已经变成了黑色，像被充满了空气似的肿胀起来，真像是肥猪的尸体。黄色的江水哗啦啦地冲洗着这些肮脏的黑尸，有些尸体像被冲下来的圆木头似的，在水面上荡来荡去。有的尸体成了交通船的肉垫。这些尸体一踩上去，如烂泥般恶臭的内脏就会流出来。有的尸体被压在渡船下面，士兵们穿着钉着铁钉的坚硬皮靴，像踩垫脚石一样，踏着一具具尸体登上渡船。水上工兵站在船头，用长柄的铁钩子，"扑哧"一声刺入肿得像个球似的死尸内，然后像拔萝卜一样，把这尸体拖入江水里冲走。有一个工兵用长钩子一具一具地把五具尸体拖到一个小船上。站在江堤上的一个工兵说："每天都要用卡车拉来满满的残兵败将，把他们排列在码头上，我们的任务就是把他们都扔到江里。如发现有会游泳的，就用机枪射死。"

東史郎戦時日記抄録（１９３８年１月２３日）

夜が明けると、私たちの眼前に凄惨な光景が展開した。岩壁に牛や豚のように虐殺され放り込まれた敵兵の死体——私たちが今日まで、常に見かけた特有のドス黒い色の死体、はち切れるほど空気を入れたかと思われるほどの、膨張しきって膨れ上がった黒い死体が、揚子江のなぎさに山となって転がっている。

全くよく肥えた豚のような死体だ。この黒い死体の上を、黄色い河水がひたひたと洗っている。ある死体は流された丸太棒のように水にゆられている。ある死体は連絡船の下敷きになっている。兵士たちは、踏めばぐしゃりと腐った泥の臭いのする臓物の出て来そうな、はれあがった死体の上を、飛石でもあるかのように、鉄の鋲の打った堅い靴で、ポンポンポンと飛んで、連絡船に乗る。（略）水上工兵たちは、ボートの上から長い柄の先についた鉄の鉤に、これらの死体を腐った大根にでもするようにグイと引っかけて、沖に流しにいく。ハレもののように身体全体がむくみ上がった死体に、工兵たちの鉤がぶすりと刺し込まれ、一人の工兵が一個ずつ計五個がボートに引っぱられていく。岩壁に一人の兵士が立っていた。彼は、「毎日トラックで一杯、敗残兵を積んで来た奴を、波止場にずらりと並べて置いて、河の中へ突き落とし、泳ぐ奴をズドンズドンと射ち殺すのだ。これが俺の毎日の仕事だよ」とぐっと顎をしゃくっていった。



南京大屠杀遇难者尸体，被侵华日军用船抛入长江。
——(日)《村濑守保写真集》

南京大虐殺の受難者の死体、中国侵略日本軍によって船で揚子江に投げ込まれる。
——(日)『村瀬守保写真集』





原侵华日军第16师团20联队士兵东史郎在日记中这样记载："第二天（1937年12月17日）一早，我们奉命去马群镇进行警备。据说就在我们警备马群镇期间，被抓来的俘虏分成二三百人一组，交给各中队杀掉了。"

图为在紫金山下，遭日军屠杀的中国士兵和无辜市民的尸体被抛在荒地乱草上。

——《侵华日军南京大屠杀图集》

元中国侵略日本軍第１６師団２０連隊の兵士東史郎さんの日記には次のように記載されている。「（１９３７年１２月１７日）、翌朝私たちは馬群鎮の警備を命じられた。私たちが馬群鎮の警備についている間に捕虜たちは各中隊へ二、三百人ずつ割りあてられて殺されたという」

写真は紫金山の麓で、日本軍に虐殺された中国兵士や一般民衆の死体が荒れ地の草むらに散らばっている。

——『中国侵略日本軍南京大虐殺写真集』

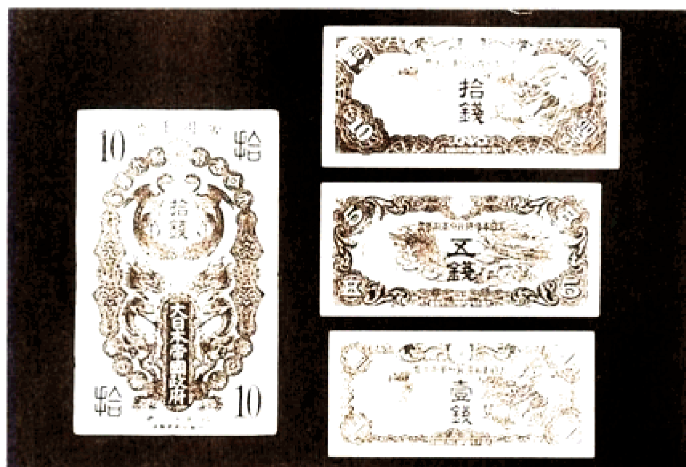


日军占领南京后，发行各种“军票”，大肆进行经济掠夺。

（日）东史郎　提供

日本軍は南京占領後、各種の「軍票」を発行し、経済略奪を大いにほしいままにした。

——（日）東史郎　提供





1938年8月，东史郎所在的部队参加了武汉会战。图为侵华日军占领下的武汉。

（日）《村濑守保写真集》

1938年8月、東史郎さんが所属した部隊は武漢会戦に参加した。写真は中国侵略日本軍が占領した武漢。

——（日）『村瀬守保写真集』

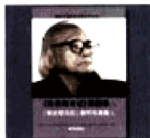


图为日本国内庆祝武汉陷落。

（日）《日本的侵略：中国、朝鲜》

写真は日本国内の武漢陥落祝賀風景。

——（日）『日本の侵略：中国・朝鮮』





武汉战役结束后，东史郎随部队又参加了襄东战役。图为在襄东作战的日军。

日本中支从军纪念写真贴刊行会《出征中支》1940年10月版

武漢戦役が終わった後、東史郎さんは部隊に従って襄東戦役に参加した。写真は襄東作戦の日本軍。

－－日本中支従軍記念写真帳刊行会『出征中支』１９４０年１０月発行



1939年11月9日，东史郎回国后住进了福知山陆军医院。

(日)《福知山第20联队3中队史》1984年版

１９３９年１１月９日、東史郎さんは帰国し福知山陸軍病院に入院した。

－－(日)『福知山第２０連隊第３中隊史』1984年出版





东史郎第 一次回国后，F1943年加人了当地的军国主义组织。图为京都府翼赞壮年团训练讲习会全体成员的纪念照（二排右二为东史郎）。

——(日)东史郎　提供

東史郎さんが第1回目に帰国した１９４３年頃、現地の軍国主義組織に加入した。京都府翼賛壮年団訓練講習会、写真は構成員全員の記念写真（二列目の右から二人目が東史郎さん）。

——(日)東史郎　提供



1940年4月29日，东史郎得到了裕仁天皇授予的金鵄勋章和证书。据东史郎介绍，当时从间人町出征的士兵约有600多名，而得到了这个勋章的只有两个人。1998年3月，东史郎将这枚勋章和其它勋章及奖状一道捐给了侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆。

(日)东史郎　提供

１９４０年４月２９日、東史郎さんは裕仁天皇から金鵄勲章と証書を授けられた。東史郎さんによると、当時、間人町出征兵士約６００名の兵士の内からたった二人がこうした勲章を得ることができる。１９９８年３月、東史郎さんは、すでにこの勲章とその他の勲章と賞状を一緒に、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に寄贈した。

——(日)東史郎　提供

1944年3月，东史郎再次应召加入步兵第128联队参加侵华战争。1945年8月，在浙江宁波迎来日本战败，后在上海向中国军队投降，并于1946年1月被遣送回日本。

１９４４年３月、東史郎さんは再び召集に応じ歩兵独立１２８大隊に入り、中国侵略戦争に参加した。１９４５年８月、浙江省の寧波で日本の敗戦を迎え、その後上海で中国軍に降伏し、１９４６年１月に送還され日本に帰国した。



东史郎和他的胞弟东重一（左）一同参加了侵华战争。
这是东史郎与东重一兄弟两人在侵华战场上的合影。
（日）东史郎　提供

これは東史郎さんと彼の実の弟の東重一（左）は一緒に中国侵略戦争に参加した。
これは東史郎さんと東重一兄弟の二人が中国侵略戦争の戦場で一緒に写した記念写真。
——(日)東史郎　提供

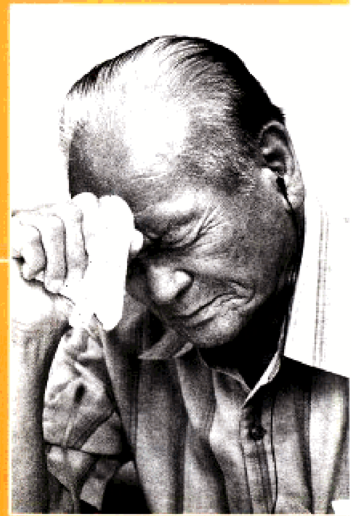


东史郎至今保存着日本偷袭珍珠港时，日本海军大将山本五十六在飞机螺旋桨片翼上写的“不自惜身命”横匾。
—(日)东史郎　提供

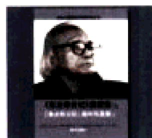
東史郎さんが今まで保存している、日本のパールハーバー奇襲の時、日本海軍大将山本五十六がプロペラ機の片方の翼に書いた「不自惜身命」の額。
——(日)東史郎　提供

2 东史郎的反省、谢罪和《东史郎日记》公诸于世

東史郎さんの反省、謝罪と『東史郎日記』の公表







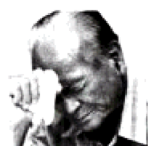
战后，东史郎回到日本，先后经营过电影院、机床厂等。他生有四个女儿和一个儿子，家庭生活富裕。1987年，东史郎出于对参加侵略战争的反省和谢罪，在日本京都的和平展上，公布了自己的战时日记。同年12月，东史郎以《我的南京步兵队》为题，将日记交青木书店公开出版。在南京大屠杀发生50周年的时候，他来到侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆，诚恳地向中国人民反省谢罪，在日本国内外产生了极大反响，同时也遭到日本右翼势力的忌恨和威胁。

戦後、東史郎さんは日本に帰り着くや、相次いで映画館、工作機械の製造などをおこなった。彼には四人の娘と一人の息子がおり、裕福な家庭生活をおくってた。１９８７年、東史郎さんは侵略戦争に参加した反省と謝罪から日本の京都での「戦争展」で自らの戦時日記を公開した。同年１２月、東史郎さんは『わが南京プラトーン』と題して、日記を青木書店から公開出版した。南京大虐殺が引き起こされて５０周年の時、彼は中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館を訪れ、誠実に中国人民に対して反省と謝罪をおこない、日本国内外にきわめて大きな反響を生み出した。同時にまた日本の右翼勢力からの妬みと脅迫にもあった。



东史郎的家乡——丹后町毗邻的日本海风景。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんの故郷——丹後町の日本海を臨む風景。
——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





东史郎和夫人东久江。
(日)东史郎　提供

東史郎さんと夫人の東久江さん。
——(日)東史郎　提供



青年时期的东史郎。
——(日)东史郎　提供

青年時代の東史郎さん。
——(日)東史郎　提供



东史郎全家照。
——(日)东史郎　提供

東史郎さん一家の写真。
——(日)東史郎　提供

1986年6月16日，东史郎在他的祖墓前留影。

—(日)东史郎　提供

１９８６年６月１６日、東史郎さんの先祖の墓の前での記念撮影

——(日)東史郎　提供



1987年7月6日，东史郎（中）和当年一起参加侵华战争的日军第16师团20联队士兵增田六助（左一）、上羽武一郎（左三）在京都和平展上会见记者，并公布其战时日记。

——(日)下里正树：《被隐瞒的联队史—第20联队下级士兵看到的南京事件真相》· 青木书店1987年版



１９８７年７月６日、東史郎さん（真ん中）と、当時一緒に中国侵略戦争に参戦した日本軍第１６師団20連隊兵士増田六助さん（左）と上羽武一郎さん（右）は京都の戦争展で記者会見し、またその戦時日記を公開した。

——(日)下里正樹『隠された聯隊史—「20ｉ」下級兵士が見た南京事件の真相』· 青木書店1987年出版





东史郎等原日军士兵接受记者采访、公开战时真实材料后，日本报纸的有关报道。

——(日)"为了和平的京都战争展第14次照片记录"京都和平资料事业中心

東史郎さんなどの元日本軍兵士が記者の取材を受け、戦争中の真実の資料を公開した後に、日本の新聞もそれについての報道をおこなった。

——(日)京都平和資料事業センター『平和のための京都戦争展１４回の写真記録』

1987年夏，日本京都举办一个宣传和平的展览。东史郎出于心灵上的内疚，于同年7月6日公布了他的战时日记，其中包括记录当年南京大屠杀情景的材料。他说："对于一个退伍军人来说，战场上的事是不能忘记的。因为我常常看那些日记，当时的情况就常常出现在我的脑海中。半个世纪前的事情大家都忘记了，但我因为有这些日记，所以才能记得这些事。"

１９８７年の夏、日本の京都で平和を訴える展覧会が開催された。東史郎さんは、心の後ろめたさから、同年７月６日に彼の戦時日記を公開し、その中には当時の南京大虐殺の状況を記録した資料も含まれていた。彼は「一人の退役軍人にとってみれば、戦場で起こったことは忘れることのできない事柄である。私は常々その日記を見て、当時の状況はいつも私の脳裏に立ち現れてくる。半世紀前の事情はみんなはみな忘れてしまっているが、しかし私はこうした日記があるからこそ、こうした事柄を記憶していることができる。」



1987年8月15日，东史郎向《朝日新闻》读者栏目投稿，发表了《南京大屠杀—我为什么作证？》一文，严厉反驳恐吓他的人。这是刊登在《朝日新闻》上的文章及打印的原稿。

—（日）东史郎　提供

１９８７年８月１５日、東史郎さんは『朝日新聞』の読者欄に投稿し、『南京大虐殺—私はなぜ証言したか』の文章を発表し、彼を脅迫した人たちに厳しく反論した。これは『朝日新聞』に掲載された文章とタイプ打ちの原稿。

——（日）東史郎　提供



《东史郎日记》中关于侵华日军侵占南京时部分记录的影印件。

『東史郎日記』中の中国侵略日本軍が南京を侵略占領した時の部分の写真。





东史郎在家中翻阅《东史郎日记》等资料，回忆侵占南京时的情景。
——（日）下里正树：《被隐瞒的联队史——第20联队下级士兵看到的南京事件真相》，青木书店1987年版

東史郎さん自宅で『東史郎日記』などの資料に目をとおし、南京占領時の状況を追憶する。
——（日）下里正樹『隠された聯隊史——「20 i」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年出版



日军第16师团20联队卫生兵上羽武一郎。
——（日）下里正树：《被隐瞒的联队史——第20联队下级士兵看到的南京事件真相》，青木书店1987年版

日本軍第１６師団２０連隊衛生兵上羽武一郎。
——（日）下里正樹『隠された聯隊史——「20 i」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年出版

东史郎与上羽武一郎和增田六助，均保存有当时的战时日记。为了不孤军奋战，东史郎联络他们共同向京都和平展出借日记，将战时的32件资料、包括行军间隙写的作战手记和战后亲手整理的日记公诸于世。这些公开的资料、从1987年7月26日到8月6日、在京都“为了和平、制止战争”的展览会上展出。这是他们首次以真实姓名公开见证侵华日军南京大屠杀的暴行，当时日本传媒都作了大篇幅的报道，引起强烈反响。

東史郎さん、上羽武一郎さんと増田六助さんは皆な当時陣中の日記を保存していた。孤立したまま敵と戦うのを避けるために、東史郎さんは彼らと連絡をとり一緒に京都の戦争展に日記を貸し出した。それは戦争中の３２件の資料で、行軍の間に書いた作戦手記と戦後帰国した後自ら整理した日記を含むもので、これらを世間に公表した。こうして公開された資料は、１９８７年７月２６日から８月６日まで、京都の「平和のための戦争展」で展示された。彼らが初めて実の名前で、中国侵略日本軍の南京大虐殺の残虐行為の目撃証拠を公開したため、日本のマスコミはみな大きな分量をさいて報道し強烈な反響を引き起こした。

上羽武一郎战时日记摘录：

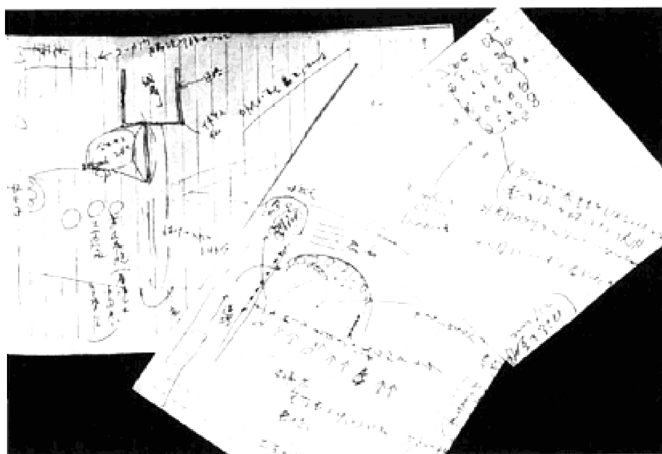
1937年12月9日

（南京汤山）炮兵学校用大理石做成的校门，我真为学校之大感到惊讶！我们搜索败兵，开进树林里，用火把照路，开进村子里搜身，都剃着光头，在其中发现一个人(有身份证)，他们的表情痛苦。一共抓出100人，让他们背向小河，我们向这些败兵齐射，顿时出现了一片血海。有的人还挖出败兵的肝。

上羽武一郎戦時日記の抜粋

１９３７年１２月９日（南京湯山）

「砲兵学校大理石の校門にはほろり広大さにあきれる山をぬって四里前進担送たい松の道しるべ敗残兵を検べるに村中引き出し身体検べ皆頭つるんつるん中に一人見付ける（証明書を所持する）一同の顔（ヒコーベヘ）悲そうなり百人狩出して担送さす、彼の心や如何に、クリークを背にして敗残兵一勢射撃血の海之で土民のきもを取る事にする」



日军第16师团20联队第4中队上等兵增田六助绘制的关于在玄武门屠杀俘虏和平民500余人的现场示意图。

（日）下里正树：《被隐瞒的联队史—第20联队下级士兵看到的南京事件真相》·青木书店1987年版

日本軍第１６師団２０連隊第４中隊上等兵増田六助さんが書いた玄武門での捕虜と一般民衆５００人余りの虐殺現場の見取り図。

——（日）下里正樹『隠された聯隊史—「20ｉ」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年出版



六、現在員二三四名内入院四〇名

十二月十四日 晴 火 於南京

一、一四作命第一七〇號ニヨリ午前十時ヨリ掃蕩區域ノ掃蕩ヲ実施ス

敗残兵三二八名ヲ銃殺シ埋葬ス

增田六助战时日记摘录：

1937年12月14日

为了在城内进行“扫荡”，我们进入外国租界（指国际安全区），去搜捕那些混在难民里的残兵败将。仅第4中队就抓到不下500人，在玄武门旁枪杀，据说各中队都这样做。

増田六助戦時日記の抜粋

１９３７年１２月１４日

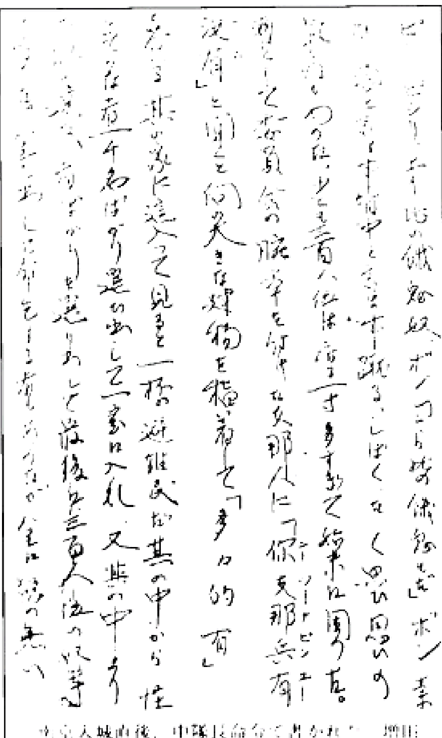
「十二月十四日　掃討　外人租界ニ入リ避難民中ニ混リテ居ル敗残兵ヲ掃討ス　第四中隊ノミニテモ五百人ヲ下ラズ　玄武門側ニテ銃殺セリ　各隊ニテモ又同シトイウ

日军第16师团第20联队四中队1937年12月14日“战斗详报”中大批屠杀的记录。

（日）下里正树：《被隐瞒的联队史　第20联队下级士兵看到的南京事件真相》，青木书店1987年版

第１６師団第２０連隊４中隊の１９３７年１２月１４日の「戦闘詳報」には大量虐殺の記録がある

——（日）下里正樹『隠された聯隊史　「20ｉ」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年出版



南京入城直後、中隊長命令で書かれた増田

增田六助手记

——（日）下里正树：《被隐瞒的联队史—第20联队下级士兵看到的南京事件真相》·青木书店1987年版

増田六助さんの手記

——（日）下里正樹『隠された聯隊史—「20 i」下級兵士が見た南京事件の真相』・青木書店1987年出版

一些日本旧军人向记者谈亲身经历

揭露日本军国主义侵华罪行

据新华社东京7月7日电 据此间报纸今天报道，一些原日本军人6日在东京、京都分别向记者发表谈话，以他们的亲身经历揭露日本军国主义的滔天罪行。

东京的村濑守保，当年作为日本野战机械化部队二等兵在南京大屠杀事件发生后不久进入南京城时，目睹了大屠杀后的惨景。他拿着当时拍下的照片说："一接近南京，便看到许多被残害的中国居民尸体，其中还有孕妇，她们的腹部被军刀剖开，躁动于里面的胎儿也被日本军人杀死。"

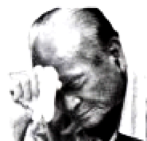
京都府的东史郎当年所在日军福知山20团三连参加了攻打南京的战斗。攻下南京后他进城看到，日本兵把中国人装进麻袋，有的点上火往高抛，有的捆上手榴弹扔进水塘炸死。

该团四连的增田六助现也住在京都府。他说，日军以连为单位在南京城内扫荡，发现中国人便带到日军营部处死。他们一个连一齐开枪打死了大约500名中国人，然后用土将尸体埋上，企图掩盖暴行。他说日军哪个连都这么干。

《每日新闻》今天发表的社论指出："卢沟桥事变50周年应当是日本对过去对中国犯的错误再次认识的良好机会，然而遗憾的是今天日本这种气氛是不够浓厚的。"

《南京日报》1987年7月8日第四版有关报道的影印件。

『南京日報』1987年7月8日第4面の関連報道（写真複製資料）。



我生命的起点

我是在浙江宁波市迎来战败的。我们受命去上海交出武器弹药时，来接受投降的中国军官说："我在南京战斗中被日军捕获时，在下关码头遭遇到集体屠杀。我被压在了一个个被枪杀的战友的尸体下装死，才九死一生，并与可恶的日军战斗至今。想到可恨的往事，我真想把你们杀掉扔到黄浦江里去。但是上司有令，让我们以德报怨。所以饶你们一命。"我没有遭到报复。因为有中国军队的宽宏大量，才有我今天的生命。我被中国人的宽容感动得流下了泪水。中国人"以德报怨"，但另一方面，日本却以复仇为美德。君主之仇、父母之仇，如果是日本人必报无疑。

之所以有今天的我，是因为当时没有受到报复。想到这里，我认为日本不仅在战争中输给了中国，而且在道德上也输了。

——(日) 东史郎

私の生命の出発点

私は、敗戦を浙江省の寧波で迎えた。上海まで武器弾薬を運ぶ命令を受け上海に行き、敵将に渡した。その中国の将校が私たちに言った。「私は、南京戦で日本軍の捕虜になった時、下関波止場で集団虐殺にあった。戦友の死体の下敷となり、九死に一生を得た。今日まで憎い日本軍と戦ってきた。その無念を思うと、おまえたちを殺して、黄浦江へ投げ込んでやりたい。しかし、「怨みに報いるに、徳をもてせよ」という命令がでた。だから命はたすけてやる。」と、私は殺されなかった。この寛大さの故に、今の私の命がある。私は中国人の寛容さに感涙した。中国人は「怨みに報いるに、徳をもてせよ」という。一方、日本では復讐は美徳であり、君主の仇、父母の仇は、日本人なら必ず復讐したであろう。今、私の生命があるのは、この時に殺されなかったからである。私は、日本は中国に戦争に負けたのみならず、道徳的にも負けたと思う。

－－(日) 東史郎

掃蕩掃射集體槍决慘不忍睹

日本發現南京大屠殺慘狀筆記

原侵華士兵說親眼看見血肉横飛腦漿迸濺的慘景

新華社東京七月十三日電 據日本《赤旗報》今天報道，在日本京都府發現了一批記載南京大屠殺慘狀的筆記，成爲震驚中外的南京大屠殺慘案的佐證。

這批筆記是原日本侵華軍福知山步兵二十聯四連四十六名官兵作爲戰爭札記寫下的。

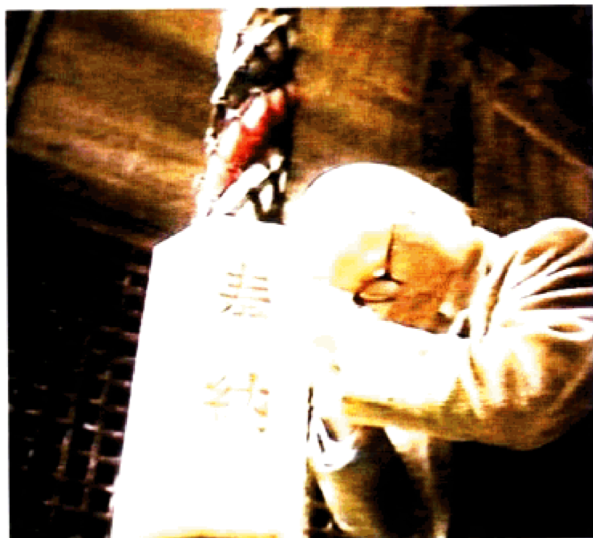
在上等兵增田六助寫的《南京城内掃蕩卷》中，載有該連一次屠殺六百名中國軍民的史實。其中寫道，四連進入南京城後，立即開始掃蕩。日軍闖進南京大衆醫院，沒找到中國人，便把醫院設備砸爛。翌日傍晚，四連抓到六百名中國軍民，挨個脱下他們的衣服，用電綫等綁起來，拉到玄武門附近一次處決。

增田現住在京都府丹后町。他對該報記者說："當時把抓到的人排成五行，外邊這兩行人都用一根電綫綁住大腿，拉到城北玄武湖去槍殺。因玄武門先前已被中國軍民用土堵死，便把抓到的人集中在那裏的土丘前，用二挺重機槍、六挺輕機槍在五十米近處一齊掃射。"

他說："我當時擔任警戒。掃射那會兒，我親眼看見血肉横飛、腦漿迸濺的慘景。在被殺害的六百人中，有二百人是軍人，其餘全是普通市民。想起來就讓人顫慄的那個場面，是難以忘卻的。說什麼也不能允許日本再進行那樣殘酷的行爲了。"

《人民日报》(海外版) 1987年7月14日第六版有关报道的影印件。

『人民日報』(海外版) 1987年7月14日第6面の関連報道の複製資料。



在参与侵华战争之前，东史郎经常去家乡丹后町这间神社，祈祷自己能为天皇打胜仗。60年后，他为谢罪再次来到这间神社。

——（日）东史郎　提供

中国侵略戦争に参加する前、東史郎氏はよく故郷の丹後町のこの神社に来て、自分が天皇のために勝ち戦ができるよう願を立てた。６０年後、彼は再びこの神社にやってきて謝罪のため 参拝する東史郎氏

——（日）東史郎　提供



1987年，应英国路透社记者要求，东史郎穿上当年旧军装，手持侵占南京时使用的军旗，心中充满痛悔、羞愧和内疚。

——（日）东史郎　提供

１９８７年、イギリスのロイター通信社の記者の要求に応じて、東史郎さんは当時の軍服外套を着て、手に南京を侵略した時に使用した軍旗（日の丸）を手に持った。心の中は後悔と恥ずかしさ、後ろめたさでいっぱいだった。

——（日）東史郎　提供



東史郎さんの反省、謝罪と『東史郎日記』の公表

1987年12月13日，东史郎在南京大屠杀事件发生50年后第一次专程来南京谢罪。

早餐时，他趴在桌子上不吃早餐，问他为什么不吃，他说："50年前的今天这时，我们正由中山门入城，对南京进行"扫荡"。此时，我心里很难过，我对不起南京人民。"

在从上海到南京的火车上，他说："这次是我战后第一次到中国来，我做了许多对不起南京人民的事，火车越是接近南京，我内心越是恐慌，我怕南京人民恨我这个东洋鬼子。"

中午，东史郎到纪念馆后，在石碑前长跪不起。一见到参观的群众就弯腰鞠躬赔礼道歉，不断向群众讲述他参与南京大屠杀的事实时说："我这个东洋鬼子，是来向南京人民谢罪的。"

１９８７年１２月１３日、東史郎さんは南京大虐殺事件が発生して５０年後に初めてわざわざ南京を訪問し謝罪した。

朝食の時、彼は机にうつぶせになって食事をしようとしなかった。彼になぜ食べないのかと訊ねると、彼は、「５０年前の今日この時、私はまさに中山門から入城し、南京で掃討をおこなった。私の心はつらく悲しく、南京人民にたいしてすまない気持ちでいっぱいだ」と述べた。

上海から南京へ向かう列車の中で、彼は「これは私の戦後初めての中国訪問です。私は南京人民に対して数多くの申し訳ないことをしてきたことを、列車が南京に近づくにつれて、私の内心はますます恐怖を感じてあわてている。私は南京人民が私を東洋の鬼として恨んでいることをおそれる」と言った。

昼、東史郎さんが記念館に着いた後、石碑の前で長く跪いて立ち上がることがなかった。参観に訪れた群衆を見かけると、腰を屈めてお辞儀をして謝罪し、絶え間なく群衆に対して自分が南京大虐殺に参画した事実を述べた時次のように言った。「私この東洋の鬼は、南京人民に謝罪するためにやってきました。」



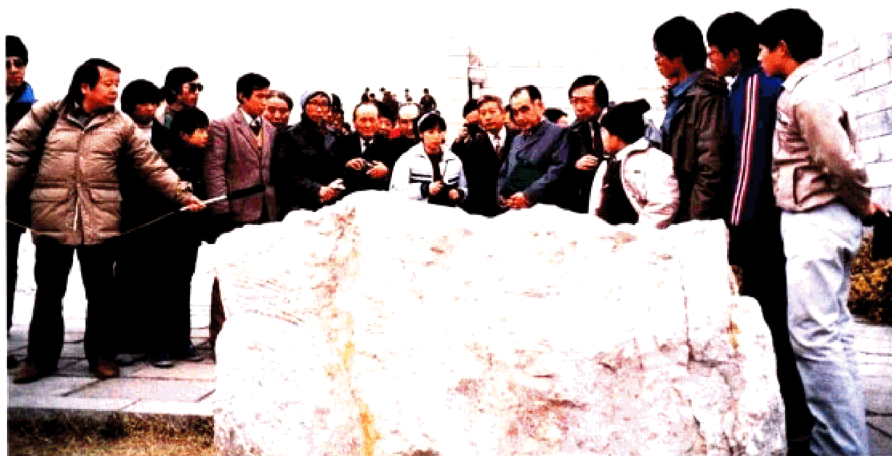
1987年12月13日，东史郎（左三）与日本南京事件调查研究会访华团成员在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆祭奠广场合影。

1987年12月13日、東史郎さん（左から三人目）と南京事件調査研究会の訪中団員は中国侵略南京大虐殺受難同胞記念館の供養広場で記念撮影をした。

1987年12月13日，东史郎在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆史料陈列厅内，接受电视台记者采访。

1987年12月13日、東史郎さんは中国侵略日本軍南京大虐殺受難者同胞記念館の史料陳列室の中でテレビ局記者の取材を受ける。





1987年12月13日，在南京大屠杀50周年时，东史郎随日本南京事件调查研究会访问中国，来南京谢罪。这是东史郎在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆内石碑前沉思。

１９８７年１２月１３日、南京大虐殺５０周年の時、東史郎さんは日本南京事件調査研究会とともに中国を訪問し、南京に謝罪に訪れた。これは中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館内の碑の前で深く考え込む東史郎さん。





1987年12月13日，东史郎在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆接待室内，回忆当年参与南京大屠杀的情景。

１９８７年１２月１３日、東史郎さんは中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館の応接室内で当時加わった南京大虐殺の状況について思い出を語る。



1987年12月，日本南京事件调查研究会访华团团长、原一桥大学社会学部教授藤原彰(左)采访南京大屠杀幸存者许自强(右)。

１９８７年１２月、日本南京事件調査研究会訪中団長、元一橋大学社会学部の藤原彰教授（左）が南京大虐殺の生存者許自強（右）から取材する。



1987年12月，日本著名南京大屠杀史研究专家、早稻田大学教授洞富雄(前左一)和一桥大学教授吉田裕(右一)，与东史郎(后中)一起在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆内参观。

１９８７年１２月、日本の著名な南京大虐殺史研究の専門家で早稲田大学の洞富雄教授（前列の左）と一橋大学の吉田裕教授（前列右）と東史郎さん（後ろのまん中）は一緒に中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館内を参観した。



1987年12月13日，面对南京大屠杀遇难者的累累白骨，东史郎心情沉重。

１９８７年１２月１３日、南京大虐殺の受難者の累々たる白骨を前にして、東史郎さんは重苦しい気持ちになった。





1987年12月13日，东史郎在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆座谈时，表示深深谢罪。

1987年12月13日、東史郎さんは中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館の座談会で深々と頭を下げて謝罪した。



1987年12月16日，东史郎一行在侵华日军南京大屠杀草鞋峡遇难同胞纪念碑前默哀谢罪。（左二：东史郎、左四：藤原彰、右三：洞富雄、右一：吉田裕）

1987年12月16日、東史郎さん一行は中国侵略日本軍南京大虐殺草鞋峡受難同胞記念碑の前で黙祷謝罪する。（左から二番目：東史郎さん、左から四番目：藤原彰氏、右から三番目：洞富雄氏、右端：吉田裕氏）



1987年12月14日，东史郎参观侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆后，挥笔写下“我是原日本军人，今天参观了纪念馆，看到了活生生的大屠杀事实，诚恳地表示谢罪”的留言。(下为东史郎手书)

１９８７年１２月１４日、東史郎さんは中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館を参観した後、筆をふるって「私は旧日本軍人でした。本日記念館を訪れ、大虐殺の生々しい現実を見て、心から謝罪を致します」という心からの気持ちを書きしたためた。(下は東史郎さんの書)

東史郎

私は旧日本軍人でした
本日記念館を訪れ
大虐殺の生々しい
現実を見て心から謝
罪を致します

一九八七年十二月十四日



東史郎さんの反省、謝罪と『東史郎日記』の公表

1987年12月17日，东史郎在侵华日军南京大屠杀清凉山遇难同胞纪念碑前，听取南京大屠杀幸存者控诉日军的暴行。

１９８７年１２月１７日、東史郎さんは中国侵略日本軍南京大虐殺清涼山受難同胞記念碑の前で、南京大虐殺の生存者の日本軍による残虐行為の告発を聞く。



东史郎给侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆的来信摘录：

“在50年后的12月13日，也就是我这个东洋鬼子去南京大屠杀纪念馆谢罪的。我对大家原谅自己表示感谢。”“我虽然踩了中国的老虎的尾巴，但是中国‘老虎’却没有吃掉我。回到日本，日本的狼却龇牙咧嘴地追逐我，对我进行威胁、攻击、谩骂。”

“我来南京谢罪时，留在家里的妻子就接到外面不少恐吓电话，骂我是‘叛徒’、‘卖国贼’、‘军人的耻辱’、‘亵渎了英灵’、‘罪该万死’等，而我妻子是毫不畏惧地支持我的。”

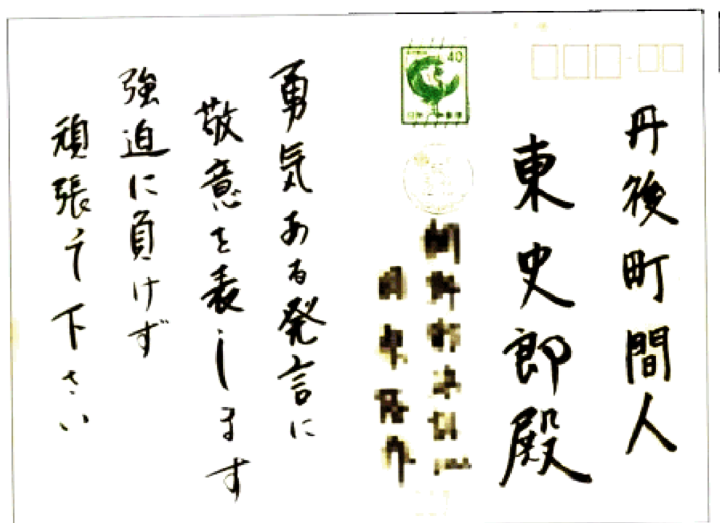
東史郎さんが中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に寄せた手紙

「50年後の12月13日、私こと東洋の鬼は、南京大虐殺記念館に行って謝罪しました。皆さんが私を許してくれたことに対し、心から感謝します。私は中国の“虎”の尾を踏んだが、中国の“虎”は私を食べるようなことはしなかった。日本に帰ってみると日本の“狼”は牙を剥きだし私を追いつめ、脅迫、攻撃し辱め罵り私を襲ってきます。」

「私は南京へ謝罪しに行っていた期間、留守を守って家に居た妻に数多くの脅迫電話がかかり、私を「裏切り者」「売国奴」「軍人の恥辱」「英霊を汚す者」「万死に値する」などと罵りましたが、妻は少しも恐れることなく私を支えてくれています」

东史郎反省谢罪的行动，得到了日本许多正义人士的支持。下图为日本各地寄给东史郎部分信件的影印件。

東史郎さんの反省と謝罪の行動は、日本の多くの正義を求める人たちの支持を得た。下の写真は日本各地から東史郎さんに寄せられた手紙の一部を複写した資料。（複製資料）


丹後町間人
東史郎殿
[redacted]
勇気ある發言に
敬意を表します
強迫に負けず
頑張って下さい

对您充满勇气的发言表示敬意。请您不畏压迫、努力斗争。

——（日）东史郎　提供

勇気ある発言に敬意を表します。強迫に負けずに頑張ってください。

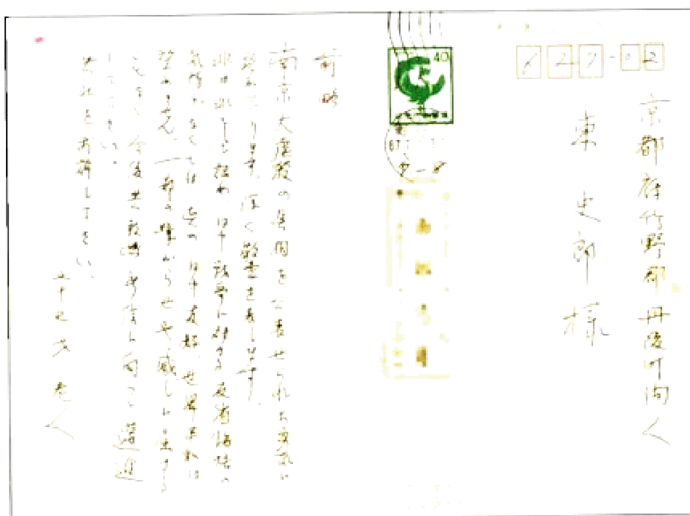
——（日）東史郎　提供

对您公开南京大屠杀真相的勇气十分的敬佩，深表敬意。有错误就应该认错，对日中战争如果没有反省悔悟的心态，就不可能有真正的日中友好和世界和平。望您不要屈服于一些人的漫骂和威胁，坚持自己的信念。　一位77岁老人

——（日）东史郎　提供

南京大虐殺の真相を公表せられた勇気に頭が下がります。深く敬意を表します。非は非として認め、日中戦争に対する反省悔悟の気持ちがなくては、真の日中友好、世界平和望めません。一部の嫌がらせや威かしに屈することなく、今後共所信に向かって邁進してください。　ある７７歳の老人

——（日）東史郎　提供


京都府竹野郡丹後町間人
東史郎様
[redacted]

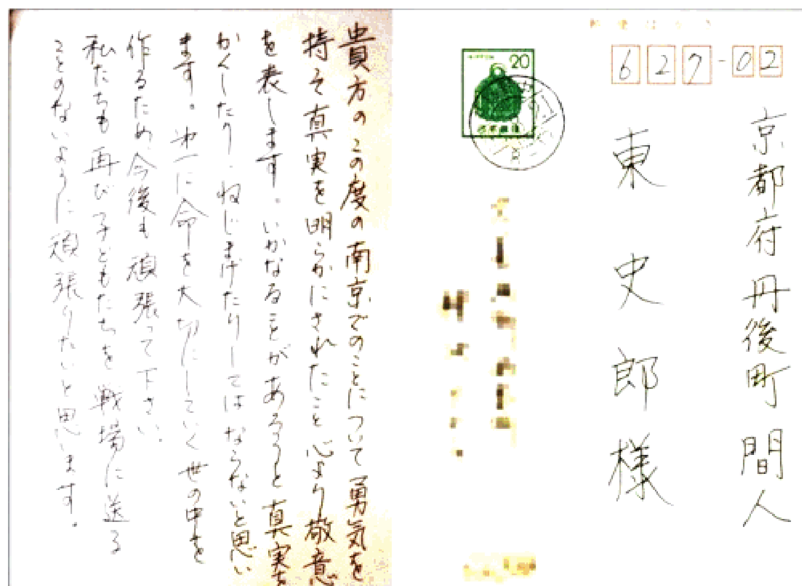


对您这次勇于揭露南京事件行动表示由衷的敬意。我想决不允许隐瞒真实、歪曲历史。珍爱生命是我们的愿望，请你努力下去。我们也要为不再把孩子送上战场而努力。

——(日) 东史郎　提供

貴方のこのたびの南京でのことについて勇気をもって真実を明らかにされたことに心より敬意を表します。いかなることがあろうと真実をかくしたり、ねじまげたりしてはならないと思います。第一に命を大切にしていく世の中を作るため今後もがんばってください。私たちも再び子どもたちを戦場におくることのないように頑張りたいと思います。

——(日) 東史郎　提供



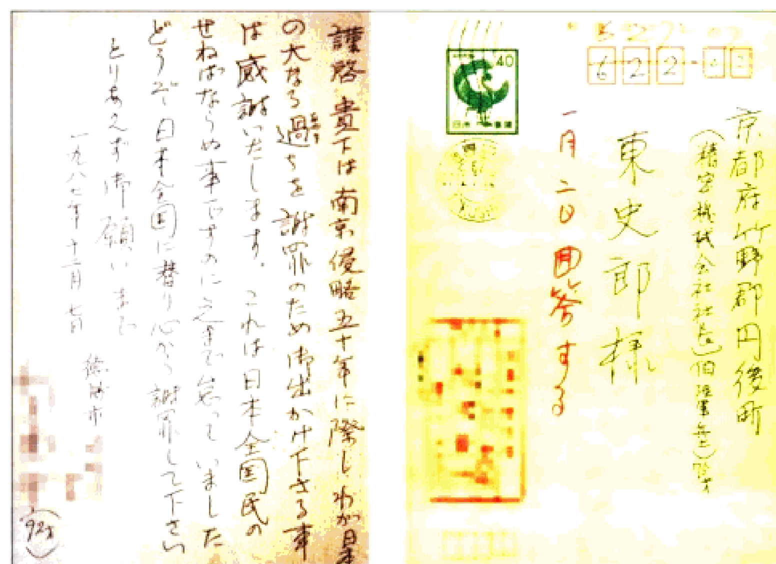
627-02

京都府丹後町 間人

東史郎様

[redacted]

貴方のこの度の南京でのことについて勇気を持って真実を明らかにされたこと心より敬意を表します。いかなることがあろうと真実をかくしたり、ねじまげたりしてはならないと思います。第一に命を大切にしていく世の中を作るため今後も頑張って下さい。私たちも再び子どもたちを戦場に送ることのないように頑張りたいと思います。



京都府竹野郡丹後町

東史郎様

一月二〇日回答する

[redacted]

謹啓　貴下は南京侵略五十年に際し、わが日本の大なる過ちを謝罪のため御出かけ下さる事は感謝いたします。これは日本全国民のせねばならぬ事ですのに、これまで怠っていました。どうぞ日本全国に替り心から謝罪して下さい。とりあえず御願いまで。

一九八七年十二月七日

徳島市 [redacted]

您在日本侵略南京、犯下重大错误50年后、去现地谢罪，对此深表感谢。这本应该是全体日本国民做的事情，但迄今却没有这样做，拜托您代表全体日本国民真诚地去谢罪吧！

德岛市一位老人(92岁)

1987年12月7日

——(日) 东史郎　提供

謹啓　貴下は南京侵略五十年に際し、わが日本の大なる過ちを謝罪のため御出かけ下さる事は感謝いたします。これは日本全国民のせねばならない事ですのに、これまで怠っていました。どうぞ日本全国民に替わり心から謝罪して下さい。とりあえずお願いまで。

１９８７年１２月７日

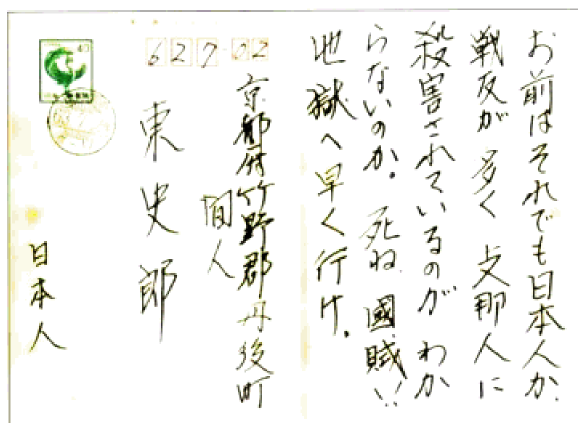
ある徳島市老人（92歳）

——(日) 東史郎　提供

东史郎自1987年公布战时日记以后，不断受到日本右翼势力的恐吓。下图为日本右翼势力谩骂、诽谤东史郎的部分信函影印件。

東史郎さんは１９８７年に煎じ日記を公表して以後、不断に日本の右翼の脅迫を受けてきた。下の資料は日本の分子が東史郎さんに悪罵を浴びせ誹謗してきた手紙の一部である。





627 02
京都府竹野郡丹後町
間人
東史郎
日本人

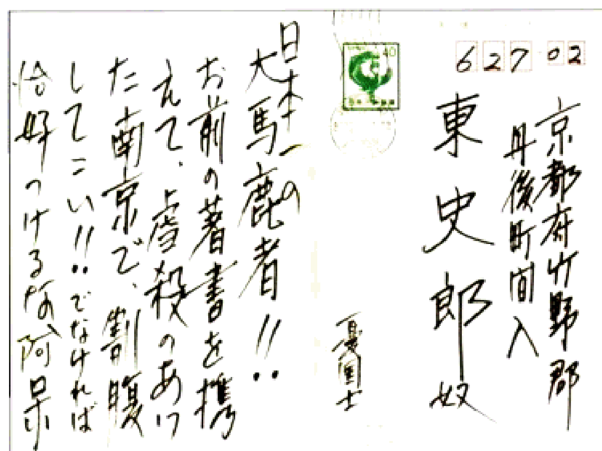
お前はそれでも日本人か
戦友が多く支那人に
殺害されているのがわか
らないのか。死ね、國賊!!
地獄へ早く行け。

"你还是日本人吗？你的许多战友都被支那人杀害了，难道你不知道吗？去死吧，国贼！快些下地狱去吧！"

——（日）东史郎　提供

「お前はそれでも日本人か、戦友が多く支那人に殺害されているのがわからないのか。死ね、国賊！地獄へ早く行け。」

——（日）東史郎　提供



627 02
京都府竹野郡
丹後町間人
東史郎奴
憂國士

日本一の
大馬鹿者!!
お前の著書を携
えて、虐殺のあっ
た南京で、割腹
してこい!!でなければ
恰好つけるな阿呆

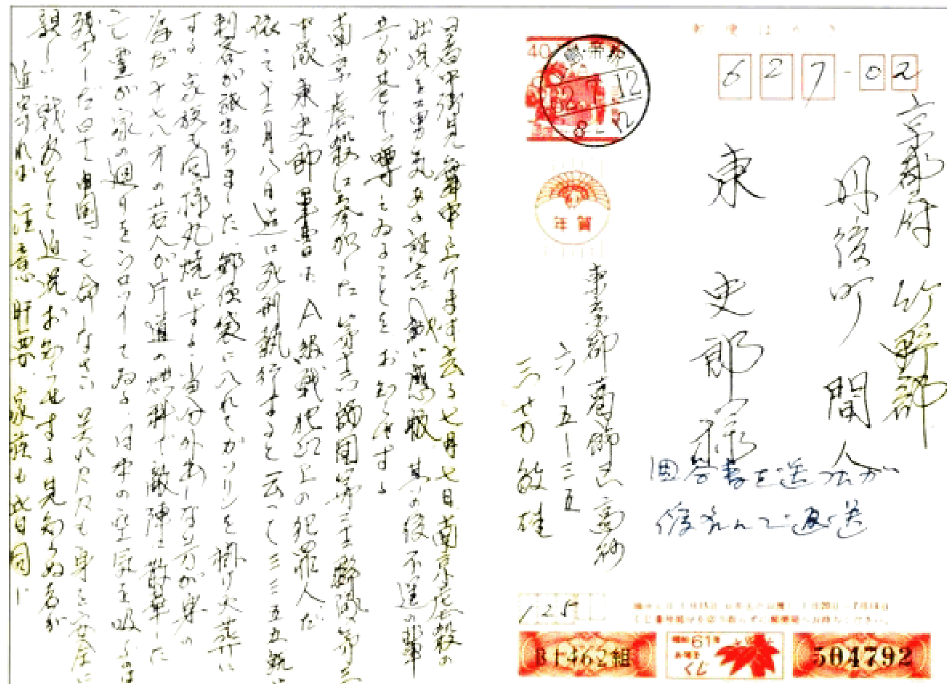
"你是日本第一大蠢货！你带着你的日记，到曾发生屠杀的南京去剖腹吧。不然的话，你就别装样子。大傻瓜！"

—（日）东史郎　提供

「日本一の大馬鹿者！お前の著書を携えて、虐殺のあった南京で割腹してこい！でなければ恰好つけるな、阿呆！」

——（日）東史郎　提供




627-02
京都府竹野郡丹後町間人
東史郎様

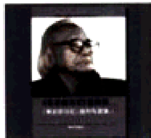
“天气炎热，向您致以问候。对你去年(指1987年)7月7日勇敢地讲述南京大屠杀证言非常佩服，今特将您作证后一些胡作非为之徒的传言告诉你：

参加南京大屠杀的第16师团第20联队第3中队东史郎军曹，是甲级战犯以上的罪犯。因此，要在12月8日之前对你执行死刑，现已有刺客三三两两地动身。准备把你装进邮政袋浇上汽油来火葬，你的家人也是同样下场。你识相一点，最好不要外出。一个十七八岁的为国捐躯的青年人的英灵正在你家周围游荡。你吸日本空气没几天了。快去中国逃命吧。我是作为你的一个亲密战友才告诉你。你要小心，切记谨防不速之客，你的全家人也一样。”

——（日）东史郎　提供

「暑中御見舞申し上げます。去る7月7日(１９８７年)南京虐殺の状況を勇気ある証言、誠に感服、その後不逞の輩共が巷で噂していることをお知らせする。南京虐殺に参加した第16師団第20連隊第3中隊東史郎軍曹は、A級戦犯以上の犯罪人だ。依って12月8日までに死刑執行すると云って三三五五既に刺客が旅立ちました。郵便袋に入れてガソリンを掛け火葬にする。家族も同様丸焼きにする。当分外出しない方が身の為だ。一七、八歳の若人が片道の燃料で敵陣に散華した亡霊が家の廻りをうろついている。日本の空気を吸うのは残り少しだ。早く中国へ亡命しなさい。呉ぐれも身を安全に。親しい戦友として近況お知らせする。見知らぬ者が近寄れば注意、肝要、家族も皆同じ」。

－－（日）東史郎　提供



1987年12月，日本青木书店以《我的南京步兵队》为书名，正式出版发行了《东史郎日记》日文版。1996年10月，再次发行了《新装版·我的南京步兵队》。图为该书封面照。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

1987年12月、日本の青木書店『わが南京プラトーン』をいう題名で正式に出版発行された『東史郎日記』の日本語版。

1996年10月には『新装版わが南京プラトーン』が発行された。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





日本青木书店出版发行的多种有关侵华战争的书籍。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

青木書店のたたずまい多くの中国侵略戦争に関する書籍を発行している。

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供


Japanese mission of sorrow over Rape of Nanking

FOREIGN NEWS

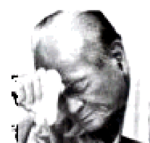
At last, a home contents insurance designed exactly the way you want it.

东史郎坦白战争罪、忏悔谢罪的勇气令人们关注。这是英国《每日电讯报》的报道。

——（日）东史郎　提供

東史郎さんの戦争犯罪の告白、懺悔謝罪の勇気は人々の注目を浴びた。これはイギリスの『毎日ディリー』の報道。

——（日）東史郎　提供





日本人の戦争観は!!

英国BBC 丹後で取材

南京事件の証言者に

1988年10月22日，英国广播公司(BBC)记者采访东史郎的报道影印件。

——（日）东史郎　提供

１９８８年１０月２２日、イギリス放送協会（ＢＢＣ）の記者が東史郎さんを取材する。

——（日）東史郎　提供

南京事件

京都師団関係資料集

編著

井口和起・木坂順一郎・下里正樹



青木書店

日本青木书店出版的《南京事件・京都师团关系资料集》封面照。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

日本の青木書店が出版した『南京事件京都師団関係資料集』の表紙写真

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供



1987年，日本记者下里正树以《东史郎日记》为蓝本之一，将部分《东史郎日记》编入《被隐瞒的联队史—20联队下级士兵看到的南京事件真相》。图为该书照。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９８７年、日本の記者下里正樹は『東史郎日記』を原本の一つにして、部分的に『東史郎日記』を組み入れて『隠された聯隊史—「20i」下級兵士の目撃した南京事件の真相』を書いた。写真はその本の写真。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1990年12月13日，在南京大屠杀事件发生53周年时，石原慎太郎（当时的日本众议院议员），在美国《花花公子》杂志上发表讲话说："南京大屠杀是中国人捏造的。"为此，京都部分市民召开抗议集会。图为东史郎在集会上抗议石原的反动言论。

——（日）"反对石原发言京都集会实行委员会"　提供

１９９０年１２月１３日、南京大虐殺５３カ年に京都において石原慎太郎（当時衆議院議員）が、アメリカの雑誌『プレイボーイ』誌上において、「南京大虐殺は中国人のでっち上げ」と発言したことに際し、市民が抗議集会を開催した。その会証言と抗議をする東史郎。

－－（日）「石原発言を許さない京都集会実行委員会」　提供

1992年2月，东史郎阅读了《昭和天皇独白录》（文艺春秋社刊），他再次对战争和战争责任进行了反思，后在文学爱好者编辑的《丹波文库》杂志上发表了《批判昭和天皇独白录》、《对昭和天皇独白录逐个检证》、《批判东条英机》等文章。

——（日）东史郎　提供

１９９２年２月、東史郎は「昭和天皇独白録」（文芸春秋社刊）を読み、あらためて戦争と戦争責任について考えた。そして同人誌『丹波文庫』誌に「昭和天皇独白録批判」、「昭和天皇独白録逐次検証」、「東条英機批判」を掲載した。

－－（日）東史郎　提供







1997年8月，东史郎先生在南京痛悔历史。
——（日）牧田清　摄影

１９９７年８月、東史郎さんは南京で過去を大変後悔した。
－－（日）牧田清　撮影



2000年2月27日，在南京大屠杀遇难者的遗骨前，东史郎再次下跪谢罪。

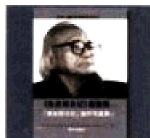
２０００年２月２７日、東史郎さんは南京大虐殺受難者の遺骨の前に再びひざまずいて謝罪した。

3 《东史郎日记》案引发肯定与否定南京大屠杀的诉讼

『東史郎日記』裁判が南京大虐殺の肯定派と否定派の訴訟を引き起こす







《东史郎日记》中涉及到的原分队长桥本光治，在这本日记出版后长达6年的时间里，对在南京大屠杀期间犯有残酷行为的记述，并无任何异议。然而，到了1993年4月，在少数原日军将校的精心策划下，他以日记记述“不是事实”、“损害名誉”为由，向东京地方法院起诉东史郎、青木书店和下里正树，要求登报公开道歉，并赔偿200万日元。他被日本右翼势力所操纵，企图以“恢复名誉”为突破口，全盘否定南京大屠杀的史实。东京地方法院为了迎合右翼势力的意图，鼓吹南京大屠杀“没有定论”。经过3年的审理，在1996年4月26日作出一审判决，认定《东史郎日记》中的有关记述是“虚构”，判定揭露南京大屠杀暴行的东史郎等“被告”败诉，并各赔偿原告50万日元。

東史郎さんはその日記の中で、彼の元分隊長が南京大虐殺の期間中の残虐行為をおこなったことに触れている。この日記が出版されて６年間の長い時間、彼は異議を差しはさむことはなかった。１９９３年４月、わずかばかりの元日本軍将校の念入りな画策のもとで、彼は、日記の記述が「事実ではなく」「名誉を毀損するものである」ことを理由に、東京地方裁判所で、東史郎氏、青木書店および下里正樹氏に対して訴訟を提起し、新聞紙上に謝罪文を掲載することと損害賠償金２００万円を支払うことを要求した。日本の右翼勢力は彼をそそのかし、名誉回復をはかることを突破口に、南京大虐殺の史実全般の否定をはかったのだった。東京地方裁判所は右翼勢力の意図に迎合し、南京大虐殺は「定説がない」と吹聴し、３年間の審理を経て、１９９６年４月２６日に第一審の判決をおこなった。それは『東史郎日記』中の関連する記述は『虚構』であると認定し、南京大虐殺の残虐行為を暴露した東史郎さん等の「被告」の敗訴と、それぞれが原告に対して５０万円の賠償することを言い渡したのである。



《东史郎日记》中记载了桥本光治等人在南京原中国最高法院门前残忍地杀害一名中国人。这是南京原中国最高法院旧址（现中山北路101号）。

「東日記」の１９３７年１２月２１日の欄には、南京元中国最高法院の門前で「西本」（仮名）が残忍にも一人の中国人を虐殺したことを記載している。これは南京元中国最高法院の旧跡（現中山北路１０１号）。

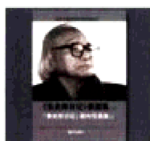


东史郎在1937年12月21日日记中，记载了“桥本光治”（原书为“西本”）在原中国最高法院的大路对面，将一个中国人装入邮政袋，浇上汽油点上火，然后绑上手榴弹，扔进水塘，将其炸死的残酷行为：

12月21日，受命整肃南京城，离开马群镇（原文为郡马镇）。位于中山北路上的最高法院是一栋灰色的大楼房，大概相当于日本的司法省。法院前面横卧着一辆被毁坏了的小轿车。马路对面有一池塘。不知从哪里带来一个支那（中国）人。战友们像孩子耍小狗似的耍弄他。桥本提出一个残忍的办法。即把他装进袋子里，浇上汽车用的汽油点火烧。哭喊着的支那（中国）人被装进邮政袋中，袋口扎得牢牢的。他在袋子里挣扎、哭泣、大声喊叫。袋子像足球一样被踢来踢去，像浇蔬菜一样被撒上小便。桥本从被毁坏了的汽车里拿来汽油浇到袋子上，袋子上系了一根长绳子，能够到处拖着走。有良心的人皱着眉头注视着残酷的行为，没良心的人有趣地声援着。桥本点着了火，汽油一下子燃烧起来。就在这时，袋子里发出一种无法言状的可怕的喊叫声。袋中人用浑身的力气使袋子跳了起来，自己滚动。战友中有的人对玩这个残忍的游戏感到很高兴。袋子发出地狱般的悲鸣，像火球一样到处滚。抓住袋子绳子的桥本说：“喂、你那么热的话，给你凉一凉怎么样？”说着把三枚手榴弹系在绳子上并把袋子扔进了池塘。火灭了，袋子沉下去了，就在水的波纹即将恢复平静的时候，手榴弹在水中爆炸了。水面一下子鼓了起来，然后平静下去。游戏结束了。这样的事在战场上什么罪过也没有，大家只是对桥本的残忍厌烦而已。接下来，好像一点儿也不记得刚发生的事情，这队人又哼着小曲继续行进了。

東史郎さんは、１９３７年１２月２１日の日記の中で、「西本」が南京最高法院の大通りの向かい側で、一人の中国人を郵便袋の中に押し込み、ガソリンをかけて火をつけ、その後に手榴弾を結びつけて池の中に投げ入れ彼を爆殺したという残虐行為をはたらいたと書いている。

１２月２１日、南京城内の整備を命じられ、馬郡鎮を去る。（原本では郡馬鎮）中山通にある最高法院は、灰色に塗られた大きな建物である。日本の司法省にあたろうか。法院の前にぐしゃりとつぶれた自家用車が横倒しになっていた。道路の向こう側に沼があった。どこからか、一人の支那人が引っぱられてきた。戦友たちは、仔犬をつかまえた子どものように彼をなぶっていたが、西本は惨酷な一つの提案を出した。つまり、彼を袋の中に入れ、自動車のガソリンをかけ火をつけようというのである。泣き叫ぶ支那人は、郵便袋の中に入れられ、袋の口はしっかり締められた。彼は袋の中で暴れ、泣き、怒鳴った。袋はフットボールのように蹴られ、野菜のように小便をかけられた。ぐしゃりとつぶれた自動車の中からガソリンを出した西本は、袋にぶっかけ、袋に長い紐をつけて引きずり回せるようにした。心ある者は眉をひそめてこの惨酷な処置を見守っている。心なき者は面白がって声援する。西本は火をつけた。ガソリンは一度に燃えあがった。と思うと、袋の中で言い知れぬ恐怖のわめきがあがって、こん身の力で袋が飛び上がった。袋はみずから飛びあがり、みずから転げた。戦友のある者たちは、この残虐な火遊びに打ち興じて面白がった。袋は地獄の悲鳴をあげ、火玉のようにころげまわった。袋の端を持っていた西本は、「オイ、そんなに熱ければ冷たくしてやろうか」というと、手榴弾を三発袋の紐に結びつけて沼の中へ放り込んだ。火が消え袋が沈み、波紋のうねりが静まろうとしている時、手榴弾が水中で炸裂した。水がこぼっと盛り上がって静まり、遊びが終わった。こんな事は、戦場では何の罪悪でもない。ただ西本の残忍性にあきれただけである。次の時にはこのようなことは少しの記憶も残さず、鼻唄を唄って歩いている一隊であった。





中间暗处者为东史郎在日记中提到的原告桥本光治。
——周描坤　摄影

中央の暗い所にいるのが東史郎日記に触れられた原告。
－－周描坤　撮影

原侵华日军第16师团步兵20联队中队长森英生，是《东史郎日记》案的幕后黑手，他指使、策划桥本光治状告东史郎，并声称：归根到底，东史郎的目的是否定战争和打破皇国史观。为此，他试图抹杀日本军的真实情况。只要是抗日民众，即使没有上司的命令也应以敌人论处，与之战斗（杀死），这是理所当然的。

元中国侵略日本軍第１６師団歩兵２０連隊中隊長森英生は、『東史郎日記』裁判の背後の黒幕である。彼は原告をそそのかし、東史郎さんを告訴させることを画策した。また次のように言いふらしている。とどのつまりは、東史郎の目的は、戦争を否定し皇国史観をうち破ることにある。このために、彼は日本軍の真実の状況の抹殺をたくらんでいる。抗日の民衆でさえあればすべて、たとえ上司の命令がなかったとしても敵と見なして処罰しこれと戦闘する（殺す）のは、これは理の当然である。



原告方的“起诉准备书（六）”(1997年11月13日)对南京大屠杀史实进行了全盘否定

“起诉准备书（六）”摘录：

卢沟桥事变：

卢沟桥事变是突发的、或是由于中国方面的挑衅，不是日军发动的侵略战争。不仅是我国（即日本），当时的中华民国政府也没有发布宣战书。

南京大屠杀：

⑴掠夺　这里引用第十军综合报告是指“征集”，在国际法上也认可。

⑵强奸　说那时中国妇女们采取了自卫行为。可以认为是因为中国军队干违法的事情，她们有亲身体会，由此推断，一切国家的军队都是那样。

⑶放火　关于放火与前面的表述一样，多是中国人自己干的。进入南京城后，我军（指日军）没有放火。

⑷杀害俘虏　佐佐木旅团长说的是溃逃兵，不是国际法上的俘虏，在我国经常是把溃逃兵及国际法上不承认是俘虏的兵通俗说成是俘虏。本应该明确区分，由于在表述上的差异，变成了日本杀害国际法上所指的俘虏。

⑸拉贝和马吉等外籍人士的日记、证言　虽然说他们是第三个国家的人，但他们或者是出生在中国，或者与本国相比在中国生活时间长，不能保持中立立场，不能因为他们是第三国家的人，就相信他们的日记、证言。

原告側の「準備書面（六)」（１９９７年１１月１３日付）は南京大虐殺の史実に対して全面的な否定をおこなっている

「準備書面六」からの抜粋

盧溝橋事件：盧溝橋事件は、偶発的なものか、あるいは中国側の挑発によるものであって、日本軍の侵略戦争ではない。宣戦布告については、我が国のみならず、当時中華民国政府もしなかったのである。

南京大虐殺

（1）掠奪　ここに引用されている第十軍の総合報告は、徴発をさしており、国際法上認められていたものである。

（2）強姦　そのとき中国の女達が自衛行為をしていたということは、中国の軍隊は不法なことをし、彼女たちは身をもってそのことを知っており、その経緯からすべての国の軍隊がそうだとおもったからである(ママ) 考えられていた。

（3）放火　むしろ放火は前述の通り、中国人によるものが圧倒的に多かったのである。まして南京入城後は我が国の兵士による放火はなかった。

（4）捕虜の殺害 佐々木旅団長が言及しているのは敗残兵のことで、国際法上の捕虜のことではない。我が国では敗残兵や国際法上の捕虜と認められない兵も捕虜と通俗的に表現することが多く、本来であれば明確に区別すべきであるが、言葉の上で区別しない為に、日本軍は国際法上の捕虜を殺害したと取られ勝ちであった。

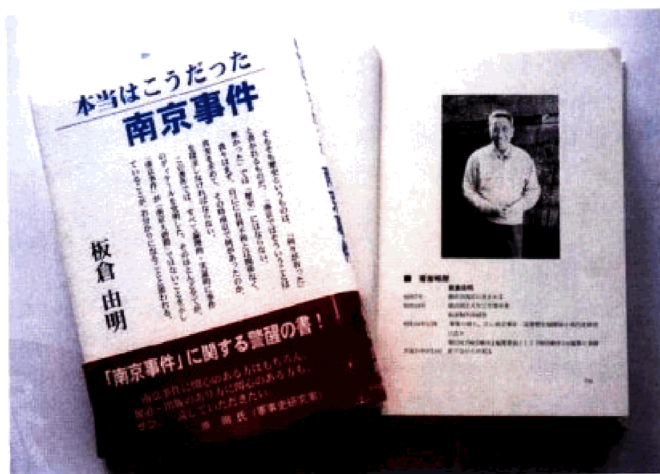
（5）ラーベやマギー等外国籍人士の日記、証言　　第三国人とはいえ、中国で生まれたか、本国より中国の生活が長い人で、中立ではなく、第三国人だからといって評価できるものではない。

板仓由明是桥本光治的主要支持者之一。多年来，他发表文章，公开鼓吹南京大屠杀是“虚构”的，是日本南京大屠杀“虚构派”的代表人物之一。在1993年5月17日出版的《月曜评论》上，他发表了题为《向南京大屠杀的虚构挑战 桥本诉讼经纬及意义》，公然声称：“本诉讼案（指《东史郎日记》案）乍见是为桥本恢复名誉，但其目的并不仅在此。我们将以此作为突破口，证明步兵20联队的残暴行为纯属虚构，要为其恢复名誉。尤其是若能证明所谓‘南京大屠杀’是虚构的，那将更加符合全体日本国民的利益。”

板倉由明は原告の主な支持者の一人である。数年来、彼は文章を発表し、南京大虐殺は「ウソ」であるとおおっぴらに吹聴してきており、日本の南京大虐殺「まぼろし派」の代表人物の一人である。１９９３年５月１７日に発行された『月曜評論』紙上で、彼は「南京大虐殺の虚構に挑戦－橋本訴訟の経緯とその意義」と題する文章を発表し、公然と次のように言いふらしている。「この訴訟（『東史郎日記』裁判を指す）は、一見橋本氏個人の名誉回復を目的としているようだが、それだけではない。これを一つの突破口として、歩２０（歩兵２０連隊）の残虐行為の虚偽を証明して名誉を回復し、さらに、いわゆる「南京大虐殺」の虚構を明らかに出来れば、日本国民全体の利益とも合致する」


南京虐殺の虚偽に挑戦
橋本訴訟の経緯とその意義
板倉由明

ありのままだから
感動がある。



南京大虐殺 55年後の告白
東史郎氏の証言に異議

1993年5月23日，森英生等在《中日新闻》上发表文章，对东史郎进行攻击。

1993年5月23日、森英生等は『中日新聞』紙上に文章を掲載し、東史郎さんを攻撃した。

「南京虐殺」の虚偽糾す
東史郎氏と出版社相手に
元陸軍兵が提訴

高まる改憲論

东史郎被右翼分子推上法庭后，该诉讼引起了国内外媒体的关注。1993年5月25日，日本右翼报纸《国民新报》攻击东史郎歪曲事实。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんは日本の右翼分子から法廷に告訴されたあと、国内外のマスコミの注目の的になった。1993年5月25日、日本の右派新聞の『国民新聞』は東史郎さんの事実を偽って報道した。

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



东史郎在日本大阪、名古屋、福冈、京都、鹿儿岛等各大城市的和平集会上，为有关日军侵华历史事实作证。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんは日本の大阪、名古屋、福岡、京都、鹿児島等の各大都市の平和集会で、日本軍の中国侵略の歴史的事実に関する証言をおこなった。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



平成7年10月24日（火）

南京大虐殺語る東さん　丹後

米ABCが取材

企画番組で20世紀検証

中、香港に続き

1995年10月24日，美国广播公司（ABC）记者赴东史郎家中采访。

——（日）东史郎　提供

１９９５年１０月２４日、アメリカ放送会社（ＡＢＣ）記者が東史郎さん宅を訪れ取材する。

——（日）東史郎　提供



「すべては教育から」

82歳元日本兵 再び謝罪の旅

中国へ社会科教師ら30人と

日本軍の中国での残虐行為を証言し続ける元兵士・東史郎さん＝京都市内で



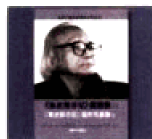
日本軍残虐行為の語り部
東 史郎さん

1994年8月5日，东史郎再次为南京大屠杀史作证并表示，要再次赴中国南京向中国人民谢罪。

——1994年8月5日《东京新闻》

１９９４年８月５日　東史郎さんは再び証言し、また、中国の南京へ行き中国人民に謝罪すると表明した。

——１９９４年８月５日『東京新聞』



日本必须面对过去的罪过，彻底悔悟，向受难的亚洲各国人民该道歉的便道歉，该赔偿的便赔偿。只有如此，日本才能洗净自己的灵魂，重新抬起头来，做亚洲各国的一个堂堂正正的邻居。

——日本诺贝尔文学奖得者　大江健三郎

日本は過去の罪行に正面から向き合い、徹底的に悔悟し、被害を受けたアジア各国の人たちに対して謝罪すべきは謝罪し、賠償すべきは賠償することが必要である。このようにしてこそ初めて、日本は自らの良心を洗い清めることができ、もう一度たちあがり、堂々としてアジア各国の隣人になることができるのである。

――日本のノーベル文学賞受賞者　大江健三郎



《东史郎日记》案在东京地方法院一审时，东史郎的律师椎名麻纱枝。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

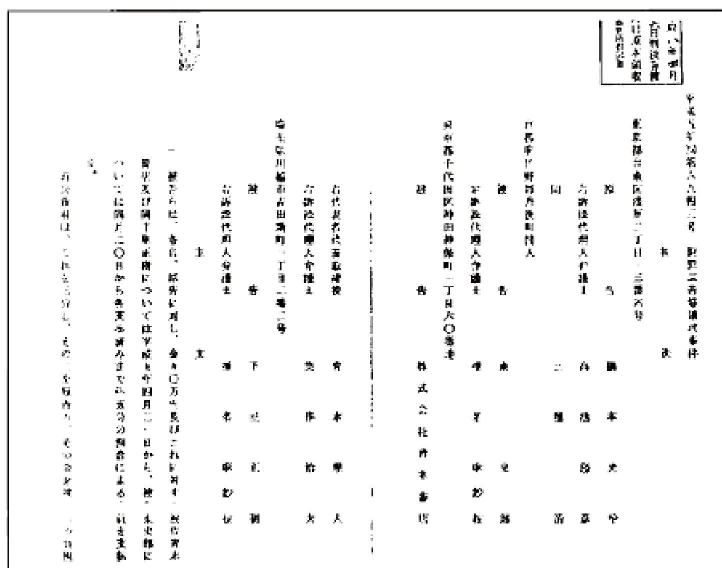
『東史郎日記』裁判の東京地方裁判所第一審時の東史郎の弁護士椎名麻紗枝。

――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



日本东京地方法院。

日本の東京地方裁判所。



判決

主文

1996年4月26日，东京地方法院一审判决东史郎等败诉。图为部分判决书的影印件。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９６年４月２６日、東京地方裁判所一審判決で東史郎さんら敗訴。これは判決文の写真複製資料。

――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

1996年4月26日，东京地方法院一审判决东史郎先生败诉。东史郎先生非常气愤，立即发表《我的决心》，强烈抗议该院的不公正判决。他说：这次审判是以损害名誉为借口，而企图通过法官的判决来否定南京大屠杀，这是妨碍我的言论、行动和出版自由的诉讼审判。发起这次诉讼的目的是，使日本军队的侵略行为正当化（合法化）。于是，东京地方法院便迎合原告的企图，而在4月26日我84岁生日的前一天，判决《东史郎日记》中关于屠杀的记述是虚构的，使我败诉。否定南京大屠杀就必然导致肯定侵略战争，肯定军国主义分子一直主张的“圣战论”，抹杀战争犯罪，否定由世界人民主持的东京审判，否定亚洲各地进行的战争审判。我作为参加了侵略战争的士兵，了解侵略的真相。我没有向大量的威胁和攻击屈服，而对战场上的真相进行了坦白。这是因为，我认为，我们必须弄清楚历史事实并进行反省。我还希望世界舆论对此作出审判。 ——(日)东史郎　提供

１９９６年４月２６日、東京地方裁判所の一審判決で東史郎さんは敗訴した。東史郎さんは非常に立腹して、すぐさま『私の決意』を発表し、裁判所の不公正判決に厳重に抗議した。彼は次のように語った。「この訴訟は、名誉毀損の籍口して、従来から論争されている南京大虐殺否定を裁判で決定しようと目論むものであり、東の言論・表現・出版の自由を妨害しようとする裁判である。また日本軍の行為を正当化せんと目論むものである。かくて東京法廷は、原告訴訟の意義主張にそって、４月２６日「東の虐殺日記記述は虚構である」と東の８４歳の誕生日の前日に決定し東を敗訴にした。

南京大虐殺否定は侵略戦争否定に繋がるものであり、軍国主義者が主張していた「聖戦論」の肯定であり、戦争犯罪を抹殺し、大戦後に世界から審判された東京裁判史、アジア各地で挙行された戦争裁判史を否定するものである。私は従軍兵士として加害の実相を知っている。幾多の攻撃・脅迫にも屈せず戦場の実相を告白してきた。それは「真実を明らか にして反省すべきである」と思うからである。世界の世論の審判を求める。 ——（日）東史郎　提供



为了诉讼，从京都丹后半岛到日本东京的法院，东史郎每次要花2天时间乘公共汽车、火车、新干线。就这样持续了八年，对于80多岁的老人来说是相当艰难的了。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎は、2日がかりで京都の丹後半島から日本東京の裁判所へバスや汽車、新幹線を乗り継いで、8年間に渡り通った。80歳代の老人にとってあまりにも過酷な年月であった。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供







1996年5月9日，东史郎在名古屋市举行为历史作证活动。
——（日）"南京事件不再重演·名古屋之会" 提供

1996年5月9日、東史郎さんは名古屋にて証言活動を行った。
——（日）「ノーモア南京・名古屋の会」 提供

1994年8月，东史郎在战后第二次来到南京，与日本“南京事件历史调查团”在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆参观。大量的历史照片和史料，唤起了东史郎对当年参与大屠杀情景的回忆。

１９９４年８月、東史郎さんは戦後で二度目の南京訪問をおこない、日本「南京事件歴史調査団」と中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館を参観した。大量の歴史的写真や資料は、東史郎さんに当時大虐殺にかかわった光景の記憶を呼び起こした。





1994年8月，东史郎在南京下关中山码头原日军屠杀现场，回忆当年亲眼目睹的情景。

１９９４年８月、東史郎さんは南京の下関中山埠頭で元日本軍による虐殺現場で自らが見た当時の様子を思い起こした。





1994年8月，东史郎在侵华日军南京大屠杀北极阁遇难同胞丛葬地纪念碑前凭吊遇难者。

１９９４年８月、東史郎さんは、日本軍が南京を侵略した時の北極閣虐殺受難同胞合葬地の記念碑前で受難者の霊をとむらった。



1994年8月，东史郎在南京玄武门讲述当年日军屠杀情景。

１９９４年８月、東史郎さんは南京玄武門で当時の日本軍の虐殺の有り様について語った。



1994年8月，东史郎随日本“南京事件历史调查团”再次来到南京反省谢罪，对中山码头、北极阁等南京大屠杀遗址进行了实地调查，走访了南京大屠杀幸存者，并受到了江苏省对外友好协会会长吴锡军(左)的会见。

１９９４年８月、東史郎さんは、「南京事件歴史調査団」について、再度南京に反省と謝罪にやってきて、中山埠頭、北極閣など南京大虐殺の遺跡で実調査をおこない、南京大虐殺の生存者を訪れ、また江蘇省対外友好協会会長の呉錫軍氏と接見した。



1997年8月，东史郎先生与一中国女兵在北京街头交谈。

——（日）牧田清　摄影

１９９７年８月、東史郎さんとある中国の女性兵士が北京の街角で言葉を交わす。

——（日）牧田清　撮影





1996年冬，空野佳弘律师和日本支援东史郎案审判实行委员会部分成员，来到东史郎家中，对诉讼准备工作进行商谈，并在东史郎住宅前合影留念。图中前排中间为东史郎先生，其右侧为其夫人久江女士，其左侧为山内小夜子女士。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

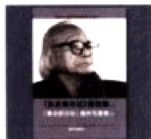
１９９６年冬、空野佳弘弁護士と日本の東史郎さんの南京裁判を支援する会の一部の人たちが東史郎さんのお宅を訪れ、訴訟の準備作業の進め方について相談し、東史郎さんのお宅の前で記念撮影した。写真の前列中央が東史郎さん、その右側が久江夫人、その左側が山内小夜子さん。

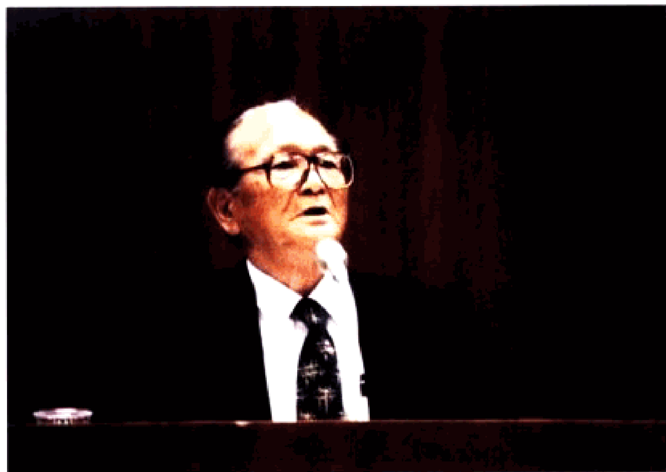
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1997年8月14至16日，“侵华日军南京大屠杀史国际学术研讨会”在南京举行。东史郎战后第三次来南京，并在该会上发表演讲——《与“虚构派”挑起的南京大屠杀案审判作斗争》。

１９９７年８月１４日から１６日まで、「日本中国侵略南京大虐殺史国際学術シンポジウム」が南京でおこなわれた。写真は東史郎さんの戦後三回目の南京訪問で、この会議で東史郎さんは、「『まぼろし派』の仕掛けた南京大虐殺事件裁判とのたたかい」と題し講演した。





1997年10月24日，东史郎在日本广岛吴市"南京大屠杀证言讲演会"上。
——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９７年１０月２４日、日本の広島県呉市での「南京大虐殺証言講演会」での東史郎さん。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

东史郎言论摘录

我们日本人对蒙受原子弹的危害大声呼号，而对加害在中国人民身上的痛苦却沉默不语……作为战争的经历者，讲出加害的真相以其作为反省的基础，这是参战者的义务。战时，特高警察和宪兵压制国民的思想言论自由。时至今日，那些不醒悟、身着西装但骨子里依然穿着军装的家伙、伪君子还要压制言论自由。战争期间曾参加屠杀无辜的我，对自己的青春追悔莫及。我曾应召走向战场并豁出性命去拼杀，但在南京大屠杀60周年的现在，我正在与那些坚持认为南京大屠杀是虚构的人为"南京战争审判"而斗争。歪曲历史、不知何为耻辱、缺乏国际感知的政治家们无知愚昧的发言，以及"那是一场民族解放战争"、"南京大屠杀是中国捏造的"等无耻谰言还在继续流传。如果法院迎合大放厥词、不思悔改的政治家作出不公正判决的话，我将诉诸世界舆论，要求世界作出判决。孔子曰："过，则勿惮改。"为改正过错必须反省过去。为此，我要为公正审判而作斗争。要发展真正的友好，就要讲实话、讲真话，不能让战争的悲剧重演！

東史郎さんの発言からの抜粋

われわれ日本人は原子爆弾の危害を被ったことに対しては大声をあげて叫ぶが、中国の人たちの身に痛苦の加害を加えたことに対しては沈黙して語らない。戦争の経験者として加害の真相を語り、反省の基礎としていくのは、これは参戦者の責務である。戦争中は特高警察と憲兵は国民の思想と言論の自由に圧迫を加えてきたが、今日に至っても、それらはまだ目覚めてはいない。身体には背広を着てはいるものの、内心では依然として軍服に身を固めている輩、偽紳士はまだ言論の自由に圧力を加えている。戦争期間中無辜の人たちを虐殺してきた私は、自分の青春を悔やんでも悔やみきれない。私は戦争に召集されて戦場に行き生命を投げ出してひたすらに殺した。しかし、南京大虐殺６０周年の現在、私はいま南京大虐殺は虚構であるということに固執する人たちと「南京戦争裁判」をたたかっている。歴史の歪曲がどんなに恥辱なのかわからず、国際感覚の欠如した政治家たちが無知愚昧な発言をおこない、さらには「あれは民族解放戦争だ」「南京大虐殺は中国がでっち上げたもの」等の恥知らずなたわごとが、まだ引き続き伝播している。もし裁判所がこうしたかってな議論や悔い改めようとしない政治家たちに迎合して、不公正な判決をおこなうならば、私は世界の世論に訴えて世界の審判を要求する。孔子は「過ちを改めることを憚ることなかれ」と言っている。過ちを改めるには過去を反省しなければならない。このために私は裁判をおこない、たたかう。真の友好の発展のために、本当のことを語り、戦争の悲劇を繰り返してはならない！



1998年1月，日本大阪府枚方市上映电影《南京1937》时，有100辆右翼宣传车前来骚扰。
——日本"和平都市枚方"市民之会　提供

１９９８年１月、日本大阪府枚方市で映画「南京１９３７」を上映したとき、１００台の右翼の宣伝車がやってきて騒いだ。
——（日）「平和都市ひらかた」を考える市民の会　提供





日本右翼势力出动的宣传车上张贴着"谴责为南京大屠杀作伪证"字样，公然否定南京大屠杀。
—　日本"和平都市枚方"市民之会　提供

日本の右翼勢力が出動させた宣伝カーには「偽証南京大虐殺糾弾」の文句が貼られ、南京大虐殺を否定した。
——（日）「平和都市ひらかた」を考える市民の会　提供





图为在放映电影场所前警备的枚方市民和警察。

——日本"和平都市枚方"市民之会　提供

映画上映会場前を警備する枚方市民と警察。

——(日)「平和都市ひらかた」を考える市民の会　提供



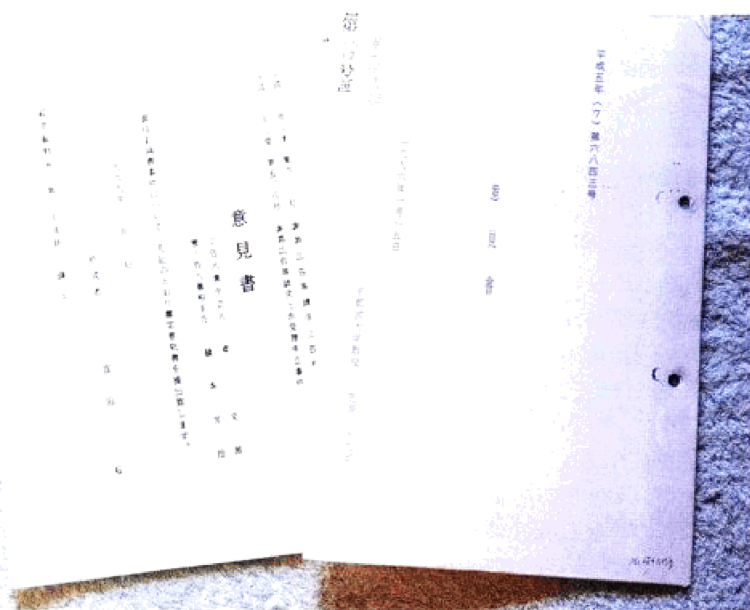


1997年冬，丹羽雅雄律师来到东史郎家，与东史郎先生商谈东京高等法院上诉书的有关事宜。

——（日）牧田清　摄影

１９９７年冬、丹羽雅雄弁護士は東史郎さんの家を訪問し、東史郎さんと東京高等裁判所への控訴に関係する事柄を相談した。

——（日）牧田清　撮影



意見書

《东史郎日记》案一审时，日本历史学家为东史郎写的意见书。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

『東史郎日記』裁判の第一審の時、日本の歴史専門家が東史郎さんのために意見書を書いた。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1998年3月12日，日本东京高等法院对《东史郎日记》上诉案进行了第10次庭审。图为庭审后，东史郎和他的律师在法院的记者俱乐部会见记者。

—— 日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年３月１２日、日本の東京高等裁判所は『東史郎日記』控訴審の第１０回公判をおこなった。写真は公判審理が終わったあと、東史郎さんと弁護士が裁判所の記者クラブで記者会見をおこなっているところ。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1998年9月8日，东京高等法院对《东史郎日记》案进行了第13次庭审，东史郎在法庭上陈述了最后的意见。图为东史郎先生的律师在法院的接待室向支持者们报告庭审的情况。

—— 日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年９月８日、東京高等裁判所は『東史郎日記』裁判の第１３回目の公判をおこない、東史郎さんは法廷で最後の意見陳述をおこなった。写真は東史郎さんの弁護士が、裁判所の待合室で支持者にたいして公判の状況を説明しているところ。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



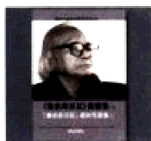


1998年3月12日，日本东京高等法院进行了《东史郎日记》案第10次庭审。图为庭审后，东史郎和律师团在该法院记者俱乐部会见记者。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年３月１２日、日本の東京高等裁判所は『東史郎日記』控訴審の第１０回公判をおこなった。写真は公判審理が終わったあと、東史郎さんと弁護士が裁判所の記者クラブで記者会見をおこなっているところ。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

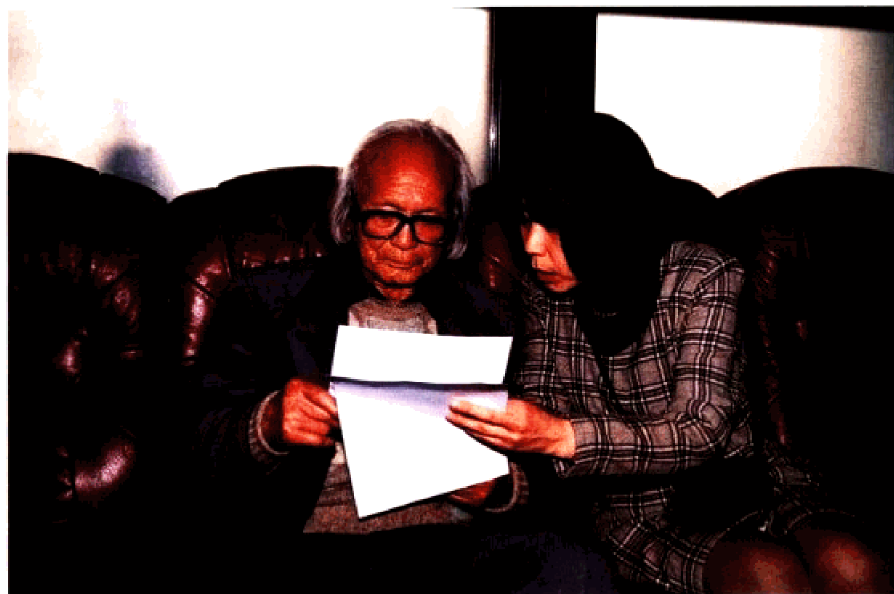


日本支援东史郎案审判实行委员会秘书长山内小夜子言论摘录

世界所注目的是一个参加了侵略战争的原日本兵，自我反省、忏悔杀害了中国人，从“日本鬼子”变成了“人”的86岁老人，如何被日本社会接受，受到怎样的遭遇。这是个涉及到当今日本、日本的司法以及日本社会的历史认识问题，东史郎审判的历史意义也正在这里。因为南京大屠杀是日本侵华战争中最典型、最残暴的一个事件。否定了南京大屠杀，就是彻底否定了日军侵略战争的暴行。

東史郎さんの南京裁判を支援する会の山内小夜子の発言からの抜粋

世界がこの裁判に注目するのは、一人の侵略戦争に参加した元日本軍兵士が、自省して、中国人を殺害したことを懺悔する人間となった。「日本鬼子」から「人間」へとなった８６歳の老人を、日本社会はどのように受け入れ、どのような処遇をするのか、ということが点こそが注目されている。これは、今日の日本に関係する事柄であり、日本の司法と日本社会の歴史認識が問われる問題であり、ここにこそ東史郎裁判の歴史的意義がある。南京大虐殺は日本の侵略戦争の中でもっとも典型的な、もっとも残虐な事件であり、南京大虐殺を否定することは、即ち日本の侵略戦争の残虐行為すべてを否定することにほかならない。



山内小夜子与东史郎在一起商讨诉讼问题。
—— 日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

山内小夜子さんと東史郎さんが一緒に訴訟問題を相談する。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1998年9月8日，东京高等法院第13次庭审结束后，东史郎与中国旅日华侨刘彩品亲切交谈。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

1998年9月8日、東京高等裁判所第13回公判がおわったあと、東史郎さんは華僑の劉彩品さんと親密に言葉を交わす。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

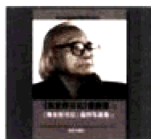


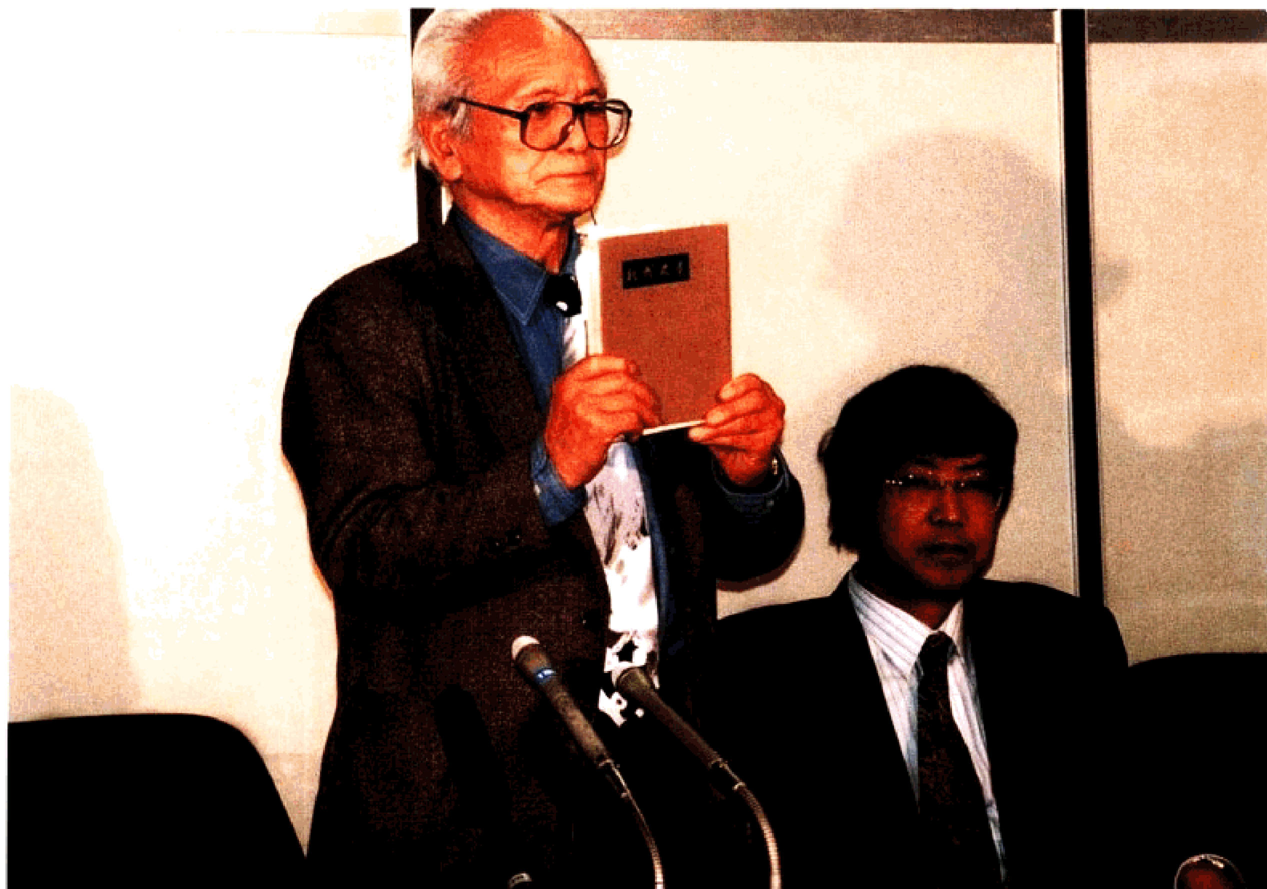
中国留学生到法庭旁听，声援东史郎，对东史郎是极大的鼓励。

（日）牧田清　摄影

法廷には、中国留学生たちが傍聴支援に駆けつけて、東史郎さんに支持に意志を伝えた。東史郎にとっては大きな励ましになった。

——（日）牧田清　撮影





1998年3月12日，在记者招待会上，东史郎展示日记原稿，强调其真实性。
——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

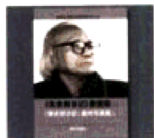
１９９８年３月１２日、記者会見席上で東史郎さんは、当時の日記原本を示しながら、記述は真実を訴えた。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

4 中日两国人民声援东史郎，共同为正义举证

中日両国人民は東史郎さんに声援をおくり、ともに正義の立証活動をおこなう







《东史郎日记》案在日本东京地方法院一审败诉后，1996年8月，日本支援东史郎案审判实行委员会专门派人到南京，主要就一审涉及的“1937年邮政袋能否装下一个人”、“最高法院门前的马路对面当年是否有水塘”和“手榴弹绑在装有中国人的邮政袋上扔进水塘、爆炸后是否对岸上的加害者构成危害”三个问题调查取证。南京人民积极支持，为上述三个问题提供了有力的证据。侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆将这些证词证物一一转交东史郎律师团，成为《东史郎日记》案的有力佐证。

『東史郎日記』裁判が日本の東京地方裁判所で第一審敗訴になった後、１９９６年８月、日本の東史郎さんの南京裁判を支える会がわざわざ南京に人を派遣して、主に一審でふれられていた「１９３７年の郵便袋に一人の人間を入れることができるのかどうか」「最高法院前の大通りの向かい側に当時池があったのかどうか」および「中国人を中に入れた郵便袋に手榴弾を縛りつけ、池に投げ入れ、爆発させた後で、対岸上の加害者に危害が及ばないかどうか」という三つの問題について調査し証拠を集めようとした。南京人民はこれに積極的に協力し、先の三つの問題について有力な証拠を提供した。中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館は、こうした証言や証拠物件を一つひとつ東史郎弁護団に手渡し、『東史郎日記』裁判の有力な証拠になった。



《东史郎日记》案一审败诉后，日本民间正义人士和东史郎律师团成立支援东史郎案审判实行委员会，支持和援助东史郎的正义之举。

图为东史郎先生与“支援东史郎案审判实行委员会”秘书长山内小夜子在集会上。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

『東史郎日記』裁判一審敗訴以後、日本の民間の正義を求める人たちと東史郎弁護団は、東史郎さんの南京裁判を支える会を発足させ、東史郎さんの正義の行動を支持し、援助した。

写真は、集会での東史郎さんと「東史郎さんの南京裁判を支える会」事務局長の山内小夜子さん

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1998年3月12日，日本东京高等法院对《东史郎日记》案进行了第10次公开审理，东史郎的支持者100多人参加了旁听。图为东史郎先生在该法院前向他的支持者表达必胜的决心。

——（日）牧田清　摄影

１９９８年３月１２日、日本の東京高等裁判所は『東史郎日記』裁判の第１０回公判審理をおこなった。東史郎さんの支持者１００人余りが傍聴した。写真は東史郎さんが裁判所前で支持者に必勝の決意を訴えているところ。

－－（日）牧田清　撮影





《东史郎日记》上诉案律师团律师中北龙太郎先生。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

『東史郎日記』控訴審裁判弁護士中北龍太郎さん。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



《东史郎日记》上诉案律师团律师丹羽雅雄先生。
——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

『東史郎日記』控訴審裁判弁護士丹羽雅雄さん。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



《东史郎日记》上诉案律师团律师空野佳弘先生。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

『東史郎日記』控訴審裁判弁護士空野佳弘さん。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1997年3月9日，律师团和支援会为审判作准备，开始详细阅读《东史郎日记》和当时有关的资料。图为在东史郎家确认原始日记的律师空野佳弘和支援会成员。

——（日）"不再重演南京事件·名古屋之会"　提供



１９９７年３月９日、弁護団と支える会は裁判闘争の準備として、東史郎日記と当時の資料を詳細に読むことから始めた。東史郎さんの自宅で元日記を確認する空野佳弘弁護士と支える会の会員。

－－（日）「ノーモア南京・名古屋」提供





1996年9月8日，日本支援东史郎案审判实行委员会、东史郎律师团和东史郎先生，在大阪浅香进行了邮政袋燃烧试验。

上图为空野佳弘律师将装有重物的邮政袋浇上汽油燃烧后，拖着行走。

下图为试验结束后，东史郎先生与参加试验的全体人员合影留念。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９６年９月８日、日本東史郎さんの南京裁判を支える会、東史郎弁護団と東史郎さんは、大阪の浅香で郵便袋燃焼実験をおこなった。

上の写真は、空野佳弘弁護士が、重い物を入れた郵便袋にガソリンを注いで燃焼させた後、引っ張って歩いているところ。

下の写真は実験終了後、東史郎さんと実験に参加した全員で撮った記念写真。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



中日両国人民は東史郎さんに声援をおくり、ともに正義の立証活動をおこなう

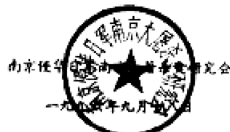
支援东史郎南京大屠杀审判实行委员会：

东史郎先生为发展真正的中日友好关系，避免历史悲剧重演，敢于以真实姓名公开自己在1937年进攻南京时的随军日记，以亲身经历证实南京大屠杀的历史事实，并认真谢罪反省，这一正确的举动，受到了中国人民特别是曾经遭受日本军国主义严重杀戮的南京人民的欢迎。

东史郎先生的这一正义之举，对妄图否定南京大屠杀历史事实、推卸侵华战争罪责的日本右翼势力，是一个沉重的打击。因此，在日本右翼势力的周密策划下，那个曾残害过中国人的桥本光治，竟然倒行逆施，诬告东史郎先生、下里正树先生和青木书店，其目的是图谋推翻早有历史定论的“南京大屠杀”铁案。我们对东京地方法院关于东史郎一案作出的不公正判决，表示无比的愤慨！

我们认为，东史郎先生在法庭上的正义斗争不是孤立的，它受到了并将继续受到日本国内外有正义感的人们的支持。我们“南京侵华日军南京大屠杀史研究会”及其专家学者，将全力支援东史郎先生等的正义斗争，拿一切所能提供证据，绝不允许日本右翼势力企图掩盖历史真相的阴谋得逞。

前事不忘，后事之师。认真地回顾和总结历史教训，对于维护世界和平及发展中日友好关系，有着重要的现实意义。日本必须承认那段侵略历史并认真反省，走和平发展的道路，才能推动中日两国的关系向着正确的方向发展。



南京侵华日军南京大屠杀史研究会

一九九六年九月十八日

南京侵华日军南京大屠杀史研究会在《东史郎日记》案一审败诉后，致函日本支援东史郎案审判实行委员会，表示坚决声援东史郎的正义之举。

南京中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会は『東史郎日記』裁判一審敗訴の後、南京裁判を支える会手紙を送り、東史郎さんの正義の行動に断固として声援をおくった。

激励の手紙

日本の東史郎さんの南京裁判を支える会のみなさん：

東史郎さんは、真の中日友好関係を発展させるために、歴史の悲劇を二度と繰り返さないために、勇気をもって実名で自己の１９３７年南京に侵攻したときの従軍日記を公開した。身をもって体験した故にこそ、南京大虐殺の歴史的事実をまちがいなく証明し、その上に誠実に謝罪し反省するという、こうした正しい行動は、中国人民、とりわけかつて日本軍国主義のむごたらしい殺戮を被った南京人民の歓迎を受けた。東史郎さんのこの正義の行動は、南京大虐殺の歴史的事実の否定と、侵略戦争の犯罪行為の責任回避を目論む日本の右翼勢力にとって、これは大きな打撃であった。そのため、日本の右翼勢力は周到な計画の下で、あのかつて中国人を虐殺した橋本光治は、なんと道理を無視して、東史郎さん、下里正樹さんと青木書店を誣告したのである。その目的は、早くから歴史の定説になっている「南京大虐殺」の確固たる事実を覆そうという企みである。われわれは、東京地方裁判所が東史郎さんの裁判に関しておこなった不公正な判決に対して、この上ない憤慨を表明する。われわれは、東史郎さんの法廷での正義のたたかいは決して孤立してはおらず、日本国内外の正義を求める人たちの支持を受けてきたし、受け続けているものと思っている。われわれ「南京中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会」とその専門家、学者は、全力をあげて東史郎さんたちの正義のたたかいを支援し、提供できる全ての証拠を出し尽くし、日本の右翼勢力が歴史の真相の隠蔽の目論みをほしいままにすることは絶対に許さない。前のことを忘れず、後の事の戒めとする。誠実に歴史の教訓を振り返り総括することは、世界平和を擁護し中日友好関係を発展させるために、重要な現実的な意義を持っている。日本は必ずあの侵略の歴史を認めなければならない。そして誠実に反省し、平和を発展させる道を進んでこそ、中日両国関係の正しい方向にむけての発展を促進するものである。

南京中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会

１９９６年9月18日



山内小夜子女士为《东史郎日记》案取证一事，分别接受江苏有线电视台和南京电视台记者采访。

山内小夜子さんは、『東史郎日記』裁判についての証拠集めで、江蘇有線テレビ局と南京テレビ局の記者から、それぞれ取材を受けた。

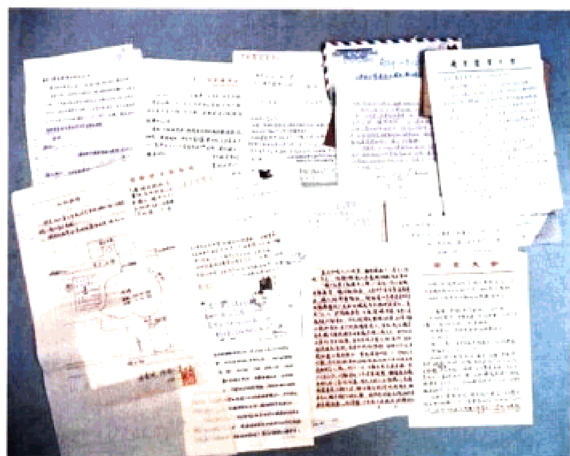


为正义举证

中国各新闻媒体迅速报道南京有关方面接受日本友人为《东史郎日记》案取证的请求，引起强烈的反响。图为《服务导报》率先刊载“为正义举证”报道的影印件。

中国の各マスコミは南京の関係方面が日本の友人が『東史郎日記』裁判の証拠集めの協力要請を引き受けたことを素早く報道し、大きな反響を引き起こした。これは『服務導報』紙が率先して掲載した「正義のための立証」の報道のコピー。





中国各地纷纷来信来电表示声援东史郎，图为部分信件的照片。

中国各地から次々と東史郎さんへの声援を表明する手紙や電報が寄せられた。これは一部の手紙の写真。



日本支援东史郎案审判实行委员会在会报上刊登《不是“自虐”，是“自省”》的文章，将让会员了解诉讼情况。另外，山口县支援东史郎案审判之会出版了《黄土》会报。东京方面，“不再重演南京事件之会”在会报上发表了《不再重演南京300000》的文章，声援东史郎。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

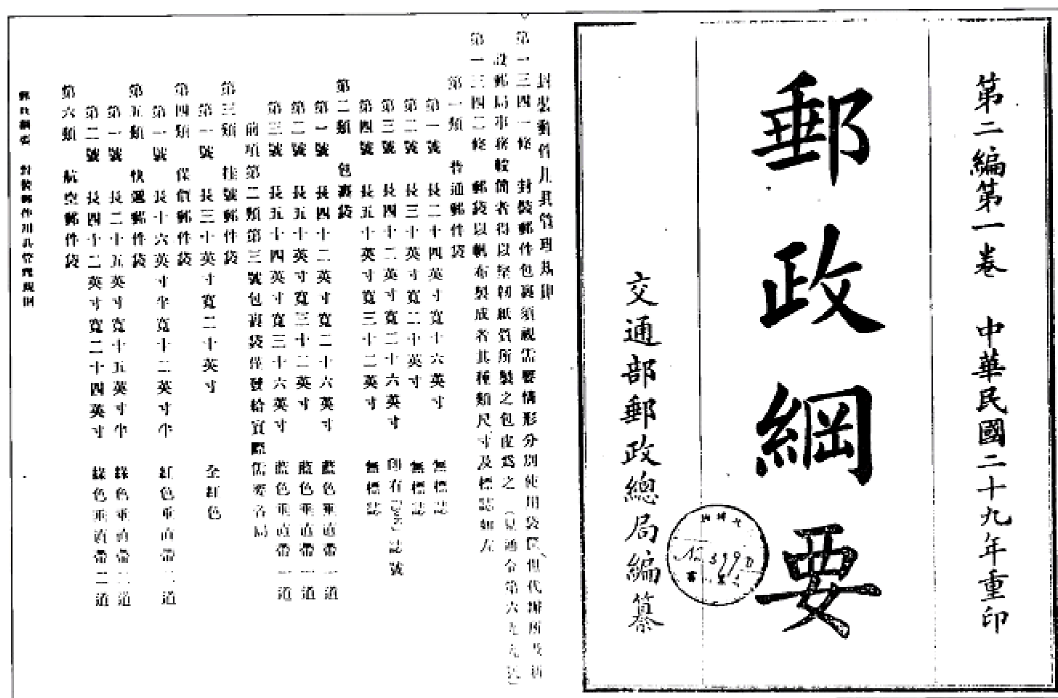
東史郎さんの南京裁判を支える会は会報『自虐ではなく自省を』を発行して裁判状況を会員に知らせた。また、東史郎訴訟「南京虐殺裁判」を支援する会・山口は会報『黄土』を発行。東京方面では「ノーモア南京の会」が会報『ノーモア南京３０００００』を発行して東史郎さんの裁判を支えた。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1996年10月，朱成山馆长向《东史郎日记》案律师中北龙太郎（左二）、空野佳弘（左三）和日方翻译老田裕美（右一）移交东史郎案有关的地图、航空摄影地形图、房产图、证人证言等共33种41件证据。

1996年10月、朱成山館長は、『東史郎日記』裁判の弁護士中北龍太郎氏（左から２番目）、空野佳弘氏（左から３番目）と日本側通訳老田裕美氏（右側）に、東史郎裁判関係地図、空撮地形図、家屋図、証人の証言など、あわせて３３種類４１件の証拠を渡す。


第二編第一卷　中華民國二十九年重印

郵政綱要

交通部郵政總局編纂

封裝郵件及其管理規則

第一三四一條 封裝郵件包裹須視需要情形分別使用袋匣、但代辦所及設郵局事務較簡者得以堅韌紙質所製之包皮為之（見通令第六…）

第一三四二條 郵袋以帆布製成者其種類尺寸及標誌如左

第一類 普通郵件袋
第一號 長二十四英寸寬十六英寸 無標誌
第二號 長三十英寸寬二十英寸 無標誌
第三號 長四十二英寸寬二十六英寸 印有「…」記號
第四號 長五十英寸寬三十二英寸 無標誌

第二類 包裹袋
第一號 長四十二英寸寬二十六英寸 藍色垂直帶一道
第二號 長五十英寸寬三十二英寸 藍色垂直帶一道
第三號 長五十四英寸寬三十六英寸 藍色垂直帶一道
前項第二類第三號包裹袋僅發給實際需要各局

第三類 掛號郵件袋
第一號 長三十英寸寬二十英寸 全紅色

第四類 保價郵件袋
第一號 長十六英寸半寬十二英寸半 紅色垂直帶一道

第五類 快遞郵件袋
第一號 長二十五英寸寬十五英寸半 綠色垂直帶二道
第二號 長四十二英寸寬二十四英寸 綠色垂直帶二道

第六類 航空郵件袋

郵政綱要　封裝郵件用具管理規則

中国颁布的《邮政纲要》，规定了各类邮政袋的质地、字样、颜色和规格。这是《邮政纲要》部分影印件。

南京八中退休教师吴邦汉致函侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆说："1946年，在南京市邮政局第五支局工作期间，曾听师傅说过，日本人用邮政袋装人并将其残酷杀害的经过。"

家住秦淮区东关头21号的王其昌致函侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆说："1937年，在珠江路邮政局做勤杂工，曾亲眼见过当时的邮政袋能装下一个人。"

中国で公布された『郵政綱要』は、各種の郵便袋の生地、字句、色と規格が規定されている。これは『郵政綱要』の一部の写真のコピー。

南京第八中学校定年退職教師呉邦漢さんは中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館に次のような手紙を寄せている。「１９４６年私が南京市郵政局第５支局で働いていた時期に、かつて先輩職員が、日本人が郵便袋に人を詰め込みそれを残酷に殺害した経過を語ったのを聞いたことがある。」

秦淮区の東関頭２１号に住む王其昌さんは二度も中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館に手紙を寄せて次のように語っている。「１９３７年、珠江路郵政局に雑役工として勤務したことがあり、当時の郵便袋に人一人を詰め込むことができることを自分の眼で見たことがある」



江苏省省内邮袋调拨局

证　明

经邮电部邮政总局查询 、中华民国时期邮袋规格如下:

168cm × 105cm
138cm × 92cm
128cm × 82cm
106cm × 68cm
80cm × 50cm
60cm × 38cm
52cm × 30cm

袋身印有"中华民国邮政"字样（繁体、从右至左），邮袋质地为帆布，白底黑字，1949年新中国成立后，中华人民共和国即停止使用。



江苏省省内邮袋调拨局
1996.8.15

1996年8月15日，江苏省省内邮政袋调拨局出具了关于邮政袋尺寸、质地和字样的证明书(略)。

中国30年代曾使用的大号邮政袋，长度为1.68米，宽度为1.05米，完全可以装得下一个成年人。

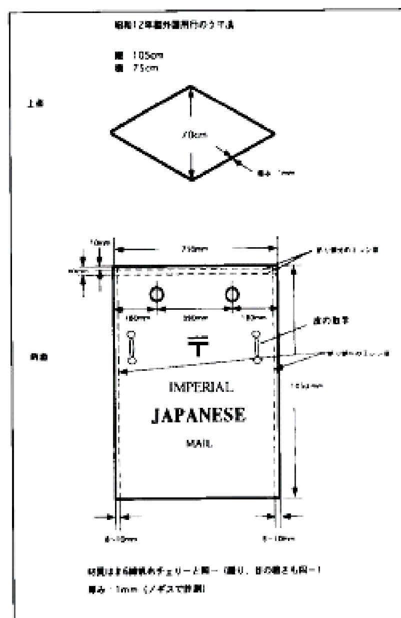
１９９６年8月１５日、江蘇省省内郵政袋調達局と南京市郵政袋調達局が発行した郵便袋のサイズ、生地と字句の証明書：

郵電部郵政総局を経て問い合わせたところ、民国の頃、郵便袋の規格サイズは次のとおり：（サイズは略）

袋には「中華民国郵政」の文字（繁字体、右から左へ）が印刷されており、郵便袋の生地はズック製で、白地に黒い文字である。１９４９年【訳者：１９４９年の間違い】新中国成立以後、中華人民共和国は即座に使用を停止した。

江蘇省郵便袋調達局（公章）
１９９６．８．１５

中国の３０年代にはかつて大きいサイズの郵便袋が使われており、長さ１．６８メートル、幅１．０５メートルで、完全に成人一人を詰め込むことができる。





日本30年代使用的国际标准邮政袋，长度为1.05米，宽度为0.75米。也完全可以装得下一个成年人。

日本で３０年代に使用された国際標準の郵便袋は、長さ１．０５メートル、幅０．７５メートルである。これも完全に成人一人を詰め込むことができる。

东史郎先生的儿子东隆史到日本邮政研究所附属资料馆，调查1937年外国邮政袋，写成“报告书”提交法院，邮政袋长105CM，宽75CM，布料为棉帆布。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんの息子・東隆史さんは、日本の郵政研究所付属資料館に行き、１９３７年当時の日本の外国郵便用行嚢（郵便袋）を調査し、「報告書」を作成。裁判所に提出した。縦１０５センチ、横７５センチ。布の種類は綿の帆布。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

報　告　書

御庁平成８年（ネ）２３７９号事件について、下記のとおり報告致します。

１９９６年１２月２日

東京高等裁判所　第７民事部　御　中

記

私は、控訴人東史郎の子どもであります。

私は、控訴人東史郎の代理人である中北龍太郎弁護士に依頼され、本年１０月１８日、郵政研究所附属資料館に１９３７年製の外国郵便用行のうの調査におもむきました。

同館町より、同行のうの撮影許可をもらい、同行のうを写真撮影し、実測しました。

写真は、乙８８号証の３です。

乙８８号証の４は、私が実測した結果を図示したものです。

同行のうの材質はサンプルとしてもっていった「＃６綿帆布チェリー」と同一でした。

以上報告致します。









1997年1月19日，东史郎案律师团在大阪浅香模拟《东史郎日记》所记述，进行了用邮政袋装人和浇上汽油点火燃烧试验。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９７年１月１９日、東史郎弁護団は大阪の浅香で『東史郎日記』に記述されていることをシミュレーションして、郵便袋に人を詰め込む実験とガソリンを注ぎ火をつけて燃やす実験をおこなった。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1997年5月11日，在大阪浅香，东史郎律师团进行了邮政袋装人试验，结果表明，邮政袋完全能装下一个人，试验所用的邮政袋规格为长105CM，宽75CM。图为协助试验的京都大学学生将丹羽雅雄律师装入邮政袋前的一刻。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９７年５月１１日、大阪の浅香で、東史郎弁護団は郵便袋に人を詰め込む実験をおこなった、結果では、郵便袋に完全に一人の人間を詰め込むことができることが明らかになった、実験に使った郵便袋の規格は長さ１０５センチで、幅７５センチ。写真は実験に協力した京都大学の学生が、丹羽雅雄弁護士を郵便袋に詰め込む前のひととき。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



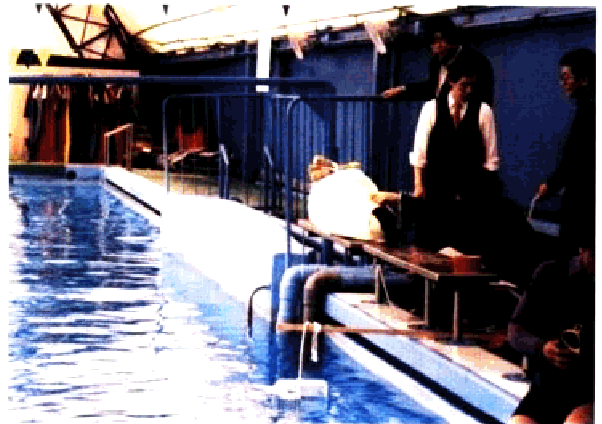
一审判决称："浇上汽油的邮政袋燃烧后，实行者有被烧伤的危险。"1997年5月11日，在大阪浅香，东史郎律师团进行了邮政袋燃烧试验，结果表明，邮政袋浇上汽油燃烧后，近距离不会被烧伤。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

一審判決では、「ガソリンを注いだ郵便袋を燃やした後、実行者は火傷をおう危険がある」と言っている。１９９７年５月１１日、大阪の浅香で、東史郎弁護団は郵便袋燃焼実験をおこなった。実験結果では、郵便袋にガソリンをかけて燃やした後、近距離でも火傷することはないことがわかった。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1998年3月2日，在京都八濑的一个游泳池里，东史郎律师团进行了装人邮政袋沉水试验，并用防水相机在水中对试验过程摄影。原告方面诡称："装着人的邮政袋入水后不下沉，而是浮在水面上。"试验结果表明，将装着人的邮政袋抛入水中，5秒钟即下沉2.5米。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年３月２日、京都の八瀬のプールで、東史郎弁護団は郵便袋に人を詰め込んで水に沈ませる実験をおこなった。また防水カメラで水中の実験過程を撮影した。原告側は「人を入れた郵便袋は水の中に入れても沈まず、水面に浮いている」と述べている。実験の結果は、人を詰めた郵便袋を水中に投げ込むと、５秒で水深２．５メートル以下まで沈んだ。

――(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

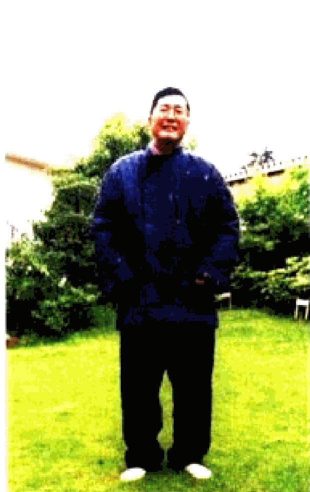


1998年3月2日，在京都八濑，为支持东史郎先生打赢官司，这位立命馆大学的青年学生自愿钻进邮政袋，进行邮政袋沉水试验。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年３月２日、京都の八瀬で、東史郎さんを支援して訴訟に勝つために、この立命館大学の若い学生は志願して郵便袋の中に入り込み、郵便袋を水に沈める実験をおこなった。

――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





东京高等法院在1998年12月22日的二审判决中诡称：“东史郎方面的邮政袋试验中，装入邮政袋中的人穿的是夏装，如果穿的是中国的冬装，就装不进去。上诉方只将试验的部分照片和录像作为证据，提供给了法院。”为反驳法院的狡辩，1999年6月27日，在大阪浅香，东史郎律师团再次进行了邮政袋装人试验。律师团找了一套类似中国棉袄的冬装，日本支援东史郎案审判实行委员会的山本干夫扮成中国受害者穿上冬装，另一志愿者穿上当年“皇军”的军装，进行现场“邮政袋装人”试验。这些试验的过程全部被拍成录像和照片，作为证据提交给法院。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東京高等裁判所は１９９８年１２月２２日の第２審の判決で詭弁を弄して「東史郎さん側の郵便袋実験の中で、郵便袋に詰め込まれた人は夏服を着ていたが、もし着ているのが中国の冬服であった場合、詰め込むことはできない。」と言っている。裁判所の詭弁に反論するために、１９９９年６月２７日、大阪の浅香で、東史郎弁護団は再度郵便袋に人を詰め込む実験をおこなった。弁護団は一着の中国の綿入れの上着に類似した冬服を探し出し、東史郎さんの南京裁判を支える会の山本幹夫さんが中国の被害者に扮し、もう一人の志願者は当時の「皇軍」の軍服を着て、「郵便袋に人を詰め込む実験」をおこなった。これらの実験の一部始終を写真やビデオで記録し、裁判所に証拠として提出した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供









1997年8月，南京市教委、侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和日本纪念南京大屠杀遇难者60周年全国联络会等组织，共同在南京举办“留下历史的见证——万名学生寻访南京大屠杀幸存者”夏令营活动。图为东史郎、山内小夜子等日本友人参加1997年8月15日的该夏令营开营仪式。

１９９７年８月、南京市教育委員会、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館と南京大虐殺６０周年全国連絡会などの組織と共同で南京で行った「歴史の証拠を保存する——万人の学生による南京大虐殺生存者の訪問」サマーキャンプ活動。写真は東史郎さん、山内小夜子さんら日本の友人が参加した1997年8月15日のサマーキャンプのオープン・セレモニー。



严肃认真的中、日小营员们整装待发。

厳粛で真剣なキャンプ隊員たちは支度を整えて出発を待つ。



中日两国小营员向南京大屠杀遇难者敬献花圈。

中日両国のキャンプ隊員は南京大虐殺受難者の霊前に謹んで花輪を捧げた。

1997年8月，东史郎携其儿子东隆史在侵华日军南京大屠杀中山码头遇难同胞纪念碑前默哀谢罪。

（日）牧田清　摄影

１９９７年８月、東史郎さんは子息の東隆史さんを連れて中国侵略日本軍南京大虐殺中山埠頭受難同胞記念碑前で黙祷し謝罪した。

——（日）牧田清　撮影





1997年8月，在南京大屠杀事件发生60周年之际，东史郎及其支援会成员来到《东史郎日记》中记载的南京东郊仙鹤门集体屠杀和遇难者从葬地遗址现场，悼念南京大屠杀遇难者。

（日）牧田清　摄影

１９９７年８月，南京大虐殺事件発生から６０周年の時，東史郎さん支える会の人たちは，『東史郎日記』の中に記載されている南京東郊外仙鶴門集団虐殺現場と受難者埋葬の遺跡を訪れ，南京大虐殺受難者を追悼した。

——（日）牧田清　撮影





1997年8月，东史郎先生在南京东郊仙鹤门一带当年屠杀现场，听取曾参与掩埋仙鹤门日军大屠杀遇难者尸体的八旬老人陶东志证言。

——（日）牧田清　摄影

１９９７年８月，東史郎さんは南京東郊外仙鶴門一帯の当時の虐殺現場で，仙鶴門の日本軍による大虐殺の被害者の死体埋葬にたずさわった８０歳の老人陶東志さんの証言を聞き取る。

——（日）牧田清　撮影



1997年8月，东史郎在原中国最高法院旧址前，与当年水塘旧址所在地的一中国老人合影。

——（日）牧田清　摄影

１９９７年８月、東史郎さんは元中国最高法院の建物の前で、当時あった池の跡地に住んでいた中国老人と一緒に撮影した。

——（日）牧田清　撮影



东史郎与证人丁仰乾在原中国最高法院旧址前合影。

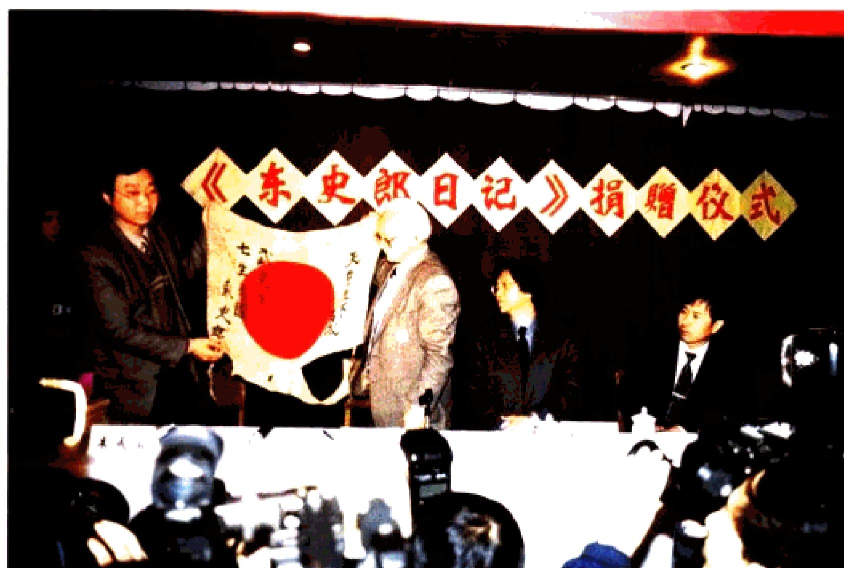
——（日）牧田清　摄影

東史郎さんと証人の丁仰乾さんが元中国最高法院の建物の前で一緒に写真を写す。

——（日）牧田清　撮影







1998年3月，东史郎战后第4次来到南京。为了把真实的历史告诉世人，他将战时日记、勋章和军旗捐赠给侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆。

１９９８年３月、東史郎さんの戦後４回目の南京訪問。真実の歴史を世間の人びとに訴えるために、彼は戦時日記、勲章と軍旗を中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に寄贈した。



东史郎先生将当年战时日记捐赠给侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆，并授权该馆翻译并出版《东史郎日记》中文版。这是东史郎先生正在写授权书。

東史郎さんは、当時の戦時日記を、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に寄贈し『東史郎日記』中国語版を翻訳出版する権限を授けた。

これは、東史郎さんが授権書を書いているところ。



宁垦出租汽车公司司机姜忠勤，自愿为来宁取证的日本友人免费提供用车服务。

南京寧墾タクシー会社の運転手姜忠勤さんは、南京に証拠集めに来た日本の友人のために、志願して無料でタクシーを提供してサービスした。











1998年3月，东史郎及其律师团在南京市中山北路101号原中国最高法院旧址（现江苏省商业厅）调查取证。

——（日）牧田清　摄影

（下图）杨　磊　摄影

１９９８年３月、東史郎さんとその弁護団は南京市中山北路101号の元中国最高法院の建物（現江蘇省商業庁）で調査し証拠集めをおこなった。

——（日）牧田清　撮影

（下の写真）楊　塁　撮影



空野佳弘律师在原中国最高法院旧址前作现场调查记录。

——（日）牧田清　摄影

空野佳弘弁護士は元最高法院の建物の前で現場調査をおこない記録をとった。

——（日）牧田清　撮影





丹羽雅雄律师正在现场测量从原中国最高法院旧址至马路对面水塘旧址距离。

（日）牧田清　摄影

丹羽雅雄弁護士が、元最高法院から大通りの向かい側の池があったところまでの距離を現場測量しているところ。

——（日）牧田清　撮影





中北龙太郎律师及芹泽明男先生正在现场测量从原中国最高法院旧址至马路对面水塘旧址距离。

——（日）牧田清　摄影

中北龍太郎弁護士と芹沢明男さんは，元中国最高法院の建物から大通り向かい側の池があったところの距離を現場測量しているところ。

——（日）牧田清　撮影

东史郎及其律师团、日本支援东史郎案审判实行委员会和侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆部分成员，登上原中国最高法院旧址对面的楼顶上，作现场地形的调查取证。

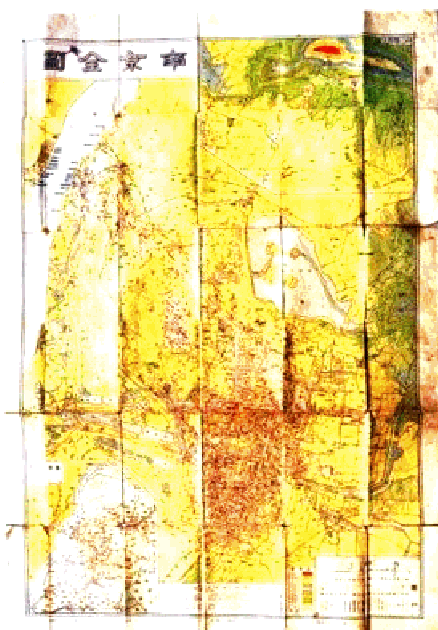
（日）牧田清　摄影

東史郎及びその弁護団，東史郎さんの南京裁判を支える会と中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館の職員は，旧中国最高法院の建物の向かい側のビルの屋上にのぼり，現場地形の調査を行い証拠を集めた。

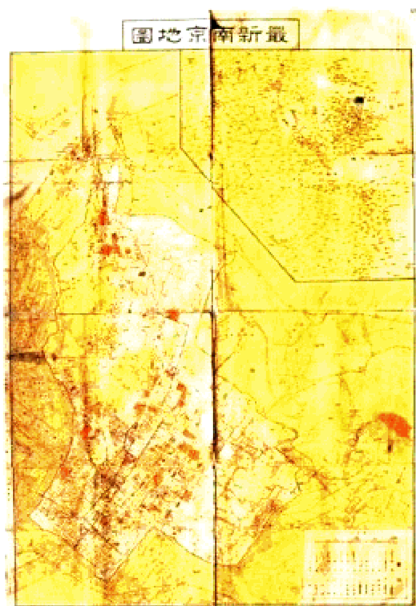
——（日）牧田清　撮影











从1996年8月起，南京市民共提供60余件地图，证明原中国最高法院门前的马路对面确有水塘。

１９９６年８月から今日まで、南京市民が提供したあわせて６０余件の地図は元中国最高法院の門前の大通り向かいには池があったことを証明している。





江苏省地矿厅遥感中心高级工程师黄家柱，提供的航空拍摄的南京地图照片上，《东史郎日记》中所记载的原中国最高法院门前马路对面的水塘清晰可见。

江蘇省地鉱庁リモート・センシングセンターの高級技師黄家柱氏が提供した南京地図の航空写真では、『東史郎日記』の中に記載された元中国最高法院の門前の道路向かいの池がはっきりと見て取れる。

谈 话 笔 录

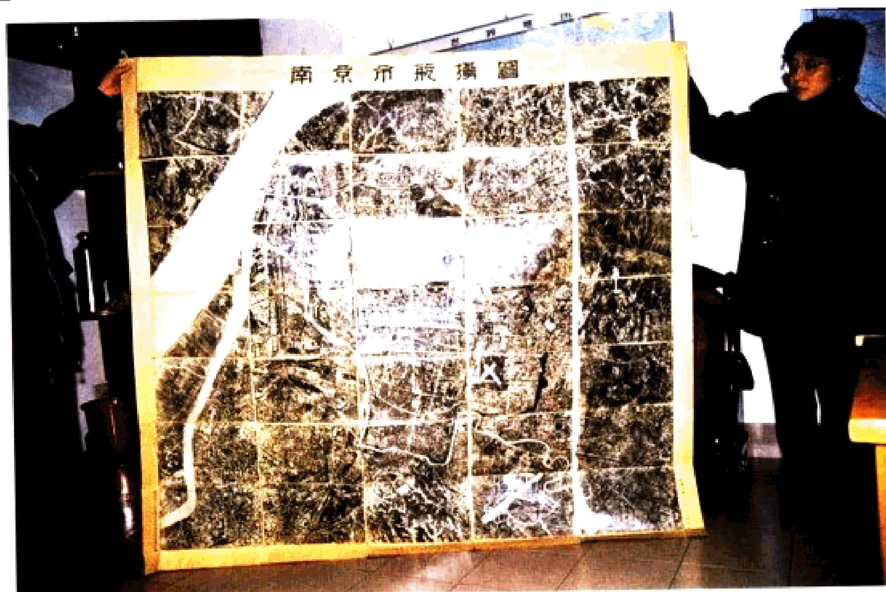
时 间：1998年3月7日

地 点：南京市状元酒楼二楼会议室

接谈人：[illegible] 记录人：[illegible]

被接谈人：[illegible]

谈话内容记录：[illegible]



南京勘察测绘设计院保存的1946年航空拍摄的南京地图上，原中国最高法院门前马路对面确有水塘。

南京調査測量製図設計院が保存している１９４６年の南京の航空写真地図では、元中国最高法院の前の道路向かいには確かに池がある。





东南大学生物系李乃弘、家住南京市一枝园的86岁老人王长发、莫愁新寓荷花里退休干部孙任国，分别提供了昭和十三年（1938年）日本名所图绘社印刷、小山吉三出版、至诚堂发行的《最新南京地图》，均证明原中国最高法院门前的马路对面确有水塘。

東南大学生物学部の李乃弘さん、南京市一枝園の８６歳の老人の王長発さん、莫愁新寓荷花里の退職幹部孫任国さんはそれぞれ昭和１３年（1938年）日本の名所図絵社印刷、小山吉三出版、至誠堂発行の『最新南京地図』を提供した。すべて元中国最高法院の門前の道路向かいには確かに池があったことを証明している。





南京鼓楼区裴家桥68号李秀章先生，向侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆捐赠1937年《最新南京地图》。

南京鼓楼区裴家橋６８号の李秀章さんは、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に１９３７年の『最新南京地図』を寄贈した。

公　　证　　书

（９８）宁证外民字第2028号

兹证明前面的《关于原最高法院对面有水塘的举证材料清单》上所盖的南京市房屋产权监理处档案馆印鉴属实。

中华人民共和国江苏省南京市公证处

公证员　李巧宝

关于原最高法院对面存在水塘的举证

由南京市地政局为进行土地登记于1936年测制地籍原图，每户按地段测制地产登记审查用图。解放后，为办理房地产登记，在原地籍图的基础上，于53年又测制成南京市房地产平面图。现将二种资料对比，进行举证，证明原最高法院对面，确有水塘。

[illegible]

解放后，地籍图改制为房地产平面图，[illegible]

[illegible]

3506　改为046335

3507-1改为046350

3507-2改为046345

3508　改为[illegible]

[illegible]

从53年的046-2幅房地产平面图上看出，原水塘依然存在，只是范围略小一些，面积为2.5713亩。（见抗战前和解放初水塘面积计算表）

水塘现已不存在，为人行道处，建了五层楼房，门牌是中山北路76—78号，74号也是原水塘的位置，是二层楼。（见85年的046幅房地产平面图）

以上看出，原最高法院对面确实有一个水塘。

举证人　汪智学

单位　南京市房屋产权监理处

职务　档案馆副馆长

职称　[illegible]

1998年3月5日

另附：关于原最高法院对面有水塘的举证材料清单

抗战前和解放初水塘面积测算情况表

抗战前水塘面积：

序号	面积（亩）	备注
1	0.2125	据3506段内水塘面积计算表
2	2.9406	据3507-1段地产登记审查用图记载水塘面积
3	0.8547	据3507-2段地产登记审查用图记载水塘面积
4	0.2496	据3508段地产登记审查用图记载水塘面积
合计	4.2574亩	

解放初水塘残留面积：

序号	面积（平方市丈）	备注
1	2.10	据南京市土地卡片046335丘记载水塘面积
2	116.16	据南京市土地卡片046350丘记载水塘面积
3	60.08	据南京市土地卡片046345丘记载水塘面积
合计	178.29	

[illegible]

汪智学

关于原最高法院对面有水塘的举证材料清单

序号	名称	数量	制作单位	日期
1	南京市地籍图			
~~1-1~~	~~第六区[illegible]图~~	~~1张~~	~~原南京市地政局~~	~~1936.7~~
1-2	第六区第七十幅图	1张	同上	同上
1-3	第六区第七十一幅图	1张	同上	同上
2	分段地产审查用图			
2-1	第六区3506段	1张	原南京市地政局	36.11.14
2-2	第六区3507（一）段	1张	同上	37.8.5
2-3	第六区3507（二）段	1张	同上	37.9.2
2-4	第六区3508段	1张	同上	35.10.25
2-5	第六区3389段	1张	同上	1936
3	南京市房地产平面图			
~~3-1~~	~~[illegible]~~	~~1张~~	~~南京市房地产管理局~~	~~[illegible]~~
3-2	537-3幅	1张	同上	53.2
3-3	046-2幅	1张	同上	同上
3-4	046-2幅	1张	同上	85
4	原六区旧段新丘对照表	3张	档案室	53.12
5	南京市土地卡片			
5-1	046335丘	1张	南京市房地产管理局	53.7.25
5-2	046345丘	1张	同上	同上
5-3	046350丘	1张	同上	同上
6	水塘拼接图（用35-37年地产审查用图拼接）	1张	档案馆	98.3
7	3506段内水塘面积计算图表	1张	汪智学	同上
8	原最高法院和水塘拼接图（用53年房地产平面图拼接）	1张	档案馆	同上

合计21张

南京市房屋产权监理处档案馆

1998.3.5

1937年3月18日，南京地政局绘制的《地产登记审查用图》，比例尺为：1:400，上面标明"水塘"大小的尺寸和所有权人。该图由南京市房产局档案馆馆长汪智学提供。

１９３７年3月１８日、南京地政局が制作した『不動産登記審査用図』は縮尺が１：４００で、そこには「池」の大きさの寸法と所有権者が明示されていた。この写真は南京市住宅管理局公文書館館長汪智学さんが提供したもの。



南京市交通局职工王正强先生，原家住乐业村 12–2号，与《东史郎日记》中所记载的水塘毗邻。这是南京市公证处为王正强先生私房产权蓝图所作的证词笔录。

南京市交通局の職員王正強さんは、元楽業村１２－２号に住んでいた。『東史郎日記』の中に記載されている池に隣接していた。これは南京市公証所が王正強さんの不動産権の青写真のために作った証言記録である。

谈 话 笔 录

时 间：1998 年 5 月 6 日

地 点：南京市公证处[illegible]

谈话人：[illegible]　记录人：[illegible]

被谈话人：王正强，男，[illegible]

谈话内容记录：问：[illegible]

答：[illegible]

问：[illegible]

答：[illegible]

[illegible]

谈 话 笔 录

时 间：1998 年 5 月 6 日

地 点：中国南京中山北路101号[illegible]

谈话人：[illegible]　记录人：[illegible]

被谈话人：李安民，男，1930年[illegible]

谈话内容记录：问：[illegible]

答：[illegible]

问：[illegible]

答：[illegible]

李安民

南京市公证处为原最高法院附近的居民李安民提供的有关水塘的证言出具保全证据《公证书》，这是所作的证言笔录。

南京市公証所が元最高法院付近の住民李安民提供した池の証言のために証拠を保全する『公証書』をそろえた。これは証言の記録である。



1998年3月6日，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆委托南京工程爆破设计研究所，在南京江宁县上峰地区完全模拟《东史郎日记》中的记述，进行了邮政袋绑上手榴弹并扔进水塘的实爆试验。

１９９８年３月６日、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館が南京工程爆破設計研究所に委託して、南京江寧県上峰地区で、『東史郎日記』の中の記述を完全にシミュレーションして郵便袋に手榴弾をくくりつけ、池に投げ入れて爆破させる実験をおこなった。



1998年3月6日，在南京市江宁县上峰镇进行的邮政袋、手榴弹燃烧试验。试验结果表明，浇上汽油的邮政袋燃烧后，手榴弹没有爆炸。图为试验现场照片及邮政袋残片。

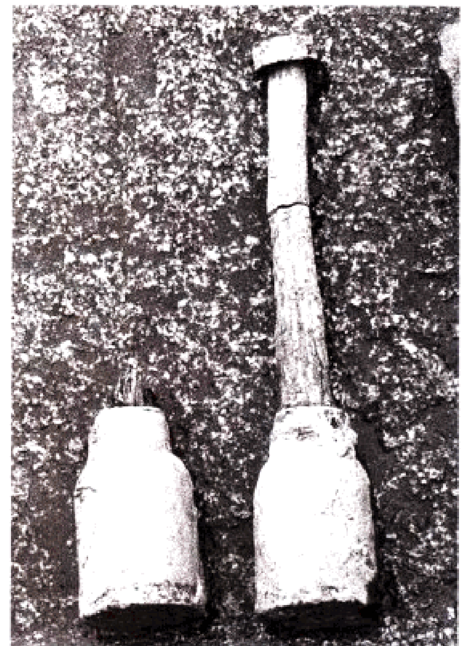
１９９８年３月６日、南京市江寧県上峰鎮で郵便袋、手榴弾の燃焼実験をおこなった。実験の結果、ガソリンを注いだ郵便袋を燃え上がらせた後でも、手榴弾は爆発しなかったことがわかった。写真は実験現場の写真と郵便袋の燃えかす。





南京理工大学徐云庚教授是中国手榴弹研制专家。1939年，他曾在汉口兵工厂改制了攻防两用小型木柄手榴弹。他证明在此之前，中国军队使用的手榴弹均为老式木柄手榴弹，其引爆时间为5－7秒、杀伤半径为5 7米。

南京理工大学の徐雲庚教授は、中国における手榴弾の研究開発の専門家である。１９３９年，彼はかつて漢口兵器工場で攻防両用小型木柄手榴弾を改良した。彼はそれ以前に、中国の軍隊が使用していた手榴弾は、すべて古い木柄手榴弾で、その起爆時間は５～７秒で、殺傷範囲は５～７メートルであることを証明している。



1998年2月15日，在下关电厂工地（长江边）出土的当年中国守军使用的老式木柄手榴弹。

１９９８年２月１５日、下関の発電所建築現場（揚子江のそばにある）で掘り出された中国守備軍が使用していた古い木柄手榴弾。



1998年3月6日，东史郎先生来到南京市江宁县上峰地区手榴弹实爆试验现场。

１９９８年３月６日、東史郎さんは、南京市江寧県上峰地区で行われた手榴弾爆発実験現場に来た。







1998年3月6日，在南京市江宁县上峰地区进行的手榴弹爆炸试验现场。
——杨　磊　摄影

１９９８年３月６日、南京市江寧県上峰地区で行われた手榴弾爆発実験現場。
——楊　磊　撮影



主持这次手榴弹爆炸试验的中国爆破专家吴腾芳教授说："试验的结果，完全与《东史郎日记》中的有关记述相吻合，对加害者不会构成威胁。"

この手榴弾爆発実験を担当した中国の爆破専門家の呉騰芳教授は、「実験の結果、『東史郎日記』の中の関係する記述と完全に一致し、（爆発が）加害者を脅かすようなことはない」と述べた。



东史郎案手榴弹爆炸试验报告

一、东史郎案手榴弹爆炸试验报告
二、试验附录
1、手榴弹拉火及推、踢蹲式木制模拟人时间测量
2、操作人员撤离速度测量
3、制式手榴弹延期时间测量
4、邮包（真人）滚动试验
5、邮包（蹲式木制模拟人）滚动试验
6、单发制式手榴弹破片飞散试验
7、单发模仿手榴弹破片飞散试验
8、邮包（蹲式木制模拟人）带单发制式手榴弹滚落时破片飞散试验（35°坡）
9、单发制式手榴弹靶板试验
10、单发模仿手榴弹靶板试验
11、仿制炸药与TNT炸药猛度比较试验
12、仿制炸药威力（铅铸膨胀扩孔）试验
13、手榴弹砂箱破片试验
14、邮包加汽油燃烧试验
15、干坑（45°）定点三发制式手榴弹破片试验
16、干坑（45°）邮包（蹲式木制模拟人）捆三发制式手榴弹滚落实爆试验
17、水坑（45°）邮包（蹲式木心水泥人）捆三发制式手榴弹滚落实爆试验

1998年3月6日，南京工程爆破设计研究所出具《东史郎案手榴弹爆炸试验报告》（影印件）。

1998年3月6日、南京工程爆破設計研究所は『東史郎裁判手榴弾爆破実験報告』（写真複製資料）をとりまとめ提出した。





1998年3月6日，南京市公证处公证员刘庆宁、李巧宝对手榴弹爆炸试验作现场公证，并出具保全证据公证书。

１９９８年３月６日、南京市公証所公証員の劉慶寧、李巧宝二人は手榴弾爆発実験について現場公証をおこない、証拠を保全する公証書をとりまとめ提出した。



1998年7月20日，南京工程爆破设计研究所再次为《东史郎日记》案进行手榴弹水下定点爆炸试验。图为实爆试验现场。

１９９８年７月２０日、南京工程爆破設計研究所は再度『東史郎日記』裁判のために手榴弾水面下定点爆発実験をおこなった。写真は、爆発実験現場。

手榴弹水下定点爆破试验报告

1998年7月20日在南京江宁县上峰镇进行了手榴弹水下定点爆炸试验，试验结果如下：

1、使用手榴弹性能

据资料，当时中国军队使用的手榴弹装药成份为 KV：TNT 60.40，装药量为40g，与中国1967年式手榴弹（装药成份为TNT，装药量为38g，拉发火装置，延期时间2.8～4s）性能相近。本试验用手榴弹由1967年式手榴弹改制而成（把拉发火装置改为瞬发电发火装置）。

2、水坑结构尺寸

水坑半径为9m，深度为3.5m，底部坡度约45°，坑沿垂直高度约1.0m。

3、试验结果

三发手榴弹捆在一起，定点在距水坑边沿3m（水平距离）、距水面下1.5m（垂直距离，离地表面2.5m）处爆炸时，在岸上距水坑边沿（水平距离）2m、4m、6m处的1.8m高的三合板靶板上均未发现手榴弹破片击穿的弹孔（试验设置示意图见附图）。

见证人：室野佳弘　山内小夜子

公证员：刘庆宁　李巧宝

南京工程爆破设计研究所
教　授　吴腾芳　吴腾芳印
副教授　龙　源　龙源印

一九九八年七月二十日

保全证据公证书

（98）宁证外民字第7635号

申请人"东史郎南京大屠杀案律师团"因收集证据向我处申请，对手榴弹水下1.5米定点爆炸试验进行保全证据。

根据《中华人民共和国公证暂行条例》的规定，本公证员与公证员李巧宝于一九九八年七月二十日上午来到江苏省南京市江宁县上峰镇试验现场，参与了由南京工程爆破设计研究所教授吴腾芳（男，一九四二年八月出生）和该所副教授龙源（男，一九五八年三月出生）主持的手榴弹水下定点爆炸试验，对试验全过程、现场制作试验报告和现场摄像进行监督，并当场对所摄录像带作了签封。见证人室野佳弘（男，一九五一年六月二十三日出生，日本护照号码为 TE5984913）和山内小夜子（女，一九五九年八月三十日出生，日本护照号码为 TF0030803）在场见证。

兹证明，与本公证书相粘连的《试验报告》为试验主持人现场制作，公证员、试验主持人、见证人的签名均属实；经我处签封的录像带为现场实地所摄制，所摄内容与现场实际情况相符。

中华人民共和国江苏省南京市公证处

公证员　刘庆宁



一九九八年七月二十日

手榴弹水下定点爆炸试验结果验证了《东史郎日记》记载的真实性。这是《手榴弹水下定点爆炸试验报告》及南京市公证处出具保全证据的公证书。

手榴弾水面下定点爆発実験の結果は『東史郎日記』記載内容の真実性を検証した。これは『手榴弾水面下定点爆発実験報告』および南京市公証所提出の証拠保全公証書。







1998年11月4日，东史郎等在北京中国人民大学演讲，500余名师生参加了报告会。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年１１月４日、東史郎さんらは北京の中国人民大学で講演し、５００人以上の教師、学生がこれに参加した。

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1998年11月，《东史郎日记》案二审判决前夕，日本支援东史郎案审判实行委员会和东史郎律师团在大阪举行声援集会，会场上悬挂着中国学生声援东史郎的签名横幅“还历史真实，伸人间正义”。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年１１月、『東史郎日記』裁判二審判決の前日、東史郎さんの南京裁判を支える会と東史郎弁護団は声援をおくる前段集会を大阪で開催した。会場には中国の学生が東史郎さんを声援する寄せ書き　『歴史の真実にたち帰り、人間の正義を広げよう』と書かれた横物が掲げられた。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





东史郎在集会上发言："当初，判决日期预定为11月26日，突然变为12月22日。因为从11月25日开始，中国江泽民主席访问日本，他们故意避开那儿天。我对变更日期非常失望。我在法庭外奋斗了2000天，是正义获胜，还是邪恶的军国主义获胜，请你们关注12月22日的判决。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんの集会での発言

「当初判決日は１１月２６日の予定であった。突然１２月２２日に変更になった。１１月２５日から江沢民国家主席が来日されている。その日を避けたのか？私はこの判決日変更に深い失望を感じた。２０００日も我は法廷で戦ってきた。正義が勝つか、軍国主義者の不正が勝つか。１２月２２日の判決に注目していただきたい」

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

中北龙太郎在集会上发言："东京高等法院在审理中，我们律师团为《东史郎日记》的真实性提供了确凿证据。只要擦亮眼睛正视历史，法官也应承认《东史郎日记》的真实。我们坚信东史郎会胜利，并将直面判决。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

中北龍太郎氏の集会での発言

「東京高等裁判所の審理で、私たち弁護団は、東日記の真実性を立証し尽くした。歴史を曇り無き眼で見れば、裁判官も東日記を真実と認めざるを得ないはずだ。私たちは、東さんの勝利を信じ判決に臨む」

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



丹羽雅雄在集会上发言："原告称邮政袋事件发生时（12月21日）不在现场。在第一审时称'那天对下关进行扫荡。'可是，在第二审时他又极暧昧地称'记不清什么时间去下关。'与此相比，东史郎既有当时的日记、又有具体的证言，可见原告不可信。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

丹羽雅雄氏の集会での発言

「原告はこの事件当日12月21日のアリバイ証明として、第一審では「その日、下関方面に掃討に行った」と証言した。ところが第二審では「下関に何時行ったのか記憶にない」と極めて曖昧な供述をした。当時日記に記録し、具体的な証言をした東史郎と比べて、その信用性が著しく低いことは明白である。」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



空野佳弘在集会上发言："《东史郎日记》不仅记录了战斗情况，也记录了自己目睹的残酷现状和内心的矛盾。

东史郎在日记的第一卷开头就写道：'我要在这里记下战场上的真实。只有通过记述真实，才能真正明白战场上将士们的思想和行为。既然要记录真实，那么就记录战场上的美与丑。'

从日记记述特点和当时思想、心理状况、记录内容来判断，不存在虚伪创作的成分。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

空野佳弘氏の集会での発言

「東日記には、戦闘の記録と共に、残酷な現実を目の前にして心の葛藤も記録している。

東史郎さんの日記第一巻冒頭には、「ここには真実を記したい。真実なる事実を記すことによってのみ、戦争の兵士の思想も行動も明白になるであろう。真実を記すというからには、戦場に於ける美しい場面も、醜い場面も記すのである」と書かれている。日記記述の姿勢や当時の思想、心理状況、東日記の記録内容から判断して、虚偽や創作が入ることはあり得ない。」

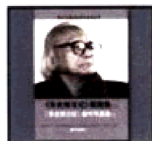
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



5 《东史郎日记》案二审判决后引起的反响

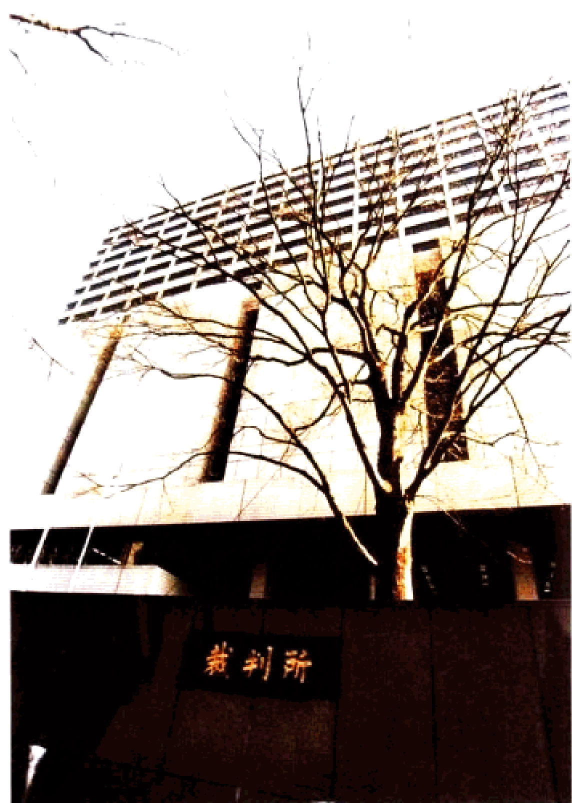
『東史郎日記』裁判第二審判決後に巻き起こった反響





1998年12月22日下午，日本东京高等法院对《东史郎日记》案二审作出判决，再次判处东史郎败诉。消息传出，全世界正义人士深表震惊。人们对东京高等法院不顾史实、颠倒黑白的不公正判决表示惊讶、遗憾和强烈的愤慨，中国外交部新闻发言人、新闻媒体及和平友好人士，纷纷谴责东京高等法院的无耻行径，以各种方式声援东史郎的正义行动。

１９９８年１２月２２日午後、日本東京高等裁判所は、『東史郎日記』裁判第二審の判決をおこない、再度東史郎さんに敗訴を言い渡した。その知らせが伝わるや、全世界の正義を求める人たちは驚きの念を示した。人びとは東京高等裁判所に対して、歴史を顧みず、白を黒と言いくるめる不当な判決にあきれ果て、残念に思い、非常に憤慨し、中国外交部のスポークスマン、マスコミ、平和友好を求める人たちはそれぞれ東京高等裁判所の恥知らずな行動を厳しく非難し、それぞれの方法で東史郎さんの正義の行動に声援をおくった。



东京高等法院外景

1998年12月22日14时14分至14时16分，东京高等法院无理判决东史郎等再次败诉。

東京高等裁判所のたたずまい

１９９８年１２月２２日１４時１４分から１４時１６分にかけて、東京高等裁判所は理不尽な判決をおこない、東史郎さんに再度敗訴を言い渡した。

平成一〇年一二月二二日判決言渡
同日判決原本領収
裁判所書記官　滝井憲治

平成八年(ネ)第二三七九号、第二四〇七号謝罪広告等請求控訴事件、平成九年(ネ)第四一七号、第二七八八号同附帯控訴事件(原審・東京地方裁判所平成五年(ワ)第八八四三号)

平成一〇年一一月一七日口頭弁論終結

判　決

京都府竹野郡丹後町字間人二七一〇
平成八年(ネ)第二三七九号事件控訴人
平成九年(ネ)第四一七号、第二七八八号事件附帯被控訴人
(以下「控訴人」という。)　東　史郎
右訴訟代理人弁護士　中北龍太郎
同　丹羽雅雄
同　空野佳弘
同　加島宏

埼玉県川越市吉田新町一丁目一番二号
平成八年(ネ)第二三七九号事件控訴人
平成九年(ネ)第四一七号事件附帯被控訴人
(以下「控訴人」という。)　下里正樹
右訴訟代理人弁護士　椎名麻紗枝
右訴訟復代理人弁護士　[illegible]

東京都千代田区神田神保町一丁目六〇番地
平成八年(ネ)第二四〇七号事件控訴人
平成九年(ネ)第四一七号、第二七八八号事件附帯被控訴人
(以下「控訴人」という。)　株式会社青木書店
右代表者代表取締役　青木理人
右訴訟代理人弁護士　[illegible]

東京都台東区浅草二丁目一三番六号

東京高等裁判所

平成八年(ネ)第二三七九号、第二四〇七号事件被控訴人
平成九年(ネ)第四一七号、第二七八八号事件附帯控訴人
(以下「被控訴人」という。)　橋本光治
右訴訟代理人弁護士　高池勝彦
同　三堀清

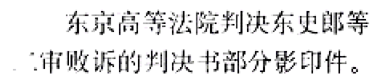
主　文

一　本件各控訴をいずれも棄却する。
二　本件各附帯控訴(当審における請求を含む。)をいずれも棄却する。
三　原判決主文第一項は、請求の減縮により次のとおり変更された。
控訴人らは、被控訴人に対し、各自金五〇万円及びこれに対する平成五年五月一日から各支払済みまで年五分の割合による金員を支払え。
四　平成八年(ネ)第二三七九号事件控訴費用は控訴人東史郎及び同下里正樹の、同第二四〇七号事件控訴費用は控訴人株式会社青木書店の、各附帯控訴費用はいずれも被控訴人の各負担とする。

事実及び理由

第一　申立て
一　平成八年(ネ)第二三七九号、第二四〇七号事件控訴の趣旨
1　原判決中、控訴人ら敗訴部分を取り消す。
2　被控訴人の請求をいずれも棄却する。
二　平成九年(ネ)第四一七号事件附帯控訴の趣旨
1　原判決中、被控訴人敗訴部分を取り消す。
2　控訴人らは、被控訴人に対し、別紙一記載1の謝罪広告を、同記載3の方法で、株式会社中日新聞社発行の中日新聞に一回掲載せよ。
3　控訴人らは、被控訴人に対し、各自金一五〇万円及びこれに対する平成五年五月一日から各支払済みまで年五分の割合による金員を支払え。
三　平成九年(ネ)第二七八八号事件附帯控訴(当審における訴えの追加的変更)の

東京高等裁判所



东京高等法院判决东史郎等二审败诉的判决书部分影印件。

東京高等裁判所が東史郎さんらに対しておこなった、第二審の敗訴判決の判決文の一部のコピー。



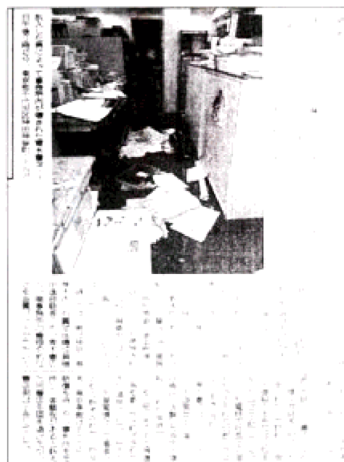
东京高等法院判决东史郎等败诉后，桥本光治的律师高池胜彦等人，立即在该法庭内举行记者招待会，并公然打出"南京大屠杀捏造裁判胜诉"的大字标语，通过东史郎案进而否定南京大屠杀历史的图谋昭然若揭，引起了正义人士的愤怒谴责。

東京高等裁判所は東史郎さん等の敗訴のあと，原告側の弁護士である高池勝彦らは，直ちにその法廷内で記者会見をおこない，公然と「南京大虐殺ねつ造裁判勝訴」と大書したスローガンを張り出した。東史郎裁判を通じて南京大虐殺の歴史を否定しようという策動が誰の目にも明らかになり，正義を求める人たちの憤りと非難を引き起こした。



1998年12月22日，东京高等法院作出不公正判决。图为桥本光治的支持者们。左三为策划诉讼的主要人物之一——原日军中队长森英生。

１２月２２日，東京高等裁判所が不当な判決をおこなった。これは原告の支持者たち。左から三人目が裁判の中心人物の元中隊長森英生氏。



1998年12月22日，《东史郎日记》案二审判决后，出版《我的南京步兵队》的青木书店遭到右翼青年的袭击。据《朝日新闻》（1999年1月8日晚刊）报道，一青年用金属棒将该书店内设施破坏，并质问"为什么出版南京大屠杀的书籍"？

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９８年１２月２２日の不当な判決の後，翌１９９９年１月８日，『わが南京プラトーン』の出版社である青木書店が右翼青年に襲撃された。『朝日新聞』（１９９９年１月８日夕刊）によると，青年は「どうして南京大虐殺の本を出版するのか」と語り，金属バットで事務所内を破壊した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



东史郎二审败诉后高举“不当(公正)判决。(我)仰不愧天，俯不愧地”的大字标语。

東史郎さんは第二審敗訴の後、「不当判決、俯仰天地に愧じず」と大書したスローガンを高く揭げた。



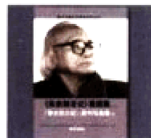


东史郎对日本东京高等法院的不公正判决表示强烈愤慨，他说：“东京高等法院的不公正判决，从根本上践踏了法律与正义。我将勇往直前，继续上诉，斗争到最后一刻。我要用道歉请求原谅，让人们知道侵略战争的真相。我已86岁，剩余的生命不知还有多少，万一离开这个世界进入到地狱，也要请求阎王作一个公正的判决。”

周措坤　摄影

東史郎さんは日本の東京高等裁判所の不当な判決に激しく憤り，次のように語った。「東京高等裁判所の不当な判決は根本的に法律と正義を踏みにじるものである。私は勇往邁進し、つづけて上告し、最後までたたかう。私は遺憾の意を表し、お許しを願い、人びとに侵略戦争の真相を知らせていきたい。私はすでに８６歳で、残りの生命はどれだけあるのかわからないが、万一この世界を離れて地獄にいったとしても、閻魔大王に公正な判決を求めていく」

——周措坤　撮影



抗议声明

东京高等法院今天（1998年12月22日）步三年前东京地方法院之后尘，又一次作出了缺乏国际性历史认识的不公正判决。

通过审理过程，谁都清楚地看到，东史郎的日记记载是事实，而这次判决从根本上践踏了历史事实。

这次审判的真正原告是企图通过审判恫吓历史见证人、妨碍他们讲述史实、并将"南京大屠杀"虚无化的一伙人。他们一直主张南京的屠杀、放火以及强奸均为中国军队所为。这种主张其实是篡改历史。法院站在"虚无派"的一边，作出了完全带政治色彩的判决，我们对此不能不感到强烈的愤慨。

我们在此声明，决不能接受这一判决，立即向日本最高法院提出上诉，同时，将《东史郎日记》及南京大屠杀的史实向全世界广泛宣传，并期待着历史的公正审判。

日本支援东史郎案审判实行委员会
《东史郎日记》上诉案律师团
1998年12月22日

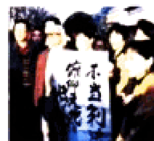
抗議声明

本日（１９９８年１２月２２日）、東京高等裁判所は、三年前の東京地方裁判所に続いて、またも国際的な歴史認識を欠如した不当判決を行った。

東史郎日記が真実であることは、審理を通じて誰の目にも明らかになっている。判決は歴史の事実を根本から踏みにじっている。

この裁判の本当の主体は、歴史の証言者を裁判で恫喝し、真実を語ることを妨害し、また、南京大虐殺を「まぼろし化」しようと暗躍する者たちである。彼らは、南京の虐殺も放火も強姦も中国軍の仕業だと主張してきた。こういう主張は歴史の改竄にほかならない。裁判所が「まぼろし派」に加担し、極めて政治的な判断をしたことに強い憤りを禁じられない。私たちは、この判決をとうてい受け入れることはできず、直ちに最高裁判所に上告するとともに、東史郎日記と南京大虐殺の真実を広く世の中に訴えて、歴史の審判を期すことをここに表明する。

東史郎さんの南京裁判を支える会
東史郎さんの南京裁判弁護団
1998年12月22日





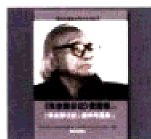
东京高等法院判决后，东史郎向支持他的人们鞠躬表示谢意。

東京高等裁判所の判決の後における東史郎さんとその支持者たち。写真は支持者に対してお辞儀をして感謝の意を表す東史郎さん。



支持东史郎的日本有识之士包括僧侣，表示决不接受这一判决。他们表示将一如既往地支持东史郎的正义之举，让日本国民更广泛地了解南京大屠杀这段历史。

東史郎さんを支持する僧侶を含む日本の有識者は、この判決を絶対に承認することはできないと表明した。日本国民にさらに広範に南京大虐殺のあの歴史を理解してもらうために、東史郎さんの正義の行動に対して、これまでと変わりなく支持すると語った。





各国新闻媒体非常关注《东史郎日记》案，纷纷派记者前往东京采访报道。南京电视台率先将东史郎败诉的消息传到中国国内，经中国中央电视台的迅速传播，引起了强烈的反响。

各国のマスコミも『東史郎日記』裁判に非常に関心をもち、それぞれ東京に記者を派遣して取材し報道した。南京テレビも率先して東史郎敗訴のニュースを中国国内に伝え、中国中央テレビの迅速な放映を経て、大きな反響を引き起こした。



1998年12月22日，东史郎先生在东京高等法院门前接受记者采访。

１９９８年１２月２２日、東史郎さんは東京高等裁判所でテレビの記者の取材を受けた。





东史郎先生强烈抗议法院这一不顾事实的判决。他对记者表示，将继续上诉，将这场官司进行到底。

图为白发苍苍的东史郎先生在二审判决后，在东京高等法院内与部分中国记者合影。

東史郎さんは裁判所のこの事実を顧みない判決に厳しくに抗議した。そして、上告を続け、この訴訟を最後までたたかうことを明らかにした。

すっかり白髪となつた東史郎さんは第二審判決の後中国人記者の一部と記念写真をとった。



东史郎先生在家中接受江苏电视台记者采访。

東史郎さんは自宅で江蘇テレビ記者の取材を受けた。

1998年12月22日下午6时，日本各界人士在东京举行集会声援东史郎。东史郎及其律师中北龙太郎、丹羽雅雄、空野佳弘、支援会秘书长山内小夜子等，在集会上一致谴责东京高等法院的无耻判决。

1998年12月22日午後6時、日本の各界の人たちは東京で集会を開催し、東史郎さんに声援をおくった。東史郎さん、弁護士の中北龍太郎さん、丹羽雅雄さん、空野佳弘さん、支える会事務局長の山内小夜子さんは一致して東京高等裁判所の恥知らずな判決を糾弾した。



东史郎发表演讲，强烈谴责东京高等法院的不公正判决："我今年86岁零8个月，已是年迈之人，却历时6年、2000个日日夜夜，艰难地往返于丹后半岛和东京法庭，听到今天的判决，我非常失望，我有什么必要在60年前写的日记中说谎话呢？我背着加害的罪名，却要为证明加害的事实作斗争。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎氏は演説して、東京高等裁判所の不当な判決を厳しく非難した。「私は今八十六歳と八ヶ月ですから、もう老人であります。その老人が六年間、２０００日間、がんばって丹後半島から東京の法廷まで通い続けて、今日の判決を聞いた。非常に腹の底から無念極まる思いである。６０年前の日記にどうして嘘をかく必要があるでしょう。私は加害の事実を背負い続けて、最後の最後まで徹底的に闘います」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

中北龙太郎律师发表演讲："竟有这样的判决，不调查南京大屠杀的历史事实，先作结论！在判断邮政袋事件时，明显偏向原告方面的主张，判定《东史郎日记》不可信。我们决不屈服，也不允许不公正的判决，要继续斗争下去。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

中北龍太郎弁護士が演説する。「はじめに結論ありき！この判決は、南京大虐殺の歴史の事実を見ずに、郵便袋事件を判断した。原告側の主張に引きずられ、東史郎日記を信用できないと決めつけた。引き続き反動判決に屈せず、許さず、闘っていきたい」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供







丹羽雅雄律师发表演讲:"法院认为,《东史郎日记》记述的是杀人游戏,游戏则应该没有危险。所以,这个(日记)记述是假的。

这是对亚洲正视历史的人们的一种有威吓和震慑作用的审判,法院实际上参与了原告方的阴谋活动。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

丹羽雅雄弁護士が演説する

「この判決は、戦闘行為と殺人遊びは違うという概念を持ちだし、東日記の記述は殺人遊びである、遊びで危険なことはしないはずだ、だからこの記述は嘘だという論理である。

アジアの人々と歴史認識を共有しようとする我々に対する威嚇効果、萎縮効果を狙った裁判であり、その策動に裁判所は加担した。」

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



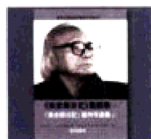
空野佳弘律师发表演讲:"今年5月,三名法官都作了更换。法官根本不理会在3月进行的法庭对东史郎的调查证言,就写下了判决书。法官不仅不了解南京大屠杀事件,也完全不了解生活在军国主义时期人们的心理,是无视历史的判决。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

空野佳弘弁護士が演説する

「今年5月に裁判官3人が全員一度に交代した。三月に行われた東史郎さんの法廷での本人尋問の証言を聞いていない裁判官によって判決文が書かれた。裁判官は、南京大虐殺事件はもちろん、軍国主義時代に生きた人間の心の葛藤というものをまったく理解していない。歴史への洞察力をまったく欠いた不当な判決である。」

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



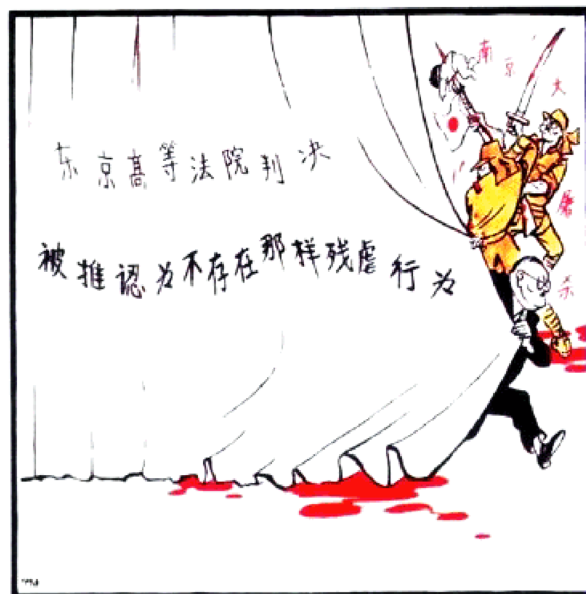


山内小夜子秘书长对《东史郎日记》案二审败诉发表演讲："为了迎接判决这一天，我们准备了'仰不愧天，俯不愧地"的大字标语，我们的所做所为是对得起良心的。不管胜败如何，今后我们仍需作不懈努力，决心创造一个像东史郎所做的那样尊重历史的日本社会，这是我们今后活动的中心任务。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

山内小夜子支える会事務局長が『東史郎日記』裁判第二審敗訴に対して演説する。「我々は、判決日を迎えるにあたって、勝利しても敗訴であっても「俯仰天地に愧じす」と大書したスローガンを用意した。人間として恥じない活動をしてきた。そしてこれからも続けるという決意を表したものである。私たちは、東史郎さんのような歴史を尊重する人を尊重する日本社会を創っていくことを今後の活動の中心とすることを、本日あらためて決意する。」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供



漫画：遮不住——　英韬　作

——原载《讽刺与幽默》1999年1月20日第2期

漫画：隠しきれない——英　韜作

——原載「諷刺とユーモア」1999年1月20日第2期



『東史郎日記』裁判第二審判決後に巻き起こった反響



中国外交部新闻发言人朱邦造，于1998年12月23日接受中国中央电视台记者采访，次日又在记者招待会上就《东史郎日记》案二审败诉发表评论：

“中方注意到日本法院对《东史郎日记》案作出的判决，对这一不顾历史事实的判决结果感到惊讶和遗憾！

日本军国主义过去发动那场侵华战争，给中国人民带来了深重灾难，惨绝人寰的‘南京大屠杀’是日军侵华战争期间犯下的滔天罪行之一。历史事实，铁证如山，任何企图否认这一史实的行径都是徒劳的，必将遭到包括日本人民在内的所有主持正义的人们的强烈谴责。我们要求日本方面以实际行动正视历史、尊重史实、以史为鉴，防止历史悲剧重演。”

1998年12月28日，中国外交部新闻发言人朱邦造再次接受记者采访时说：“我们注意到日本外务省发言人关于侵华日军在南京的暴行是不可否认的事实这一表态。但必须指出的是，东史郎诉讼案已不是普通的民事诉讼，其实质是极少数日本右翼势力企图借司法程序达到否认南京大屠杀的目的。日本东京高等法院无视历史事实作出错误判决，严重伤害了中国人民的感情，中方再次对此表示遗憾和义愤。历史事实是不容抹杀的，日本军国主义侵略中国犯下的罪行更是抹杀不掉的。我们要求日本方面以实际行动正视和反省历史，以史为鉴，坚持走和平道路。”

中国外交部（外務省）スポークスマンの朱邦造氏は１９９８年１２月２３日、東京高等裁判所の東史郎敗訴の判決の発表に対して、中国中央テレビ局が論評を求めたのに応えて、中国側は日本の裁判所が東史郎日記事件に対しておこなった第二審判決に留意し、この歴史の事実を顧みない判決結果に驚きあきれるとともに遺憾に思うと表明した。

朱邦造氏は「日本軍国主義が過去におこなったあの中国侵略戦争は中国人民に大きな災禍をもたらし、この世のものとは思われないほど悲惨な『南京大虐殺』こそ日本軍が中国侵略戦争期間に犯した極悪な犯罪行為の一つである。この歴史事実の証拠は確かで動かすことはできない。この史実を否認するどのような企ても全て徒労に終わり、日本人民の中の正義を主張する全ての人たちの強い非難にさらされるであろう。我々は日本側に対して、実際の行動をもって、歴史を直視し、史実を尊重し、歴史を鏡に戒めとし、歴史の悲劇を繰り返すのを防ぐことを求めるものである。」と述べた。

１９９８年１２月２８日、中国外交部（外務省）スポークスマンの朱邦造氏は、記者の質問に再度次のように答えた。「我々は、日本外務省のスポークスマンが中国侵略日本軍の南京での暴行に関して、否定することのできない事実であるとはっきりとした立場を明らかにしたことに留意するものである。しかし、指摘しなければならないのは、東史郎訴訟事件は決して普通の民事訴訟ではなく、その実質は極少数の日本の右翼勢力が司法手続きを借りて南京大虐殺を否認する目的を達成しようと企図したものである。日本東京高等裁判所が歴史の事実を無視して誤った判決をおこない、中国人民の感情を著しく傷つけたことに対して、中国側は再度このことに対して遺憾義憤の意を表明するものである。歴史の事実を抹殺することは許されず、日本軍国主義が中国を侵略し犯した罪行は更に消し去ることはできない。我々は、日本側が実際の行動をもって歴史を直視し反省をおこない、歴史を鏡として、平和発展の道を歩むことを堅持するよう要求するものである。」

日本外务省发言人谈『东史郎案』

日本外务省发言人12月25日在记者招待会上就东史郎诉讼案发表谈话称：本案不是关于所谓“南京事件”是否存在及事件全貌等问题的诉讼，而是就被告的“战时日记”的部分记述是否造成对原告的名誉损害以及原告是否进行过如记述那样残虐行为的事实认定。

该发言人表示，日本政府认为，围绕所谓“南京事件”有着种种争议，但旧日军在进入南京后杀害非战斗人员和进行掠夺行为是不可否认的事实。

这位发言人还说，日本政府对历史的认识系以1995年8月15日的内阁总理大臣谈话为基础，小渊首相曾在不久前与江泽民主席的会谈中表明，这一认识没有任何变化。

本月22日，东京高等法院以所谓“被推认为不存在日记中所描述的那样残虐行为”为由，宣判揭露当年日军制造南京大屠杀惨案罪行的原日本士兵、86岁的东史郎败诉。

日本外务省发言人对《东史郎日记》案二审判决作出辩解：

“本案不是关于所谓‘南京事件’是否存在及事件全貌等问题的诉讼，而是就被告的‘战时日记’的部分记述是否造成对原告的名誉损害以及原告是否进行过如记述那样残暴行为的事实认定。”

“日本政府认为，围绕所谓‘南京事件’有着种种争论，但旧日军在进入南京后杀害非战斗人员和进行掠夺行为是不可否认的事实。”

《服务导报》1998年12月29日

日本の外務省スポークスマンは『東史郎日記』裁判第二審判決に対して、それぞれ弁解した。

「本裁判は、いわゆる『南京事件』の存在および事件の全貌等の問題に関する訴訟ではなく、被告の『戦時日記』の記述の一部が原告の名誉毀損になるのかということと、原告が記述にあるような残虐な行為をおこなったかどうかという事実認定の問題である」

「日本政府は、いわゆる『南京事件』をめぐって様々な議論があるが、旧日本軍が南京に進入した後、非戦闘員を殺害し略奪行為をおこなったことは否定することのできない事実であると認識している」

——『服務導報』１９９８年12月２９日



声援信

东史郎先生及日本支援东史郎案审判实行委员会：

得知《东史郎日记》案在日本东京高等法院审判中败诉，对东史郎先生及日本支援东史郎案审判实行委员会、与日本否定历史的右翼势力作不屈不挠抗争的精神表示敬意。

为了维护历史的真相，多年来，东史郎先生不顾年迈体弱，曾4次来南京现场取证，会见幸存者，并多次忏悔60年前的历史过错，这种知错改错的精神，赢得了南京人民的敬重和谅解。日本支援东史郎案审判实行委员会和东史郎案律师团，也多次来南京实地调查水塘、邮政袋等相关的人证物证，还在南京进行了手榴弹的爆破试验，验证了《东史郎日记》的真实性，理应赢得东史郎案的胜利。《东史郎日记》案的败诉，说明了在当今日本社会，一小撮右翼势力肆意篡改历史、颠倒黑白的丑恶行径仍有一定的市场。今后，我们仍将一如既往地支援你们的正义行动，为捍卫历史的事实和人类的正义而共同奋斗！

祝东史郎先生健康长寿！

祝中日两国人民友好之树万古长青！

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆
南京侵华日军南京大屠杀史研究会
1998年12月22日

激励の手紙

東史郎さんおよび東史郎さんの南京裁判を支える会のみなさん

『東史郎日記』裁判が日本の東京高等裁判所の判決で敗訴したことを知り、東史郎さんおよび東史郎さんの南京裁判を支える会に対して、歴史を否定する日本の右翼勢力との不撓不屈のたたかいをおこなっておられる精神に敬意を表します。

歴史の真相を擁護するために、長年にわたって、東史郎さんは高齢で体が弱っておられるのを顧みず、かって四度にわたって南京の現場で証拠集めをされ、生存者と会い、また何度も６０年前の歴史の過ちを懺悔されました。こうした過ちを悟りこれを改める精神は、南京人民の尊敬と理解を勝ち得ました。日本の東史郎さんの南京裁判を支える会と東史郎弁護団も数回にわたって南京を訪問され池，郵便袋等関連ある証人、証拠を実地調査され、また南京で手榴弾爆発実験をおこない，『東史郎日記』の真実性を検証し、当然東史郎裁判の勝利を勝ち取るべきでした。『東史郎日記』裁判の敗訴は、現在の日本社会では、一握りの右翼勢力がほしいままに歴史を改竄し、黒を白といいくるめる醜悪なふるまいが依然として一定の支持者をもっていることをあらわしている。今後われわれはみなさんの正義の行動をこれまでと少しも変わることなく支援し、歴史の事実を守り人類の正義のためにともに奮闘するものである！

東史郎さんの健康と長寿を祈る！

中日両国人民の友好の樹がとこしえに青青と生い繁げるように！

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館
南京中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会
１９９８年１２月２２日



1998年12月23日下午，南京历史学界、法学界的专家学者、南京大屠杀幸存者和《东史郎日记》案举证人代表，举行“《东史郎日记》案败诉专家座谈会”，谴责日本东京高等法院不顾史实和有违法理的判决。

１９９８年１２月２３日午後、南京歴史学界、法曹界の専門家、学者、南京大虐殺の生存者と『東史郎日記』裁判立証人代表は、『東史郎日記』裁判敗訴についての専門家座談会を開き、日本の東京高等裁判所による事実を顧みない法理に反する判決を厳しく非難した。

1998年12月27日，原远东国际军事法庭助理检查官裘劭恒先生、日本“铭心会”访华团团长松冈环女士，在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆内愤怒谴责日本东京高等法院的无耻判决。

１９９８年１２月２７日、元極東国際軍事法廷検査官補佐の裘劭恒さんと、日本「銘心会」訪中団団長松岡環さんは、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館で、日本の東京高等裁判所の恥知らずな判決に憤り、厳しく非難した。





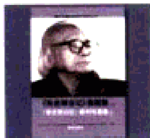






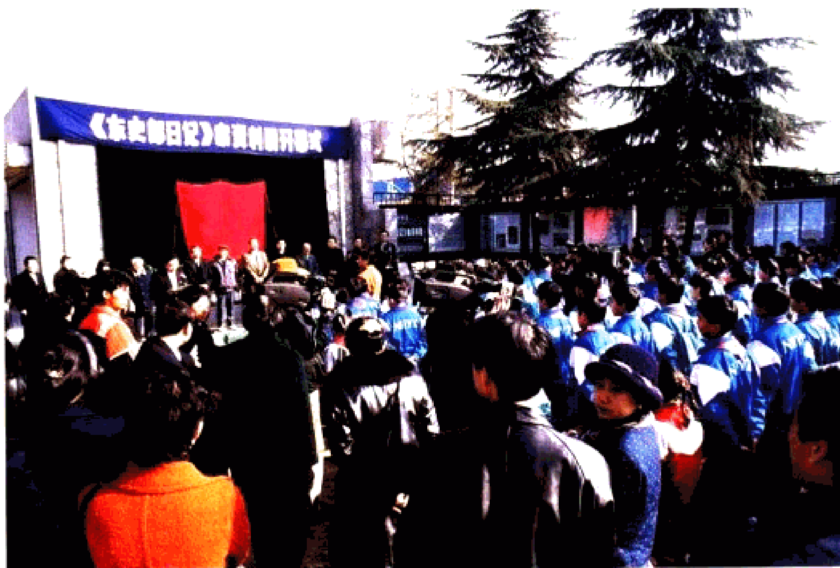
原远东国际军事法庭检察官顾问、国际大法官倪征燠先生(上)，原远东国际军事法庭助理检察官裘劭恒先生(中)，原远东国际军事法庭检察官翻译高文彬先生(下)。他们分别指出：东史郎作为侵华日军士兵，亲身经历了侵华战争和南京大屠杀。他在战时写成的日记客观真实。日本法院无视历史事实和铁的证据，违背了法理与正义。

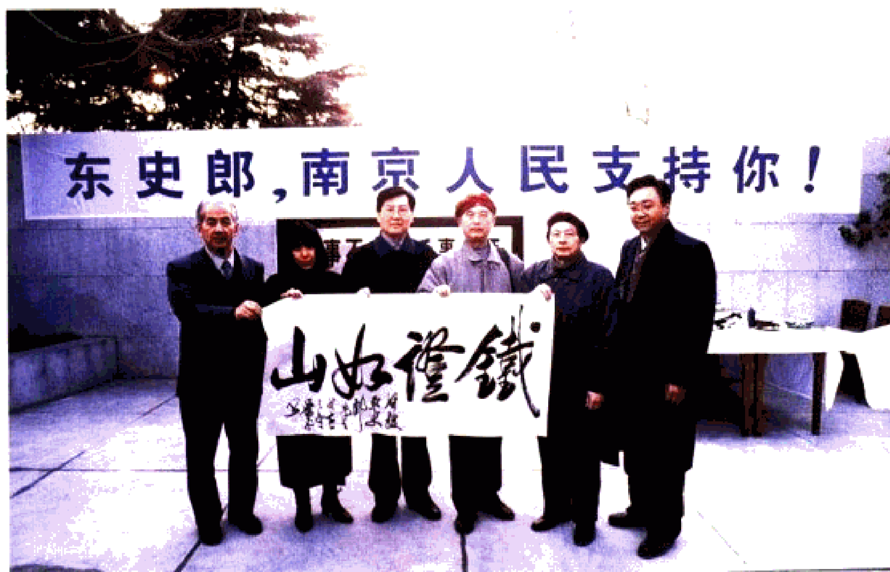
元極東国際軍事法庭検察官顧問、国際裁判官の倪征燠さん（上）、元極東国際軍事法庭検察補佐の官裘劭恒さん（中）、元極東国際軍事法庭検察官通訳の高文彬さん（下）。彼らはそれぞれ次のように指摘した。東史郎さんは中国侵略日本軍兵士として、自ら侵略戦争と南京大虐殺を体験した。彼は、戦時において、客観的な事実を書き残した。日本の裁判所は、歴史の事実と確固たる証拠を無視し、法理と正義に背いた。



1999年2月4日，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆举办了“《东史郎日记》案资料展”，坚决支持和声援东史郎先生为正义而斗争。

1999年2月4日、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館は『東史郎日記裁判資料展』を開催し、東史郎さんの正義のためのたたかいを断固として支持し声援をおくった。

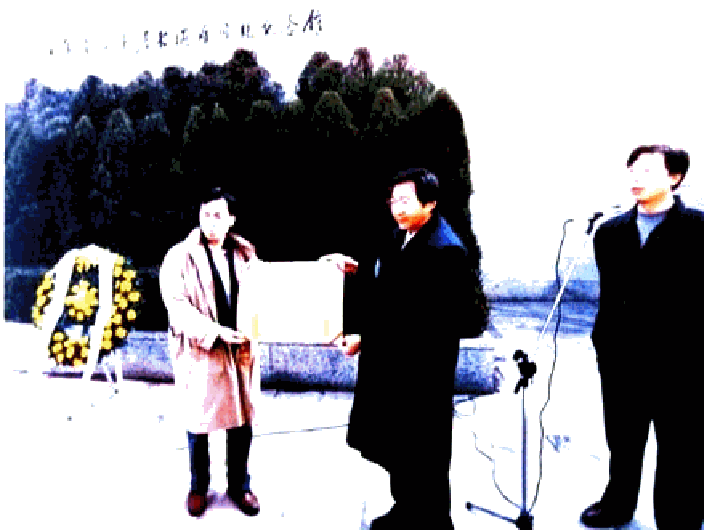




南京著名书画家萧平（左三）、吴国亭（右三）、陈培光（右二）为东史郎先生现场创作书画，图为书画家们与山内小夜子、林伯耀、朱成山先生合影。

南京の著名な書画家蕭平（左三人目）、呉国亭（右三人目）、陳培光（右二人目）さんらは東史郎さんのために、現場で書画を創作した。これは書画家たちと山内小夜子さん、林伯耀さん、朱成山さんの記念写真。





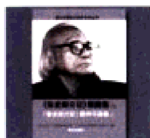
1999年1月15日，上海先灵葆雅（中国）有限公司为侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆举办的《东史郎日记》案资料展览捐款，声援东史郎的正义行动。

1999年1月15日、上海先霊葆雅(中国)有限会社は中国侵略日本軍南京大虐殺受難者同胞記念館が主催した『東史郎日記』裁判資料展覧会のために献金し、東史郎さんの正義の行動に声援をおくった。



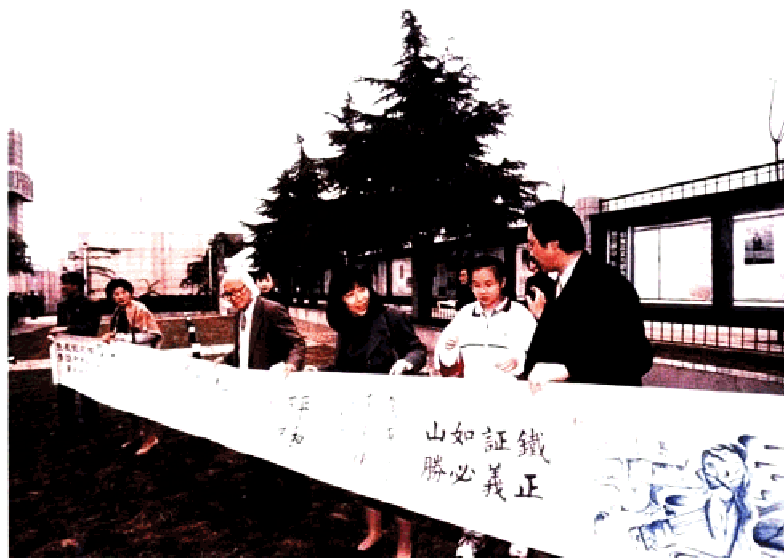
1999年1月20日，南京市多伦路小学师生为侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆举办的《东史郎日记》案资料展览捐款，以此支持东史郎的正义行动。

1999年1月20日、南京市多倫路小学校の教師と生徒は、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館が主催した『東史郎日記』裁判資料展覧会のために献金し、東史郎さんの正義の行動に支持の意を表した。



南京外国语学校学生们将集体绘制的书画长卷递交东史郎先生及其女儿长岛和子，表达他们对东史郎先生的支持。

南京外国語学校の学生たちが集団制作した長い書画の巻物を東史郎さんとその娘さんの長島和子さん等に手渡し、東史郎さんへの支持の気持ちを伝えた。





南京师范大学附属中学将"声援东史郎"条幅，送至侵华日军南京大屠杀遇同胞纪念馆。

南京師範大学附属中学は「東史郎さんを声援する」という横断幕を中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に送り届けた。



《东史郎日记》案败诉消息传出后，中国江苏、辽宁、北京、福建、安徽、湖南、黑龙江、香港等地各界人士纷纷致电、致函侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆，要求转达对东史郎先生的支持。

『東史郎日記』裁判敗訴のニュースが伝えられたあと、中国江蘇、遼寧、北京、福建、安徽、湖南、黒龍江、香港など各地の各界の知名人は、東史郎さんへの支援を伝えるよう、それぞれ中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館に電報や手紙を寄せた。



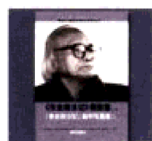


侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆将中国人民6万多人签名的横幅和声援信空运至日本，提交日本东京最高法院。图为朱成山馆长与日本支援东史郎案审判实行委员会秘书长山内小夜子和旅日华侨、中日友好促进会秘书长林伯耀在上海虹桥机场合影。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館は中国人民から寄せられた6万人の署名した横断幕や激励の手紙と「南京大虐殺の歴史の真実に基づいた厳粛な司法判断を求める署名」を空路日本に運び、日本の最高裁判所に渡した。この写真は朱成山館長と日本の東史郎さんの南京裁判を支援する会事務局長山内小夜子さん、在日華僑、中日友好促進会秘書長の林伯耀さんが上海虹橋飛行場で一緒に記念撮影したときのもの。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



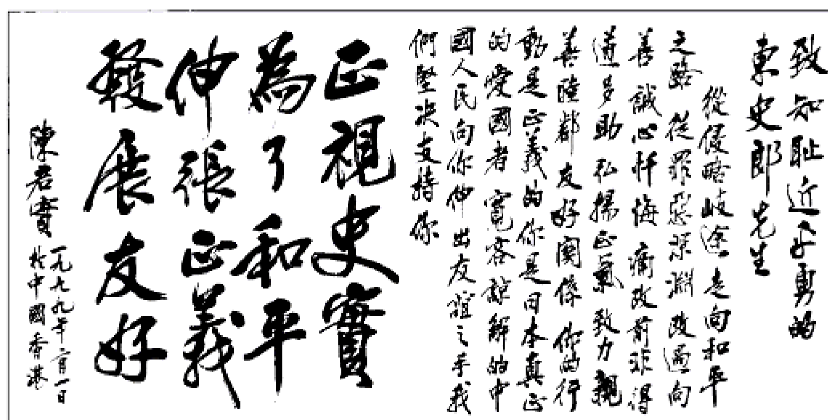


香港爱国实业家陈君实先生（左）与东史郎先生（右）亲切交谈，中间为香港世界抗日战争史实维护会会长杜学魁先生。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

香港愛国実業界の陳君実さん（左）と東史郎さんが親しく話しをしているところ、間にいるのは、香港世界抗日戦争史実擁護会会長杜学魁さん。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



香港爱国实业家陈君实夫妇对东史郎正义行动的评价：

“从日本人的角度来看，东史郎是真正的爱国者，因为他大声呼吁日本应认识过去的侵略与加害的历史，竭力改善日本人的国际形象；从中国人的角度来说，东史郎是真正的朋友，因为他反省了过去的罪行，用真诚赢得了中国人民的谅解，用实际行动来构筑中日两国真正友好的桥梁。”

香港愛国実業家の陳君実さん夫妻は東史郎さんの正義の行動を高く評価した。

「日本人の観点から見ると、東史郎さんは本当の愛国者である。なぜなら彼は日本は過去の侵略と加害の歴史を認識すべきであると大きな声で呼びかけ、力を尽くして日本人の国際的なイメージを改善してきた。中国人の観点からいえば、東史郎さんは真の友人である。なぜなら彼は過去の犯罪行為を反省し、誠実をもって中国人の理解を勝ち取り、実際の行動で中日両国の真の友好の架け橋をつくったのである。」





东史郎、东久江夫妇收到香港陈君实夫妇寄来的声援信。陈君实夫妇还给常年支援东史郎的久江女士赠送绣有和平鸽和中国牡丹花、日本樱花的双面刺绣，以示慰问。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

陳君実夫妻から贈られた声援の書を受け取った東史郎、東久江夫妻。

東史郎さんを長年に渡って支えてこられた久江さんに対し、慰労の意味を込めて平和の象徴のハトと、中国の国の花・ぼたん、日本の花・桜を刺繍した両面刺繍が贈られた。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1999年2月11日，东史郎先生、丹羽雅雄、山内小夜子、中国留学生刘燕参加了香港集会和演讲会，引起香港市民的极大反响。图为东史郎在香港"南京大屠杀证言集会"上会见记者。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年２月１１日、東史郎さんと、丹羽雅雄弁護士、山内小夜子さん、中国留学生の劉燕さんは，香港の集会と講演会に参加し、市民の間でに大きな反響を巻き起こした。これは香港で開催された『南京大虐殺証言集会』の記者会見の席での東史郎さん。

――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

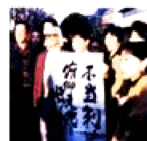


1999年2月，香港世界抗日战争史实维护会会长杜学魁先生（左二）与东史郎先生（左一）会谈。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年２月、香港世界抗日戦争史実擁護会会長杜学魁（左から二番目）さんが東史郎さん（左から一番目）と語り合った。

――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1999年4月11日，东史郎和女儿和子（右二）及支援会秘书长山内小夜子（右前），参加中国中央电视台《实话实说》栏目，制作了“战争的回忆”录像片。图为东史郎一行在中国中央电视台大楼前纪念留影。

东史郎为战后出生的女儿取“和平”的“和”字为名，其用意是期望“世界和平”。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年４月１１日、東史郎さんと彼の娘・和子さん（右から二人目）と支える会事務局長の山内小夜子さん（右前）は、中国の中央テレビの『事実を率直に話す』に出席した。番組「戦争の思い出」の録画どりをおこなった。写真は東史郎さん一行が中国中央テレビビル前で記念撮影。

戦後生まれの和子さんは、「平和な世界を」いう東史郎さんの願いから、「平和」の一字をとって「和子」と名付けられたと語った。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



图为参加《实话实说》栏目的山内小夜子女士（右二）、竹内迅（右一）、中国人民对外友好协会黄岚庭先生（左一）、中国留学生刘燕小姐(左二)与《实话实说》节目主持人崔永元(中)合影。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

写真は『事実を率直に話す』番組に参加した山内小夜子さん（右から二番目）、竹内迅さん（右端）、中国人民対外友好協会対外文化事務理事処長の黄嵐庭さん（左端）、中国留学生劉燕さん（左から二番目）、と『事実を率直に話す』司会者の崔永元さん（真ん中）。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



1999年4月9日，东史郎先生在北京观看《我认识的鬼子兵》。图为观看演出后，东史郎先生一行与演员合影留念。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

1999年4月9日、東史郎さんは北京で『私の知っている鬼の兵隊』を観劇した。写真は公演を観賞した後、東史郎さん一行と俳優たちが一緒に記念撮影した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



《东史郎日记》中文版封面照

『東史郎日記』中国語版表紙写真



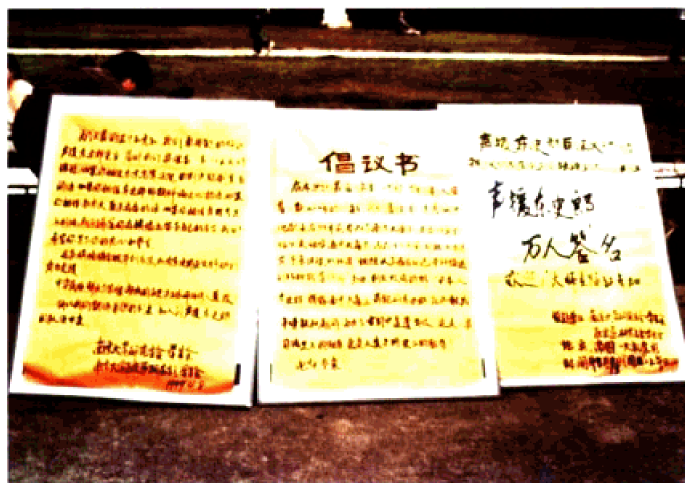
1999年4月12日，东史郎先生在南京金陵饭店参加《东史郎日记》（中文版）首发式。图为东史郎先生为读者签名。

东史郎先生在新闻发布会上说："德国人拉贝的日记是救助难民的爱的日记，我东史郎的日记是制造难民的加害的日记。加害的历史将永远抹不掉。我想通过在中国发行这本书，还历史的真相。"

1999年4月12日、東史郎さんは南京金陵ホテルでの『東史郎日記』（中国語版）出版記念会に参加した。写真は東史郎さんが読者のためにサインをしているところ。

東史郎さんは席上、「ドイツ人ラーベの日記は難民を救った愛の日記。私東史郎の日記は難民を作った加害の日記であります。この加害の歴史が永遠に残り、加害者東史郎の名も永遠に残るでしょう。しかし、歴史の真実は明らかにしなければと思い中国での発行に同意いたしました」と語った。





南京大学学生会在校园内发起“声援东史郎万人签名活动”倡议书。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

南京大学の学生会はキャンパスで「東史郎さんを声援する一万人署名活動」を始めた。写真はその趣意書。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

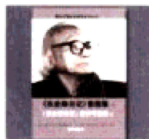


南京大学学生手持标语，欢迎东史郎先生到南京大学演讲。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

南京大学の学生は手にスローガンを持ち、南京大学に講演に訪れた東史郎さんを歓迎した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1999年4月13日，东史郎先生在南京大学演讲，受到该校数千名师生的欢迎。

１９９９年４月１３日、東史郎さんは南京大学で講演し、数千名の教師、学生の歓迎を受けた。





南京大学的学生们将一条“声援东史郎正义行动”的百米横幅赠送东史郎。

南京大学の学生たちは百メートルもある『東史郎の正義の行動に声援を送る』横幕を東史郎さんに贈った。







南京市青年联合会组织报告会，数千名南京青年加入声援东史郎行列。

南京市青年連合会は報告会をおこない、数千名の南京の青年が東史郎さんに声援をおくる行列をつくった。





1999年4月15日上午，东史郎在南京市社会科学界举行的报告会上演讲。

1999年4月15日午前、東史郎さんは南京市社会科学界が主催した報告会で講演した。





1999年4月，东史郎先生应邀走进江苏有线电视台演播室，为大型时事谈话节目《地球村》作首档节目　　东史郎谈《东史郎日记》。

1999年4月、東史郎さんは、江蘇有線テレビ局の招請に応じて、大型の時事談話番組『地球村』の最初の番組に出場するためスタジオに入った。東史郎さんは『東史郎日記』について語った。



在南京至杭州的Ｋ６次列车上，1200多名旅客自发签名声援东史郎。图为列车乘务员们向东史郎先生赠送签满旅客姓名的绶带。

周描坤　摄影

南京から杭州に向かうK6次列車で1200名を越える乗客は自発的に東史郎さんを支援する署名を行った。写真は、列車の乗務員たちが乗客名前を書い、タスキを東史郎さんに贈ったところ。

——周描坤　撮影



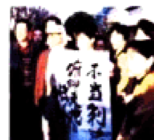


1999年4月，东史郎先生参观"侵华日军浙江富阳日军投降纪念地"，追忆当年日军在浙江向中国投降时的历史情景。

周描坤　摄影

１９９９年４月、東史郎さんは 中国侵略日本軍浙江降伏受け入れ村 を参観し、日本軍が浙江省で降伏を受け入れたときの模様をふりかえった。

— 周描坤　撮影





1999年5月，年迈的东史郎因过度劳累患病住院，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆委托日本友人送去鲜花表示慰问。图为到医院看望东史郎的山内小夜子、刘燕与东史郎先生的合影。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年５月ご、高齢の東史郎さんは，過度の疲れのために病を患い入院した。中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館は日本の友人に委託して生花を贈って東史郎さんを見舞った。これは病院で東史郎さんを見舞った山内小夜子さん、劉燕さんとの記念写真。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

1999年12月11日，在大阪国际和平中心举行国际市民和平集会。会后，国际市民代表的游行队伍行进在大阪的街道上。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年１２月１１日、ピースおおさかで国際市民平和集会が開催された。集会の後、集会参加者は大通りをデモ行進した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



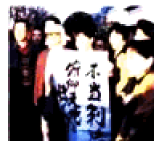


1999年12月11日，中日两国的《东史郎日记》案的支持者们，手持“铁证如山，东史郎必胜”横幅在大阪街道上游行。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年１２月１１日、中日両国の『東史郎日記』裁判を支持する人たちは、「動かぬ証拠が山のようにある。東史郎必勝」の横断幕を手に持ち、大阪の大通りをデモ行進した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1999年12月13日，东史郎先生及其支持者们走向日本最高法院，准备递交签名横幅及信函。
—日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年１２月１３日、署名と横断幕、手紙を手渡すため東史郎さんとその支持者たちは日本の最高裁判所に向かった。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



东史郎先生的支持者向日本最高法院递交来自南京、北京、香港等中国各地，以及美国、日本、加拿大等国的七万多人签名横幅及信函，要求日本最高法院尊重南京大屠杀历史事实，对《东史郎日记》案作出公正的判决。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

南京、北京、香港など中国各地およびアメリカ、日本、カナダなどの国々から寄せられた７万人以上の署名と横断幕および手紙を日本の最高裁判所に手渡し、最高裁判所が南京大虐殺の歴史的事実を尊重し、『東史郎日記』裁判に対して公正な判決をおこなうよう要求した。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

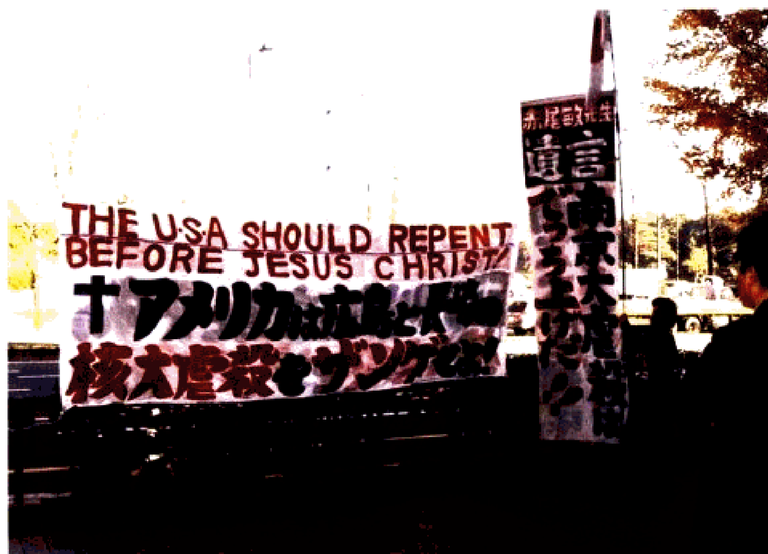


1999年12月12日，在东京举行了南京大屠杀受害者证言集会。会后，参加集会的人们游行到了东京银座，用汉语、日语、英语演讲“不再重演南京事件”。

——（日）东京“不再重演南京事件之会” 提供

１９９９年１２月１２日、東京においても南京大虐殺の被害者の証言集会が開催された。その集会の後、集会に参加した人たちは東京の銀座をデモ行進し「ノーモア南京」を中国語、日本語、英語で訴えた。

——（日）「ノーモア南京の会」 提供



1999年12月12日，在东京举行的南京大屠杀受害者证言集会遭到右翼团体的骚扰，他们挂起了“南京大屠杀是捏造的”大幅标语。

（日）东京“不再重演南京事件之会” 提供

1999年12月12日、東京での南京大虐殺被害者証言集会を妨害しに来た右翼団体。『南京大虐殺はでっち上げ』という幕を掲げている。

——（日）「ノーモア南京の会」 提供



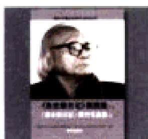


1999年12月11日、手持“追悼南京大屠杀受难者”横幅的国际市民在大阪的街道上游行。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

１９９９年１２月１１日、「南京大虐殺の受難者を追悼する」という横断幕を手に持った市民が大阪の大通りでデモ進行した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





1999年12月16日，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆馆长朱成山，在参加大阪国际市民和平集会以后，与山内小夜子一起，来到京都府丹后町东史郎家中慰问。（右一：东史郎，右二：朱成山，右三：东久江，右四：山内小夜子）

１９９９年１２月１６日、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館館長朱成山は大阪での国際市民平和集会に参加した後、山内子夜子さんと一緒に京都府丹後町の東史郎さん宅を訪れ、お見舞いした。

（右から一番目：東史郎、右から二番目：朱成山、右から三番目：東久江、右から四番目：山内小夜子）

东史郎先生在自己家中，向侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆馆长朱成山赠送亲笔题写的匾牌，上书“(中国人)以德报怨对待日军俘虏,(我)顿首再拜；为将日军侵害的真相澄清于世人，我不惜粉身碎骨。88岁东史郎致朱成山先生。”

東史郎さんは自宅で、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館館長の朱成山さんに自らしたためた扁額を贈呈した。そこには「(中国人は）日本軍の捕虜を怨みに報いるに徳をもって扱った。頓首拝礼。我々日本軍の侵害の真相を、粉骨清白。８８歳の東史郎から朱成山さんへ」と書いてある。



6 正义人士强烈谴责日本最高法院的不公正判决

正義を求める人たちは日本の最高裁判所の不公正な判決を厳しく非難する





2000年1月21日，日本最高法院再次无理判决东史郎败诉，激起了中日两国和世界各国正义人士的无比愤慨。人们纷纷举行集会，强烈抗议日本最高法院对《东史郎日记》案的不公正判决。东史郎对日本最高法院的无理判决，没有屈服，他不仅在日本的熊本、冈山、大阪、山口等地，而且去菲律宾和中国的南京、北京、沈阳、上海、石家庄等地举行报告会，感谢对他的支持，并表示坚决与右翼势力斗争到底。

２０００年１月２１日、日本の最高裁判所は再度理不尽にも東史郎氏に敗訴の判決を言い渡し、中日両国と世界各国の正義を求める人たちのこの上ない憤慨を引き起こした。人々は次から次へと集会を開き、日本最高裁判所の『東史郎日記』裁判の不公正な判決に激しく抗議した。東史郎氏は東京最高裁判所の理不尽な判決に屈服することなく、日本の熊本、岡山、大阪、山口などばかりでなく、フィリピン、中国の南京、北京、瀋陽、上海、石家荘などで、報告集会を開催し、彼への支持に感謝し、右翼勢力とのたたかいを最後まで断固としてたたかいぬくことを表明した。

日本最高法院

再次驳回东史郎上诉

新华社东京1月21日电　日本最高法院21日再次无理驳回因揭露南京大屠杀事件而被反诬损害他人名誉罪的东史郎等人的上诉，并对他判处50万日元的罚款。

东史郎在其著作《一名士兵在南京大屠杀中的体验》一书中，揭露了当年侵华日军所犯下的令人发指的罪行，他在其著作中写道：一名侵华日军头目在南京大屠杀中，将一名中国人装在绑有手榴弹的邮袋中，浇上汽油点燃后扔到水中，在水中爆炸身亡。如今还活着的这名日军头目称没有此事，反将书的执笔者和出版社负责人等送上法庭。东京地方法院于1996年4月判处东史郎等人犯有损害他人名誉罪。东史郎等人不服，上诉东京高等法院，但于1998年12月被以"书中描述的残酷行为没有客观证据"为由驳回。东史郎等继续上诉日本最高法院，又遭终审驳回。

21日晚，本社记者电话采访了住在京都的东史郎。这位88岁的日本老兵说，日本侵略中国的铁证如山，是任何人抵赖不掉的。他表示要为日本的这段罪恶历史作证到底。

1月23日，日本右翼团体叫嚷将在大阪国际和平中心举行所谓"彻底验证20世纪最大谎言南京大屠杀集会"。此间观察家认为，第一次东京高等法院宣布东史郎上诉无效是1998年12月22日，这一天正是东条英机等7名日本甲级战犯被判处绞刑的日子。这次日本最高法院又选择右翼团体将在大阪举行翻案集会前夕宣布东史郎败诉，这是耐人寻味的。

2000年1月21日，中国新华社对日本最高法院驳回东史郎案的有关报道。

２０００年１月２１日、中国の新華通信社は日本の最高裁判所が下した上告棄却決定について報道した。





中国外交部部长　唐家璇
中国外交部部長　唐家璇

2000年1月26日，中国外交部部长唐家璇发表谈话时指出："在右翼势力反华集会前夕，日本最高法院又竟然无理判决揭露南京大屠杀事实真相的东史郎等人败诉。中国政府和全体中国人民对日本右翼势力的倒行逆施和日本最高法院以司法形式压制正义、公然为右翼分子张目表示强烈的愤慨。"

２０００年１月２６日、唐家璇中国外交部部長は日本の右翼勢力の反中国集会について談話を発表した。

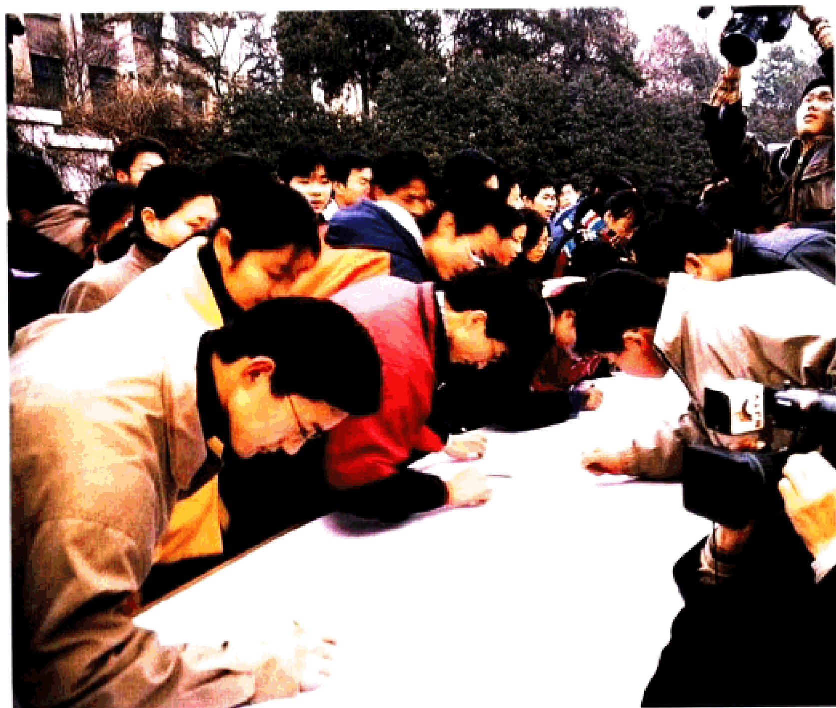
「右翼勢力の反中国集会の前夜、日本の最高裁判所はまたもやあろうことにも、南京大虐殺の事実真相を明らかにした東史郎氏等に対して理不尽な敗訴の判決を下した。中国政府と全ての中国人民は、日本の右翼勢力の正義にもとる行動と、日本の最高裁判所が司法の形式で正義を抑圧し公然と右翼分子のお先棒をかついだことに対して、激しい憤りを表明するものである」。

2000年1月23日，中国外交部发言人朱邦造发表谈话："日本极少数右翼势力1月23日在大阪市举行旨在否定南京大屠杀的反华集会。此前，日本最高法院竟然无理判决揭露南京大屠杀事实真相的东史郎等人败诉，公然为右翼势力否定南京大屠杀的丑恶表演张目。"

２０００年１月２３日、中国外交部朱邦造スポークスマンは、「日本のごく少数の右翼勢力は１月２３日大阪市で南京大虐殺を否定する反中国集会をおこなった。これ以前に日本の最高裁判所は、あろうことにも南京大虐殺の事実真相を明らかにした東史郎氏等の敗訴という理不尽な判決を行い、右翼勢力のために公然と南京大虐殺を否定する醜悪な提灯もちの役を演じた。」と談話を発表した。

2000年1月23日，日本外相河野洋平就日本右翼团体在大阪国际和平中心举行否定南京大屠杀集会一事时说："日军进入南京后，杀害非战斗人员和掠夺等行为是不可否认的事实。"

２０００年１月２３日、日本の河野洋平外務大臣は日本の右翼団体が大阪国際平和センターでおこなった南京大虐殺否定集会の件について「日本軍が南京に進入した後、非戦闘員を殺害し略奪などをおこなったことは否定することのできない事実だ」と述べた。





2000年1月17日，河海大学部分学生举行集会，强烈谴责日本右翼势力否定南京大屠杀史实的卑劣行径。

２０００年１月１７日、河海大学の一部学生が集会をおこない、日本の右翼勢力が南京大虐殺の史実を否定する卑劣な行為を激しく非難した。



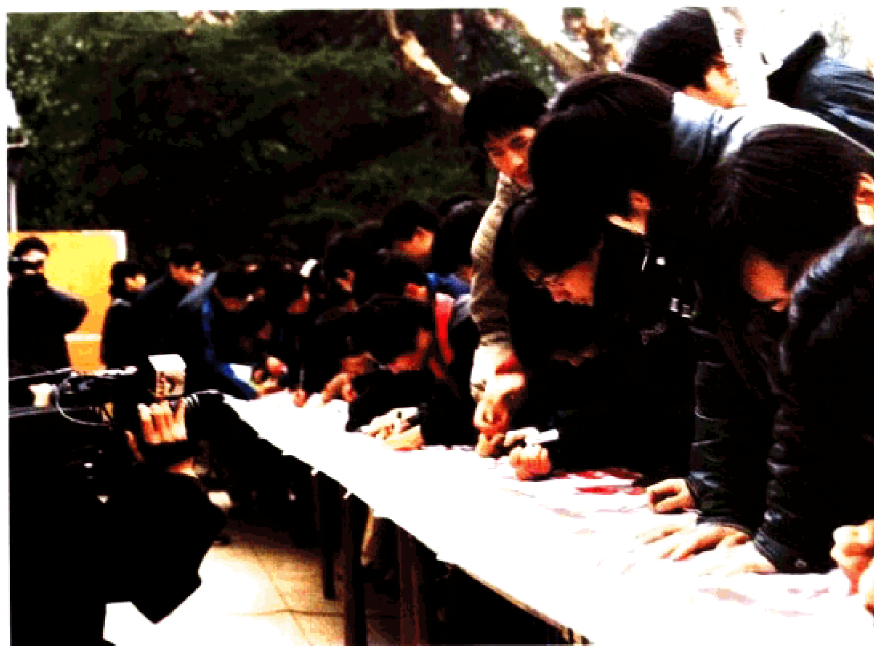
2000年1月17日，南京市金陵中学全校师生集会，强烈谴责日本右翼势力的倒行逆施。

２０００年１月１７日、南京市金陵中学の全校の教師、生徒は集会を開き、日本の右翼勢力の正義にもとる行為を厳しく非難した。









2000年1月18日，东南大学部分学生举行集会，强烈抗议日本右翼势力召开否定南京大屠杀的大阪"1·23"反华集会。

２０００年１月１８日、東南大学の一部学生は集会をおこない、日本の右翼勢力が、南京大虐殺を否定する大阪「１・２３」反中国集会を開くことに対して強烈に抗議した。







2000年1月18日，南京市外国语学校师生集会，强烈抗议日本右翼势力否定南京大屠杀史实。

２０００年１月１８日、南京市外国語学校の教師と生徒は集会を開き、日本の右翼勢力が南京大虐殺の史実を否定したことを激しく抗議した。



2000年1月19日，南京大屠杀幸存者和受害者遗属，强烈抗议日本右翼势力否定南京大屠杀的大阪集会，愤怒控诉当年日军暴行。

２０００年１月１９日、南京大虐殺の生存者と被害者遺族は、日本の右翼勢力による南京大虐殺を否定する大阪集会を開催することに激しく抗議し、当時の日本軍の残虐行為を怒りをもって告発した。



对日本最高法院“驳回上诉，以及不受理上诉”的抗议

2000年1月21日，日本最高法院（第二小法庭，河合伸一审判长）所做的维持东京高等法院判决的决定，完全无视国际影响和历史认识，无视东史郎律师团的多次申请，法官一次也不见面，不去调查研究原告的“承认犯罪录像”和在中国进行的手榴弹爆炸试验的新证据。简直就是玩忽职守。此决定让我们认为最高法院只是走了一下形式，而放弃了司法的最高责任。

此判决的主要目的是用司法来恫吓历史证人，欲堵住证人之口。他们是主张南京大屠杀“虚构”的幕后人。他们还认为南京的烧、杀、奸淫是中国军所为。这些主张是为了篡改历史。

我们对最高法院不看实质，袒护“虚构派”的做法表示强烈的愤慨。

此外，法院还无视来自中国等地提交的七万多人的“要求维护南京大屠杀事件的事实，作出严肃的司法判决”的抗议签名信。

我们决不容忍这样的判决。今后，将广泛地向世界讲述《东史郎日记》和南京大屠杀的事实，寻求公正的审判，决心和东史郎先生共同战斗下去。

日本支援东史郎案审判实行委员会
《东史郎日记》上诉案律师团
2000年1月23日

最高裁判所による「上告棄却および上告不受理」に抗議する

1月21日、最高裁判所（第二小法廷、河合伸一裁判長）が行ったこの決定は、著しく国際感覚と歴史認識を無視したものである。これは東史郎弁護団からのたび重なる要請を無視し、調査官面接を一度も行わず、また原告・橋本光次氏の「犯行自認ビデオ」や中国で行った手榴弾再現実験などの新証拠を吟味しないなど、まともな審理を怠っているものである。この決定は、東京高等裁判所判決をただ形式的に追認するという、司法の最高責任を放棄したものであると言わざるを得ない。

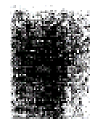
この裁判の主体は、歴史の証言者を裁判で恫喝し、真実を語ることを妨害し、また、南京大虐殺を「まぼろし化」しようと暗躍する者たちである。彼らは、南京の虐殺も放火も強姦も中国軍の仕業だと主張してきた。こういう主張は、歴史の改竄にほかならない

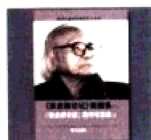
この裁判の背景を見ようともせず、最高裁判所が同様に「まぼろし派」に加担したことに強い憤りを禁じ得ない。

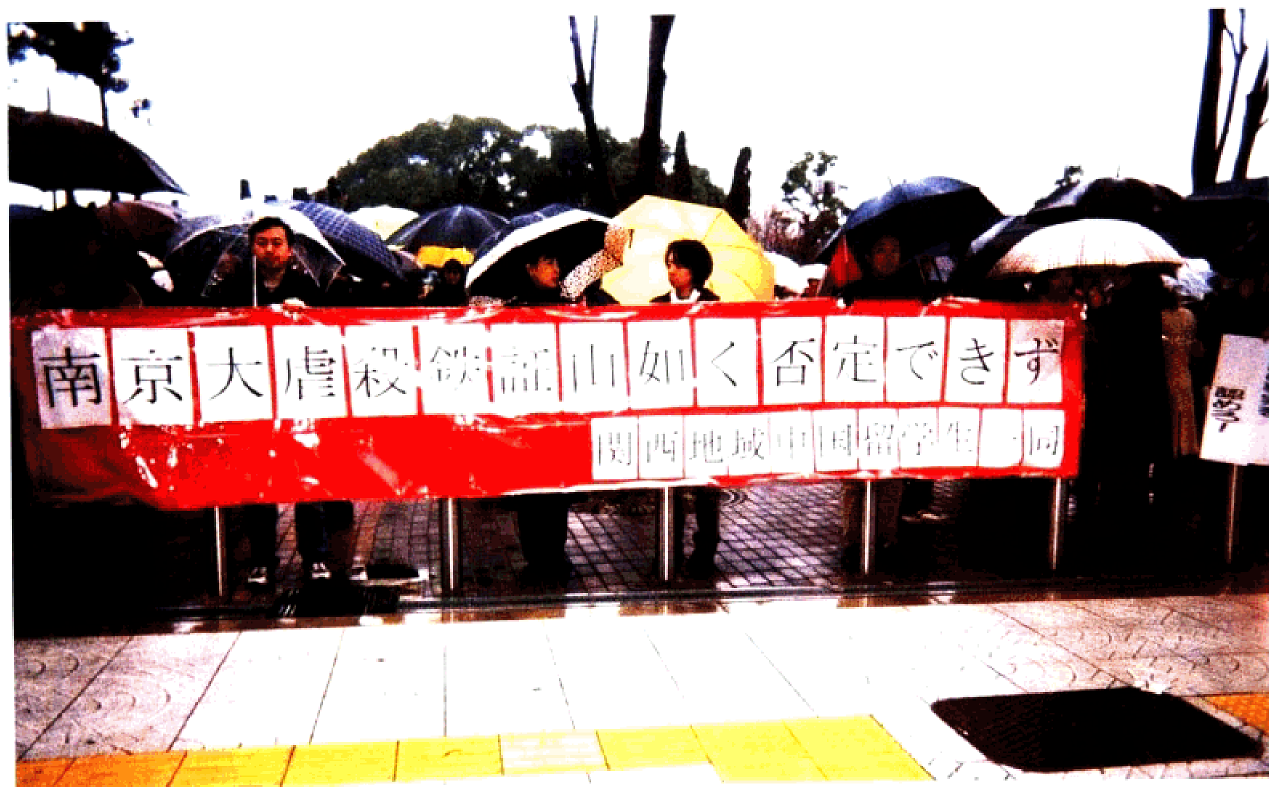
また昨年12月13日に、中国をはじめとする海外七万人におよぶ「南京大虐殺事件の事実に基づいた厳粛な司法判断を求める」抗議署名の提出も、まったく無視している。

私たちは、決してこのような「決定」を容認しない。今後とも、東史郎日記と南京大虐殺の事実を広く世界に訴えて、歴史の審判を求めて、東史郎さんと共に闘い続ける決意である。

東史郎さんの南京裁判を支える会
東史郎さんの南京裁判弁護団
２０００年1月２３日







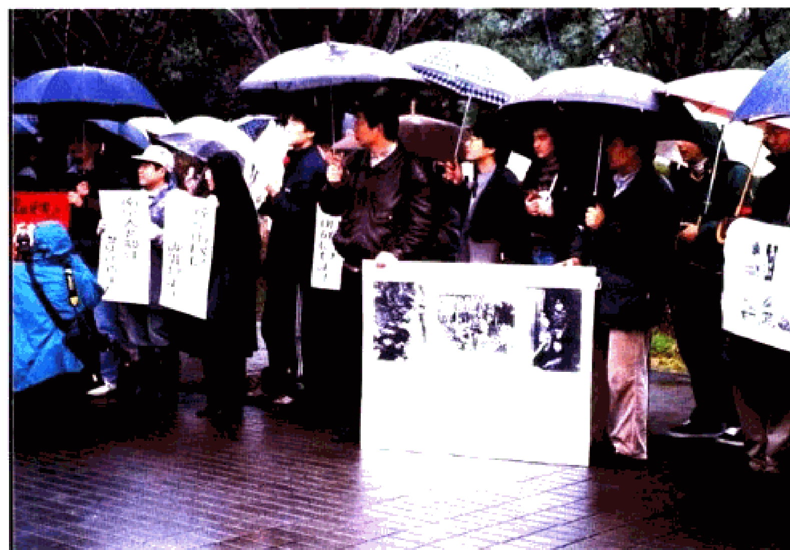
这是关西地区中国留日学生高举“南京大屠杀铁证如山，不可否定”的横幅，冒雨进行抗议示威。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

これは関西地区の中国留学生が「南京大虐殺の鉄の証拠は山の如し，否定することはできない」という横断幕を高く掲げて雨の中抗議のデモをおこなった。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000年1月23日下午，日本寻求正义的人们，冒雨聚集在右翼势力召开的"20世纪最大的谎言——南京大屠杀彻底检证"集会会场门前，举起历史照片和标语，对参加集会者进行"沉默的抗议行动"。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年１月２３日午後，雨の降る中，日本の正義を求める人たちは，右翼勢力の「２０世紀最大のウソ——南京大虐殺の徹底検証」集会会場入口前で，集会参加者に対し当時の写真やプラカードで，「沈黙の抗議行動」を行った。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

2000年1月23日，正义人士为抗议日本右翼势力反华集会，在大阪国际和平中心举行记者招待会。会后，东史郎（前排右二）和林伯耀（前排左二）先生与中国留学生合影留念。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年１月２３日，正義を求める人たちは大阪国際平和センターで右翼の集会に抗議するために記者会見をおこなった。この後，東史郎さんと林伯耀さんは中国の留学生と一緒に記念撮影を行った。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000年1月23日，日本正义人士在与大阪国际和平中心毗邻的大阪青少年中心举行集会，抗议日本最高法院对《东史郎日记》案的不公正判决。图为东史郎在此向他的支持者们说，"我们在现实中仍在与右翼作战，在与身上虽然穿着西服但心里却穿着侵略军军服的人们作战。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

2000年1月23日、日本の正義を求める人たちは大阪国際平和センターの近くの大阪市青少年センターで集会をおこない、日本の最高裁判所の『東史郎日記』裁判の不公正決定に抗議した。写真は東史郎さんがここで彼の支持者に対して、『我々は現在もなお依然として右翼とたたかっている。身体には背広を着ているけれども、心の中では侵略軍の軍服を着ている人たちとのたたかいである』と述べた。

—（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





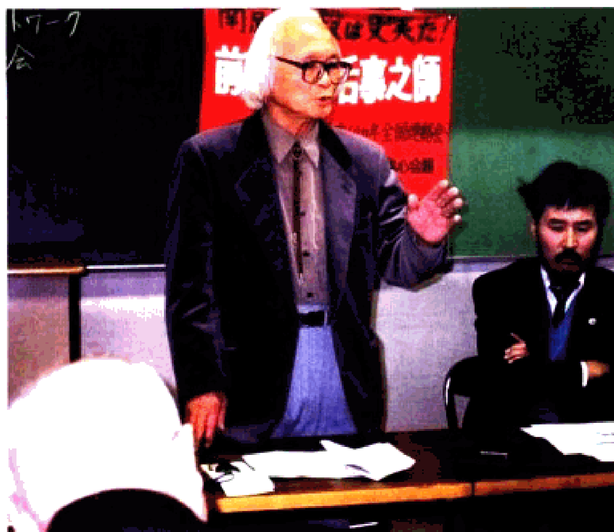
东史郎先生在日本大阪国际和平中心向该中心秘书长松原邦帆提出抗议。他说："我是南京大屠杀的亲历者，凭什么说是谎言？！"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんは日本の大阪国際平和センター（ピースおおさか）で、同センター松原事務局長に対して抗議をおこなった。彼は「私は南京大虐殺を自ら体験した者だ。何を根拠にウソだというのか」と詰った。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000年1月23日，在大阪国际和平中心召开的抗议右翼势力集会的记者招待会上，东史郎慷慨陈词，抗议日本最高法院不公正判决。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年１月２３日、大阪国際平和センターで右翼の集会に抗議するためにおこなった記者会見で、東史郎さんは最高裁判所の不公正な棄却決定に抗議した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

2000年1月23日，为抗议日本右翼势力大阪集会，山内小夜子和中国留学生在大阪地铁入口处，向人们散发资料和抗议书。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年１月２３日，日本の右翼勢力の大阪集会に抗議するために、大阪地下鉄の入口で、人々に資料と抗議文を配る中国の留学生たち。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



抗 议 书

日本国最高法院：

21日，你院第二小法庭河和伸一裁判长，作出驳回因揭露南京大屠杀真相，而被反诬损害他人名誉罪的东史郎，及其出版社青木书店败诉，并罚款50万日元。我们对此无视历史事实和公理与正义，公然为顽固坚持侵略与加害立场的日本旧军人庇护，颠倒黑白、混淆是非的无耻判决，表示极大的愤怒和最强烈的谴责！

62年前，侵华日军在南京制造的大屠杀这一特大惨案，历史早已作出结论。作为日本的最高法院，理应坚持法理，伸张正义，运用法律武器，向法西斯宣战，以实际行动维护日本在国际上的信誉及世界和平。令人遗憾的是，你们却冒天下之大不韪，从日本的地方法院、高等法院直到最高法院，竟然全部藐视法理，漠视证据，彻底暴露了日本司法制度袒护侵略与加害者，压制日本维护历史真相的进步力量，极力掩盖和抹杀血腥的历史，是日本人丑陋历史观的集中体现。这一颠倒黑白的判决，必将在世界司法史上，留下永远抹不去的丑陋的一页。

东史郎审判案历经8年。在此期间，东史郎先生曾多次真诚地向受害的中国人民忏悔，赢得了受害国人民的宽恕和尊重，其律师团亦多次来南京现场调查取证，取得了大量的真凭实据。尽管你们对其做出不公正判决，但南京人民、中国人民、世界一切爱好和平的人民，将会始终站在东史郎一边。我们坚信，尊重历史将被历史尊重，否定历史将被历史否定！正义必将战胜邪恶！

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆
南京侵华日军南京大屠杀史研究会
2000年1月22日

抗 議 文

日本最高裁判所　殿

２１日、最高裁判所第二小法廷において河合伸一裁判長は、南京大虐殺事件の真相を明らかにすること拒み、しかも無実の罪を着せられ名誉を傷つけられた東史郎氏、及びその出版社青木書店を敗訴とし、賠償金５０万円の支払いを命じた。

我々は、このような歴史の事実と公正な道理と正義を無視し、公然と侵略と加害者の立場を頑固に堅持する日本の旧軍人を庇護し続けた、白を黒と言いくるめる、物事の是非を混同する恥を知らないこの判決に対し、最大の憤怒と強烈な譴責をここに表明する！

６２年前、中国を侵略した日本軍が南京で行った大虐殺について、歴史は早くから既に結論を出している。日本の最高裁判所として、当然のことながら法の理念を堅持し、正義を拡張し、法律の武器を用いてファシストに宣戦を布告して、実際の行動を以て日本の国際的立場においての信用を確保し、及び世界の平和を守らなくてはなりませんでした。

残念なことにあなた方は、天下の悪事を偽り、日本の地方裁判所、高等裁判所から最高裁判所に至るまで、法の法理を蔑視し、証拠を無視した。そして徹底的に、日本の司法制度が侵略者と加害者に加担したことを自ら暴露した。また日本が歴史の真相を守ろうとする進歩的な勢力に圧力をかけ、血腥な歴史を、極力覆い隠し、抹殺したことは、日本人の醜い歴史観を具体的に表明したものである。白を黒と言いくるめる顛倒した判決は、世界司法史上、永遠に拭い去ることのないぶざまな一頁として記憶されるだろう。

東史郎氏の裁判は、八年間を費やした。この間、東史郎氏は幾度も誠実に受害者の中国人民に懺悔し、被害者の人民から寛大にも許され、尊敬を勝ち取られた。彼の弁護団もまた何度も南京を訪問され、現地調査をし、大量の証拠を得た。たとえあなた方裁判所が今回の事件において、不当な判決を下そうとも、南京の人民、中国人民、そして平和を愛する世界中の人民は、終始東史郎さんを支持する。我々は堅く信じている。歴史を尊重する者は歴史から尊重され、歴史を否定する者は、歴史から否定される！正義は必ず邪悪に勝利する！

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館
南京中国侵略日本軍南京大虐殺史研究会
２０００年１月２２日



声援信

东史郎先生与支援东史郎案审判实行委员会及其律师团：

得知日本最高法院21日再次无理驳回揭露南京大屠杀事件真相，而被反诬损害他人名誉的东史郎案的上诉，并被罚款50万日元。

我们对这一倒行逆施的判决表示无比的愤慨和最强烈的抗议！对东史郎先生、日本支援东史郎案审判实行委员会及其律师团，与日本否定历史的右翼势力作不屈不挠斗争的精神，表示崇高的敬意和亲切的慰问！

东史郎先生虽已年逾八旬，但先后4次来南京现场取证，为加害的历史作证，并多次向南京人民忏悔历史的过错，这种知错改错的维护历史真相的精神，赢得了中国人民包括南京人民的谅解和敬重。日本支援东史郎案审判实行委员会及其律师团，也多次来南京实地调查水塘、邮政袋相关的人证物证，还先后在南京进行三次手榴弹的实爆试验，验证《东史郎日记》的真实性。这种尊重历史事实的科学态度，理应赢得东史郎案审判的最终胜利。但是，日本最高法院不讲法理，公正与正义，极力掩盖和抹杀历史事实，公然为至今仍不思改的杀人者提供庇护，请问公理何在？正义何在？良知何在？

虽然日本法院已判处东史郎败诉，但在公理与正义面前，在南京人民的心里，东史郎先生早已赢得了胜诉。东史郎先生并不孤立，因为530万南京人民永远支持你！全中国人民永远支持你！！世界上一切爱好和平，反对侵略战争的正义人士永远支持你！！！祝东史郎先生健康长寿！祝中日两国人民友好之树万古长青！

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆
南京侵华日军南京大屠杀史研究会
2000年1月22日

激励の手紙

東史郎先生及び東史郎さんの南京裁判を支える会及び弁護団の皆さま；

日本の最高裁判所は２１日、再度わたり、理由もなく南京大虐殺事件の真相を明らかにすることを拒み、無実の罪を着せられ名誉を傷つけられた東史郎氏の控訴審において、５０万円の賠償金を支払うことを命じた。

我々は、この公理に反した判決に対して、この上ない憤慨と強烈な抗議を申し立てる！また東史郎さん、東史郎さんの南京裁判を支える会及び弁護団に対し、そして歴史を否定する右翼勢力に不撓不屈の闘争精神に対し、心より敬意を表すると同時に心よりのねぎらいを申し上げます！

東史郎さんは８０歳になられてからも、相前後して四回も南京の現場に調査に来られ、加害者としての歴史の証明をされました。また何度も南京の人民に対して歴史の過ちについて謝罪されました。このような過ちを認めてそれを正し、歴史の真相を守ろうとする精神は、南京の人民を含む中国人民の理解と尊敬を勝ち取るものでした。日本の東史郎を支持し東裁判を支える会及び弁護団の方々も、何度も南京に来られ、沼の現地調査や郵便袋に関する人物の立証や物証活動を行いました。また前後して南京において三度手榴弾爆破実験を行い、『東史郎日記』の真実性を証明しました。この様に歴史の事実を科学的に証明する方法は、当然東史郎裁判の最終的な勝利を導くものだと確信しています。

しかしながら、日本の最高裁判所は、法の理念、公正、正義を無視し、極力歴史の事実を隠匿し抹殺すると同時に、公然と現在に至るまで悔い改めることのない殺人者を庇護しています。正当な道理はどこにあるのでしょうか？正義や良識というのがどこにあるのでしょうか？

日本の法廷は、東史郎氏の敗訴を裁決しましたが、正当な道理と正義の前で、また南京人民の心の中では東史郎は既に勝訴を勝ち取っています。東史郎さんは孤立していません。なぜなら、五三〇万人の南京の人民が永遠にあなたを支持しているからです！中国の全人民があなたを支持しています！！世界中の、平和を愛し侵略戦争に反対する正義の人たちが、永遠にあなたを支持しています！！！東史郎さんのご健康とご長寿を祝して！中日両国人民の友好がとこしなえに栄えることを祝して！

侵華日軍南京大屠殺遇難同胞紀念館
南京侵華日軍南京大屠史研究会
２０００年１月２２日



天怒人怨：2000年1月24日，南京各界人士500余人冒雪在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆举行集会，强烈抗议日本最高法院对《东史郎日记》案的不公正判决和日本右翼势力1月23日在大阪召开反华集会。

程光 摄影

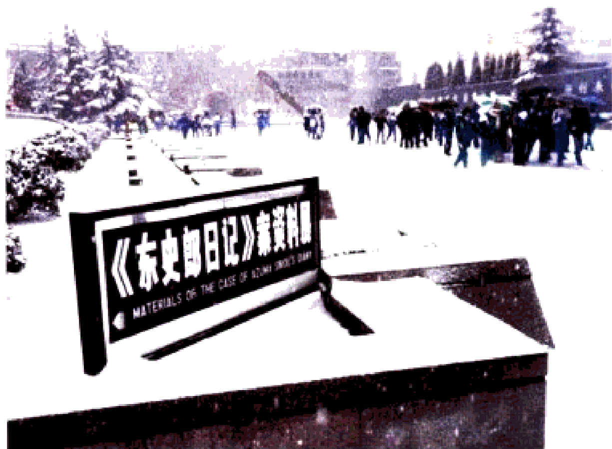


正義を求める人たちは日本の最高裁判所の不公正な判決を厳しく非難する



天怒人怨（天は怒り人は怨む）。２０００年１月２１日、南京の各界の人たち５００人余りは、雪のふりしきる中で中国侵略日本軍南京大虐殺遭難同胞記念館で集会をおこない、日本の最高裁判所による東史郎日記裁判の不公正な判決に激しく抗議し、また、日本の右翼勢力の１月２３日大阪反中国集会に抗議した。

程　光　撮影



南京市民冒雪集会后，参观《东史郎日记》案资料展。
——程 光　摄影

南京市民は雪の中で集会をおこなった後，『東史郎日記』裁判資料展を参観した
——程 光　撮影



南京青年高呼口号："决不允许日本右翼势力否定南京大屠杀历史！"
——程 光　摄影

大きな声でスローガンを叫ぶ南京の青年。「日本の右翼勢力による南京大虐殺の歴史の否定を絶対に許さないぞ！」
——程 光　撮影



南京500余各界人士集会

愤怒声讨日右翼势力反华行径

坚决支持中国政府严正立场



本报讯（记者　[illegible]）[illegible]

图片新闻
南京通特新
油印机·体机
地址：太平南路400号
TEL:4456614　4547577
网址：www.njdatas.com

2000年1月25日的《南京日报》关于“南京各界群众冒雪举行集会，抗议日本右翼势力否定南京大屠杀大阪集会和日本最高法院对《东史郎日记》案不公正判决”的报道影印件。

２０００年１月25日の『南京の各界民衆は雪の降りしきる中、日本の右翼勢力が南京大虐殺を否定する大阪集会を開いたことと、日本の最高裁判所が『東史郎日記』裁判において不当な判決を下したことに対する抗議の集会を開いた』という記事のコピー。

捍卫和平 反对侵略是中国人民永恒的原则

——全国政协外委会委员对日本右翼势力否定南京大屠杀罪行表示极大愤慨

本报讯 昨天，中国人民政治协商会议全国委员会外事委员会部分委员举行座谈，对最近日本右翼势力公然集会，否定侵华日军在南京犯下的野蛮罪行表示极大的义愤和强烈的谴责，认为这是对历史事实、对受到侵华日军残害的中国人民、对世界所有爱好和平、反对侵略战争的人士、对人类正义和良知的公然挑衅。

南京大屠杀是侵华日军制造的特大惨案，二战结束后，基于正义与和平的原则，由中、苏、美、英等十一国组成的军事法庭审定，铁证如山，是任何人也无法否认的事实。委员们以亲身经历控诉了当年侵华日军的罪行，并指出，时隔半个多世纪，特别是世界即将进入新的千年之际，日本极少数右翼势力跳出来否定侵华历史绝不是偶然的。二战后，日本一直没有认真地清算过去的侵略历史，军国主义势力没有受到彻底摧毁，致使其残余势力和土壤至今仍然存在。

委员们指出，随着日本经济实力的增长和国际形势的变化，日本政治向右倾化倾向发展。去年，日本右翼势力炮制了美化侵略战争的影片《自尊》，为臭名昭著的甲级战犯东条英机翻案；今年1月23日，又上演了一场否定南京大屠杀的丑剧。在此之前，日本最高法院无理判决揭露南京大屠杀事实真相的日本老兵东史郎等人败诉。这些事实充分说明，他们的活动完全是有预谋、有计划的。我们决不可等闲视之，必须对此保持高度的警惕。

委员们还强调指出，如何对待日本军国主义侵华的历史，是检验日本政府是否确有诚意维护中日关系政治基础的试金石。日本政府应真正负起责任来，对日本国民进行正确的历史教育，对于否定侵略历史的右翼势力要采取切实措施予以约束，而不能放任和纵容。我们希望日本的政治家能以史为鉴，使日本真正走和平发展的道路。

2000年1月26日《人民政协报》关于“全国政协委员对日本右翼势力否定南京大屠杀罪行表示极大愤慨”的报道影印件。

２０００年１月２６日、『人民政協報』『全国政協委員が日本の右翼勢力の南京大虐殺の罪行の否定に激しく憤慨した』ことを報道する複製写真資料。

上海市府向大阪递抗议信

上海讯 前天下午，上海市人民政府分别向日本大阪府政府、大阪市政府正式递交抗议信，对日本大阪府、大阪市政府不顾中方多次严正交涉，仍未阻止日本右翼团体1月23日在大阪国际和平中心举行否定南京大屠杀的反华集会，表示十分的愤慨和强烈的抗议，并称这一事件的发生不仅伤害了中国人民的感情、破坏了中日友好的大局，也影响了上海与大阪友好关系的顺利发展。

信中指出，南京大屠杀是日本军国主义对中国人民犯下的残暴罪行，铁证如山，是不容否定的事实。

2000年1月25日《江南时报》关于“上海市政府向大阪府递交抗议书”的报道影印件。

２０００年１月２５日、『江南時報』、『上海市政府が大阪府に対して抗議文を手渡した』という記事のコピー。





1月24日，沈阳各界群众数百人在“九·一八”历史博物馆集会，愤怒抗议日本右翼势力否定南京大屠杀的反华行径。这是沈阳大学的学生在观看历史图片资料。

1月24日、瀋陽の各界大衆数百人が、「9．18」歴史博物館で集会をおこない、日本の右翼勢力による南京大虐殺否定の反中国行動に憤り抗議した。これは瀋陽大学の学生が歴史写真資料を見ているところ。

我们，以德报怨　有人，变本加厉

我抗议！

我以个人名义最强烈抗议和谴责定于公元 2000 年 1 月 23 日在日本大阪举行的以否认南京大屠杀为主题的无耻集会。

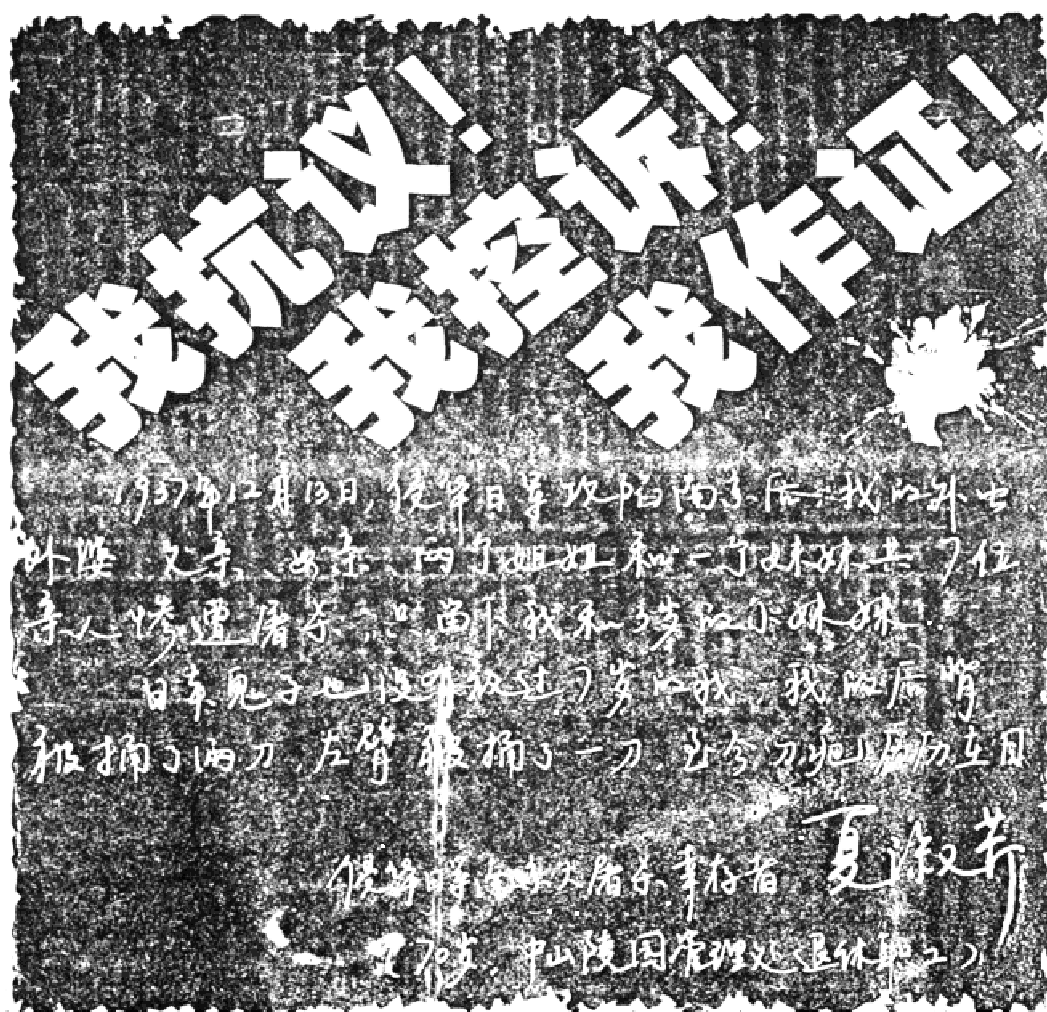
同时以个人名义有偿向全世界征集有关南京大屠杀的物证、人证，并资助对有关人员进行采访、录音、录像等报道活动。条件成熟后，将有关资料编辑整理成书或制成光盘向社会各界免费赠阅，并通过互联网向全世界传播。

汤逢雨

E－mail: Nanjing1937@ hainan. net

中国海南省青年汤逢雨自费在2000年1月23日《中华工商时报》刊登抗议广告。

中国海南省の湯逢雨青年は自らの費用で、２０００年１月２３日の『中華工商時報』に抗議の広告を掲載した。



南京大屠杀幸存者夏淑琴在2000年1月26日《现代快报》刊登广告，抗议日本右翼势力否定南京大屠杀历史。

南京大虐殺の生存者夏淑琴さんは、２０００年１月２６日の『現代快報』に広告を掲載し、日本の右翼勢力による南京大虐殺の歴史の否定に抗議した。



正義を求める人たちは日本の最高裁判所の不公正な判決を厳しく非難する



为抗议日本右翼势力大阪反动集会，南京画家夏小龙将他创作的国画经日本驻上海领事馆送交大阪国际和平中心，图为国画作者夏小龙与国画《南京大屠杀》。

日本の右翼による大阪での反動集会に抗議するため、南京の画家夏小龍は自分の画いた中国画を、日本の駐上海総領事館を通じて大阪国際平和センターに送り届けた。写真は中国画の作者夏小龍と中国画『南京大虐殺』。



漫画：“噪音大合唱”　　朱根华作
原载2000年1月25日《人民日报》

２０００年１月２５日付け『人民日報』に発表された、朱根華が創作した「騒音大合唱」という漫画。



漫画：篡改历史 美化侵略
《姑苏晚报》陶开俭　提供

漫画：歴史を改ざんし、侵略を美化する
——『姑蘇晩報』陶開倹　提供



2000年1月28日，美国纽约华人、华侨在纽约中国城集会，谴责日本右翼分子否认南京大屠杀等侵华暴行。87岁的林永俣先生过去在北京等地曾目睹日军暴行，这是他在集会上讲述抗战时期经历。

２０００年１月２８日、アメリカニューヨークの中国系住民、華僑は１月２８日、ニューヨークのチャイナタウンで集会を開き、日本の右翼分子の南京大虐殺などの中国侵略残虐行為の否定を非難した。８７歳の林永俣さんはかつて北京などで日本軍の残虐行為を目撃したことがあり、これは彼が集会で抗日戦争の時期の体験を語っているところ。



2000年2月18日至20日，东史郎先生和山内小夜子应邀访问菲律宾马尼拉市，参加了当地华侨组织的一系列声援东史郎活动。图为2000年2月18日，东史郎和山内小夜子一行到达马尼拉机场时，受到当地华侨的热烈欢迎。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年２月１８日から２０日にかけて、東史郎さんと山内小夜子さんは、招待に応じてフィリピンのマニラ市を訪問し、現地の華僑組織の一連の東史郎さん支援の活動に参加した。写真２０００年２月１８日、東史郎さんと山内小夜子さん一行はマニラ空港に到着、現地の華僑の熱烈歓迎を受ける。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000年2月19日，东史郎在马尼拉市作南京大屠杀证言报告。他说："尽管我在日本法庭上输掉了，但是我一定要在国际法庭上赢回公道。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年２月１９日、東史郎さんはマニラ市で南京大虐殺の証言報告をおこなった。彼は「たとえわたしが日本の裁判所で敗れ去ったとしても、しかし私は必ず国際法廷で勝利し正義をとりもどすであろう」と語った。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



2000年2月20日，东史郎和马尼拉市长共同为南京大屠杀展览会开幕式剪彩。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

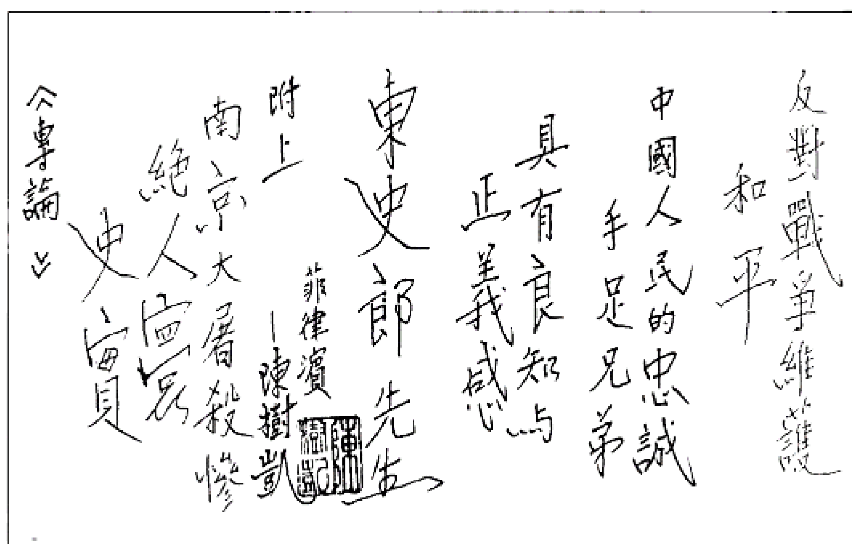
２０００年２月２０日、東史郎さんとマニラ市長が共に、南京大虐殺展覧会の開幕テープカットをおこなう。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



东史郎与菲律宾华侨子女合影。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんとフィリピンの華僑の子どもたちが一緒に記念撮影。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



菲律宾华侨陈树凯等写给东史郎的留言签名。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

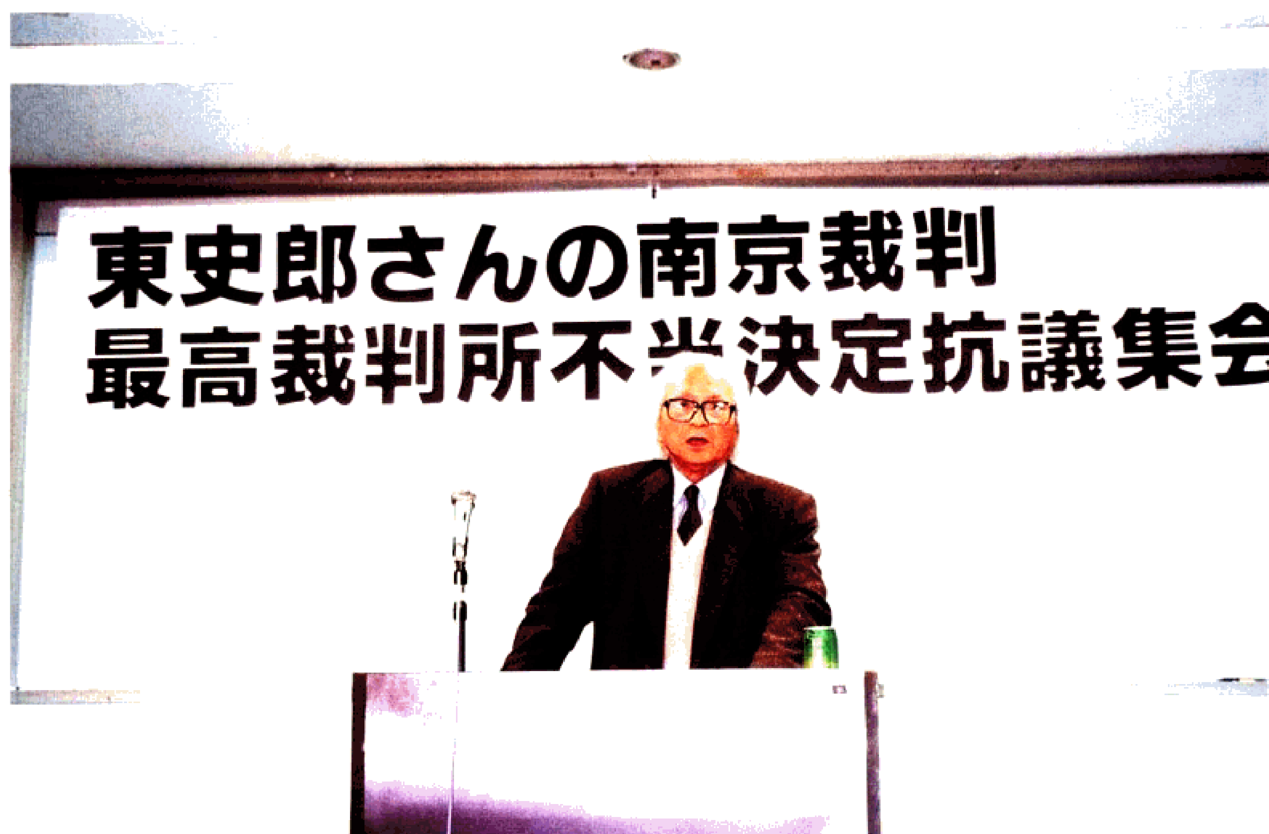
フィリピン華僑の陳樹凱さん等が東さんに書き置きとサインをした。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



正義を求める人たちは日本の最高裁判所の不公正な判決を厳しく非難する

2000年3月26日，在日本召开的抗议日本最高法院对《东史郎日记》案的不公正判决集会上，东史郎先生及日本正义人士慷慨陈词，抗议不公正判决。

２０００年３月２６日、日本において、日本の最高裁判所による『東史郎日記」裁判の不当判決抗議集会で、東史郎さんと日本の正義を求める人たちは憤慨して自分たちの考えを述べ、不当判決に抗議した。



愤怒的东史郎说：“我对这不公正判决万念俱灰，是日本最高法院放弃了司法的最高责任。”

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

憤慨する東史郎さん。「不当な決定に腹のそこから無念極まる。日本の最高裁判所は、司法の最高責任を放棄した

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



中北龙太郎律师发表演说："最高法院违背南京大屠杀的真实，为东京高等法院的判决撑起一把保护伞，这种践踏历史真相的反动判决，是与否定侵略战争的日本军国主义的动向相呼应的。我们严厉谴责最高法院的判决。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

演説する中北龍太郎弁護士「最高裁判所は、南京大虐殺の真実に背を向けた東京高等裁判所の判決にお墨付きを与えた。歴史の真実を踏みにじるこの反動判決は、侵略戦争を否定する日本の軍国主義の動きに呼応するものだ。私たちは、最高裁判所判決を厳しく弾劾する。」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

丹羽雅雄律师发表演讲："我们在这场审判中有三个目的。一是证明《东史郎日记》的真实性。二是不允许有某种势力篡改历史。第三，也是考验日本的法官怎样对待历史认识的问题。绝不允许'皇国史观'复活。法院虽然作出了不公正的判决，但我确信，人民大众的斗争阵营会越来越强大。"

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

演説する丹羽雅雄弁護士「私たちにはこの裁判に三つの目的があった。一つは東史郎日記の真実性を証明する。二は、歴史改竄勢力を許さない。第三は裁判官の歴史認識を問うということであった。つまり皇国史観とその復活を許さない。裁判所は不当な決定を下したが、民衆側の闘いも強まっていることを確信する。」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供







空野佳弘律师的演讲："我非常惊讶，最高法院在这种时刻进行'判决'。去年12月刚提出新证据，即12月13日来自中国及世界各地约7万人的'维护南京大屠杀历史史实、要求做出公正的司法判决'的签名信。而法官根本不去理会这些，只是担心引起世界关注此案，决定趁早了断。这是一起直接伤害历史被害者感情的审判。法院对《东史郎日记》案审判的特别意义假装不知。正因为日本司法界缺乏国际观才会有这样的判决。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

演説する空野佳弘弁護士「この時期に最高裁「決定」がだされ非常に驚いている。昨年１２月に証拠を提出し、１２月１３日には中国や世界各地からの７万人の「南京大虐殺事件の歴事実に基づいた厳粛な司法判断を求める署名」を提出したばかりである。証拠を裁判官が検討したとは思えない。世界がこの裁判に注目することを恐れて、早急にこの決定をだしたのだ。歴史が問われており、被害者の感情に直接ふれる裁判である。このような東史郎裁判の特別の意義を、裁判所は見て見ぬ振りをして判断を下した。日本司法の国際感覚こそが問われた裁判である。」

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

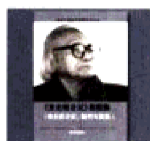
日本龙谷大学的田中宏教授在声援东史郎集会上说："1937年12月，发生在南京的举世震惊的大屠杀，当时在日本国内却进行了大规模的'庆祝南京陷落'的活动，这一60年前的阴影至今在日本还没有散去，正因为如此，才导致了这场不公正的判决。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

日本の龍谷大学の田中宏教授が集会で東史郎さんに声援をおくる。１９３７年１２月南京では世界を震撼させる大虐殺が繰り広げられていた、一方日本国内では「南京陥落祝賀」のお祭り騒ぎであった。この６０数年前の時点でのこの歴史の溝は、日本国内では現在なお埋められておらず、今回の日本の裁判所でのこの不当決定を導いたと考える。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供







日本女子大学的金子马丁教授在集会上发言，声援东史郎："应祈求和平市民团体的请求才公开自己日记的老兵，被'战友'起诉而遭法院判处'名誉损害罪'和罚金，这种事情在德国不可想象。为什么这样说，因为在德国如果谁否定了纳粹的犯罪，或认为只是小问题，是正当的话，必然要受到刑法制裁的。判处公开'日记'的老兵有罪，从司法角度来看，等于不承认战争犯下的罪行。对欲否认历史团体的所作所为，作为国家司法机关公然进行袒护和包庇，即使再狡辩也是站不住脚的，应该感到羞耻。"

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

日本女子大学の金子マーティン教授（Martin Kaneko）は集会で発言し、東史郎さんに声援をおくった。「平和を願う市民運動の依頼で日記を公開した元兵士が、かつての『戦友』から訴えられ、裁判所が『名誉毀損』の罰金刑を言い渡すような事態はドイツでは考えられない。なぜならナチスの犯罪の否定・矮小化や正当化が、刑法による処罰の対象になっているからである。「日記」を公表した元兵士に宣告された有罪判決は、司法機構による戦時下不法行為の否定に相当する。歴史の否定を主張する集団の主張に、国家機構たる司法が同調し、加担しているとみなされても、いかなる弁護もなりたたない恥ずべき態度である」

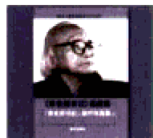
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

7 正义的斗争仍在继续

正義の闘いは続く







《东史郎日记》案虽然在日本三审败诉了，但是，东史郎却在公理和道义上赢得了胜利。他敢于反省历史，真诚地向受害国人民谢罪，赢得了中国人民的谅解；他坚持八年如一日的诉讼，不屈服于右翼势力的围攻和恐吓，维护历史事实，赢得了世界上主持正义和爱好和平人们的敬重；他虽已88岁高龄，但在法庭上坚持战斗了2000多个日日夜夜，不畏强权，不怕邪恶，不屈服于右翼压力，决心继续诉诸国际法庭和世界舆论，赢得了世界上越来越多人们的支持。

《东史郎日记》案引发的正义与邪恶的较量远未结束，在日本围绕南京大屠杀历史的斗争仍将继续下去。人们坚信，正义终将战胜邪恶，事实胜于雄辩，东史郎终将取得最后的胜利！

『東史郎日記』裁判は日本で第三審が敗訴したけれども、しかし、東史郎さんは道理と道義の上では勝利している。彼は勇気をもって歴史を反省し、被害者の国の人たちに誠実に謝罪し、中国人民の理解を勝ち取った、八年間を一日と同じように断固として訴訟をたたかい彼は右翼勢力の包囲攻撃と恐喝に屈することなく、歴史の事実を擁護し、世界の正義を守り平和を愛する人たちの尊敬をかちとったのである。彼はすでに８８歳の高齢であるにもかかわらず、法廷で２０００日以上毎日毎晩あくまで闘いつづけ、強権を恐れず、邪悪を怖がらず、右翼勢力の圧力に屈せず、国際法廷と世界世論に訴えて闘いを継続することを決意しており、世界中のますます多くの人たちの支持をかちとっている。

『東史郎日記』裁判が引き起こした正義と悪のたたかいはまだまだ終わっておらず、南京大虐殺をめぐる闘いはまだまだ続いていく。ついには正義が悪に勝ち、事実は雄弁に勝り、東史郎さんは最後の勝利を勝ち取るであろうことを人びとは確信している。

应侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆邀请，东史郎先生战后第7次来中国，于2000年2月25日至3月5日，在中国南京、北京、沈阳、上海4个城市，向中国人民报告日本最高法院对《东史郎日记》案不公正判决的情况。图为朱成山馆长于2000年2月25日，在上海浦东国际机场迎接东史郎先生一行。

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館の招待に応じて、東史郎さんは戦後７度目の中国訪問をおこなった。２０００年２月２５日から３月５日まで、中国の南京、北京、瀋陽、上海の四都市で、日本の最高裁判所による『東史郎日記』裁判への不当な判決の状況を中国人民に報告した。写真は朱成山館長が２０００年２月２５日，東史郎さん一行が上海浦東国際空港に出迎えたところ。





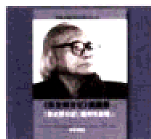
2000年2月25日，乘车行进在沪宁高速公路上的东史郎在沉思：63年前他随同日军第16师团，正是从上海杀向南京的。

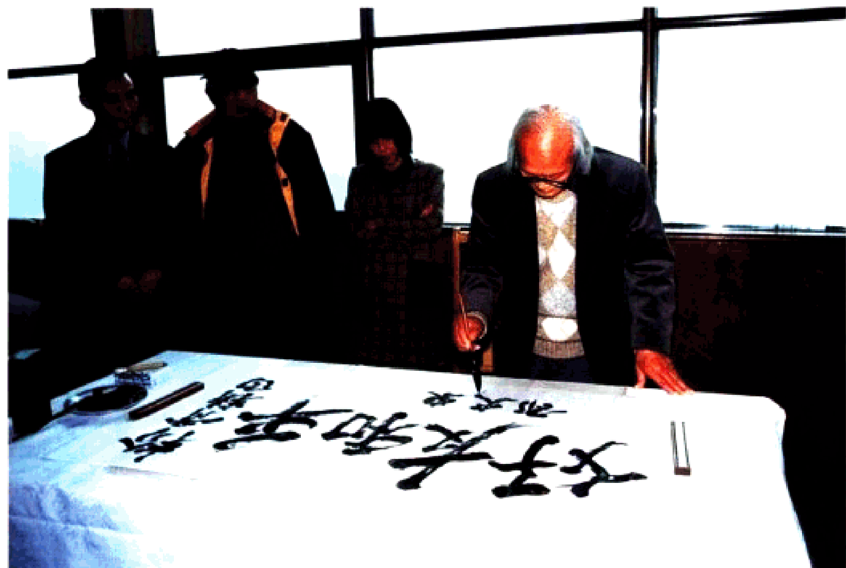
２０００年２月２５日、滬寧（上海－南京）高速道路を車で行く東史郎さんは物思いにふける。６３年前彼は日本軍第１６師団一員として、まさに上海から南京に向けて（同じ道を）殺しながら行軍したのだった。



2000年2月25日，东史郎和山内小夜子正在书店选购图书。

２０００年２月２５日、本屋で書籍を選んで買う東史郎さんと山内小夜子。





东史郎为上海江苏饭店挥毫写下“和平友好”的条幅。

東史郎さんが上海江蘇ホテルのために筆をふるって書いた「平和友好」の条幅。

2000年2月25日，东史郎先生再次来到丹阳，回忆63年前在这里参与侵华战争时的情景。

２０００年２月２５日、東史郎さんは再び丹陽を訪れ、６３年前にここで参加した中国侵略戦争の状況をふりかえった。





2000年2月26日上午，东史郎及其律师空野佳弘、支援东史郎案审判实行委员会秘书长山内小夜子等，走进江苏电视台演播室，接受专题采访，制作《为了正义》的专题片。

２０００年２月２６日午前、東史郎さんと空野佳弘弁護士、東史郎さんの南京裁判を支える会事務局長の山内小夜子さんたちは、江蘇テレビ局のテレビスタジオにいき、インタビューを受け、『正義のために』の特別番組の制作に参加した。

南京市各界青年走进直播室，准备与东史郎对话。

南京市各界の青年は生放送室に入り、東史郎さんとの対話をおこなった。

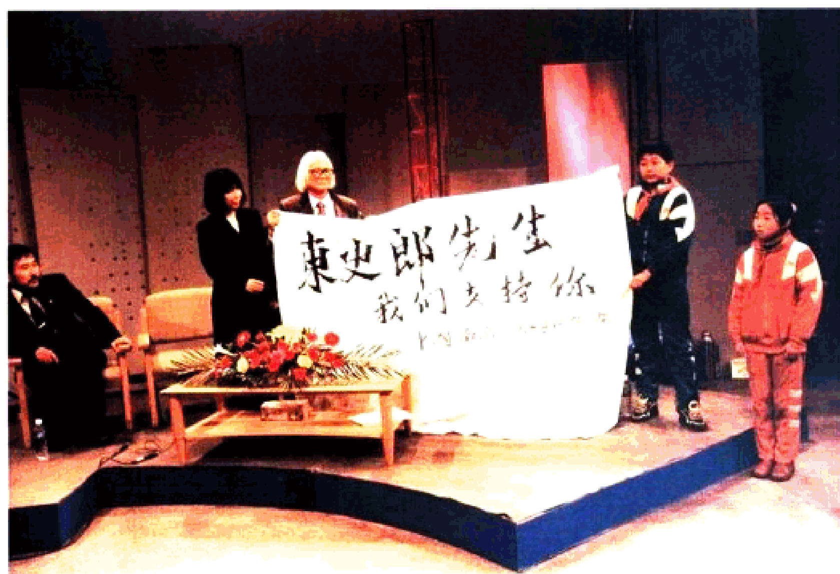




东史郎与中日特邀嘉宾一起，共同接受采访。

東史郎さんと中日の特別ゲストは一緒に共同インタビューを受けた。





在演播室里，南京多伦路小学师生向东史郎先生送上“支持东史郎”横幅。

放送室で、南京多倫路小学校の教師と生徒は東史郎さんに「東史郎さんを支持する」という横断幕を贈った。



香港著名歌唱家张明敏先生接受主持人杨蔚采访，他说：“我们坚决支持东史郎先生的正义之举！”

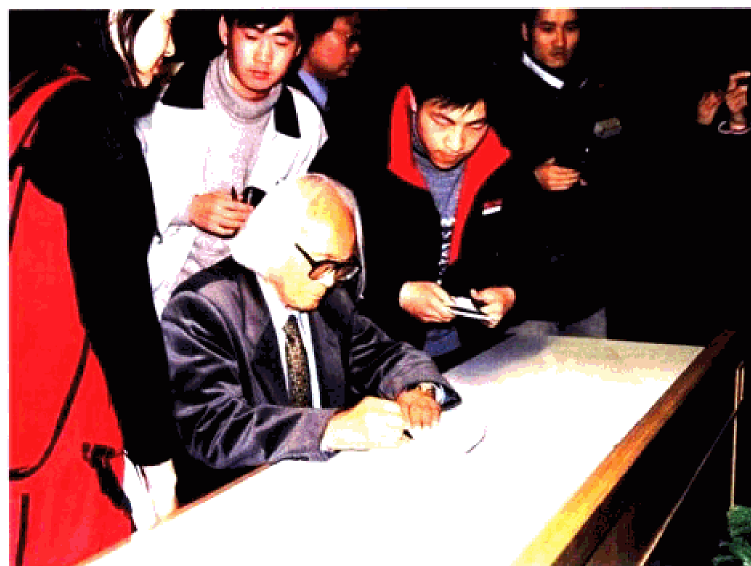
司会者の楊蔚さんは香港の著名な歌手の張明敏さんにインタビューした。彼は「われわれは断固として東史郎さんの正義の行動を支持する」と述べた。



在演播室里，南京一书法家向东史郎送上内容为“真诚”的书法作品。

放送室で、南京の一書道家は東史郎さんに「真誠」という書道作品を贈った。





热情的南京青年请东史郎在《东史郎日记》一书上签名。

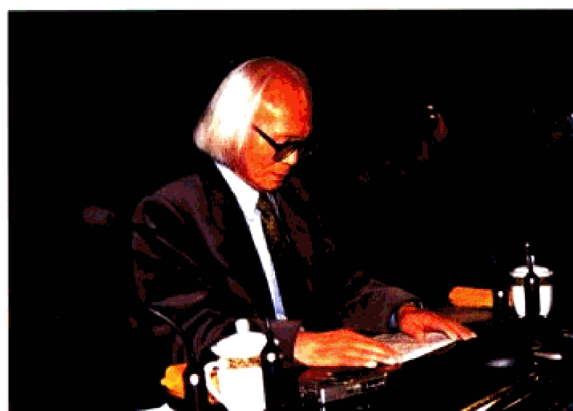
熱意あふれる南京の青年たちは東史郎さんに『東史郎日記』の本への署名をお願いした。





2000年2月26日下午，江苏省政府新闻办和南京市政府新闻办在南京人民大会堂举行3000多人的东史郎报告会。

２０００年２月２６日午後、江蘇省政府新聞弁公室と南京市政府新聞弁公室は南京人民大会堂で、3000人以上の大規模報告会をおこなった。



在报告会上，东史郎感谢南京人民对他的支持，谴责日本最高法院的不公正判决。

報告会で、東史郎さんは南京人民の自分に対する支持に感謝し、日本の最高裁判所の不当な決定を非難した。



在报告会上，空野佳弘律师向南京人民报告日本最高法院不公正判决的情况。

報告会で、空野佳弘弁護士は南京人民に日本の最高裁判所の不当な決定の状況を報告した。

在报告会上，山内小夜子向南京人民表示，日本人民将一如既往地支持东史郎。

報告会で、山内小夜子さんは、南京人民に対して、日本の人たちはこれまでと同じように東史郎さんを支持していることを表明した。



2000年2月27日，南京各界人士举行声援东史郎座谈会。

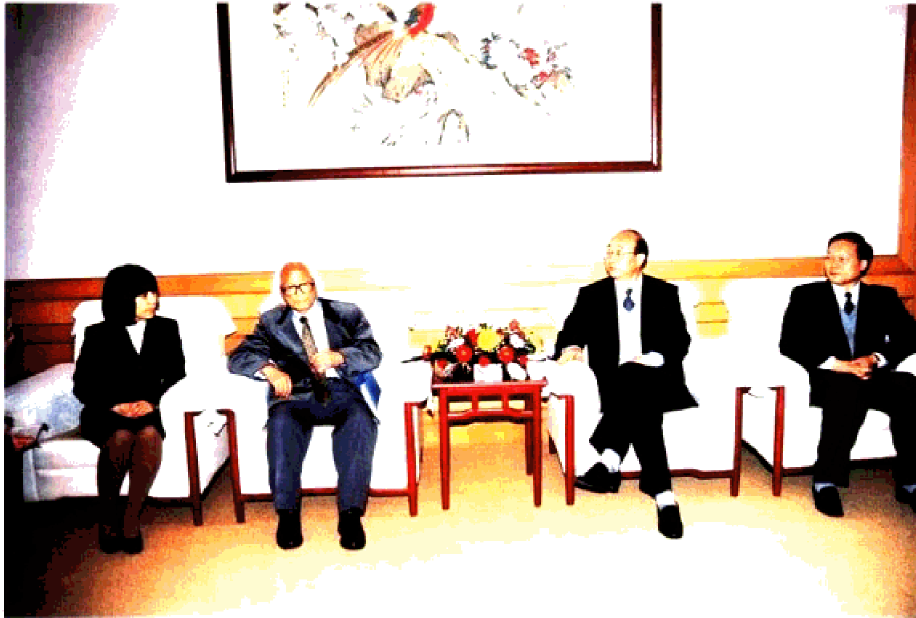
２０００年２月２７日、南京各界の人たちは東史郎さんを支援する座談会をおこなった。

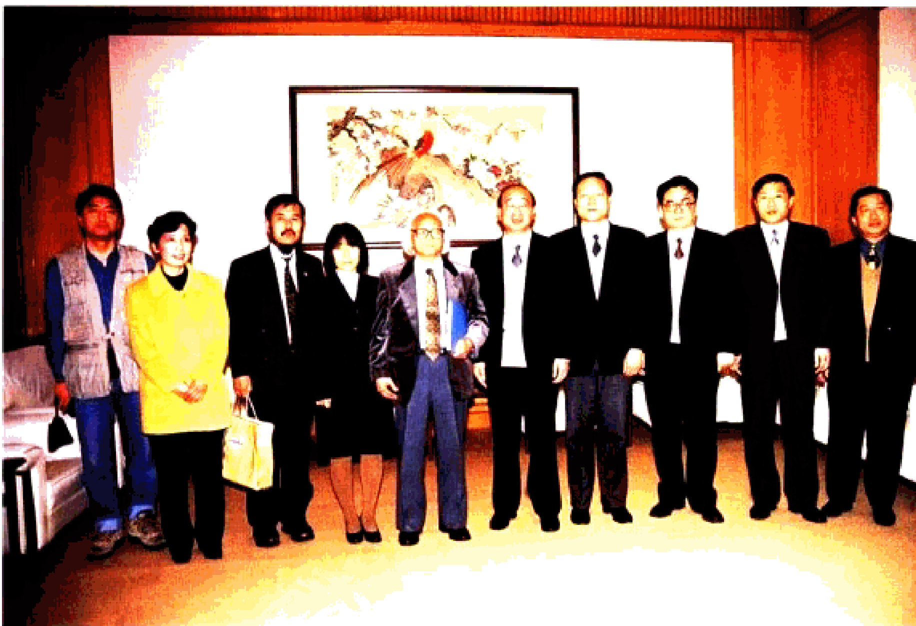




2000年2月27日，香港歌唱家张明敏和南京青年词曲作者秦敏群，把为东史郎而专门创作、演唱的歌曲《忏悔》录音带赠送给东史郎。

２０００年２月２７日、香港の歌手の張明敏さんと南京青年の秦敏群さんは、東史郎さんのために特に創作した歌曲『懺悔』の録音テープを東史郎さんに贈呈した。

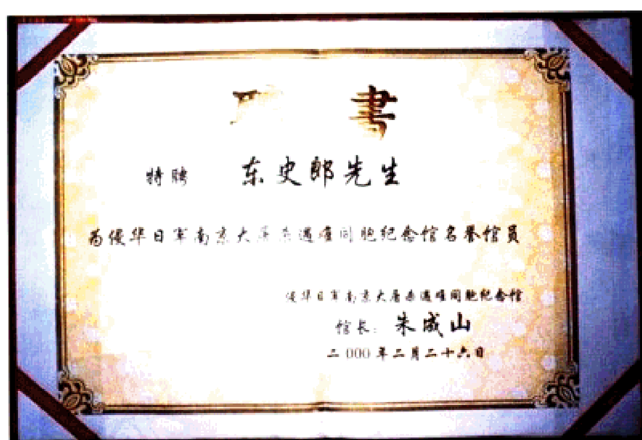




2000年2月26日，中共江苏省委副书记顾浩等江苏省和南京市的领导，在南京人民大会堂会见厅，亲切会见东史郎先生等日本客人，并与东史郎先生一行合影。

２０００年２月２６日、中国共産党江蘇省委員会の顧浩副書記等と江蘇省と南京市の政府役人は南京人民大会堂の会見室で、東史郎さん等の日本のお客さんと親しく会見し、東史郎さん一行と一緒に記念撮影した。





[illegible]書

特聘　东史郎先生

为侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆名誉馆员

侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆

馆长：朱成山

二000年二月二十六日

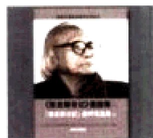
侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆特聘东史郎先生为该馆名誉馆员。图为朱成山馆长向东史郎先生颁发聘书。

中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館は東史郎さんを同館の名誉館員として特に招聘した。写真は、東史郎さんに証書を授与する朱成山館長。



东史郎先生始终保持着记日记的习惯。图为2000年2月27日，他在南京禄口国际机场候机时，利用就餐间隙，仍延续着他的日记。

東史郎さんは、今も日記を書く習慣がある。この写真は、2000年2月27日、南京祿口国際空港で、食事のあい間を利用して、日記を書き続けているところ。





2000 年 2 月 27 日，在侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆，东史郎先生面对“遇难者 30 万”石壁，双手合十，真诚忏悔。

周描坤　摄影

２０００年２月２７日、中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館で「受難者３０万人」の石壁に向かって、東史郎さんは両手をあわせて合掌し、真心をこめて懺悔した。

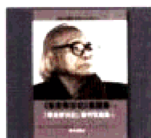
——周描坤　撮影

2000年2月27日，江苏省中医院专家为东史郎先生诊病体检。

２０００年２月２７日、江蘇省の漢方医院の専門家が東史郎さんの病気を診察し、健康診断をした。

2000年2月27日，东史郎先生来到南京东郊四方城，现场讲述当年侵占四方城时的情景。

２０００年２月２７日、東史郎さんは南京の東郊外の四方城を訪れ、現場で往時、四方城を占領したときの情景を語った。





2000年2月28日，东史郎先生在北京中国人民抗日战争纪念馆接受记者采访。

２０００年２月２８日、東史郎さんは北京中国人民抗日戦争記念館で記者のインタビューを受けた。



2000年2月28日，中国人民抗日战争纪念馆在多功能厅举行“首都史学界声援东史郎先生报告会”。图为东史郎先生正在发表演讲。

２０００年２月２８日、中国人民抗日戦争記念館の多目的ホールで「首都史学界の東史郎さんにを声援する報告会」が開催された。これは東史郎さんが講演をしているところ。



东史郎在参观北京卢沟桥时合影。（中：东史郎　右一：朱成山　右二：林伯耀　左一：山内小夜子　左二：张承钧）

東史郎さんは北京の盧溝橋を参観した後記念撮影した。（真ん中：東史郎さん、右端：朱成山さん、右から二人目：林伯耀さん、左から一人目：山内小夜子さん、左から二人目：張承鈞さん）



2000年2月28日，中国对外友好交流协会会长、全国政协副主席宋健会见东史郎先生一行并合影。
日本支援东史郎案审判实行委员会 提供

２０００年２月２８日、中国人民対外友好協会会長、全国政協副主席宋健さんは、東史郎さん一行と会見し記念撮影した。
－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供



2000年2月28日，东史郎先生在日本全面侵华战争爆发地——卢沟桥上祈祷：愿世界永远和平！
——日本支援东史郎案审判实行委员会 提供

２０００年２月２８日、東史郎さんは日本が全面的な中国侵略戦争を引き起こした場所—盧溝橋で、世界の恒久平和を祈った。
－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供





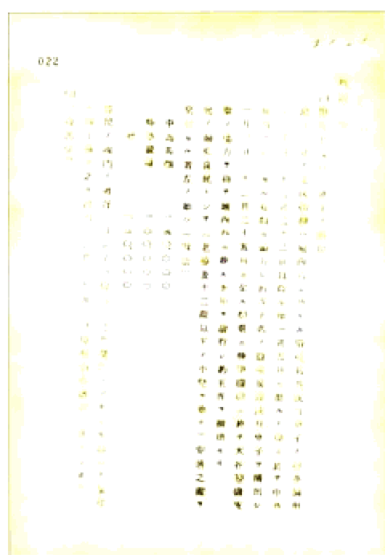
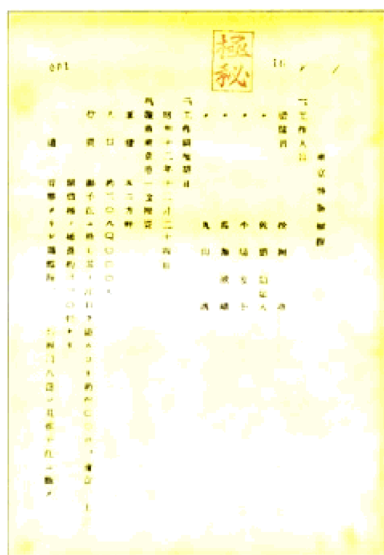
2000年2月29日，当代中国研究所、中国抗日战争史学会、中国人民抗日战争纪念馆联合举办“侵华日军南京大屠杀见证报告会”。图为东史郎先生正在发表演讲。

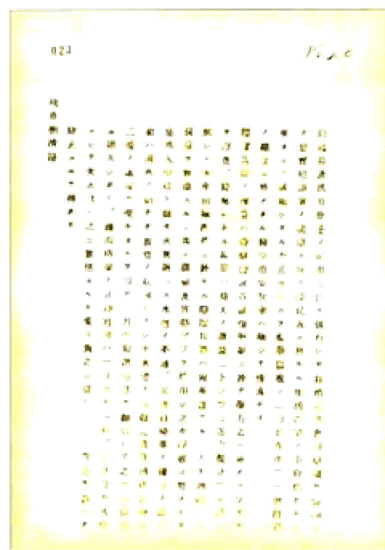
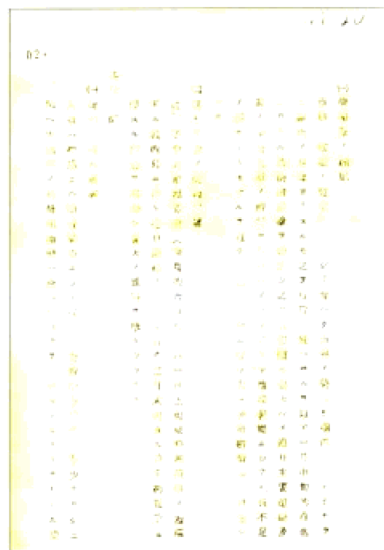
２０００年２月２９日、現代中国研究所、中国抗日戦争史学会、中国人民抗日戦争記念館は合同で「中国侵略日本軍南京大虐殺証言報告会」を開催した。これは、東史郎さんが講演をおこなっているところ。



在北京举办的“侵华日军南京大屠杀见证报告会”上，辽宁省档案馆赵云鹏馆长，向东史郎先生捐赠了当年南满铁路株式会社特务班的《南京大屠杀情况调查报告（极密）》。

北京で開催された「中国侵略日本軍南京大虐殺証言報告会」で、遼寧省公文書館の趙雲鵬館長は、東史郎さんに当時の南満州鉄道会社特務班の『南京大虐殺状況調査報告（機密）』（一部分）を寄贈した。

《南满铁路株式会社特务班关于南京大屠杀情况调查报告（极密）》。（节选部分）

「南満州鉄道会社特務班の南京大虐殺状況に関する調査報告（機密）」（一部分）



在北京举办的“侵华日军南京大屠杀见证报告会”上，中国抗日战争老战士李尔重与东史郎先生亲切交谈。

北京でおこなわれた「中国侵略南京大虐殺証言報告会」で中国の抗日戦争の老戦士の李爾重さんは東史郎さんと親しくことばを交わした。



2000年2月29日、中国著名老作家魏巍（左一）向东史郎先生赠书，表示声援。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年２月２９日、中国の著名な老作家魏巍さん（左端）は東史郎さんに書籍を寄贈し、声援をおくった。
――（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000年2月29日晚，东史郎先生在北京大学发表演讲，受到700余名师生的欢迎。

２０００年２月２９日夜、東史郎さんは北京大学で講演をおこない、７００名の教師、学生の歓迎をうけた。





2000年3月1日，东史郎来到搜狐公司，与网民进行网上交流，回答网民提出的问题。

２０００年３月１日、東史郎さんはソーフー会社を訪れ、インターネット利用者とネット上で交流し、出された質問に答えた。



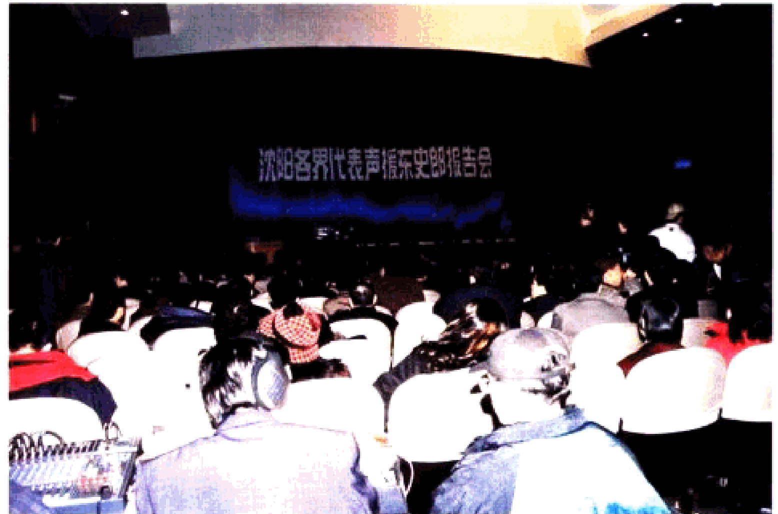
东史郎先生在北京搜狐网站与网民交流。

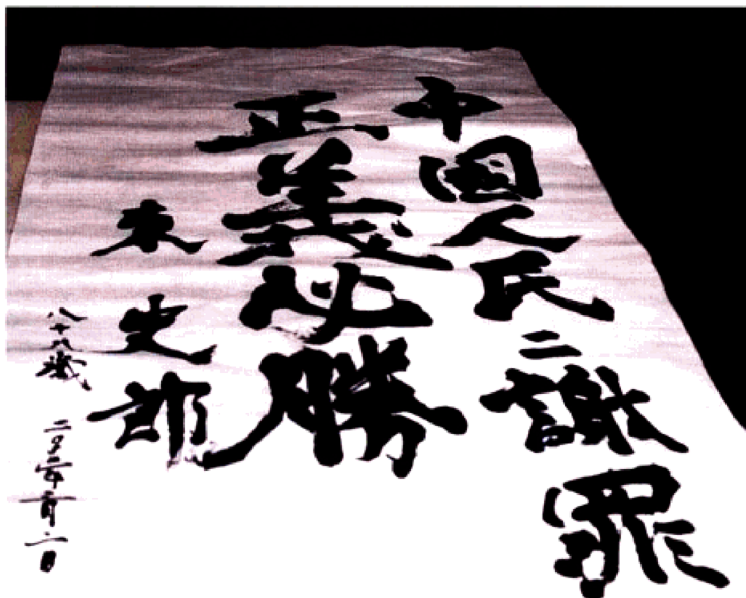
東史郎さんはは北京ソーフー・インターネットセンターでインターネット利用者と交流した。



2000年3月2日，在沈阳“九·一八”历史博物馆举办的“沈阳各界代表声援东史郎报告会”上，东史郎先生发表演讲。

2000年3月2日、瀋陽で「9・18」歴史博物館が開催した「瀋陽各界代表の東史郎さんを声援する報告会」で、東史郎さんは講演をおこなった。





东史郎在参观“九·一八”历史博物馆后留言：“向中国人民谢罪，正义必胜！”

東史郎さんは「9．18」歴史博物館を参観した後、「中国人民に謝罪　正義必勝」としたためた。



2000年3月2日，沈阳市委副书记赵金城、沈阳市对外文化交流协会常务副会长刘迎初在沈阳宾馆会见东史郎先生一行，代表沈阳市800万人民，坚决支援东史郎的正义行动。

２０００年３月２日、共産党瀋陽市委員会の趙金城副書記、瀋陽市対外文化交流協会劉迎初常務副会長は、瀋陽賓館で東史郎さん一行と会見し、瀋陽市８００万人民を代表して、東史郎さんの正義の行動を断固支援すると表明した。



2000年3月2日，中国沈阳"九·一八"历史研究中心、"九·一八"历史博物馆召开"声援东史郎座谈会"。

２０００年３月２日、中国の瀋陽「９．１８」歴史研究センター、「９．１８」歴史博物館は「東史郎さんを声援する座談会」を開催した。





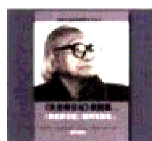
2000年3月4日，上海市政府新闻办在上海图书馆举办“侵华日军南京大屠杀见证报告会”。

２０００年３月４日、上海市政府新聞弁公室は上海図書館で「中国侵略日本軍南京大虐殺証言報告会」を開催した。



2000年3月4日，东史郎先生在上海图书馆为青年学生签名。

２０００年３月４日、東史郎さんは上海図書館で青年学生のためにサインした。





2000年3月4日晚，东史郎先生在下榻的上海和平饭店屋顶花园撞响和平世纪钟。

２０００年３月４日夜、東史郎さんは宿泊した上海和平飯店の屋上の庭園で平和な世紀を願う鐘をついた。



2000年4月28日，中国人权发展基金会名誉会长、原中国国务院副总理黄华会见东史郎。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年４月２８日、中国人権発展基金会名誉会長、元国務院副総理の黄華さんが東史郎さんと会見した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



2000年4月28日，中国人权发展基金会召开"声援东史郎正义行动报告会"，图为报告会会场。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年４月２８日、中国人権発展基金会は「東史郎さんの正義の行動報告会」を開催した。写真は報告会の会場。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





2000 年 4 月 29 日，东史郎在石家庄大学演讲。

—— 日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

２０００年４月２９日、東史郎さんは石家庄大学で講演した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

2000年5月1日，东史郎先生一行在镇江博物馆参观。

2000年5月1日、東史郎さん一行は鎮江博物館を参観した。





2000年5月1日，东史郎先生与镇江市历史学界的专家学者座谈。

2000年5月1日、東史郎さんは鎮江市史学界の専門家、学者と座談した。



2000年5月2日，东史郎在扬州平山堂拜谒中日友好交流的使者——鉴真大师像。

２０００年５月２日、東史郎さんは揚州平山堂で日中友好交流の使者——鑑真法師座像を拝謁した。



2000年5月2日，东史郎在扬州平山堂应僧侣和游人要求签名留念。

２０００年５月２日、東史郎さんは揚州平山堂で、僧侶と観光客の求めに応じて、記念のサインをした。



2000年5月3日，东史郎先生来到南京东郊马群镇，指证当年日军进攻南京时，在马群附近曾屠杀中国俘虏的情景。

２０００年５月３日、東史郎さん南京東郊外の馬群鎮を訪れ、日本軍が南京を攻略した当時、ここで中国人捕虜を虐殺したことを証言した。



2000年5月3日，南京人民在南京饭店为东史郎先生举行88岁生日宴会，祝他健康长存。东史郎先生在生日宴会上表示要继续上诉至联合国，与右翼势力斗争到底。

２０００年５月３日、南京人民は南京飯店で東史郎さんのために、８８歳の誕生パーティを開き、健康と長寿を祝った。東史郎さんは誕生パーティで、国連に訴えても、右翼勢力とのたたかいを最後まで続けると表明した。



2000年5月4日，东史郎先生在上海淞沪抗战馆门前留影。

２０００年５月４日、東史郎さん、上海淞滬抗日戦争記念館の門前で記念撮影をした。



2000年5月4日，东史郎先生在上海淞沪抗战馆参观后为该馆题写“前事不忘，正义必胜”的条幅。

２０００年５月４日、東史郎さんは、上海淞滬抗日戦争記念館を参観した後、館のために「前事不忘、正義必勝」の条幅をしたためた。



2000年5月4日，东史郎先生一行在上海淞沪抗战馆参观。

２０００年５月４日、東史郎さん一行は上海の淞滬抗日戦争記念館を参観した。





2000年5月26日，在日本山口县防府市的"诉说历史的事实"集会上，东史郎及日本正义人士表示将继续为正义而战。

２０００年５月２６日、日本の山口県防府市での「歴史の真実を訴える」集会で、東史郎さんおよび日本の正義を求める人たちは、正義のためのたたかいを続けることを表明した。

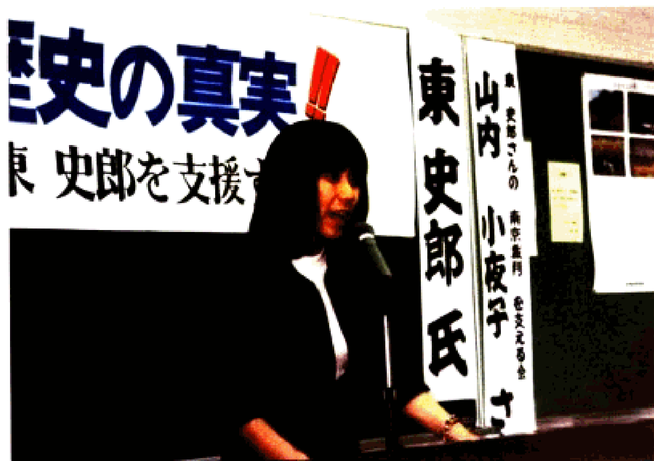


东史郎先生在山口县集会上作了有关南京大屠杀的加害证言，并表达了继续为正义而战的决心。

——日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

東史郎さんは山口県での集会で南京大虐殺に関する加害証言をおこない、また、正義のためのたたかいを継続する決意を表明した。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



山内小夜子在山口县集会上就《东史郎日记》案斗争的焦点及今后的打算等问题作报告，表示将一如既往地支持东史郎的正义行动。

日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

山内小夜子さんは山口県での集会で『東史郎日記』裁判闘争の焦点と今後の見通し等の問題について報告し、東史郎さんの正義の行動をこれまでと変わらず支持していくことを表明した。

－－（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

日本山口县"南京大屠杀证言者·支援东史郎之会"秘书长高岛美登里女士，在集会上提出继续声援东史郎的活动计划。

日本支援东史郎案审判实行委员会提供

日本の「山口の会」の事務局長の高島美登里さんは、集会で東史郎さんにひきつづき声援をおくっていく活動の計画を提出した。

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会提供





图为山口县声援东史郎的"南京大屠杀证言者·支援东史郎之会"的正义人士。东史郎和该会负责人滝泽贡（右二）、东史郎、秘书长高岛美登里（左二）。

——日本支援东史郎案审判实行委员会提供

山口県で東史郎さんを支える「南京大虐殺の証言者東史郎を支援する会」の仲間たち。滝沢貢代表（右三）、東史郎さん、高島美登里事務局長（左二）。

——(日)東史郎さんの南京裁判を支える会　提供

2000年5月29日，日本熊本市举行“南京大屠杀的实证——东史郎讲演会”，声援东史郎的正义行动。

２０００年５月２９日、熊本市で行われた「南京大虐殺の実証、東史郎講演会」で、東史郎さんの正義の行動に声援がおくられた。



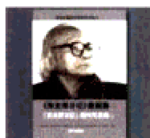
东史郎在熊本市集会上演讲，旁立者为聋哑人手语翻译。
——日本支援东史郎案审判实行委员会提供

東史郎さんは熊本市の集会で講演した。そばに立っているのは聴覚障害者のための手話通訳者。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供



参加熊本市集会的人员正在聚精会神地听取东史郎演讲。
日本支援东史郎案审判实行委员会　提供

熊本市の集会に参加した人たちは熱心に東史郎さんの講演に耳を傾けた。
——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会　提供





熊本大学的中国留学生参加了集会，并向东史郎递交声援书。

——日本支援东史郎案审判实行委员会 提供

熊本大学の中国留学生は集会に参加し、東史郎さんに声援文を手渡した。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供

为了建立友好的中日关系，举办听取加害证言和被害证言集会活动仍在日本各地继续。图为熊本县"证言集会"实行委员会的保村龙二郎委员長（后立右二）、樱井政美秘书長（后立左一）。

日本支援东史郎案审判实行委员会 提供

本当の日中友好関係の礎を築くために、加害証言と被害証言を聞く集会活動を続ける、熊本「証言」集会実行委員会の仲間たち。保村龍二郎委員長（後列右二）、桜井政美事務局長（後列左一）。

——（日）東史郎さんの南京裁判を支える会 提供





东京声援东史郎案的正义人士为宣传南京大屠杀的历史事实，组织了东京“不再重演南京事件之会”。图为该会负责人田中宏（前左一）和秘书长芹泽明男（前右二）。

——（日）东京“不再重演南京事件之会” 提供

東京で東史郎裁判を支え、南京大虐殺の歴史事実を明らかにする活動を推進する「ノーモア南京の会」の仲間たち。田中宏代表（前左一）、芹沢明男事務局長（前右二）。

——（日）「ノーモア南京の会」 提供

来自日本各地的市民提着灯笼、举着标语牌在东京街道上游行时高呼口号：

争取《东史郎日记》案的胜利！

不能忘记南京大屠杀！

不允许日本篡改历史！

不再重演南京事件！

——（日）东京“不再重演南京事件之会”提供

日本の各地から集った市民は、提燈をもち、手にプラカードをかかげ、東京の大通りを、シュプレヒコールをしながらデモ行進した。

東裁判の勝利を勝ちとろう！

南京大虐殺を忘れるな！

日本の歴史改ざんの動きを許さない！

ノーモア南京！

——（日）「ノーモア南京の会」 提供





满头银丝的东史郎先生虽已年近九旬，但他仍决心为了正义而继续斗争。
周描坤　摄影

頭が真白になった東史郎さんは90才になろうとしている。しかし、彼は、この正義の闘争を継続しつづけることを決意している。
——周描坤　撮影

附录 1

《东史郎日记》案关系年表

年　度	与东史郎有关的事件	☆与南京大屠杀有关的事件 ▲政治、外交事件
1912年	4月27日，东史郎出生	
1937年	8月，应征在京都16师团福知山20联队1大队3中队3小队1分队服役	
1939年	退役回国，途中因患疟疾，脱离部队治病，后一人回国	
1941年	与久江结婚	
1944年	再次应征	
1945年	日本战败，于宁波投降	
1946年	回国	
1965年		☆家永三郎提起教科书诉讼
1971年		☆本多胜一采访南京后撰写的《中国之旅》一书出版 ▲判决三重县津市津地镇祭违反宪法
1972年		▲中日邦交正常化
1973年		☆铃木明（虚构派）的《南京大屠杀之虚构》出版
1975年		▲靖国神社法案未被通过
1980年		☆在京都举办"为了和平的战争展"
1981年		▲森村诚一《恶魔的饱食》（揭露731部队之暴行）出版
1982年	《福知山20联队第3中队史》刊用东史郎的战地日记稿件	▲日本发生了将"侵略"改为"进入"的教科书问题
1983年		☆本多胜一《通向南京之路》出版 ☆南京开始筹建侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆
1984年		☆以一桥大学为中心成立"南京事件调查会"，代表人物是洞富雄 ☆由原日军将校组成的集团"偕行社"，开始在杂志上连载《南京战史》
1985年	4月13日，东史郎出席第20届"战友会"	▲日本首相中曾根康弘正式参拜靖国神社 ☆侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆建成开放
1986年	向妇女会编的刊物《对和平的期望》寄出战地日记稿件	

1987年	5月，京都"为了和平的战争展"恳请东史郎公开战时日记 7月7日，东史郎、增田六助、上羽武一郎对战争暴行出面作证，公开战时日记，接受记者专访 12月8日，东史郎著《我的南京步兵队——一个召集兵体验的南京大屠杀》由青木书店出版 12月8日，下里正树著《被隐瞒的联队史——第20联队下级士兵看到的南京事件真相》由青木书店出版 12月13日，东史郎战后首次到中国，专程赴南京谢罪	▲《朝日新闻》一记者在神户遭"赤报队"（右翼）枪击身亡
1988年	4月，"战友会"召开关于把东史郎除名的会议 7月，东史郎应《丸》杂志要求，向该杂志寄出原稿，当时该杂志社主编向其暗示"偕行社"正在商量起诉东史郎 8月，山内小夜子随南京大屠杀实况调查团来南京调查时，得知东史郎谢罪事	
1989年	12月15日，下里正树、井口和起、木坂顺一郎等编《南京事件·京都师团关系资料集》由青木书店出版	▲裕仁天皇死去 ☆偕行社《南京战史资料集Ⅰ》出版
1990年	12月13日，山内小夜子等举行"抗议石原慎太郎发言的京都市民集会"，东史郎和舟桥照吉在集会上发表了演讲	☆石原慎太郎在美国的《花花公子》杂志10月号上称"南京大屠杀是中国人捏造的"
1992年	东史郎在文学爱好者编辑的《丹波文库》上撰文批判天皇自白录和东条英机	
1993年	一桥出版社出版的高中历史教科书中刊载了一部分东史郎的日记，该教科书审定合格 4月14日，原告以"侵犯名誉"为由状告东史郎、下里正树、青木书店，《东史郎日记》案在东京地方法院开始审理 5月28日，东京地方法院第1次庭审 7月23日，第2次庭审 9月10日，第3次庭审 10月22日，第4次庭审 12月3日，第5次庭审	☆偕行社《南京战史资料集Ⅱ》出版 ☆板仓由明（虚构派）抗议一桥出版社引用东史郎的日记 ▲细川护熙首相发表讲话，承认"日中战争"为侵略战争
1994年	1月21日，第6次庭审 3月18日，第7次庭审 5月20日，第8次庭审 7月1日，第9次庭审 7月29日，第10次庭审 8月15日，东史郎第2次赴南京反省谢罪 9月22日，第11次庭审 10月14日，第12次庭审 12月8日，右翼分子驾驶宣传车袭击东史郎住宅 12月9日，第13次庭审	☆一桥出版社擅自将《东史郎日记》改为《16师团长中岛今朝吾日记》 ▲2月，日本法务大臣永野茂门因发表否定侵略的演讲而被迫辞职 ▲8月，日本环境长官樱井新大放厥词否认南京大屠杀 ▲10月，日本通产大臣桥本龙太郎发表否认南京大屠杀狂言
1995年	2月10日，第14次庭审 3月17日，第15次庭审 6月2日，第16次庭审 7月7日，第17次庭审 10月6日，第18次庭审 12月15日，第19次庭审	▲日本战败投降50周年 ▲8月，日本文部大臣岛村口出狂言否认南京大屠杀

1996年	2月2日，第20次庭审 4月26日，东京地方法院一审判决东史郎败诉。东史郎方面立即上诉，并由中北龙太郎、空野佳弘、丹羽雅雄组成上诉律师团 8月，随“铭心会”访华的山内小夜子通过侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆，请求南京市民为《东史郎日记》案举证 9月，组成日本支援东史郎案审判实行委员会（下简称支援会），《机关报》刊登《不是“自虐”，是“自省”》的文章 9月8日，在大阪浅香进行邮政袋燃烧试验 9月26日，在东京高等法院举行第二审第1次庭审 10月，支援会部分成员访问南京，收集举证资料 10月25日，东史郎著《新版·我的南京步兵队——一个召集兵体验的南京大屠杀》由青木书店出版发行 12月5日，第二审第2次庭审	▲日本首相桥本龙太郎参拜靖国神社
1997年	1月19日，支援会在浅香进行邮政袋试验 2月6日，第二审第3次庭审 4月22日，第二审第4次庭审 5月11日，支援会于浅香进行邮政袋试验 6月24日，第二审第5次庭审 7月24日，第二审第6次庭审 8月，东史郎第3次赴南京，参加南京大屠杀史国际学术研讨会。东史郎回国当天，其住宅受到右翼分子驾驶的宣传车围攻 10月2日，第二审第7次庭审 11月13日，第二审第8次庭审 12月7日、8日，空野律师和山内听东史郎详细介绍情况 12月18日，第二审第9次庭审	▲日本中学历史教科书中开始有“慰安妇问题”的记载 ☆家永三郎在教科书诉讼中胜诉
1998年	1月10日、11日，东史郎律师团和支援会集会 1月12日，访东史郎当年同部队战友下坂，听取情况介绍 3月，东史郎等访问南京，并进行实地调查 3月2日，在京都八濑进行了邮政袋装人沉水试验 3月6日，在南京进行手榴弹试验 3月12日，第二审第10次庭审，法庭询问东史郎本人 5月12日，第二审第11次庭审，法庭更换法官 6月23日，第二审第12次庭审，询问原告本人 7月20日，再次在南京进行手榴弹试验 9月8日，第二审第13次庭审审结 11月7日，东史郎等在大阪为争取第二审胜诉举行集会 11上旬，得知判决日期（11月26日）突然延期 11月25日，在京都为争取第二审胜诉举行集会 12月22日，东京高等法院二审判东史郎败诉。当天晚上，举行抗议不公正判决集会 12月22日，侵华日军南京大屠杀史研究会向东史郎和律师团、支援会发出“声援信”	☆张纯如写的《南京暴行——被遗忘的大屠杀》一书在美国出版 ☆二审判决后，青木书店事务所被右翼青年破坏，该青年被逮捕

1998年	12月23日，中国外交部新闻发言人朱邦造针对《东史郎日记》案二审败诉发言 12月25日，日本国外务省发言人针对《东史郎日记》案二审败诉辩解 12月25日，东史郎上诉至日本最高法院 12月28日，中国外交部新闻发言人朱邦造再次就《东史郎日记》案二审败诉发言	
1999年	1月30日，东史郎等在神户举行为侵华暴行历史作证集会 2月，东史郎访问香港，参加报告审判情况的集会 2月，在南京纪念馆举行的“正义与邪恶的较量——《东史郎日记》案资料展”开幕 4月，东史郎等参加中央电视台“实话实说”栏目节目制作 4月，《东史郎日记》中文版由江苏教育出版社出版，东史郎等赴南京参加首发式，并赴杭州、上海访问 9月22日，在南京第3次进行手榴弹试验，获成功 12月13日，向最高法院递交来自中国等国家和地区的7万人签名，要求日本最高法院“要根据历史事实对《东史郎日记》案作出公正的判决”	
2000年	1月21日，日本最高法院驳回东史郎上诉 1月22日，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和侵华日军南京大屠杀史研究会，向日本最高法院提出抗议，抗议其对东史郎案的不公正判决 1月22日，侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和侵华日军南京大屠杀史研究会向东史郎、律师团和支援会发去慰问信 1月23日，中国外交部新闻发言人朱邦造发表谈话，强烈谴责日本最高法院竟然无理判决揭露南京大屠杀事实真相的东史郎等人败诉，公然为日本右翼势力否定南京大屠杀的丑恶表演张目 1月24日，南京各界群众冒雪举行抗议集会，向日本最高法院对东史郎案不公正判决提出抗议 2月，东史郎在菲律宾举办报告会 2月17日，东史郎向日本东京高等法院提出重审诉状 2月25日—3月5日，东史郎一行到南京、北京、沈阳、上海访问，报告日本最高法院不公正判决情况 3月28日，东京高等法院驳回东史郎重审要求 4月3日，东史郎提出特别抗告书 4月21日，提出特别抗告理由书 4月27日，东史郎一行赴北京参加中国人民抗日战争纪念馆举办的“东史郎诉讼案”展 4月，东史郎等访问北京、石家庄、南京、镇江、扬州、苏州、上海等地 7月25日，日本最高法院驳回特别上诉 7月30日，律师团、支援会在宝塚集会	☆1月23日，日本右翼势力在大阪国际和平中心举行“20世纪最大的谎言——南京大屠杀彻底检证”集会 ☆1月23日，上海市人民政府分别向大阪府、大阪市政府未能阻止日本右翼团体在大阪国际和平中心举行否定南京大屠杀的反华集会提出强烈抗议 ☆1月23日，日本外相河野洋平发表谈话时说：“日军进入南京后，杀害非战斗人员和掠夺等行为是不可否认的事实。” ☆1月24日，沈阳各界群众在“九·一八”历史博物馆集会，愤怒抗议日本右翼势力举行集会否定南京大屠杀的反华行径 ☆1月26日，中国外交部部长唐家璇发表谈话，对日本最高法院以司法形式压制正义，公然为右翼分子张目表示强烈愤慨 ☆1月29日，北京各界人士在中国人民抗日战争纪念馆集会，抗议日本右翼势力的反华行径

東史郎日記裁判関係略年表

年	東史郎関係事項	☆南京大虐殺関係事項 ▲政治・外交事項
1912年	4月27日　東史郎誕生。	
1937年	8月 徴兵により京都16師団福知山聯隊 第1大隊第3中隊第3小隊に入隊。	
1939年	帰国途中マラリアに罹り、本隊と別に一人で帰国。	
1941年	久江と結婚。	
1944年	再度軍隊に召集。	
1945年	杭州湾・寧波で敗戦。	
1946年	帰国。	
1965年		☆家永三郎教科書裁判提訴。
1971年		☆本多勝一中国南京取材『中国の旅』発刊。 ▲三重県津市での津地鎮祭訴訟違憲判決。
1972年		▲日中国交回復。
1973年		☆鈴木明（虚構派）『南京大虐殺のまぼろし』発刊。
1975年		▲靖国神社国家護持法案、廃案。
1980年		☆京都市において「平和のための戦争展」開始
1981年		☆森村誠一『悪魔の飽食』（731部隊の罪業を暴く）発行。
1982年	『福知山歩兵第二十聯隊第三中隊史』刊行、東史郎従軍記を寄稿。	▲「侵略」を「進出」とした、教科書問題発生
1983年		☆中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館建設のきっかけとなる。 ☆本多勝一『南京への道』出版。
1984年		☆一橋大学を中心に「南京事件調査会」発足、代表洞富雄。 ☆元将校集団「偕行社」が『南京戦史』連載始める。
1985年	4月13日 第20回戦友会に東史郎出席。	▲中曽根康弘首相靖国神社公式参拝。 ☆中国侵略日本軍南京大虐殺受難同胞記念館開館。
1986年	婦人会編集の『平和への願い』刊行。体験記を寄稿。	

1987年	5月　京都の「平和のための戦争展」から、日記公開の要請。 7月7日 東史郎、増田六助、上羽武一郎体験を証言、資料公開、記者会見。 12月8日　東史郎『わが南京プラトーン 一召集兵の体験した南京大虐殺』を青木書店から出版。 12月8日　下里正樹著『隠された聯隊史一第20聯隊下級兵士が見た南京事件の真相』青木書店から出版。 12月13日　東史郎、南京市を訪問し、謝罪。	▲神戸で，朝日新聞の記者が赤報隊（右翼）に射殺される。
1988年	4月　戦友会が東史郎を「除名」にする対策会議。 7月　東史郎、雑誌『丸』から原稿を依頼され寄稿。その際編集長から「偕行社で裁判にかけると相談している」と示唆される。 8月　南京大虐殺実態調査団と一緒に調査に来た山内小夜子は東史郎の謝罪のことを知る。	
1989年	12月15日　下里正樹、井口和起、木坂順一郎等編『南京事件京都師団関係資料集』（青木書店）発行。	▲昭和天皇死去。 ☆偕行社『南京戦史・資料集Ｉ』行。
1990年	12月13日　山内小夜子ら「石原発言を許さない京都市民集会」開催。東史郎と府橋照吉講演。	☆石原慎太郎、『プレイボーイ』10月号誌で「南京大虐殺は中国人のでっち上げ」と発言。
1992年	東史郎、同人誌『丹波文庫』に、天皇独白録批判、東条英機批判執筆。	
1993年	一橋出版社発行高校歴史教科書に、東史郎の日記の一部を掲載。教科書検定合格。 4月14日　原告・橋本光治、名誉毀損で東史郎、下里正樹、青木書店を提訴。東史郎さんの南京裁判始まる。 5月28日　東京地方裁判所で第1回公判。 7月23日　第一審、第2回公判。 9月10日　第一審第3回公判。 10月22日　第一審第4回公判。 12月3日　第一審第5回公判	☆偕行社、『南京戦史資料集Ⅱ』刊行。 ☆板倉由明（虚構派）、一橋出版社に、東史郎の日記引用に抗議。 ▲細川首相、侵略戦争であったことを認める発言。
1994年	1月21日　第一審第6回公判。 3月18日　第一審第7回公判。 5月20日　第一審第8回公判。 7月1日　第一審第9回公判。 7月29日　第一審第10回公判。 8月15日　東史郎は第二次南京市を訪問し、謝罪。 9月22日　第一審第11回公判。 10月14日 第一審第12回公判。 12月8日　右翼街宣車、東史郎宅を襲撃。 12月9日　第一審第13回公判。	☆一橋出版社、教科書を自主規制し、「東史郎日記」を「中島今朝吾一六師団長日記」に変更する。 ▲2月永野法務大臣、侵略否定発言で辞任 ▲8月桜井環境庁長官、妄言。 ▲10月橋本通産大臣、妄言。
1995年	2月10日　第一審第14回公判。 3月17日　第一審第15回公判。 6月2日　第一審第16回公判。 7月7日　第一審第17回公判。 10月6日　第一審第18回公判。 12月15日 第一審第19回公判。	▲敗戦50年。 ▲8月島村文部大臣、妄言。

1996年	2月2日　第一審第20回公判。 4月26日　東京地方裁判所、第一審判決、東側敗訴。すぐに控訴。 中北龍太郎、空野佳弘、丹羽雅雄により弁護団結成。 8月　銘心会で訪中の山内、南京市民に資料提供を呼びかける。 9月　東史郎さんの南京裁判を支える会結成。機関紙『「自虐」ではなく「自省」を』発刊。 9月8日　大阪浅香において、郵便袋実験。 9月26日　東京高等裁判所にて、第二審第1回公判。 10月　支える会、南京を訪問し資料収集。 10月25日『新装版わが南京プラトーン』(青木書店) 発行。 12月5日　第二審第2回公判。	▲橋本首相、靖国神社参拝。
1997年	1月19日　支える会、大阪浅香にて郵便袋実験。 2月6日　第二審第3回公判。 4月22日　第二審第4回公判。 5月11日　支える会、郵便袋実験実施。於：浅香。 6月24日　第二審第5回公判。 7月24日　第二審第6回公判。 8月　東史郎は第3回目の南京訪問、南京大虐殺史国際学術検討会に参加。東史郎南京訪問。帰国日に右翼街宣車で東宅を襲撃。 10月2日　第二審第7回公判。 11月13日　第二審第8回公判。 12月7・8日　東聞き取り、空野山内訪問。 12月18日　第二審第9回公判。	☆中学校歴史教科書に「慰安婦問題」記載される。 ☆家永教科書裁判勝利判決。
1998年	1月10、11日　東裁判、弁護団、支える会合宿。 1月12日　同じ部隊員（下坂）聞き取り訪問。 3月　東史郎ら南京を現地調査のため訪問。 3月2日　京都八瀬において、郵便袋に人を入れて放り込む水中実験を行う。 3月6日南京で手榴弾実験。 3月12日　第二審第10回公判、東本人尋問。 5月12日　第二審第11回公判裁判官交替。 6月23日　第二審第12回公判、原告橋本本人尋問。 7月20日　南京で手榴弾実験。 9月8日　第二審第13回公判結審。 11月7日　第二審判決勝利前段集会・大阪。 11月初旬、11月26日の判決日が突如延期される。 11月25日　第二審判決勝利前段集会・京都。 12月22日　東京高等裁判所、第2審、東史郎側敗訴。同夕方、不当判決抗議集会。 12月22日　侵華日軍南京大虐殺史研究会は東史郎と弁護団、支える会に声援の手紙を届けた。 12月23日　中国外交部スポークスマン朱邦造は『東史郎日記』裁判第二審敗訴判決に対して、コメントを出した。 12月25日　日本外務省スポークスマンは『東史郎日記』裁判第二審敗訴判決に対してコメントを出した。 12月25日　最高裁判所に上告。 12月28日　中国外交部スポークスマン朱邦造は、再び『東史郎日記』裁判第二審敗訴判決に対して、コメントを出した。	☆アイリス・チャン『レイプ・オブ・ナンキン』発行。 ☆判決直後、青木書店、右翼青年に襲撃され事務所を破壊される。青年は逮捕。

1999年	1月30日　神戸で証言集会。 2月　東史郎香港を訪問し、裁判報告集会に参加。 2月　南京大虐殺記念館で「東史郎日記訴訟案展正義と邪悪」開幕。 4月　中央電視台『実語実説』に出演。 4月　南京で『東史郎日記』(江蘇教育出版社)を発行し、杭州、上海を訪問した。 9月22日　南京で手榴弾再実験、成功。 12月13日　最高裁判所へ中国などの7万人の「歴史の事実に基づいた厳粛な判断を求める」署名提出。	
2000年	1月21日　最高裁判所、上告棄却の決定。 1月22日　侵華日軍南京大虐殺受難同胞記館と侵華日軍南京大虐殺史学会は、日本の最高裁判所に対して、抗議文を提出し、東史郎裁判の不公正な判決に対して抗議した。 1月22日　侵華日軍南京大虐殺受難同胞記念館と侵華日軍南京大虐殺史学会は東史郎と弁護団そして、支える会に対し激励の手紙をおくった。 1月23日　中国外交部スポークスマン朱邦造は談話を発表し、日本の最高裁判所が南京大虐殺事件の真相を明らかにした東史郎を敗訴にし、日本の右翼勢力が南京大虐殺を否定するため画策に加担した不当判決に対して、強烈に非難した。 1月24日　南京の各界に人々は、雪の中抗議集会を挙行した。日本の再高裁判所が東史郎裁判において示した不当判決に対し抗議した。 2月　フィリピンにて講演会開催。 2月17日　東京高等裁判所に再審請求訴状提出 2月25日　3月5日　東史郎一行、南京、北京、瀋陽、上海を裁判報告訪問。 3月28日　再審請求棄却。 4月3日　特別抗告書提出。 4月21日　特別抗告理由書提出。 4月27日　北京人民抗日記念館で「東史郎訴訟案展」開幕。 4月　東史郎等、北京、石家荘、南京、鎮江、揚州、蘇州、上海等訪問。 7月25日　特別抗告棄却決定。 7月30日　弁護団・支える会宝塚にて合宿。	☆1月23日 大阪国際平和センターで右派「20世紀最大の嘘　南京大虐殺の徹底検証」集会開催。 ☆1月23日 上海市人民政府は、大阪府と大阪市に対し、日本の右翼団体が大阪国際平和センターにおいて、南京大虐殺を否定する反中国集会開催を阻止できなかったことに対して、強烈な抗議をした。 ☆1月23日 日本の河野洋平外務大臣は、談話を発表し、"旧日本軍が南京に進入した後、非戦闘員を殺害し略奪行為を行ったことは否定できない事実であると認識にいる"と語った。 ☆1月24日 瀋陽の各界の人々は、『九・一八』歴史博物館で集会をし、日本の右翼勢力が南京大虐殺を否定する反中国集会を開いたことに対し、強烈な抗議をした。 ☆1月26日 中国外交部の唐家璇部長は談話を発表し、日本の最高裁判所が、司法の形式で正義を抑圧し公然と右翼分子のお先棒をかついだことに対して、激しい憤りを表明した。 ☆1月29日 北京の各界の人士は中国人民抗日戦争記念館で集会をし、日本の右翼勢力の反中国集会に対し抗議した。

附录 2

《东史郎日记》上诉案律师团大事记

——东史郎律师团中北龙太郎、丹羽雅雄、空野佳弘

1996年4月26日，东京地方法院对《东史郎日记》案作出一审败诉的判决。判决《东史郎日记》中有关手榴弹爆炸（邮政袋）事件具有很大的危险性，是不可能发生的事，南京大屠杀事件的全貌不清。

1996年5月7日，东史郎向东京高等法院提起上诉，要求驳回一审判决。

1996年6月15日，东史郎二审律师团组成。律师团的方针是要把《东史郎日记》真实性作为南京大屠杀事件证据之一，进行客观的科学立证。

1995年9月26日，二审第1次口头辩论，东史郎强调一审判决是由于缺乏历史认知而对《东史郎日记》真实性的曲解。

1996年12月5日，第2次口头辩论。东史郎指出，邮政袋事件的存在是客观的事实。原告方认为：在南京杀害便衣兵和市民合法；燃烧的邮政袋在移动百米后还保持基本完好是不可能的；手榴弹在点火5秒钟内将装人的邮政袋扔进塘里爆炸是做不到的。

1997年2月3日，东史郎及其律师、支援会成员等对原中国最高法院前进行了现场调查，并对水塘一事听取了当地知情人介绍，并得到了能装进一个中国人的邮政袋以及水塘的地图，确认了当时中国军队使用的手榴弹为木柄，在木柄后端有用手指拉出点火用的绳扣，以及投掷出5秒钟后爆炸的构造。

1997年2月6日，第3次口头辩论。东史郎根据水塘深度的调查结果，指出原告所说的手榴弹必须向远处扔，否则有危险，以及向远处投掷时需要5秒以上的主张是错误的。

1997年4月22日，第4次口头辩论时原告主张：即便火势渐微，不穿耐火耐热服，不可能将已经燃烧装人的邮政袋扔进水塘。

1997年5月11日，东史郎及其支援会通过燃烧的邮政袋扔进水塘的实验证明，手榴弹一点火，同时将60公斤重的邮政袋扔进水塘的行为只有1秒钟，将150cc到300cc的汽油浇上邮政袋燃烧时，开始只是小火，由于被捆在邮政袋中的人蹦跳挣扎，而不会立刻将邮政袋烧尽。

1997年6月24日，第5次口头辩论。东史郎根据实验结果指出，邮政袋刚刚燃烧后，拉出手榴弹导火索和同时将邮政袋扔进水塘的行为是完全安全的，并提出了实验结果完全如东史郎日记中所记的那样装进袋中的人在里面蹦跳、翻滚，要求驳回原告方的主张。另外，根据日军的文献记载，证明原告可以弄到中国制造的手榴弹和邮政袋。原告主张：从汽车中抽出汽油则需要泵才能完成。

1997年7月24日，第6次口头辩论时原告主张：《东史郎日记》中记有"道路的对面有水塘"，点燃邮政袋是在原中国最高法院的附近，这段距离至少有40米（以前说是一百米，根据东史郎现场调查后更正），燃烧的邮政袋应该是被拖向水塘岸边的，而邮政袋在半路上就会燃尽，不可能继续拖下去，更不可能扔进水塘。

1997年8月14日，东史郎在南京原中国最高法院再次进行现场调查，回忆战时经过。

1997年10月2日，第7次口头辩论时，东史郎揭露了南京大屠杀的历史真相，论证了自己日记中12月21日记载的以及其它日子记述内容与实际一致。另外，《东史郎日记》中的"道路对面有水塘"只是指原中国最高法院和水塘之间的道路（中山北路），指出原告主张是对《东史郎日记》恣意歪曲，并揭露了在原告背后的一群南京大屠杀否定派，是他们在操纵着原告。

1997年11月13日，第8次口头辩论。东史郎介绍其日记产生的经过、动机和当时的思想状态，战时日记和给友人的信长期没有公开的事实和经过等，由此证明《东史郎日记》是真实的。此外，还向法庭提供了很多有关南京大屠杀的文献资料。原告主张日军没有进行侵略战争，没有进行掠夺，在南京的放火、强奸、杀害无辜是中国军的犯罪行为，日军杀害俘虏不违反国际法等。《拉贝日记》也是虚构的。这与南京大屠杀否定派的论述如出一辙。公然承认南京大屠杀否定派在支援原告。

1997年12月18日，第9次口头辩论。东史郎要求尽快对东史郎进行提问。法院决定在下一次的口头辩论中对东史郎进行询问。

1998年2月26日，东史郎在日本汽车博物馆中，对当时出口到中国的欧洲汽车进行了调查。根据此调查，表明了《东史郎日记》中所记的"横卧在地上的一辆毁坏的汽车"是不需要用泵来取油的，而是很容易就能搞到汽油。证明了当时的汽车的构造与原告的说法是两码事。

1998年3月2日，东史郎根据将人装入邮政袋中扔进水塘的实验，指出邮政袋扔进水塘中5秒后，可以沉入水深2.5米处。

1998年3月6日，东史郎在原最高法院前进行现场调查。东史郎本人在现场再次确认当时的记忆。

1998年3月12日，第10次口头辩论。东史郎在法庭陈述，重点是"桥本"抓住一名认为是非武装的穿着百姓服装的所谓"残败兵"的青年，在原中国最高法院前的水塘边毒打一番后装入邮政袋中，浇上1合（约180cc）的汽油后点火。火一下着起来，青年在邮政袋中蹦跳、嘶喊着，打着滚。火立刻变小，"桥本"抓住捆在邮政袋上的绳子，一直拖出数米至水塘边。接着，"桥本"将中国军的木柄式手榴弹绑在邮政袋的绳子上，将手榴弹点火后扔进水塘。扔下水塘后，"桥本"立刻退到数米外的分队员处。邮政袋沉下去后，随着手榴弹的爆炸，水面立刻鼓了起来。东史郎的上述供述无懈可击，使原告（代理人律师）无法进行反问。东史郎还对法官的仔细盘问一一陈述。同日，东史郎举证日军用火烧和手榴弹杀害中国人，并将他们的尸体抛入水塘、河中等许多事例。

1998年5月12日，第11次口头辩论。3名法官全部更换。这些根本没有听过东史郎陈述的新法官将写判决书。

1998年6月23日，第12次口头辩论。法庭对原告提问。原告始终佯装不知，极不自然地回答：在南京战中和攻占南京后没有杀中国人，入伍后也记不得是否杀过人，不仅自己没有放火、强奸，也没有看过其他士兵有类似的行为，没有抓捕过残败兵和俘虏，自己当时是否在原中国最高法院前也记不清楚了等等。

1998年7月20日，东史郎陈述了在南京进行了用与当年中国军使用的手榴弹有同样爆炸力的手榴弹在水中实行的爆炸实验。实验结果证明，在水深1.5米到2.5米处爆炸时，手榴弹的碎片不会飞出水面，正如《东史郎日记》中所记述的那样，只是在水面一下子鼓了起来。

1998年9月8日，第12次口头辩论。东史郎提交了在水中进行的手榴弹爆炸实验的录像带等。原告方却非难东史郎是求助中国"创作了残虐行为"，而中国政府正是利用东史郎自虐史观的日记，来作为对日外交的一个有力的王牌。东史郎在长达265页的书面答复中具体论证了：A、《东史郎日记》所有内容都是客观事实，原告的行动不涉及危险，完全能够做到；B、占领南京后各种客观状况和日本士兵的心理状况是一致的；C、东史郎陈述是充分可信的；D、从东史郎所记日记和公开的动机等来龙去脉上看，《东史郎日记》不可能不真实；E、如果不是戴有色眼镜去看待南京大屠杀历史的话，《东史郎日记》的可信性是显而易见的；F、原告陈述是完全不可信的；G、原告否定屠杀的陈述，事实上是否认南京大屠杀的右翼势力在其背后操纵的。

1998年11月17日，原定二审宣判日，由于中国江泽民主席的访日，而突然延期判决。

1998年12月22日，二审宣布东史郎败诉。判决说："在《东史郎日记》中记述的杀人游戏，对实行者来说，在实行中如果不彻底排除给自己和他人带来烧伤的危险，那就没有意义。"但是，法庭完全不考虑这是对残败兵的"扫荡"过程中发生的，没有丝毫军事上的需要，在怀有敌意的蔑视意识下，像这种有虐待性的几乎是"杀人游戏"的屠杀并不少见这个历史事实，抹杀历史导致作出这样错误的判断。此外，判决硬是采纳原告方的主

张来认定事实："在原中国最高法院旁，将中国人装进邮政袋浇上汽油点火，然后将邮政袋拖至约40米横穿中山北路，再在邮政袋上绑上手榴弹扔进水塘，这些行为进行过程中，邮政袋一直在燃烧。"并判定："拖拉、捆绑、扔进这些行为对操作者都有烧伤的危险，而邮政袋和绳都没有烧坏，这些行为是否成立值得怀疑。"得出的结论是："最终不能认定这种事情有实际实行的可能性。"这种事实的认定，是严重歪曲《东史郎日记》的记述。在《东史郎日记》中只是提到"在法院前面横卧着一辆毁坏的汽车。道路对面有一池塘。"并没有特定某个行为发生在某个地点。可是，判决却认定"(原中国)最高法院前，也就是在与水塘相反处的地方有一辆坏汽车，在那里抓来一个中国人，将其装入邮政袋，从汽车里取出汽油浇上并点火。"判决中"在那里"（横线笔者加）（也就是靠原中国最高法院旁的水塘的另一端）这一词毫无根据和证据，是凭空加进去的，因此武断认定发生装人入袋点火的行为地是在最高法院旁到水塘处40米的位置。东史郎陈述说："点火燃烧汽油是在水塘边。"法庭却毫无根据地无视东史郎的陈述。与《东史郎日记》和东史郎陈述相反，判决还毫无根据地断定浇在邮政袋上的汽油量足以损坏邮政袋和绳子，法庭所说的大量汽油燃烧的状况、行为的场所和有关拖邮政袋的距离完全是恣意篡改《东史郎日记》，为了要得出"对自己有危险而不可能实行"这样的结论，只有胡编乱造。因此，二审是歪曲历史的荒唐判决。

1998年12月25日，东史郎向日本最高法院上诉并要求受理申诉。

1999年3月19日，东史郎提出纠正二审错误判决的上告理由书。

1999年6月2日，东史郎要求面见法院调查官被拒绝。

1999年9月28日，东史郎在南京再次按照《东史郎日记》所记的那样进行了第三次手榴弹爆炸和把装人邮政袋扔进水塘后爆炸的试验。

1999年12月2日，东史郎向日本最高法院提交新证据：1、二审判决后的1998年12月9日，香港广播电视台播放的原告等在接受采访时坦白自己曾参与屠杀的录像。2、1999年9月28日手榴弹再次实验的录像证明，按《东史郎日记》的记载，原告的行为可以安全地实行。3、日本南京事件研究者吉田裕完成了"对二审判决的历史认识错误的论证"的意见书等。为了说明这些证据，要求面见法院调查官，被再次拒绝。

1999年12月13日，由东史郎、东史郎律师团、支援会、侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆馆长朱成山等人，向日本最高法院书记官提交7万名中国人的签名信函。

2000年1月21日，日本最高法院作出驳回上诉，不受理上诉申请的决定。

2000年2月17日，东史郎向日本最高法院提交要求对原告的伪证进行再审的诉状。

東史郎南京虐殺裁判二審以降の裁判年表

東史郎弁護団　中北龍太郎、丹羽雅雄、空野佳弘

１９９６年４月２６日　東京地方裁判所東史郎敗訴一審判決：東日記の手榴弾爆殺（郵便袋）事件は危険性が高く、実行不可能、南京虐殺の全容は不明と判断。

１９９６年５月７日　　東史郎　東京高等裁判所（二審）に一審判決の取消求め控訴。

１９９６年６月１５日　東史郎　第二審弁護団結成。弁護団の方針として、東日記の真実性を南京大虐殺事件の一つとして客観的・科学的に立証することを確認。

１９９６年９月２６日　二審第１回口頭弁論　東側：一審判決が歴史認識の欠落等により東日記の真実性を見誤ったと強調。

１９９６年１２月５日　第２回口頭弁論　東側：東日記は、人の入れる郵便袋の存在等客観的事実と一致していると指摘。

原告側：南京での便衣隊・市民の殺害は合法、袋が焼き切れぬよう百メートル運搬することは不可能、手榴弾点火後爆破までの５秒間で人間の入った袋を沼に放り込むことはできないと主張。

１９９７年２月３日　東側：最高法院前現地調査及び当時の沼について現地の人から事情聴取。また、人の入れる中国製郵便袋、沼の地図の提供を受ける、当時の中国軍の手榴弾（柄付きで柄の後部にある点火用の紐のワッカに指をかけて投げると５秒後に爆発する構造）を確認。

１９９７年２月６日　第３回口頭弁論　東側：沼は深く切れ込んでいたという調査結果に基づいて、手榴弾は遠くまで投げないと危険で、遠くまで投げるのに５秒以上要するという原告の主張の誤りを指摘。

１９９７年４月２２日　第４回口頭弁論　原告側：下火になっていても耐火耐熱服なしで人の入った袋を沼に放り込むことはできないと主張。

１９９７年５月１１日　東側：放り込み、郵便袋燃焼実験　手榴弾点火と同時に６０[illegible]の重さの袋を沼に放り込む行為は１秒で可能、１５０から３００ｃｃのガソリンを袋にかけて燃やした場合すぐに下火になり袋は燃えつきないことが証明された。

１９９７年６月２４日　第５回口頭弁論　東側先の実験により、袋の燃焼直後、手榴弾を点火する動作と同時に袋を沼に放り込む行為を安全にできること、及び東日記に書かれているように袋に入れられた人が跳びあがり転げ回れることが裏付けられたと主張し、原告の主張を弾劾。また、日本軍の文献によって、橋本が中国製手榴弾や郵便袋を入手できたことを証明。

原告側：自動車からガソリンを抜き出すには、ポンプが必要と主張。

１９９７年７月２４日　第６回口頭弁論　原告側＝東日記には「道路の向こう側に沼があった」と書かれているから、袋に火をつけたのは最高法院寄り、そこから少なくと４０ｍ（以前は１００ｍと主張していたが、東の現地調査によって訂正）以上燃える袋を引きずって沼の岸辺まで袋を引っ張ってきたと読むべきであり、その間途中で袋が燃え尽き引っ張れなくなるし、袋を沼に放り込めないと主張。

１９９７年８月１４日　東側：最高法院現地調査。東自身、現場に立って当時の記憶を確認。

１９９７年１０月２日　第７回口頭弁論　東側：南京大虐殺の歴史の事実を明らかにし、東日記の１２月２１日の記述やその他の日の記述が当時の実態と一致していることを論証。また、東日記の「道路の向こう側

に沼があった」との表現は、最高法院と沼との間に道路（中山北路）があったことを表しているだけであって、原告の主張は東日記の恣意的な読替えであると指摘。さらに、原告の背後にいるのは南京大虐殺否定派であり、彼らが原告を操っていることを明らかにした。

１９９７年１１月１３日　第８回口頭弁論　東側：東日記の作成経過・動機、当時の東史郎の意識状況、陣中メモや友人への手紙、長く公表しなかった事実との経過等から、東日記にウソが書かれているはずがないことを明らかにした。また、多数の南京大虐殺に関する内外の文献資料を提出。

原告側：日本軍は、侵略戦争をしていない、日本軍は略奪をしていない、南京における放火、強姦、民間人の殺害は中国軍の犯行、捕虜殺害は国際法違反ではない、ラーベ日記も虚偽であると南京大虐殺否定派の論述をそっくりそのまま主張、また南京大虐殺否定派が原告を支持していることを認める。

１９９７年１２月１８日　第９回口頭弁論　東側：東さんの尋問を早く実現するよう迫る。裁判所は、次の口頭弁論で東さんの尋問をすることを決定。

１９９８年２月２６日　東側：日本自動車博物館で当時中国に輸出されていた欧米の自動車を調査。この調査によって、東日記にある「横たわっていた、ぐしゃりとつぶれた自動車」の給油口からポンプ等無しで簡単にガソリンが取り出せることが明らかになり、原告の主張が当時の自動車の構造と反することが証明された。

１９９８年３月２日　東側：プールで人の入った袋を放り込む実験を実施した結果、放り込み時から約５秒後に水深２．５ｍまで沈むことが明らかとなった。

１９９８年３月６日　東側：最高法院前等の現地調査。東自身、現場を見ながら当時の記憶を改めて確認した。

１９９８年３月１２日　第１０回口頭弁論　東側：法廷で供述。供述要点「西本」が非武装で平服を着た「敗残兵」と思われた青年を最高法院前の沼側で暴行した後、は袋詰めにして約一合（約１８０ｃｃ）のガソリンをかけて燃やした。一度にぱっと燃え上がり、青年は袋ごと跳びあがったり転がったり、わめいたりしていた。すぐに火は下火になり、「西本」は袋に結び付けた紐を持って、沼の岸辺まで数引きずっていった。そこで、「西本」は中国軍の柄付き手榴弾を袋の紐に結び付け、手榴弾の点火と同時に袋を沼に放り込んだ。放り込み後すぐに「西本」は数ｍ後ろにいた分隊員のいる場所へやってきた。袋は沈み、手榴弾が爆発しごぼっと水面が盛り上がった。以上の供述に対し、原告（代理人弁護士）か反対尋問を試みたが、東の供述はゆるがなかった。裁判官の細部にわたる質問にも、東は、当時の記憶を思い出しながら適確に供述した。同じ日、東は、日本兵が中国人を火や手榴弾で殺害したり、殺害後、沼、池、川に死体を投げ込んだ事例が沢山あることを裏付ける証拠を提出した。

１９９８年５月１２日　第１１回口頭弁論　裁判官３名全員交替。東供述を聞いていないこの裁判官達が判決を書くことになる。

１９９８年６月２３日　第１２回口頭弁論　原告の尋問。南京戦闘中も南京占領後も中国人を殺していない、中国従軍後人を殺した記憶はない、徴発もしていない、放火・強姦も自分はしていないし、他の兵士のそうした行為も見たことはない、敗残兵・便衣兵を捕まえたこともない、最高法院前にいったかどうかも記憶がはっきりとしないなど、原告はシラを切り通し、極めて不自然な供述に終始した。

１９９８年７月２０日　東側：南京において当時の中国軍の手榴弾と同じ爆発力の手榴弾で水中爆破実験。実験の結果、水深１．５ｍ及び２．５ｍで爆破させた場合、手榴弾の破片は水面上に飛び散らず、東日記のとおり水面がごぼっと盛り上がるだけであることが証明された。

１９９８年９月８日　第１２回口頭弁論　東側：水中実験のビデオ等の証拠を提出。

原告側：東は中国に頼って「残虐行為を創作」し、また、中国政府は自虐史観の東日記を利用して対日外

交の有力な切り札にしようとしていると非難。東側：２６５頁に及ぶ最終準備書面で、（１）東日記はすべての面で客観的事実と合致し、「西本」の行動は危険ではなく十分実行可能、（２）南京占領下の様々な客観的状況や日本兵士の心理状況とも一致し、（３）東供述は十分信用でき、（４）東日記作成の動機、公表のいきさつ等から、東日記にウソが書かれるはずがなく、（５）南京大虐殺の歴史の事実を曇りのない眼で見れば東日記の信用性は明らかであること、他方（６）原告供述は全く信用ができず、（７）原告の虐殺否定供述は、南京大虐殺はなかったとする右翼勢力に操られたものであること等を具体的に論証した。

１９９８年１１月２６日　この日、判決言い渡しの予定であったが、江沢民国家主席の訪日予定日と重なった。予め判決言い渡し期日が延期された。

１９９８年１２月２２日　判決言い渡し。判決は「（東日記には）殺人遊びとして記述されており、実行者にとっては殺実遊びとして火傷その他身の危険を全く冒さないで実行することができなければ意味がない。」という。しかし、これは敗残兵掃討戦の過程で、軍事上の必要もないのに、敵対心と差別意識からサディスティックなまるで「殺人遊び」のような虐殺が多数発生したという歴史の事実を全く無視した判断である。歴史の抹殺がこのような誤った判断をもたらした。また、判決は、「最高法院のすぐそばで、中国人を袋に入れガソリンをかけ点火し、その後、袋を約４０ｍ引きずって中山通りを横断し、袋の紐に手榴弾を結びつけ、袋を沼に放り込んだ、これらの行為の際袋は燃え上がっていた。」と、原告側の主張に引きずられた事実認定をしたうえ、「引きずり、結びつけ及び放り込みの行為のいずれの行為も実行者に火傷の危険があり、また袋や紐が燃損しないまま、これら行為ができるのか極めて疑問」と判断し、「到底実行可能性があるものとは認めることができない」と結論づけた。この事実認定は、東日記記述を著しく歪曲している。東日記には、本件行動の場所や情景について「法院の前にぐしゃりとつぶれた自家用車が横倒しになっていた。道路の向こう側に沼があった。」と言及されているだけで、それ以上に各行為の地点は何ら特定されていない。ところが、判決は、「最高法院前、すなわち、沼と反対側の位置に壊れた自動車あり、そこに　中国人が連れられて来て、袋の中に入れられ、自動車から取り出したガソリンをかけて火をつけ」（横線は筆者）と認定した。このように判決は、「そこに」（つまり最高法院のすぐそばで沼の反対側）という文言を何の根拠・証拠もなく挿入して、袋に人を入れて火をつけた行為の場所を最高法院側で沼まで４０ｍの位置だと独断で決めつけてしまっているのである。この認定は、「ガソリンへの点火は沼側であった」という東供述を何の証拠もないのに頭から無視するものだ。しかも、判決は、何の証拠もなく、東日記や東供述に反して、袋にかけられたガソリンの量は袋や紐が焼損するほど大量であった、と断定している。こうした大量のガソリン量と燃焼状況、行為の場所と袋の引きずり距離に関する日記の恣意的な読み替えは、「自損の危険があり実行不可能」という結論を導きだすためのでっち上げに他ならない。このように、二審判決は、歴史を歪曲するでたらめな判決であった。

１９９８年１２月２５日　東側：最高裁判所に上告及び上告受理申し立て

１９９９年３月１９日　東側：２審判決の誤りを正す上告理由書提出

１９９９年６月２日　東側：調査官に面接申し入れ、面接拒否される。

１９９９年９月２３日　東側：南京で東日記の記述どおりの手榴弾爆発、沼への放り込み再現実験。

１９９９年１２月２日　東側：最高裁判所に新証拠提出。新証拠は、（１）二審結審後の１９９８年１２月９日に香港広播電視台が行った、原告自らが虐殺を自白したインタビュービデオ、（２）東日記におけるＨＭの行動は安全に実行可能な事を証明した１９９９年９月２３日の再現実験ビデオ、（３）南京事件研究者吉田裕作成の「二審判決の歴史認識の誤りを論証」した意見書等。これらの証拠の説明のため、調査官と面接申し入れ、再び拒否される。

１９９９年１２月１３日、東、東弁護団、支える会、朱成山南京記念館館長らが最高裁判所担当書記官に約７万通の中国の人々の署名等を提出。

２０００年１月２１日　最高裁判所上告棄却、上告受理申し立て却下決定

２０００年２月１７日　東京高等裁判所に、原告の偽証等を理由ら再審訴状提出。

附录 3

东史郎先生致本图集全体编辑人员的函

"《东史郎日记》案图集"的各位编辑：

感谢你们在百忙中为出版图集而提供合作，在此致以深深的谢意。

中日战争(日本侵华战争)从1937年到1945年，经过了8年终于结束了，而我的与中日战争有关的诉讼已进入了第9个年头，目前还远远没有结束。这个诉讼的形式是民事诉讼，实际是一场关于有无发生过南京大屠杀的诉讼斗争。奥山(东京高等法院《东史郎日记》案)审判长为了迎合右翼政治潮流判我败诉，其用心是为了判定南京大屠杀是虚构的。我要向这个不正当、不公正的判决进行彻底的斗争，并揭露其真相，法院的判决是日本国家(司法机关)作出的决定，决不允许作出这样的判决。

我决心上告至联合国，寻求世界的审判。

尽管在你们的协助下，我们向法院提交了事实证据和手榴弹的实爆试验证据报告，但奥山审判官却无视这些证据，仅凭想象和推断，就做出了不公正判决。我们要求法院弹劾不公正的奥山兴悦法官，审判法官。

"在战场上与敌人作战是你们的天职，片刻都不应该忘记勇猛。"在天皇的这个命令下，我们侵害了中国，我谢罪是为了告诉日本人民当年东洋鬼子的真实情况并进行反省，开拓中日友好的未来。正因为如此，我将继续和那些毫无反省者作毫不妥协的斗争。

在宁波我得知了日本战败，深感绝望，然而中国军对我们"以德报怨"，没有复仇，使我绝望的心中又燃起了希望之火。我对中国人感恩戴德。

深深感谢你们为这本诉讼图集而做出的努力。

侵略加害者　东史郎

2000年10月25日

東史郎さんからの写真集編集者への書簡

『東史郎日記裁判図集』編集者の皆様

御多用中にも拘わらず、図集出版に御協力してくださいまして有難う御座います。

厚く御礼申し上げます。

中日戦争は１９３７年から１９４５年まで８年間で終わりましたが､私の中日戦争に関する戦争裁判は９年目に入ります。まだまだ終わりません。

この裁判は民事裁判の型式をとった南京大虐殺の有無を争い審判する裁判であります。右翼政治風潮に迎合した奥山裁判長は私を敗訴にしました。

即ち南京大虐殺は虚構である、とする為の判決です。故にこの不当不正に対し徹底的に戦い、真実を明らかに致します。裁判所の判決は日本国家の決定であり断じて許容できません。

国連に訴えて、世界の審判を求める所存です。

皆様のご協力による事実証拠、又、手榴弾実験による事実再現証拠を提出しても奥山判事は無視して、想像・推認による不当判決を下した。不正な裁判官奥山興悦を弾劾裁判にかけ、裁判官を裁判します。

「汝等は戦いにのぞみ敵にあたるの職なれば片時も武勇を忘れる事勿れ」と天皇に命令され、中国を侵害した私の謝罪は、日本人民に過去の東洋鬼の実相を伝え、反省を求め、中日友好の未来を開くことにあります。その為に私は徹底的に無反省者と戦いつづけます。

日本の敗戦は私に寧波で絶望感を与えました。だが、中国軍は、「怨みに報いるに徳」を以て対処してくれ、復讐されず、絶望感から希望の炎を燃やしてくれました。中国人に御恩がある。

裁判図集出版に御努力してくださった事に、厚く御礼申し上げます。

侵略加害者　　東　史郎

２０００年１０月２５日

后　记

本“图集”由侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆和日本支援东史郎案审判实行委员会联合编著，朱成山和山内小夜子共同主编。

东史郎先生、日本支援东史郎案审判实行委员会秘书长山内小夜子、侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆馆长朱成山专门为本“图集”撰写了序言。日本东史郎南京审判律师团律师中北龙太郎、丹羽雅雄、空野佳弘特地整理了“《东史郎日记》上诉案律师团大事记”，日本支援东史郎案审判实行委员会提供了“《东史郎日记》案关系年表”。

本“图集”中文编写由中方负责，日文编写由日方负责，中方统稿。朱成山、段月萍、刘相云、刘燕军等负责中文说明的编写，陈平稳、王伟民、梁强、卢志远、艾德林、谢红霞等参与校对，蒋作初先生担任统校，山内小夜子、北山敏博、山本千夫等负责日文说明的编写和校对，常嫦、燕龙溪担任部分日文翻译工作。

本“图集”照片除署名者外，均由侵华日军南京大屠杀遇难同胞纪念馆拍摄，刘相云、山内小夜子为照片作了筛选和编辑整理。

本“图集”由新华出版社崔金玉副编审担任责任编辑，原江苏古籍出版社编审章耀达担任封面设计和版式设计顾问，南京瑞宝广告工程有限公司王砚、罗祥华等担任版式设计，常州太平洋印刷有限公司承印装帧。

在本“图集”编纂过程中，得到中国人权发展基金会、江苏省政府新闻办公室、南京市政府新闻办公室的支持，并得到香港爱国实业家陈君实先生的资助，谨此表示谢忱。

由于编纂匆忙，疏漏、不足之处难免，敬请指正。

2000年10月

あとがき

この「写真集」は、中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館と東史郎さんの南京裁判を支える会が編纂したものであり、朱成山氏と山内小夜子さんがその責任を負うものです。

東史郎さんと日本の東史郎さんの南京裁判を支える会事務局長の山内小夜子さん、中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館館長朱成山氏が、特にこの「写真集」のために「まえがき」を書いて下さいました。東史郎さんの南京裁判弁護団の中北龍太郎、丹羽雅雄、空野佳弘さんたちはもっぱら『東史郎日記』裁判第二審以来の重要な事柄の年表を整理し、日本の東史郎さんの南京裁判を支える会が『東史郎日記』裁判関係年表を提供して下さいました。

本「写真集」は中国側が中国語の部分の編集を担当し、日本側が日本語の部分の編集を担当して、中国側がその総括に責任をもちました。朱成山、段月萍、劉相雲、劉燕軍等氏らが中国語の解説に責任をもち、陳平穏、王保民、梁強、盧志遠、艾徳林、謝紅霞氏等が校正に携わり、蒋作初さんがその総括を担当しました。山内小夜子、北山敏博、山本幹夫さん等は日本語の解説と校正に責任をもちました。常嫦、燕龍渓さんは日本語への翻訳の一部を担当しました。

本「写真集」の写真で名前を書き記した者以外は、すべて中国侵略日本軍による南京大虐殺受難同胞記念館が撮影し、劉相雲、山内小夜子さんがこの写真の選別と編集整理をおこなったものです。

本「写真集」は新華出版社の崔金玉副編集長が責任編集を担当し、元江蘇古籍出版社編集長の章耀達氏が表紙と組版形式のデザイン顧問を担当しました。南京瑞宝広告会社の王硯、羅祥華氏等が組版形式のデザインを担当し、常州太平洋印刷有限公司が印刷し、装丁をおこないました。

この「写真集」の編集過程で、中国人権発展基金会、江蘇省政府報道事務室、南京市報道事務室の支持と協力をいただき、香港の愛国実業家陳君実さんの資金援助を得たことにたいして、ここに謹んで謝意を表わします。急いで編集したために手抜かりと不備があることはどうしても避けられず、ご叱正を請うものです。

２０００年１０月

Document generated by Anna's Archive around 2023-2024 as part of the DuXiu collection
(https://annas-blog.org/duxiu-exclusive.html).

Images have been losslessly embedded. Information about the original file can be found in PDF attachments. Some stats (more in the PDF attachments):
{
"filename": "MTAzMjY2NzYuemlw",
"filename_decoded": "10326676.zip",
"filesize": 41047046,
"md5": "88e8e742e5219a55382466842970a7fe",
"header_md5": "0efb2a98000a408b0f20c288d7f454dd",
"sha1": "e805ec311e0e36becd12f2c6b2201f0aef4ee916",
"sha256": "fc1db9789cdf4910d8878da11c31f372d8b3835841178cc01276e175a1c50345",
"crc32": 2325343058,
"zip_password": "",
"uncompressed_size": 41468288,
"pdg_dir_name": "",
"pdg_main_pages_found": 286,
"pdg_main_pages_max": 286,
"total_pages": 296,
"total_pixels": 408518670,
"pdf_generation_missing_pages": false
}